

---

# 非現実的な人生

ゆうさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非現実的な人生

### 【Nコード】

N9609L

### 【作者名】

ゆうさん

### 【あらすじ】

いつも通りの生活をしていた主人公に転機が訪れる。

ある時、天超地という異世界で目覚めた俺は女神っぽい神に

『雷でズドンって感じで死にました』

と言われました。正直、可哀想な俺……

その後、第二の人生を紹介され新たな旅へと出発します。

それから仲間の死・修羅場・世界の謎・危機などを乗り越えて魔人を倒そうとします。主人公は途中から最強です。言い切ります。なんだかんだであんまりバトルが無いので、どうかと思いましたか？

…。最近はそれぞれの過去が少しずつ明かされています。まだまだ  
終わりそうにありませんが着実に進んでいますのでこれからもよろ  
しく願います。

## プロローグ 不運で始まる物語（前書き）

初投稿ですのでまだまだ未熟者で誤字・脱字があるかもしれません。それでも見ていただける方はありがとうございます。面白い作品になるよう努力していきます。

## プロローグ 不運で始まる物語

プロローグ 不運で始まる物語

目が覚めたら変な空間に浮かんでた

「ここは・・・」

どこまでも広がる光の世界、俺はなんでこんなところに・・・

「・・・あれは何だろう」

何も無い光の空間に現れたひとつの黄金玉

俺はその光に向かって泳いだ、その場所は思ったよりも長くなり泳いだような気がした。

「結構でかかったんだ・・・って、あれ？」

かなりでかいその黄金玉をよく観察していると中に誰かいるような・・・

そんな風に思っているといきなりその黄金玉にひびが入った

パリパリパリパリ！

そんな音を鳴らし羽化したのはとても綺麗な顔をした女神様だった

「あ、あの・・・」

俺はとりあえずその女神様に声をかけてみた。

が、返事が返ってこないまま、どれくらい待っただろうか  
数回声をかけた後、少し待ちもう一回声をかけてみた

「あの・・・女神さん、んう」って起きたし」

「よく寝た、って、うわっ！？君、誰？」

いや、誰って言われても困るんだけどな・・・  
目を覚ますなり、女神様はいきなり飛びずさった。

「いや、ええ」と俺も目が覚めたらここに居たんでよく分からない  
んですけど」

「あ、そうなの？そっか、君が例の子ね」

例の子？なんだか分からないけど、どうやらこの人、いや女神様は  
俺のことを知ってるみたいだ

「いろいろ聞きたいことがあるんですけど、なんで俺はここに居る  
のでしょうか？」

これが一番知りたかった、しかし返ってきた言葉は瞬時には理解で  
きなかった

「あなたは死んだのよ、だからここに來たの」

「・・・」

死んだ？・・・俺は死んだのか、なぜ？

記憶が無い・・・

「死んだって、どうやって」

「うーんってね、雷でズドオーンって感じで」

可哀想な俺、そんな風に死んだのか、痛いという感情も無いまま死んだって感じだったのかな、たぶん

「んじゃ、俺はこれからどうすれば・・・」

「君には新しい人生を歩んで行ってもらいます」

新しい人生？生まれてこのかた17年、新しい人生歩めって言われてもなあ

女神が手を挙げると5つのすんごい扉が出てきた  
すんごいとはとにかくすんごいのである。

「これはいい」

扉には赤・緑・白・黒・金の色のレンガで作られていて

赤には「peaceful morte」

緑には「strongest sorcery」

白には「two armada fuoco」

黒には「to manipulate spada」

金には「special(17)」

と刻まれていた。

「あなたはまだ若いから選択肢がたくさんあるのよ」

それは、うれしいことなんだが、どれがどういう扉なのかよく分からない・・・

「これはねえ、ディフィティ語って言って、君たちの世界で言う英語とイタリア語の混合語ってところかなあ」

自称１．５ヶ国語の俺にとっては絶対に読めないだろう

君に読めるように訳すと左から順に、といいながらディフィティ語の上あたりに

俺でも読める日本語が浮かび上がってきた

安らかな死

最強の魔法

二丁拳銃

操る剣

特別コース（１７）

と書かれていた

「どうしますか？ちなみにお勧めは特別コースですよ」

特別コース、一際目立った金色の扉、実際超気になっていたのだが（１７）ってなんだ

「特別コースって言うのは？あと（１７）って言うのは？」

「それは行つてからの楽しみっていうことになっていますので・・・あつ（１７）っていうのは（１７）歳で死んでしまった人だけの特別コースです」

よくあるパターンだと俺は思った。漫画の展開もこんな感じにストーリーが展開していくものである・・・

でも若さの特権、面白さもあるし行ってもいいかな

「んじゃ、特別コースをお願いします」

「特別コースですね。それでは二度目の人生を思う存分楽しんでください」

そう女神様は言うのでつかい十字架を出現させた

「ちょっと重いよねえこれ・・・」

「えーっと女神様・・・それは・・・」

「よいしょっと。これをつ。ぶつければっ。気絶っ。するでしょ」

「ちょちょちょ待つてくれ!!」

気絶じゃなくてももっと簡単な方法は無いのかよ!!

「いつまで女の子に重たいもの持たせる気? んじゃ。おーやーすーみっ!!」

ヒュン!!!!

「俺・・・これからどうなってアガッ!!」

360度振りかぶり俺のほうに飛んできた十字架はもはや避けるこ

とすらできず、眩いてる途中で俺の記憶が途切れた・・・

## ブログ 不運で始まる物語（後書き）

のんびり書いていきますので投稿は不定期になりますが  
頑張っていきますのでよろしく願いします。

## 第一章

### 非現実的な世界（前書き）

勉強をしようと思うと気が散ってしまい  
小説を書く毎日・・・

そろそろ頑張らないと・・・

## 第一章 非現実的な世界

### ゴーナ平原

「痛え〜〜〜」

頭の痛さで目を覚ますと平原に倒れていた。不思議なことにたんこぶ1つ無かったが・・

そこら辺にあった看板らしき物にゴーナ平原と書かれていた・・・また、どこだかわからないところにまた来てしまった

「ったく、どこに行けばいいのやら・・・」

とりあえず、歩かないことには始まらないので勘を頼りに進んでいった

しばらく歩くと頭上から手紙っぽい物が降ってきた。

「ん？なにになに・・・」

第二の人生楽しんでますか、君にはまだ名前をまだ言っていないませんでしたね

私の名前は「キルティ」です。今後ともよろしく

この通信ペーパーを送ったのは君には力を応用できる力を与えたいと思ったからです。

この世界には、野生の魔物が普通に出てきます。今の力では太刀打ちできません

力を応用出来れば、某水中サッカー好きの少年みたいにバク転を武器を持ちながら威力を上げて攻撃することもできればアクション主人公のように2段ジャンプが可能になったりとか、まさにゲームの中に出てきそうなものばかり

この先の旅はどうなるか誰にも分かりませんが、君が作り上げていくのですから

では、もしも力が必要でありましたらサインを記入してください

女

神 キルティより

氏名

おまかせ

「今のままじゃ魔物に太刀打ち出来ない・・・だって・・・？」

こういう手紙が俺の家に届いたら「また通信販売がどうたらこうたらだろ?」ってな感じに即ゴミ箱行きだっただろ?」

しかし、今は違う。これは確実に手に入れないとやばいな。

「書くものが・・・っとペンが落ちてきた」

いざ書くとしたとき、ふと気づく

「俺の名前、なんだっけ?」

どう思いつくとしても思いつくことができない自分の名前

「・・・忘れちゃったよ」

しばらく通信ペーパーなるものを眺めていると氏名記入欄の隣に「おまかせ」と書いてあった

「おまかせってなんだ?」

と俺はとりあえずその文字を指でなぞった

ピュイン!

「!?!」

眩い光が目の前いっぱいに広がると氏名の欄に勝手に記入されていた

「ブレイク・・・?」

勝手に名前が決まった。さすがおまかせだ、というかこれが俺のこ

れからの名前・・・？

英語では・・・確か壊す？・・・だっけ？まああまりよくないことは確かだがどうやっても消せない・・・。

「自分の名前は分からないし、書かれた名前は消せないし、これで生活していくか」

「ブレイクブレイクブレイクブレイク・・・まあいつか」

自分の勝手につけられた名前を何回も頭の中で連呼していた立ち止まっていると足元に影が？

「なんで？どんどん広がってうわっ！！」

ゴトンッ

ものすごい重量感がありそうな剣が地面に・・・

「すげえ、超重そうだし」

カチャ

「って軽っ！片手で持てるなんて」

その剣を眺めているとローマ字で何かが書かれていた

「name？この名前か？・・・ヴェーアっていうんだ」

なんか付属されていた紙を見ると

どうやらしもう時は消えるように思えば勝手に消えてくれるらしい

ようだ、これは移動が楽だ。しばらく剣を振る練習をしていると誰かが木の茂みに潜んでいるのが見えた。

カサッ

こちらから見たらバレバレであるが向こうは必死みたいである

「おい？」

「・・・」

「バレバレだけどー？」

「・・・」

「君の後ろにお化けがいるよ」

「っ！！」

いきなり飛び出してきたその少女は背的に俺より年下だろうか・・・

「きゃああああああ」

「うわっ！」

目をつぶって思いっきり走ってくるので俺はその子にぶつかった。

「あ、あの君、だいじょ」で、出たな！レインボラル「・・・は？」

レインボラルって誰だ？・・・なんかバリバリ戦闘モードだし

「か、覚悟しなさい！」

「おいおい、待てって俺は違うって！人違いだって！！」

「そうやって人を騙すのね、お母様が言ってたとおりね、そんな変な服装をしてるくらいだから、絶対にそうだって！」

「ほんとに違うって、うわっ、その危ないものをしまえて」

「あなた、こんな武器も知らないの？」

それは剣が数十本集まった円形状の車輪みたいなものだった

「なんだよ、その変わった武器は！？っていうか、それ武器なの？」

どうやって攻撃すんだよ・・・

頭の中がハテナで一杯に広がるとその少女はほっと一息をつきながら

「ふう・・・どうやらあなたはレインボラルではなさそうね」

俺の馬鹿げた質問でどうやら助かったらしい・・・

「だから、そのレインボラルって誰だよ」

「討伐ターゲットなのよ、その人」

討伐ターゲット？この国はいつたいなんだ、超こえゝ、無力な自分がターゲットにされたら一貫の終わりじゃん、とにかく助かってよかったあゝゝ、って、ん？なんか意識がクラッと・・・

「だっ大丈夫ですか？」

気が抜けたのか俺はその場に倒れた・・・

「俺、精・・・神・・・力・・・弱えゝ・・・」

どのくらい気を失っていたのだろうか・・・  
目をゆっくり開けるとそこにはさっきの女の子がいた

「あもう、大丈夫ですか？」

「あ、ああ、まだぼーっとしてるけど大丈夫」

「えっと、今、おかゆ作ってるんで待っててください」

（・・・おかゆってこの国にもあるんだ）

そういうと、彼女は扉の向こうへと向かって行こうとしたので

「あっ！？さっき言ってたレインボラルってどうなったの？」

おかゆのことはもはやどうでもよかった

とにかくレインボラルの討伐のことがちょっと気になった。

「あれは討伐依頼を断ったわ、依頼を受けてるよりも倒れたあなたの方が心配でほっとけなかったからね」

俺は思った。こんなに優しい子に助けられて良かったと

しばらくして運んできてくれたおかゆを口にする

「・・・」

「どうでしょうか」

なかなか美味しい、でもいつも食べてるようなものではなく、ちょっと違う感じがしたが、全然いけた。

「うん、美味しいよ」

「よかった、あの時、あなたが倒れたときはほんとびっくりしたんですよ」

そうだろうなと思う。いきなり人が倒れたら驚くのも当然だと思う

彼女がふと何か思ったのかいきなり顔を近づけてきた

「・・・あなた、目が黒いのね」

いや、黒いのは当たり前じゃないのかと思った

「みんな黒いんじゃないのか？」

ミシエルは首をかしげていた・・・なぜだ？  
と、よくみるとミシエルの目は青色だった

「・・・そんなに黒は珍しいのか？」

「黒い目の人なんてこの世界に存在しないわよ」

「黒目が存在しない・・・？」

「うん。黒目ねえ・・・」

ミシエルは少し考え込むようなそぶりをしていたがそのうち  
らちが明かなくなったのか

「・・・自己紹介がまだでしたね。わたしはミシエル17歳、あな  
たは？」

と、自己紹介に話を切り替えた。

この話はまた後でもいいだろうと思い

「俺はブレイク、17歳」

と答えた、これが偽名なのは知っている、しょうがないけど

「なあんだ、同年？ブレイクね、んじゃこれからブレイクって呼ぶからよろしく」

いきなりため口！？まあでも、その方が話しやすいかな  
そんな自己紹介をしていると突然

ゴンゴン！！

「だ〜れ〜か〜いませんか〜。いるんでしょ〜ミシエルちゃん〜」

はあ〜というため息が聞こえてきた

「またあいつ等か・・・」

「誰？」

「黒盗賊よ、女の人や、金目のものを何でもかんでも奪う酷い人」

黒盗賊？そんな奴が何でここに、まあいつまで待っても帰ってくれそうにないし

とりあえずこの武器があれば追い払えるかな？

でもこの剣はまだ使ったこと無いし、ここで使うのも・・・

いや、ここで使わなきゃいつ使うんだ？・・・やるっきゃないか

「ヴェーア！」

そう叫ぶとどこからともなく現れた剣が手で握られていた

「ブレイク？その神秘的な武器はいつたい？」

「これはね、俺の大事な武器なんだけど、細かな説明は後でね」

そう告げると入り口の扉まで歩いた。

武器が無くなったらこの世界で生きていけないからな

「おっ来ました、ミシェルち「黒盗賊さん、この家に何の御用ですか」・・・き、貴様はだれだ！」

顔がアホ面だ、長いひげに、赤い服に金のズボン、そして緑のトンガリ靴

「・・・きもい、黒盗賊の癖に派手だなあ」

結構小さな声で言っただけだが黒盗賊のリーダー・・・いや、髭面ピエロ（さっきの原色野郎はこう呼ぼう）はそれを聞き逃さなかった

「なっ、なんだと、私に向かって、きもいなど、お前らこいつを叩き潰せ」

あ、派手とかそういう部分にはノータッチですか・・・

そういつて出てきたのは超がつく程がたいのでかい男が二人前に出てきた

「誰だか知らんが親分を馬鹿にした罰にボロボロにしてやる」

ボロボロって怖い怖い、とにかくボロボロにされる前に倒さないと

「よし、覚悟！」

そういつて剣を一振りすると真っ赤に燃え盛る火剣に変わった

「えっ？」

俺はかなり、いや、めちゃくちゃびっくりしたが髭面ピエロは俺の数倍はびっくりしていた

「魔法剣だ・・・ばっ馬鹿なそんなはずは・・・」

顔が真っ青になっていた。こんなにびびる剣なのか？・・・脅しをかけてみるか

「魔法剣っていうのかこれ？まあこの剣さえあれば・・・いや髭面ピエロにはこの剣さえ必要も無いな、いやでもこれを使って速攻倒されたほうがいいかな？」

とくに後半部分に力を入れて言ったのだが

「ひ、髭面ピエロだとっ！」

あつ、違うところに突っかかりましたか・・・  
顔をさつきから青くしたり赤くしたり忙しい奴だなあ・・・

「親分、こんな奴に勝てるはずが無いですよ、魔法剣ですよ魔法剣」

「くう・・・し、仕方ない、引き上げるぞ！」

そんなことを髭面ピエロは言いながらどこか遠くの方へと逃げ去った

そのころ逃げていった方の木の影に隠れていた謎の人物がブレイクを観察していた

「あの少年、目が黒かったな・・・まさか!？」

「あの伝説の話だろ？見間違えじゃないのか？」

「うーん、確かにあれは黒だった」

「お前がそういうならそうだろうなあ騎士団一視力良いし」

そんな会話を木の陰でやりとりしていた

「なんだか知らないけど助かったあゝ」

などと言っていると、なんか物凄い勢いでミシエルが来て

「ブレイクってセル騎士団の一員だったの？」

なんかすんごい目でこちらを見ているが何がなんだかさっぱり分からない

「セル騎士団って何？」

「セル騎士団って凄腕の人たちが集まる最強の騎士団だけど・・・」

「そんなにすごいのか？」

「って！！、セル騎士団を知らないのぉ！！！！！！？」

とてつもなくでかい声を出してきた、鼓膜が破れるくらいな特大なのを・・・

## 第一章

### 非現実的な世界（後書き）

今回は結構長くなりましたが文の長さも一定じゃ無くなると思います  
次回はかなり短くなりそうです。

EX?

退屈(前書き)

今回はブレイクの話ではなく  
ブレイクにとっては危険な人物が動き出します。

EX?

退屈

EX? 退屈

### 魔王城・王部屋

今日も戦いの無い退屈な時が流れた。これを人間どもは平和というのだろうな

部屋の大きさはどこかのホテルのスウィートクラスなのだが装飾品は一切無い、あるといったらベッドの横にある花瓶に飾られた花くらいだ。今はテラスに出て空を眺めているのだが

「つまらんな・・・」

ボソツとそういった。普段、城の中を歩き回るのも飽きたからテラスに来たが、ここも何度目だろうか・・・。

「なにか面白いことは無いですかね・・・」

隣にいる金髪のツインテールに赤い目をしているエルウェールが言った。着ている服は動きやすい生地にガーターベルトをしている。魔神王は何も言わなかったが、そういう性格なのはよく分かってる。簡単に感情を表に出さないし、ここに初めて入隊した頃から冷徹な性格だったし、規則を破るものは即刻首を刎ねた。しかし、心底悪い人ではない気はした。あの時は私に優しくしてくれた・・・

その時、いつもの日常に機転が訪れた。

ガチャ！

「ギーヴァ様！問題が起きました」

「入るときには礼儀ぐらいあるだろう。ツァツェ」

特に表情を変えことなく口調も随分落ち着いていた  
急いで入ってきたツァツェは方目を覆うほど長い銀髪形で美青年で  
あり、上も下も青黒い色の清楚な紳士服を着ている

「ご無礼を失礼しました」

片膝をつき低頭した。

「それで。用は何だ？」

「はっ！ハイエント地方に謎の少年を感知しました。その見張りを担当していた者が、空中に次元を歪めいきなり出現したと言うことです。」

魔神王は滅多に笑うような人ではなかったが、それでもほんの僅かだった笑った

「次元を歪めた・・・ククツ。これは調べてみる価値がありそうだな・・・」

エルウェールは久しぶりに見たギーヴァ様の笑みに少し嬉しくなった。その笑みはすぐに消えてしまったが、それでもしっかり見えないと分からないほどほんの少しの笑いだったのは確かだ。こんな

こと、何年ぶりだろうか・・・

「ツァツエ、今後もそいつについて詳しく調査を続けてくれ」

「はっ！分かりました。」

失礼しましたと告げ、その場を後にした・・・

#### 魔王城・最上階廊下

ツァツエにとつてギーヴァ様は憧れの存在でありどんなに頑張っても追いつけない力を持つお人・・・いや、魔人様であった。この人が魔人だと知るものは、この城で俺が、エルウェルくらいである。他の兵は魔人であることなど分からないし、魔人という存在は、恐れられている存在である。

昔話や神話・言伝えなど魔人の強さは誰一人として知らないものはいないだろう。

「あの少年に興味を持ってくれたおかげで、しばらくはギーヴァ様に退屈をさせることは無くなりそうだ」

ツァツエも軽く笑みをこぼし階段を下りていった・・・

「必ずやあの少年の情報を徹底的に調べ上げギーヴァ様にお伝えしなくては」



EX?

退屈(後書き)

2話置きにこの話を何回かした後にブレイクと接触します  
それはもう少し先の話になりそうですがブレイクには頑張ってもら  
わないと。

## 第二章

### セル騎士団との戦い（前書き）

話の構成が成り立ってるか不安でいっぱいです・・・

## 第二章

### セル騎士団との戦い

#### ミーレの家・居間

「セル騎士団っていうのはね、数少ない人材を集めて作り上げた魔法剣最強の騎士団よ！」

「そんな騎士団がいたなんて・・・」

なんかこれからやばいことになりそうな気がするなあ  
さて、これからどうするか・・・

「んじゃあ、ブレイクはどこに騎士団に所属してるの？」

「どこについて？」

所属も何も俺は・・・

「そうよ、セル騎士団じゃ無いなら、ゼロ騎士団？ア力騎士団？それともクア騎士団？・・・まさか、ダーゼル闇騎士団なんてこと無いわよね？」

何ひとつ分らない、そもそも聞いたことが無い・・・これじゃあ嘘のつきようが無い・・・

「・・・ごめん、知らない」

「し、知らないって？騎士団全部分からないの？」

「知らない・・・」

「嘘でしょ、世間知らずにも程があるわ」

世間知らずというか、まだこの世界の新米であって何ひとつ分らない身でして・・・

なんと説明したらよいのやら・・・

「信じてもらえるかどうか分らないけど、俺さあ、この世界の住

人じゃないんだよねえはははは・・・」

「この世界の住人じゃない・・・？」

やっぱり信じてもらえるわけ無いよな

「そう、日本っていう・・・分からないか。まあ違う世界から来たんだ」

しかしなぜかあっさりと答えが返ってきた

「やっぱりそうだったんだ、私もそうだと思ったんだよね、だってどう見てもその服装は、ここの人が着てるような服じゃないもん」

信じてもらえちゃったよ、でも、その理由がこの変だという服装なのか？

そんなに変なのかあ？

「この剣も、俺が目が覚めて貰った物だし」

「そうなんだ、そういえばさっき、ヴェーなんだっけ？なんか名前

みたいの呼んでたよね？」

「ヴェーアね、それはこの剣の名だよ」

そついいながら剣を前に出現させた

「これが？とても綺麗な剣ね」

その言った瞬間、少し輝きが増したような気がした

そりゃあ変わってるだろうな、俺のいたあの場所はよく分からないけど

そこにいたキルティがこれをくれたからな

「まあね、でも俺が付けた名前じゃないんだ」

初めて貰った剣の時の様子を思い出しながら説明した

「へえー最初からついてたんだ」

自分のことをしばらく話していると、またノック音が聞こえてきた

「ん？誰だろう？」

ミシエルが玄関の扉を開けるとセル騎士団が立っていた。真っ赤な制服に金色のボタン、ズボンは黒一色。

「どんな御用で・・・？」

そのなかの一人が歩み寄ってきて

「ここら辺に凄腕の黒目の少年が居たらしいが見なかったか？」

などと言ってきた。言って良いのか悪いのか、ミシエルには判断し  
かねなかった

「おい、誰が来てるんだ？」

何も知らない俺はそいつらに顔を見せてしまった

「あなたが噂の・・・」

噂？え？もう噂になってるの？

「ってか、あなた達は誰ですか？知り合いなのかミシエール？」

「いや、騎士団の人とは関わりを持てなから知らないよ」

そんなにすごいのか騎士団ってのは。

「あなたが黒盗賊と戦っていたとき私たちの部下の数人がたまたま、あなたを見かけたそうで、よく見ると黒目だったそうなの」

悪い人じゃないと判断したのか、ミシエールが「夕飯の準備してくるね」言いながら

部屋の奥へと戻っていった

「いやあ、俺は結構、尾行とか気づく方なんだけどそれより遠くにいたのによく見えたな・・・  
恐るべしセル騎士団

「そんなに黒目が珍しいんですか？」

「もちろんですとも、階級の目の色がどこにもあたいない謎の魔人、伝説では聞いたものの本当にいるとは私たちも一目見なきや信じられませんでした」

「まてまて、魔人・・・？  
俺は人間だぞ？魔人って何でも出来ちゃう最強の人じゃなかったっけ？」

「いや〜でも俺は魔」是非とも我がセル騎士団に入団してもらいたい」マジっすか・・・」

「やっぱりな・・・（なんとなく感じてたからね）  
入団したところで歯が立たないのは目に見えてるし

そもそも伝説になってるってことはそこそこ闘える奴じゃないのかよ

「でも俺「おねがいします。どうか入団してくれませんか？」そこ  
までやりますか？」

先程まで立っていたセル騎士団一員が膝をついて頭を下げてきた

「止めておいた方がいいですよ」

首と手を振りながら否定した

戦力になるどころか足手まといになるしな  
そうすると一番偉そうな奴が立ち上がった

髪は長髪の赤色で体つきは良いし身長も高いしでイケメン要素がた  
くさん含まれてた

「では私と闘ってくれませんか？」

「はあ？」

絶対に負けるって!!瞬殺されるだろ・・・  
相手はすでにこちらに剣を構えている  
ああ・・・神様、どうか私をお守り下さい

「ヴェーア!」

剣を取り出すと俺も構えた

「剣が現れた!?!・・・なんと不思議な魔法ですね、教えてもらいたいものです」

と、言うとかかなりの勢いで走ってきた

「覚悟!!!」

最初は胴を薙ぐ様に斬ってきた

キィィィン!

守るので精一杯だった

「どうしたのですか？手加減は無用ですよ」

キン！キユイイン

目にも留まらぬ速さで斬りかかってくるので、もはや守るにできなかつた

「やつ！！」

俺が横腹を蹴られよろめいてる所に

「とどめ！！」

最後に見たのは頭上から迫ってきた剣だった・・・

## 第二章

### セル騎士団との戦い（後書き）

これからもゆっくり書いていきます。

ので、よろしくお願いします。

### 第三章

#### あの世の世界で猛特訓！（前書き）

ブレイクは死ぬことが出来ないんじゃないか？  
と、書きながら思いました。

まあ後々問題が起きるんですけどね・・・

### 第三章

### あの世の世界で猛特訓！

???

「んんん？」

目が覚めたら変な空間に浮かんでいた

「ここ、どこだよ・・・」

頭をかきながら周りを見渡すと

「久しぶり〜ブレイクう〜!」

「キ、キルティ!？」

こちらに手を振りながら走ってきたのはキルティだった  
そうか、ここはやっぱり最初の・・・

ってか、あの時は頭が混乱してたからよく見てなかったけど  
キルティの髪の色って金色だったんだな。

背丈はそれほど高くなかったし、肌は真っ白なんだなあ〜

「どうしたの？」

じっくり観察しすぎたな。

「いや別に何も」

「まあ、単刀直入に言うと、またブレイクは死んだのよ」

はあゝそうだよなあ・・・

セル騎士団に殺された時の痛みなど感じてないが、ここに居るってことは死んだんだよなあ・・・

「ってか、殺さないでもいいだろ、精精、寸止めとか」

「騎士団の人たちはあんな程度の攻撃でブレイクがやられるとは億に一つ思ってたんでしょ」

「億に一つ！？勘違いも程々にしろっての！」

「いやゝそこは勝ってもらわないとねえゝん」

ニコニコしながら話すキルティだが、何故にニコニコ？

「んなこと言っても相手は最強のセル騎士団だしなあゝ」

「ブレイクはセル騎士団に勝つ力があるのよ」

なに！？そんな力がどこに・・・  
体のあちこちを確認するが特に何も無い・・・

「あははっ 目に見えるもんじゃないでしょ。だからこれから特訓するのよ」

「特訓ってここですか？」

「もちろんよ！」

その日から、厳しい特訓が始まった

「んじゃ、まずは瞬発力を鍛えなきゃね」

とびっきりの笑顔で片手を振り上げた

そして何やら呪文を唱え始めたのだが・・・ん？

徐々に現れる小さな石・・・じゃなくて！結構でかい岩？！？

ズドン！！！！

「うわっ！！！」

「ほらっ避けないと死んじゃうわよ」

すでに死んでるっつーのにこれ以上どこに行くってんだよ！？  
でも、さすがに痛い思いをするのは嫌・・・だっ！

最後の“だっ”はちょうどこちらに飛んできた岩を横飛びで避けたからだ

「あつぶねえ・・・」

間一髪避けたが次々と来る岩は休むことさえ許してくれなかった

「はい！どんどん行くわよぉ」

キルティの掛け声と共に何個も何個も降り注ぐ岩岩岩・・・

やっこの思いでやりとげてもう体が動かない

「はぁ～もう無理だぁ～」

「そんなこと言わないの、ヒーリング！」

体中に行き渡る鮮やかな緑色の風がスウット・・・

「なんだこれ？・・・ってあれ？・・・体が楽に・・・」

「これで動けるでしょ？はい、特訓開始！」

このあとにもバリバリ特訓が続き、体が限界に達すると回復の繰り返しで

なんか無限に体力が付いたみたいで不思議な気分であったが、さすがに気持ち悪くなってきた、精神的に限界が来ているんだと思うけど、このままやっても大丈夫なのだろうかと心配になってきた  
そういえば、この世界には朝も無ければ夜も無い  
いくら練習してもあの時の来たままの雰囲気だった

「どのくらいやったかって？そうね・・・26時間ぐらいは特訓したかな？」

2、26時間！？おいおい、まさかこんなにやっているとかわなかつたな

普通じゃこんな特訓やってたら死んでるし

ってかテレビ番組にそのぐらいやってるのなかったっけ？

「まあ、今のあなたは死んでるけどね、私、そのテレビ番組見たことあるわよ」

「心の中が読めるのかよっ！？って、なにげにテレビ見てるし・・・

」

ってか、テレビあんの！？

「ブレイク、普通に声に出して言ってたわよ」

いくらなんでも女神という立場であつてもそんなことが出来るのは大神様ぐらいだわ

と、言われたが、俺、そんなに疲れてたのか・・・（精神的に）  
心の中の言葉を声に出してるとかそろそろやばいな

そんなことを考えていたがこの後も特訓は長々と続いた・・・

「体術のほうはそろそろいいかな、次は剣術ね」

待つてました！どれほど待ちくたびれたことか、あの長々と続いた特訓もやっと次のステップに移るよぉ

「まずは心得から！」

そついうとなにやら巻物を持ってきたキルティなのだが・・・

「よおいしょつとおゝ・・・むうゝなんだかめんどくさいわね」

使えないと判断したのか投げ捨てた

「いいわ、私が説明するから良く聞いててね」

1つ 無駄の無い攻撃！

これは練習で叩き込まれたから大丈夫かな

2つ たとえどんなときでも落ち着いて判断！

「どんなときでもって言われてもなあ」

「落ち着いていればなにかが見えてくるはずよ」

3つ 最後まで気を抜かないこと！

「気を抜くのはマズイもんなあ」

「そうよ、たとえ勝てるという自信が100%あったとしても気を抜かないことは重要よ！」

確かにキルティの言う通りだな・

「じゃあ、まずは剣を出してみて」

「わかった、ヴェーア！」

久しぶりに出した剣だが、むうゝなんか仕掛けがありそうな・・・

「あの黒盗賊と戦った時に剣が燃えたわよね？」

「確かに燃えたけど」

「あれは闘わなくちゃいけないと決断した勇気の色」

勇気の色って赤色なんだなあゝ

・・と思った。

「その剣、ちょっと借りてもいい？」

はい、っと渡すと剣を前に構えて何かをブツブツブツ・・・  
そうすると一瞬で・・・銃？

「こんな風に銃にも変えられるのよ」

「すげえ……遠距離攻撃も可能なんだな」

「近距離でも遠距離でもどんな時にでも使える万能武器、しかも威力を変えられるのよ」

「威力を変えられる？」

「そうよ、相手を殺さずに吹っ飛ばすことも出来るのよ」

「マジか？そんなことが出来たら殺さずにすむな」

「まあね、実際そんな甘ったるい世界じゃないけど……それじゃあ特訓始めるわよ」

「そついうと剣に変えてこちらに渡した」

「銃に変えるときは銃にしたいと願えばいいのよ、口に出していった方がうまく出来るかも、威力の方も同じで、弱くしたいと願えば」

弱くなるのよ」

簡単でしょ？と微笑んだがそんな上手いくのか？

銃にしたいと願えば剣が変形する・・・  
威力も同じように願えばいいんだよな  
なんていうか、なんでもありな武器だな

「んじゃまずはこの立方体の鉄箱を投げるから剣で斬って、そのあと中に入ってる2つの球体を1つは銃で破壊してみて、もう1つのは無傷で弾いて」

いくよ？と言うと、手の平ぐらいの緑色の箱を出現させ空中に放り投げた

鉄箱壊せるの！？と言う驚きはもはやお約束みたいなものでこんな剣じゃなんでも斬れそうだ・・・

「まずはターゲットに接近、無駄の無い攻撃で斬る！」

教えの3つの内の1つを思い出し

ジュン！っという音を鳴らすと二つの球体が出てきた  
次に剣でなく銃に変える

「ん？なかなか上手くない」

「思いを集中させるのよ！」

そうキルティが叫んだ

「剣から銃に、剣から銃に・・・」

呪文のように何度も唱えると  
さっきまで剣だった物が銃にひと変ってくれた

「よし！」

重力に従うように落ちながら銃を構える  
続いて2つ目の教え

「どんな時にでも落ち着いて焦らず判断」

冷静に撃ち二つ目のターゲット破壊に成功  
続いて二つ目のターゲット  
威力を調節しないと破壊してしまうため  
気をつけなければならない

「弱めて、弱めて・・・」

そう言いながら放った銃弾は球体めがけて飛んでいき  
壊さずに弾く事に成功した

「ふう一回目でなんとか出来たな」

銃をしまい、一息つく

「うーん・・・まだまだね」

そう言いながらキルティはこちらにさっきの球体を見せてきた

「ヒビが入ってる・・・」

「そうね、なかなかだったけど、惜しいわね」

「なんか悔しいな」

「んじゃ、もう一度やるつか、最後まで気を抜かずにね！」

どうせやるなら完璧にして終わりたい  
それから数時間特訓に励んだ

「よし、これでもう大丈夫ね」

キルティはそう頷くとこちらに近寄ってきて

「もう一度あの時の場面に飛ばしてあげるわ、あっ！あとねえ入団  
はした方がいいわよ」

「セル騎士団にか？」

「そうよ」

しかし、だったら戦う意味無いじゃん・・・っていうね・・・

「だったら戦わなくていいんじゃない？」

「それは駄目みたい。ある決まった場所にしか戻せないし、その常識を破るのは神羅書に反するみたいだから」

神羅書という物がここ、天超地の掟だろうと俺は思ったからとくに何も言わなかったが  
結局戦うのかあゝ  
でも次は必ず勝たなきゃいけない

「んじゃ行くわよ！」

というと俺に手をかざして

「今度こそ勝つて来るのよ！」

「おう！」

そういうと俺は光に包まれた



### 第三章

#### あの世の世界で猛特訓！（後書き）

大きい十字架でぶん殴りはどうしたんでしょうかね  
それについても少し悩んだブレイクでした。

EX？

企み

「以上。報告を終了します」

「ご苦勞。今後ともブレイクとやらの觀察を続けてくれ」

「はっ！それでは失礼いたしました」

エルウェールやツアツエは魔界市場に出掛けている、ギーヴァはそんなうるさいところには絶対に行かない。何故かは、騒がしい場所がただ嫌いなだけであり、今いる部屋のように静かなのが一番いい。しかしこのような時間が長く続くのは好きではないため時折外へ散歩に出かけている。

「あの少年・・・ブレイクといったな。所持している剣は変化が可能か、魔界でもそんな剣など存在していない・・・」

ギーヴァは少し悩んだがそういうことは会ってみるのが一番早い  
先程の兵には觀察を続けろといったがいちいち待つのも面倒だ

「どんな力を持っているのか楽しみだな・・・ククッ」

ギーヴァはブレイクの現在位置特定のためアクレイトポインターを使った

「・・・少し時間がかかるな。やはりこの類の魔法を取得しておくべきだったな」

EX？

企み（後書き）

いくら魔王といっても面倒な魔法を覚えるのが苦手

と言つか魔王でも取得するのに少しは学ばないといけないんですね

もうなんか何もしなくてもなんでも覚えらるなんていうそんな便利機能は無いんですね

## 第四章 最強の主人公降臨

ミシエルの家の前

「では私と闘ってくれないか？」

「  
えっと・・・」

この場面はセル騎士団と戦う前の所だったよな  
しかし緊張はしてるもののあの時みたいな恐怖感は無くなっていた  
あれだけ特訓したし心配すること無いよな

「望むところです！」

「ではっ！」

というと相手は剣を構えた

「ヴェーア！」

俺も剣を呼び出し構える

「剣が現れた！？・・・なんと不思議な魔法ですね、教えてもらいたいものですっ！」

と、言うとかかなりの勢いで走ってきた

「これは特別な魔法なんですっ！！！」

キーン！！

その頃ミシエルはというと・・・

「今日はどんな夕食にしようかなあ〜」

鼻歌を歌いながら料理を作っていたが

「なんか外が騒がしいな・・・」

窓で外を確認するとブレイクと騎士団が戦っていた

「ええー！何で戦ってるの？」

ミシエルは初めはびっくりしたもののブレイクの戦い方に少々見惚れていた

「す、すごい。ブレイクってあんなに強かったんだあ・・・」

どこの騎士団にも属さない謎の黒目の少年が名高いセル騎士団と対

等に戦っているなんて

ミシエルはしばらくの間夕飯の準備を忘れていた

「おりゃー!!」

胴を薙ぐ様に斬ってきた

状況は少し違うけどあの時と同じ攻撃方法・・・

相手の攻撃をギリギリまで引き寄せ避けて

ブォン!!

相手が空ぶった隙に右蹴りで打ち上げる

騎士団リーダーは、うっ!と唸りを上げて飛ばされる

「さすがですね、強さが違いますよ」

腹を押さえながら魔法を唱え始めた

「燃え盛るもの、それは少しの揺らぎもなく周りを焼き尽くす。相手に苦痛を、このフォースを炎獄神に捧げ、力をお与え下さい。大魔法フレイムピラム!!!」

手を空にかざすと真つ赤に燃える炎の柱が出現した

「ハア。ハア。これは大量のフォースを消費する強魔法の1つ、大丈夫です。当たっても死ぬことはありません、致命傷にはなりません。が……」

こんなの見たことねえ……

啞然とするほど物凄いものだった

すると何かが頭に話しかけてきた。テレパシーか？

(剣をかざしながらソーサリーフレクトと唱えてみてください)

……？なんだか分からないけどこのピンチをしのぐには言つ事を聞くしかねえな

「ソーサリーフレクト!!!」

なにか虹色に光る何かが巨大な盾になった

すげえ・・・こんなこと出来たのか・・・

巨大な火柱が盾にぶつかりと爆発音を立てながら火柱が跡形も無く消え去った

「な！？そんな簡単に・・・」

相手は息を荒く吐きながら目を見開いていた

「今度はこっちから行きます！！」

真つ二つにしない程度に威力を調整し剣を振り上げる  
人殺しにはなりたくないもんで

うっ！

相手を打ち上げて2回程蹴り

ドスッ！！ドッ！！

上空から地面へと叩き落とす

「くられ！」

物凄い勢いで相手を打ち落とした

バドーン！！

グアハツ！！

そんな効果音と呻き声をたて地面に叩き付けられた  
死んではないと思うけど骨とか大丈夫かなあ・・・

セル騎士団はよほど驚いたのか目を見開いていた

「やはり・・・伝・・・説・・・は・・・本当・・・だった・・・」

ガクガクと立ち上がりながら声を発した

あんなに高いところから叩き落としたのに骨、どこも折れてなさそうだった。さすが騎士団

「あなたのお名前は？」

背中を擦りながらたずねてきた

「ブレイクです、あなたは？」

「私はセル騎士団攻撃要因隊長のギフエアです」

ギフエアか。なんか、かつこいいな  
そくだそくだ、入団しないといけないんだっけ

「あのか？」

「あなたの強さはよく分かりましたそれではまたいつか」

「入団させてくれませんか？」

立ち去ろうとしていたギフエアは何かにつ  
張られるようにシュタ  
ツットこつちを向いた

「それは、ほ、本当なのか？」

呆然と立ち尽くしていた

「ほ、本当か？」

「はい、気が変わりました。が、しかし、まだ大丈夫ですか？」

良いに決まってるじゃないですかと言わんばかりに手を握り締めて  
ブンブン振った

「ありがとう。ありがとう。」

物凄く嬉しかったのだろう。しかし、そんなに俺の立場は凄いのか・  
・

「ではブレイク殿、早速我が城へ」

そう言われ俺は、騎士団達に肩をつかまれ連れて行かれた

「ちょ、ちょっと！ブレイクどこに行くのぉ？ごはんは？」

夕飯を作っている途中だったのだろう。エプロン姿で外に出てきた

「セル騎士団の城にちよつくら行つてくるよ」

ミシエルには悪いがこの状況行かなきゃな

「なるべく早く帰ってきてねえ」

「ブレイク殿、さあこちらへ」

ブレイクはこの先どうなるのか不安を感じるのであった。  
あと、あの時のテレパシーは一体・・・

## 第四章

### 最強の主人公降臨（後書き）

投稿が遅れました。

完結するまで頑張っていくので見てくれている人たちはこの先もよろしく願います。

## 第五章

### 不落のヴェセア城

#### ヴェセア城・門前

「結構・・・いや、かなりのでかさだなあ」

ここの敷地は、しいて言うなら東京　イーニー　ーぐらいの大きさだそれはさすがに・・・と思うだろうがほんとにそうだからしかたがない

「そうでもない、ここより大きい敷地は他にもあるからな」

他にもここよりでかい所があるのかあ・・・

この世界どれだけ広いんだよ

「城も豪華だなあ・・・」

ギフエアが門を開け中に入ると、城までの距離は1キロはあるだろう城の入り口が見える程、道はまっすぐだった。目がかすむほど地面がピカピカとひかり

両脇にはある一定の距離に柱が置かれていて1つ1つに絵が描かれていた。

ほぼ白・水色で統一された庭・・・噴水は左右の花畑に1つずつかあ・・・すげえ

「では、ブレイク。次は中庭のほうの案内を」

そう言われ俺は後でミシエルに話を聞かせてやろうとじっくり見て庭を後にした。

## ヴェセア城・中庭

俺は城に囲まれた中庭のところまで来た

この城は紅色をベースに白と金で綺麗にそしてかつこよく彩られていた

この城の紋章はきつと金色の剣を2本持ったグリフォンだ。

今まで通ってきた道にはそんな垂幕がいくつもあつたからという予想だが、きつとそうに違いない  
周りを見渡せば噴水の所に水色の壺を抱えた女神像が立っていり花壇には見たこともないような不思議な花を咲かせているし、いやゝ凄すぎるだろ・・・

「あ、その花はキューイトと呼ばれる花で、四季が変われば色も変わりますよ」

日本じゃ考えられないことだ、写真にとっておきたいのだが第一俺は死んでるからとうぜんながら所持品は何ひとつ俺の部屋だ・・・

「中庭の紹介も終わりましたことだし姫様にでも挨拶に行かれたらどうですか？」

お姫様いるの！？ハッキリ言って、内心踊りまくりである  
きつと、こんな綺麗なお城にお住みになっているから清楚で可憐でとても可愛いんだろぅなあ。もちろ  
ん「はい」と返事をした

中庭を後にして城の赤絨毯の敷かれた階段を登っていくと、5階だろっか？

一際目立つ金に縁取られた赤色の扉があった

「ここが姫様の部屋でございます。まあ正式には面会の場でもありますが・・・」

「えっと、それはどういう意味で？」

「姫様の部屋はこの他にももう1つあるので、姫様の許可が無いとそちらには誰も入ることの出来ない部屋になっていますので」

「そうなんですか」

「では」

そついうとガチャッ！！と扉を開けた

「失礼します」

ギフェアが開けたその先には人影が見当たらない

「姫様？・・・」

そう言いながら探したのだがいなかった

「ブレイク、ここで座って待っていてはくれないか？」

「あ、わかりました」

俺はひとまず座ると軽く礼をしてギフェア達は部屋から出て行ってしまった。

誰もいない空間にただ一人・・・

「そういえば、ここ最近一人になったことが無かったな」

そついいながら腕を組んだ

いままで忙しいことが数え切れないほどたくさんあった

俺はもう、元の世界に変えることは出来ないだろうけど、こちらの世界でもなんとかやっていけそうだな。そんな過去を振り返りながら周りを見渡すとこの部屋には、たくさんのお偉いさんだろうか？写真が飾られている。そのほかにはシャンデリアやよく見ると下は大理石で鳥のような絵が作られている

椅子から立ちしばらくの間いろいろな物を見て回った、どれも不思議でとても美しかった。

「なにかもが高そうな物だな」この部屋にある装飾品だけで数億はしそうだよな」

そんな感想を述べて再び椅子に座ると左側の扉に影が映り

ガチャ！

「ん？」

誰なのか見ているとかわいらしい女の子が出てきた

「ふあゝあ、よく寝たあ……どちら様でしょうか？」

とてもドレスが似合っている。肩ぐらいの長さの髪だろうか？綺麗な水色だ。目は薄い緑色、年は15、6歳程度だろうか……

「あのう……そんなにじっくり見ないで下さいな」

ボーッと眺めていたためか顔を真っ赤に染めていることに気づかなかった

「あ！すいません、ついつい見惚れちゃいまして……」

「私にですか!?!」

その子はびっくりし目を見開いていた。

「はい、そうです。とても可愛いですね。ところで、もしかしたら貴女がこの城のお姫様ですか?出来ればお名前を……」

「とても可愛いだなんて……ポッ」

その言葉はこの静寂したこの部屋であつてもブレイクには聞こえなかった

「あ、あの姫様?名前は?」

「は、はい!わわ私が、お、お姫様ですわ!」

えっと・・・名前聞いたんだけど・・・ってか、姫様の顔が真っ赤  
っ赤！！

え！？どうしたんだ！？急に熱でも！！！？

「だ、大丈夫ですか！？熱でも！？」

「べ、べっ別に大丈夫です。お気になさらないで下さい」

「本当に大丈夫ですか、とりあえず横になられた方が」

しかし、その女の子は首を振るだけだった

「本当に大丈夫ですから気になさらないで下さい」

「そ、そうですか・・・」

「あのお？あなたは一体・・・」

「あ、申し遅れました。俺はセル騎士団入団の手続きにここに来たブレイクと申します」

「ブレイクさん・・・ですね。それで・・・？どういったご用件で？」

「あ、えっと、ギフェア隊長に姫様にご挨拶に行かれたらどうだと言われまして・・・」

「そうだったのですか。先程は取り乱してしまって大変申し訳ないことを・・・」

顔をうつむいてもじもじとしてしまったそして何かを振り切るように顔を上げ

「私の名前はアイシエス・ティーナといいます」

「いい名前ですね」

「え！？いい名前ですか・・・あ、ありがとうございます！」

顔を赤らめて上目ずかいで見てきた。かわいい奴だな・・・  
断じて俺はロリコンじゃないがな・・・

「いえいえ。それよりもアイシエス姫・・・でいいんですか？お座りになられたらどうですか？」

「は、はい、でも・・・出来ればティーナと呼んでくれると「アイシエス姫！もう、戻られていたのですね、お姿が見当たらないので心配しましたよ」・・・はい」

ギフエアの声で後半部分がよく聞こえなかった・・・出来れば？って俺に何をお願いしようと思ったんだ？　なんかアイシエス姫はとも落ち込んでるみたいだけど・・・

「どうですか？アイシエス姫は？」

「どうですか・・・ですか？とても綺麗な人だと思いました。なんか、さすがこの城の姫様だなと・・・はい」

姫様にまた異変が起きたみたいだがほんとに大丈夫かなあ

「そうですか。ではアイシエス姫。失礼いたしました。また3時ごろにお伺いしますので・・・」

そういつて部屋を出ようとすると

「あ！あの・・・私も一緒にしたいのですけど・・・」

「アイシエス姫がですか！？それは何故でしょうか？滅多に騎士団の見学なんてなさらないのに・・・」

「いえ・・・何故といわれましても・・・たまにはこういうのも良いのではないかと思ひまして」

ふうん滅多に見に行かないんだ。まあ、こんな子が騎士団の練習風景を見てもつまらないだけだろうしな。でもなぜ今回はこんなにも行きたがつてんだろ？

「そうですか。なら、一緒に」

そういつて歩き出すとアイシエス姫は俺の隣に来た軽い会釈付きで先頭にギフェア次にアイシエス姫と俺、といった感じになって歩いている姫様はなんだかにこにこしてるみたいけど・・・

「あ、あの・・・アイシエス姫？」

「はい！なんでしょう？」

なんだかとても元気な返事をしてくれたのだが、その元気がとても輝いて見える……。

「なんでそんなに元気なんですか？」

「へ？そ、それは……嬉しいからです」

「嬉しい？何かあったんですか？」

「嬉しいから嬉しいのです。」

少し頬を染めながらそういった。何が嬉しいのか、ちゃんとした理由は言ってくれなそうだな  
姫様の部屋から出てから、階段で下に降りた廊下をずっと進んだ先に薔薇や女神が描かれているステンドガラス張りの部屋にたどり着いた。

「ブレイク、こちらが我等騎士団員だ」

そういつて手を向けたほうには大体30人程の騎士団が剣術や魔法の練習を行っていた

「ギフェア？ブレイクさんとはどうやって知り合ったのですか？」

「それはですね、アイシエス姫。私が本気でブレイクと戦って完敗させられたためこれは必ずや我が騎士団に入れなくてはと思いますし、必死の交渉により仲間になってくれることになりました」

口到手を当てて目を見開いていたがとても嬉しそうだった

「それはほんとですか！？ギフェアも強いですけど、ブレイクさんもそんなに強いのですか？」

それはもう強くて強くて私では歯が立ちませんでしたよ。あの完璧

な攻守は誰にも破られないと思わせるようなもので、敵に回したらどんなに恐ろしいことが・・・

そんなこんなで俺についての話を長々と姫様に聞かせていた。姫様も退屈することなくそれで？それで？などとギフエアの話に没頭している。

「ギフエア隊長・・・この男は一体？」

と俺を見ながら言ってきたが男が一人・・・

そいつが言い出した一言により周りがガヤガヤと騒々しくなった

「・・・え？・・・アイシエス姫ですか！！？」

俺の肩を押しどけてアイシエス姫に跪く。

「アイシエス姫が我等の頑張りを見に来て下さったぞ！」

などと言いだめたから困ったもんだ。なんだか物凄く騒がしくなっ

たけど肝心の姫様はちょっとビクビクッ！として、俺の後ろに隠れてしまっていた。

「大丈夫ですかアイシエス姫？」

「あ、はい、大丈夫です、心配しないで下さい」

「ギフエアさん、アイシエス姫は人前が苦手なんですか？」

少し困ったような顔をしながら髪を掻き

「ああ・・・。一人二人程度なら姫様も平気なんだが五人ぐらいから怪しくなってしまうてな。部屋からなかなか出ないのも騎士団のグループに会うことを少し恐れているようなんだ・・・」

それってとちよつとした引きこもりじゃ・・・ってことは黙っておいて

アイシエス王妃は立場からして大勢の人たちの前で話すこともあるだろうに大変そうだ。

・・・？なにやらゴツイ男が俺の前まで歩いてきて

「おい！貴様、気に入らない奴だな、姫様と親しくなってるのも気に入らん。俺と勝負しろ！」

おいおい、いきなりなんですかぁー！？

こんな奴と戦ったら骨を粉碎されそうだ・・・

「ダロツト、お前にはこいつは倒せないぞ。なぜなら「こんなヒョロヒョロの奴になんかにこの俺が負けるわけが無いですよ！」おい、訊いてるのか？」

ダロツトという奴はなにやら、ウオー！とか騒いでいて、まったくギフエアの話を聞いていない。こいつはアイシエス姫とは永遠に仲良くなれないだろう。このようにアイシエス姫は脅えきってるからだ。

「大丈夫ですか？アイシエス姫」

「あ・・はい大丈夫です・・あの・・ブレイクさん、気をつけてくださいね。怪我、しないで下さいね」

そんな優しい言葉をかけられるととてもやる気が出るのだが、こいつのオーラが凄くて・・いやいや。アイシエス姫のためにも頑張らなくちゃならないな

「おい、ヒヨロヒヨロ、覚悟はいいか、クククッ」

こんな奴になど負けるはずが無いとでも言っような微笑が聞こえてくる

「少なくとも俺はヒヨロヒヨロじゃないからな！」

俺の言葉を訊くなり「フッ」と鼻で笑い。走ってきた

「コラ！ダロツトいい加減にしろよ。」

「ギフエア隊長！こんな奴なんかに絶対には負けませんから見ててください」

ギフエアは「はぁ」とため息をつきでこに手を当てた

「まあ・・・そういうことだそうだと頑張ってくれ。ブレイク」

「わかりましたっ！」

返事とともに剣を構えた。

## 第六章

### 大剣使いダロット戦（前書き）

騎士団主要メンバー9人の内の1人、ダロットですが、喧嘩っ早い  
です。

趣味は筋トレ・面白い話をする（相手にとっては迷惑）

騎士団クラスはSランク

武器は、お話にて・・・

## 第六章

### 大剣使いダロット戦

ヴェセア城・騎士団訓練所

あんな筋肉どうやってつけたんだか、持ってる武器は・・・

「貴様から来ないなら俺から行くぞ!」

等身大ぐらいの大剣だ、180cmはあるだろう。よく持てるよなあ、  
あゝ

・・・そんなことよりも今は自分の心配をしないと

ブォォン!!

「この大剣に当たれば粉々だぜっ!」

相手を十分に引き付けてからの回避だが音がやばい・・・  
アイシエス王妃の「粉々になっちゃうんですかあ!？」とギフエアに訊ねる今にも泣きそうな声を聞いたがその会話の続きを聞いている

るほど暇ではなっ！！

ブォォン！！

「避けてばかりじゃ勝負にならないぜ」

つと。あぶねえあぶねえ・・・

ここは近距離戦より遠距離戦に変えて戦おう

「ヴェーア！剣から銃に！」

カシャリと音を立て変形した  
ダロツトは少し驚いた表情を見せ

「随分変わった剣だな・・・変化する剣なんて聞いたこと無いが」

「ショット！」

バギュン！！

睡眠薬入りの銃弾はダロツトを捉え動体視力を超えるスピードで放たれたが  
結果は予想を大きく外れた。

「シールド!!」

そう叫ぶと赤い鳥の紋章を出現させ目の前で銃弾が消えた

「そんな速度じゃ俺を捉えることは出来ないな。クックック・・・」

「まてまてダロツト。ブレイクはだなあ」「ギフェア隊長はしっかりと見ていればいいのです」確かにやってみなきゃ分からない場合もあるがな・・・」

いろいろと話をしているおかげで少し考える時間が出来た。

銃弾は、まったく効果なし・・・

接近戦での力のぶつけ合いは、こちらが大いに不利になる。

うーん、と悩んでる時に頭にピリツとした感覚が走った

まただ・・・あの時のテレパシーだな？

（お久しぶりです。この相手は接近戦を得意としますね。あなたの予想は当たっていますよ。こういう相手には力を格段に下げるパワーブレイカーという魔法を使用すると良いでしょう。魔法を使用する際には普通、特訓の必要があるのですが、どうやら大丈夫そうですね・・・魔法の種類が強化・弱体化の種類を使用しますので力の消費は少ないでしょう。相手からの遠距離攻撃はリフレクターで跳ね返すとだいぶ楽になります。では健闘を祈ります。）

「あ！まってくれ！？あなたの名前は？」

（私の名前ですか？いずれ分かることでしょう）

そっぴい残しテレパシー特有の感覚が消えた。まあ言われたことをやってみるしかねえよな、アドバイスを受けた以上有効に使わしてもらおう

「ダロツト・・・とか言ったな。んじゃそろそろあんたの力を見せてくれよ」

「お？・・・フハッ！面白いっ！『ブロックデイスペラー』！！（物体破滅）」

剣を大きく振りかぶり地面に叩きつけると亀裂が走り俺に向かってきた

「リフレクター！」

虹色に輝く壁が地面を突き破って出てきた

キュイーン！！

「ブロックデイスペラーが・・・効かない？・・・だと？」

「どうした？パワーブレイカー！」

紫の輪っかがダロットを囲むと締め上げた。

「グアアッ！」

数秒締め上げた後その輪っかが消えダロツトは地面に叩きつけられた

「ふっ・・・やるじゃねえか。  
スロウアウトソード  
投擲飛剣」

そう技名を言いながらこちらに投げたが・・・

「な！？なんだこれは？ち、力が・・・入らない・・・」

「随分とスピードが遅いんじゃないか？」

ゆるりゆるりと飛んできた大剣を片手で掴み、地面に突き刺した。

相手が軽く混乱しているところに

ダッ！つと相手の間合いに走りこみ足を払った。  
ダロットの体重なら転ばせればこちらが優勢になる

「くっ！」

転んだダロットの間隙はあまりのも大きかった。  
そして相手の頭に剣先を向け

「降参か？」

「・・・ああ。俺の負けだ・・・」

そういうとさっきまで物凄い暴言をはいていた男、ダロットが土下座してきた。

「さっきはあんなこと言ってすまなかった・・・あんたの強さは本物だな」

「っ！？（ちゃんとした事言えんだな）  
ああ、あゝ・・・いい  
って。別に気にしてないから」

「ほんとか？」

「ああ」

俺は、ダロツトに手を貸し体を起こした。しっかりとお礼も言ったし。案外、礼儀正しい奴なのかな

「ダロツト。なあ？言つたろ。俺はブレイクに負「ほんとにすいませんでした。こんな馬鹿な俺で、騎士団失格ですよね・・・」うーむ、馬鹿ではない、その戦おうとする勇氣は騎士団一だぞ、人の話を訊かないのは良くないがな」

「は？人の話は良く聞くほうですが？」

「いや、だから。俺の話を聞いてないだろ」

「何か言ってたんですか？」

「俺が、ブレイクに負けたって事をさっきから・・・ん？どうしたみんな？」

この瞬間、部屋自体の時間が止まったかの様に思えた

「ギフエア隊長が負けたんですかぁ！！！！？」

騎士団全員そろって大声を出し。かけ寄ってくる  
その後、ギフエアに質問の嵐、嵐、嵐のなんのって、どんなに大変  
だったことやら

ちなみに俺は逃走済み・・・

## 第六章

### 大剣使いダロツト戦（後書き）

ダロツトは確かに話はよく聞くほうですが、戦闘で熱くなるとまったく聞こえなくなるそうです。中学の時にいた人によく似ているのですが、その人を真似たわけではありません

そして、そろそろ魔神王が行動する頃です。

文章力はまだまだありませんが  
長い目で見守ってくれると嬉しいです。

S  
P

キルティ先生による地理授業（前書き）

世界設定について少し書きました。

物語はまったく進まないのを見たい人だけ見ていって下さい

S P

## キルティ先生による地理授業

天超地・ファーナ学校

ゴーン！・・・ゴーン！・・・ゴーン！・・・

ガラガラガラガラッ！

入ってきたのは赤メガネをかけたキルティだった

「みなさん初めまして！新任教師のキルティです。なぜいきなり教師に？という質問は一切受け付けておりませんのでご了承を。では、第1回目の授業はこの世界について勉強しますよ。決して、下っ端だからしょうがなく教師やってますとか言いませんので・・・あれ？なんか言っちゃいけない事をいったような・・・いやいや、私は結構口固いから大丈夫！ではではまずは・・・」

黒板的なものにチョークでなにやら書き始めた  
カキカキカキ・・・

## 1・地方について

「はい、では地方についてですが、全部で8つあります。」

カキカキ・・・

ガダルナ地方・アルタンテ地方・サフェン地方・マロハス地方  
ボルテキア地方・ジェキア地方・ラズルト地方・フェオルト地方

「えーっと、ブレイクたちがいる所はガダルナ地方よ。ヴェセア城はガダルナ地方を代表する城で地方ごとに城があるんだけど、騎士団の城はガダルナの他にアルタンテ・サフェン・マロハスの4つ。他の地方の城は、しばらく紹介しなくても大丈夫かな。」

少し早いけど今日のまとめ

ガダルナ地方

・ヴェセア城

セル騎士団の城

白と水色で彩られた庭に紅色をベースに白と金で作られた城  
この城の紋章は金色の剣を2本持ったグリフォン

・ゴーナ平原

ブレイクがこの世界に初めて来たときにいた場所

・ミール家

丈夫な赤煉瓦で出来た家に住む17歳の少女ミール  
なんか知らないけど倒れてしまったブレイクを看病した後、騎士団  
との戦いで、少し気にかけている模様・・・（恋愛方面？）

アルタンテ地方

・ザテルーク城

ゼロ騎士団の城

サフエン地方

・ユジエクト城

ア力騎士団の城

マロハス地方

・イスナル城

クア騎士団の城

「ん」と、ア力騎士団については最近、改名してア力騎士団になったみたいけど、そこんこはあまり気にしないでね。目の色についての話も修正が入ったみたいね。分からない方は大丈夫、気に

しないで。細かいこと気にするとはげるって言うでしょ？」

そして！といいながらカキカキと・・・

天超地

・ファースト学校

ここのことですよ。

「それで、この場所は関係なしに全地方をまとめたこの世界のことをパロバツセって言うから覚えておいてね！・・・やっぱり覚えなくてもいいかも（笑）」

魔法が何か唱え全ての物を片付けると

「最後に・・・ここ！天超地はいろいろな世界と繋がっているの。私の担当はブレイクのいるパロバツセ。他にも私も知らない世界がたくさん広がってるみたいなんだけど、上層部の人たちが教えてくれないからよく分からないのよね・・・次回の授業は、まだ決まっていません（笑）いつどこでやるかは情報が揃いしだい行っていきたいと思います。では、キルティの地理授業はこのへんで終わりにしたいと思います。バイバーイ！」



S  
P

キルティ先生による地理授業（後書き）

次回は8/29の12時くらいに第七章を投稿したいと思います。

## 第七章

### 魔神王ギーヴァの出現（前書き）

今回はいよいよ例の人？との対決です。

## 第七章 魔神王ギーヴァの出現

### ヴェセア城・3階廊下

あの質問攻めにされていたギフェアが俺のところに戻ってきたあとこの世界についていろいろ教えてもらったのだが、ふと疑問に思うことが・・・

「ん？・・・ミシエルが何か言ってたような・・・って！！夕飯忘れてた！！アイシエス姫、ギフェアさん、お先に失礼します！！」

俺はギフェアと姫様に挨拶を済ませ急いで城から出た

タッタッタッ

「はあはあ・・・ヤベエ・・・かなり・・・待たせちゃってるよな・・・きつと」

城からミシエルの家まで少なくとも5キロはある。俺が生きていた頃の体力は標準だった

どうでもいいことだが持久走大会でも280人中150位という結果で・・・

要するに・・・ノーマルな人間だった。

まあ、キルティのおかげでかなりマシになったと思うけど。

カツツカツツカツツ

コンクリで出来た道を走り

トントントントン

木で出来た橋を渡り

シャトツシャトツ

砂利道を走り・・・

「さすがに・・・ハアハア・・・疲れたなあ・・・」

それからまた少し走り家の前まで来て

「ミシエルごめんっ!!」

勢いよく扉を開けたが部屋の中が真っ暗だった・・・

「ミシエル?・・・」

周りを見渡したが物音一つしない・・・  
いろんな部屋を探し、居間まで行くとテーブルに腕枕をしたミシエルが寝ていた  
その隣にはおいしそうなご飯が置いてあった

「悪いことしたな・・・」

俺はミシエルを抱え寝室まで運び、寝かせた。

「ムニヤムニヤ・・・いつになったら帰ってくるのよぉ・・・ムニヤムニヤ・・・」

俺は寝言を言いながら少し顔をしかめてるミシエルに「ほんとごめんな」と一言謝りごはんが置いてあるテーブルを見て思った。

「見たことの無い食べ物ばかりだな・・・」

さすがに異世界だしそれぐらいの覚悟は出来ていたはずだが、お粥の件でテツキり何もかもが普通だと思い込んでいた・・・

しばらくして椅子に座ってご飯を食べ始めた・・・

居間だけが電気が点いており、一人でずっと待っていたミシエルのことを考えながら・・・

一人がこんなに寂しいなんてな、と今日二回目の言葉を呟きながら想像以上に美味しいご飯を食べ一夜を過ごした。

・ブレイク帰宅後のアイシエス姫&ギフェア・

ヴェセア城・3階廊下

ブレイクが急いで城を出て行った後、アイシエス姫はギフェアに尋ねた

「あ、あの・・・ミシエルという人はブレイクさんとどんな関係なんでしょうか？」

「いや、それは分かりませんね。いつから知り合ったのかも、もしかしたら、もう、そんな関係になっているのかもしれないね」

「え！ええゝ！？もうそんな関係って何なんですか！？」

「姫様。そんなに大声を出してどうかなさったんですか？（！？もしや・・・姫様は・・・）」

「べ、別にどうもしてませんよっ」

「そうですか・・・（言動に少し乱れが見える・・・と言つことはやはり・・・）」

「はい、そうですよ、何でもありません」

「・・・」

「ん？どうかしたのですか、ギフェア？」

「……………」

「ギフエア?」

「姫様……」

「はい? 为什么呢?」

「もしや……ブレイクのことがお好きではないでしょうか?」

「ふえっ!」

いきなりそんなことを訊かれ変な声が出てしまった。

「やはりそのようですね（急激に顔が真っ赤になったなら確実といつても・・・）」

「そ、そんな！そんなことはありませんのことですわー！」

「姫様。言動が乱れていますよ。それは凶星ではないかと・・・」

「わ、私がブレイクさんのことをあゝ・・・ボタンっ！！」

頬を両手で押さえ顔を真っ赤に染め倒れてしまった。

「大丈夫ですか！！？姫様？姫様っ！？（・・・これはかなり重症のようですな）」

### ミシエルの家・居間

「ふぁゝあ。よく寝た」

俺はいつの間にかソファで寝ていた。  
それはいいとして目を開けたらすぐ目の前にミシエルがいた。

「ブーレーイークーっ!!」

「あ・・・ほんと昨日はごめん・・・」

「ごめんじゃないでしょ!!!もう、どんなにさみ・・・退屈だったことかっ!!」

さみ・・・なんだ?さみしい?・・・んなわけないか・・・  
でもほんと悪いことをした

「悪かった、ほんと悪かった」

「はあ・・・もういいよぉ。」

ため息を吐き肩をおとす

「ほんとに悪いと思ってんだからな」

「もう大丈夫だって、・・・あれ？今日はお城に行かないの？」

「あ！そうだ、今日は能力テストがある日だったな」

「能力テスト？」

「ギフェアが言ってたんだよ。騎士団に入団するには必ず能力テストを受けなきゃならないってね。入団する時以外でも定期的に行うらしい。そして、出来の良さによってランクが決まり下はAから最

上がSSSだつて」

現実世界での中間テストやら期末テストのことと同じだろうな。そういえばこの世界に来てから勉強はまったくしてないし、気が楽だな。

「最下位ランクがAって・・その能力テストかなり基礎のランクが高いんだね。さすがセル騎士団」

「そうだな、俺がどのランクになるか分からないけど、行つて来るよ」

「ブレイクならSSSランクなんじゃない？」

笑いながら話すミシエル

「そんなランク獲ったらびっくりだな」

「そうよねえ〜」

そんな会話に二人して笑う、しばらくし、ブレイクはヴェセア城に向かった

## 岩石街道

「そういえば、この長い道のりを自分の魔法なんかでどうにかで

きないかな。ゴツゴツした場所とか走りづらいし疲れるし・・・」

その時、聞き慣れた声が頭に響いた

（剣を地面に置いてその上に乗った後、剣の持ち手に丸い穴が開いてあると思いますのでそこにシオラ石をはめてみて下さい）

「シオラ石って何だ？・・・ってかい加減名前教えてくれないか？」

（それはいずれわかると・・・）

「いずれじゃなくて今知りたいんだが・・・」

（・・・。マーシャです。私の名はマーシャ・ミヴィアスです）

「マーシャ・ミヴィアス？」

(発音が少し違います。・・・正確にはヴィです)

「ああ。ごめん、マーシャ・ミヴィアスな」

(はい。その剣、ヴェーアに宿る精霊みたいな者です)

「んじゃ、これからはミヴィって呼ぶよ」

(ミヴィですか・・・はい。どう呼んでも構いませんが・・・)

「まあーしかし、この剣の精霊だったとはなあ、なんとなくそんな気はしてたけど」

(そうですか・・・あ、早くしないと遅れるのでは?)

「あーやべえ！！えーっとシオラ石だよなあってどこだ？」

（あなたのポケットに入っているはずです）

「ポケット？」

疑問に思いながらポケットを探ると何か固い石みたいなものを掴んだ。

「これか？（こんな物が入ってるとは全く気付かなかった）」

それは緑色で500円玉くらいの大きさのビー玉だった。

（それをはめて、飛ばうという意識を集中させてみてください。飛べるはずですよ）

「飛ばうという意識を集中・・・」

剣を地面に置きその上に乗ってみたが・・・バランスがとりづらい。

これがどのくらいのスピードが出るかわからないが自転車くらいのスピードでも落下しそうだ。いやいや、今はそれ以前の問題だ。

「落下しないよな？」

（そうですね。どんなにスピードを出したとしても決して落ちることとは無いでしょう）

「そうか、ならよかった」

それが分かったなら安心だ。軽く集中したぐらいで簡単に浮き上がった。

「おっ！この浮遊感はなんか楽しいな」

（そうですか、スピードも自分の意思で変えられますので・・・）

「了解！」

あの時城からミシエルの家まで帰るのに30分くらいかったが  
ヴェセア城に到着した時は5分もかからなかった

「結構早く着くもんだな・・・」

テレパシーが途絶えているためミヴィとは話は出来なくなっていたが  
今は特に聞くことも無いし心配無しだな

そういつて城の門をくぐると何か黒い渦が空中に浮かんでいた

「なんだあれ？」

・  
そう思うと次第に黒い渦は消えそこに居たのは何やら怪しい人が・

「フフツ・・・お前がブレイクか。その強さ、なかなか興味をそそる所があるな」

銀髪で方目を覆うほど長い。ところどころ赤髪がちらちらと見える。外見は20そこそこのところかな？着てる服も銀や黒などを主に作られている

「なぜ俺の名前を？」

「なぜか？それはとてもお前に興味があるからだよ、十分に調べさせてもらった」

調べた？何故そんなことが・・・？

「何しにここまで来たんだ！？」

推測だがコイツはレポートスキルを使ってここまで来たっぽいよな  
そうすると、ただ者ではない筈だ。レポートスキルはスリーマジックマスターの1つでありその魔法を使っている人はとうに滅びているとギフエアに聴かされた  
以上の点からコイツは人ではないと判断できるんだが・・・

「・・・ん？私が人では無いとでも思ってたか？」

「もちろんだ、そのレポート魔法を使える人材はとうに滅びているはず」

「なかなか分かる奴だなあゝククツ・・・面白い」

「何が面白い！？」

「まあまあ、それじゃあ手ほどきでも・・・」

そういつと地面から赤黒い剣が出てきた。

「準備はよろしいかな？」

「かかって来い!!」

そういつと目にも留まらぬ速さで走ってきた  
その剣の振りを瞬時に判断し避ける事が出来た。はずだったが・・・

「っ!？」

「クツクツ。どうした？」

ポタポタ・・・

肩から血が滴り落ちる・・・

そんなはずは・・・確かに攻撃を避けたはずだが・・・

「なかなかいい避けだな。まあ俺の足元にも及ばないがな」

少し口を歪めて笑う

（ソードスキル、エアロウエーブ・・・）

「なんだそれ？」

（スキルの1つでさっきのは剣のスキルをつかったものです）

「剣でスキルが使えるのか？」

（これもある程度の訓練が必要になってきますが、それにしてもそれだけの怪我で済んで不幸中の幸いですよ。普通なら片腕が飛んできます）

「片腕が飛ぶって・・・おいおいまた死ぬのかよ・・・」

（この様子では勝ち目はなさそうですが・・・）

「ですが・・・なんだ？」

（少し誰かの気配を感じるのでこの気配が味方なのなら勝算はあります）

「すぐに来てくれないのか？」

（まだ少し距離が遠いですね。しかし敵なら最悪な状態になりますよ）

「んじゃ、味方だということを信じて何とかしのぐか」

「ほほう、テレパシーを使ってるな？随分暇を持て余してるみたい

だな・・・」

何故分かったんだ？相手との距離は4、50m・・・

人じゃない」魔人となるこいつは視力・聴力共に抜群にいいのか

「グラヴィティーストームインフィニティ」

そいつって空中に紋章を描き始めた

（・・・T結合！？逃げなさいブレイク、ここは私にまかせて）

「この間の防御魔法でどうにかならないのか？」

（ソーサリーフレクトは結合魔法を抑えることが出来ないのです）

「結合魔法？」

（そうです、結合魔法とは2つ以上の魔法を同時にかつ絡めて攻撃する魔法です。この間ではランクが低すぎます。）

「そうなのか？ギフェアさんが出した、あの魔法より強力とは、魔法はなんと恐ろしいものか・・・」

（ですから、逃げてください、私が食い止めますから）

「おいおい、それって、この魔法を食い止めて私も消えます的なあれだろ？」

（それしか手段は無いでしょう）

「それは無理なお願いだな」

(なぜですか？そうしないと貴方まで巻き込まれますよ)

「いや、ミヴィの顔、まだ見てないだろ？だからさあ、なんか悔いが残るようなことは出来ないんだよな、だから死なせるわけにはいかないんだな(自分は平気だがミヴィを死なせては絶対にならない)」

(そんな理由でなぜ？このままじゃ・・・)

「・・・まあ死ぬわな」

(なら・・・)

「特攻あるのみ!!」

(やめなさいっ!!!)

「クククツ。いい度胸だな、死ねえ！」

そう言つと片手を上げ紋章と共鳴し始めた

「久しぶりに楽しませてもらつたよ」

「おりゃああああ!!」

思いつきり剣を振り上げたが・・・

「っ！くっ・・・邪魔が入つたな・・・」

そう言つた奴の姿は急に消え、その剣は空を切っていた

「命拾いしたな。次に会うときまで精精楽しくな」

既に奴のいない空から聞こえてきたこの声は、静かなこの場所に響き渡った。

「ん？なんだか分からないけど助かったな・・・」

（そうですね、この感じは結界・・・そしてさっきのは魔人ギーヴァ王）

「ギーヴァ王って、王って言うぐらいだから魔人の中で一番偉いとか？」

（その通り。ギーヴァは魔界で魔族37564人の内の第一位）

「魔人ってそんなにいるのか・・・不吉な数字だし」

（正確には居るのではなく、居ましたという過去形です。今ではだ  
いぶ数が減り427人になっています。しかし、魔人だからといっ  
てその427人全てが最強と言うことでもありません）

「あ、そうなんだ。それはよかった・・・ってよくないわっ！！そ  
んな人たちが人間界に攻めてきたらどうするんだ？」

（まず、それはないでしょう。この世界の掟を決めているラウワー  
ルドセンター通称『RWS』これは魔術でできている掟でそう簡単  
には壊すことなんてできない。例えばこの世界が粉々になろうとも。  
魔界書第2170条『魔人が人間界に入ることとは決してあってはな  
らない』というふうにも書かれているので）

えゝゝ・・・思いつきり破ってるじゃん・・・アイツ

（そうなんです。RWSの監視は世界一小さい虫。ムニルの動きす  
ら全て把握するぐらいの力を持っている筈なんですが・・・。しか  
し、考えられるとするならば・・・）

「魔人の気配を消した？」

（そうです。それなら十分考えられますが、そんなことをどうしたら………。このことはまた後で考えるとして、向かって来ていた人物のことですけど）

「そうそう、こっちに向かって来てる奴がどうか言ってたよな？」

（しかし、その気配はもう無くなっています。ですがこれだけすごい結界を張るということはかなりの大魔術師ではないかと思えます）

「そうだよな、あんな強い奴を蹴散らすほどなんだからな」

（まあここらへん一帯もこの結界のおかげで、しばらく安全になるでしょう。怪我が無くてなりよりです。さあ試験に挑みましょう）

「そうだった！完全に忘れてた！」

俺は急いでヴェセア城へと走っていった

## 第七章

### 魔神王ギーヴァの出現（後書き）

次回はEX?の更新は8/31です。

新たな人物の名前が出てきます。

EX？

恨み（前書き）

EXはギーヴァ視点で物語を進めていきます。

今更こんな説明いらないか・・・

EX？

恨み

魔王城・王部屋

「ファンベル・・・」

ギーヴァはそう呟いた。

「何かあったんですか？しかし、懐かしい名ですわね・・・」

ギーヴァの不満そうな顔を見るエルウェールはどうにかしてあげたいと思っていた。

「奴に結界を張られた」

表情は変わってないがエルウェールには分かっていた  
悔しさと喜びが混じった感情を・・・  
そう、昔はギーヴァ様とファンベルは気の合う仲だった

しかし・・・

「ファンベルに結界を張られたのなら・・・」

「そうだ。結界を張るにはある程度の範囲内にいないと発動は不可能だ。そして、その範囲は決して遠いものではない」

「そうですわね、と、いうことはついにギーヴァ様の目標が」

魔人とあいつらみたいな騎士団との両方の血を受け継いでいるなんて知らなかった  
それが許せなかった・・・

「そう。長きに渡り奴を追い続けてきた。今こそ裏切り者の首を刎ねるぞ！・・・と、言いたいところだが。今は、この計画を先に実行しなければ・・・」

そう言いマントを翻して部屋を出て行った。

「私もお役に立たなければならぬわ」

かつては、とても優しい方だった。表情も豊かでとても充実した生活をおくれた

あんな事件さえ起こらなければこんなにも変わることは無かったはずでも、私はどんなにギーヴァ様が変わろうとついていく決心があります。

あの時助けてくれた恩を返すために・・・

そして、エルウェールも急いで準備を始めた。

大いなる魔法破壊計画を進めるために・・・

EX?

恨み（後書き）

次回は第八章を投稿したいと思います。

基本的にテストや行事が無ければ一週間以内には投稿するので  
よろしく願います

## 第八章

### 能力テスト（前書き）

騎士団の能力判定を行います。

## 第八章

### 能力テスト

ヴェセア城・聖なる騎士部屋

人間界と魔界の狭間の城でギーヴァが話している頃、ブレイクは城の廊下を猛ダッシュで走っていた

「時間に間に合わないー！ーいつ！ー！」

ボタン！ー！ー！

「すみませんっ！遅れましたっ！……っ……ん？」

誰もいない・・・

場所・・・在ってるよな？

当に約束の時間から10分過ぎていた

「日にち間違えたか？いやいや、そんなはずは無い」

と、そんなところに

「それでさあ、あいつはこう言ったんだ、この崖から落ちれば1000バロン（B）くれるんだな？つて、そしたらなあ……..  
よお！随分早いんだなあ」

なにやら愉快な話をしながらダロットは片手を上げこの部屋に入ってきた

愉快なのはダロットだけみたいに見えるがそれは置いて。その他に騎士団メンバーがそろそろと入ってきた。

「試験はどうなったんだ？」

「試験だあ？これからやるに決まってるだろあ？」

「でも、とうに時間は過ぎて」「この騎士団に時間厳守なんて堅う苦しい言葉なんざあ存在しねえよ!」・・・そうなんだ」

大丈夫なのかあ？　この騎士団・・・

真剣にそう思う

ほら、だって時間を制す者、戦いを制すつてよく・・・言わないか？

その後いつになれば始まるのかと思いつながらしばらくみんなで話しました

「ええ」と自己紹介まだだったな。私はレクセル。君の魔法や剣術の腕前をもつとよく見せてくれないか？」

背の高さは俺と同じみたいだな・・・172ぐらいはあるだろう  
眼鏡を掛けるインテリ系で髪は紫で片方だけボリウムがあり襟  
足も肩ぐらいまである  
目の色は茶色だ

「あ・・・そう・・・ですね。暇があればいつでも・・・（俺は決めた。  
今日から暇な時間は作らない）」

こういう面倒くさいことは正直、あまりやりたくない・・・

「レクセルは策略家よ。罠を作り相手をはめるから気をつけてね。  
私はヴェスティよ。よろしくね。」

ピンク色の髪にパーマがかかっている頭には黒いリボンの飾りがつ  
いていて  
悪魔みたいな風貌だ目の色は黄色だ。

ヴェステイは握手を求めてきたので  
それに答えようと手を伸ばすと

「触っちゃだめええ!!」

近くにいた女の子がそう叫んだが遅かった

すでに手に触れてしまっていたが、それにしても随分長い握手だな・  
・

なにやらヴェステイはにんまりしているが

なんなんだ？ にやにやと・・・

しかし表情がだんだんくもり首をかしげた

「なんで効かないの？」

ヴェステイはそう言ってきた

「なにがだ？」

「ヴェステイに触れるとヴェステイのことが好きになっちゃうのよ。あなたは特別ね。全然効いてないから、私はキューラ。これからよろしくね」

とりあえず助かった・・・

そして、さつきヴェステイの居る方から軽く舌打ちしたような音が聞こえたが・・・  
いや聞こえない。俺は何も聞こえてない。

この子はショートヘヤーのキューラか  
髪の色が黒でどこにでも居そうなごく普通の女の子という感じだ  
とても魔法を使う人だとは思わない  
目の色は緑色だな

「俺はマールーだ。よろしく」

そうやってきたのは真っ赤な前髪を立ち上がらせているウルフみたいな奴。  
もみ上げは顎の辺りまで来ている

後ろ髪はツンツンしてとても好戦的に見える。  
目の色は茶色だ

「マールーはね。5本の剣を同時に操ることが出来るんだよ。凄いでしょ。私はタミンよ。これからよろしくお願いします。」

タミン・・・この子は何歳なんだ？外見で判断すると小学生並みなんだが・・・  
髪の色は緑色でポニーテールだよ・・・これ。まあそんなような髪で目の色は緑だ。  
そして、きつと小学生というのは禁句なんだと思う、いや、絶対そうだ。

「もしかして！？私が小学生に見えるうゝとか思ってたあ？」

「いやいやいやいやいや絶対！絶対！思ってたないから！！」

「あうゝその言いようはバレバレなんだけども・・・」

頬っぺたを膨らましながらし背伸びをした

「これから！これから絶対大きくなるもんねえ〜だ！絶対絶対なるもん！」

「タミン。うるさいぞ」

「うるさいって言われてるぞ？」

「うるさくないもん！うるさくないもん！うるさくないもん！！  
それでも私は回復魔法のスペシャリストであらゆる状態異常も治せるのですよ」

「しかし9時になると眠くなる」

「・・・それは子供だな」

「そういうことは言わないって言ったじゃないですかぁ・・・アイゼンさん」

「いや、すまないな。でも、正直なところ嘘じゃないだろ？」

そんなこんなでタミンを止めようとしたのが・・・

「私はアイゼンだ。よろしく」

アイゼーンというクールな女性は  
茶色のストレートヘヤーでその長さは肩ぐらいまでかかっている。  
目の色は黄色だな

「ほら、最後はあんだだぞ！」

マールーが、ったく。ってな感じで見た少年は

「べ、別に僕はいいよぉ」

なんかすごい小心者っていうかなんというか・・・  
銀色の髪をした少年  
目の色は緑色

「お前で最後なんだからさあゝ早くしろって！」

さっきから急かすマールー

「分かったよあゝ、僕はピロクですつ。よろしくお願いしますつ。」

「まったくそれだけでいいつーのにさつさと言えつてんだよ・・・。  
よし、これで全員の自己紹介が終わったな。ギフェア隊長を含むこの八人が主要メンバーなんだが、ほかに補欠メンバーもいる、そいつらのことはあ後で知るなりなんだりしてくれ」

ガチャ・・・

マールーが話し終わるのと同時にギフェアとアイシエス姫が入ってきた

そっついえばギフェアの目の色って赤色だな

「アイシエス姫!？」

これまたザワザワ話す騎士団一員・・・

やっぱりアイシエス姫が来るのは珍しいことなんだろうか? (しかも入ったきた途端、アイシエス姫と目が合ってから俺をずっと見ているような・・・なんかしたか? 俺・・・)

「では、これから能力テストを開始する」

テストの内容は簡単なもので自分の技量を見せるというものだった  
とっておきの技・魔法などを3つ披露するようだ

「最初は・・・ダロツトから行くか？」

「俺からですか？」

「なんだ？一番手は嫌か？」

「いえいえ、俺の大技を最初から見せちゃゝ後の人にプレッシャーが掛かつちゃうんじゃないかと思ひまして、ガッハッハッハ！」

ダロツトってかなりの自信家だよなゝと俺は思う

「そうか、相変わらずだな。んじゃレクセルやるか？」

「では私からお願いします」

「お！いいねえ、レクセルー」

とダロツト。なんかどっかのおじさんみたいな言い方で話す

「制限時間は無制限、自分の力量を最大限に発揮し頑張ってくれ！」

それから1時間程度騎士団の力量というものを見せられた

一番手のレクセルはトラップ系の魔法を得意とする

モンスターが通ると地面から痛そうな針が突き出したり

見えない糸を張り巡らせたり、特に凄いのと思ったのが自分そっくりな人物を作り、

とても人形には見えない動作、生きている人間に精巧に出来ていてそれを利用した

ダミーブレイク  
嘘姿破壊という技、これはダミーを襲おうとしたモンスターが縄状に変化したダミーに絡みつかれ自爆するというもの、あまりに爆風が凄いため隔離した部屋でテストを行ったという恐ろしい魔法だった・・・

二番手はヴェステイ、この人はどんな技を見せてくれるのだろうか・

「ギフェア隊長、光敵をお願いします」

「光敵ってなんだ？」

俺は隣に居たキューラに訊いた

「光敵ですか？それはですね、そのまんまなんですよ。  
光でできた動く敵みたいなものです」

「光でできた敵？」

「そうです、光敵を使えば魔法を使うのに狙いが定まりますし、  
なにより動きが本物そっくりなので技をよく見せられるのですよ」

「そっか、確かに敵が居れば、派手に魅せられるかもな」

「まあそういうことよね」

そんなこんな話をしているうちにヴェステイの技の披露が始まった。

「ラバーデス  
偽魅惑殺」

そういつて目の前におきた光景はヴェステイらしい罠  
光敵ですらヴェステイの誘惑罠トラップに引っ掛かっていた

「ふむふむ、感情を持たない光敵ですら虜にする程の力・・・なか  
なか成長したな」

「ありがとうございます、ギフェア隊長」

そんなこんなでヴェステイの披露も終わり

マールーが披露する時になんか腹が痛くなってきた・・・

死んでるはずなのにこういう体調不良が起きるなんて・・・  
俺はこっそりとそこから抜け出し廊下に出た。すると、姫様がいた。

「どうしたのですか？」

「1人でいると落ち着くんです」

でも・・・。と言いかけ黙ってしまっ

「でも？」

「いや、なんでもありません。それよりブレイクさんの出番はいつですか？」

「多分最後だと思っただけど・・・」

「では、その頃にまた戻ります。頑張ってくださいね」

「ありがとうございます」

「えーっと・・・引き留めてしまったようです。すみません、どち  
ちらへいくところでしたか？」

「。。。」

「どちらへ？」

「・・・トイレ」

「あっ！これはすすすみませんっ！で、ではっ」

急激に顔を真っ赤に染めたアイシエス姫は猛ダッシュでその場所から立ち去った。

あははは・・・・・・はあゝ

それから数十分後、俺の番に回ってきた

「では次はブレイクだな」

「はい、よろしくお願いします！」

得意な技、魔法・・・どうすればいいんだ？  
とりあえず光敵を出してそこに魔法をぶつければいいか

「ギフェアさん、光敵お願いします」

そう言って出された三体の敵に手のひらを向ける

「荒ぶる風よ静電気を纏え！」『エアロスパーク』（電磁波風）」

この技は結合魔法といわれるものであいつも使っていた魔法だが今の自分では結合は二つが限界・・・

「け、結合魔法!？」

マールがそういった

やはり結合魔法を唱える者は少ないのであろう少なくともこの騎士団にはいなさそうである

風の渦に巻き込まれた電気はウルフ型の光敵を吸い込み長時間によるスパークにより消え去った

「ヴェーア!炎よ宿れ!！」

出現した剣、ヴェーアは炎をまとして手に収まった  
しかし、魔法を剣に宿させることはセル騎士団としては朝飯前・・・  
それを少し改良して

「無限の水よ炎に纏え！『バーニングフラッド』（燃える水）」

「さすがはブレイク、水を蒸発させ消えぬようコントロールされている」

別に試しに相性を悪くしてみただけであって意図的じゃないことは  
黙っておこう

炎の剣から水が弾け飛びグルグルと剣の周りを回る

「『アザーエネミー』（目標転換）」

敵の位置・場所を把握し、目標を定めた

熱湯のように温度の増した水は針のように鋭く尖り敵を切り裂いた  
地面からは湯気が上がり熱さで周りが揺らいで見える・・・

「んじゃ最後は・・・」

最後に見せる技・・・何にしよう・・・

同系統の技を披露するのは止めたほうがいいな  
でも、思いつかない・・・

（それでは竜騎士でもやってみたらどうですか）

「ほんと、いきなり出てくるなミウイ」

（はぁ・・・、まあ気にしないで下さい）

「・・・そうですか。それで竜騎士ってなんだ？」

（はい、太古昔、騎士団の一員が竜を捕まえるときに使った技であります）

「そんな技が使えるのかよ」

（先程、剣の上に乗る練習しましたよね？あれはシーズウーという移動技なんです。一部の地方ではシーズウーを利用したレース大会も開かれています。しかしその移動技は昔、竜と共に飛び、時に捕まえる手助けにもなったそうです。）

「それが竜騎士……」

（そうです。やり方は剣の上に乗る自身の身長約2倍程度の高さまで上がります。そして剣から飛び降り好きな魔法を唱えます。地面に向かって剣を刺せば魔方阵が形成されます。その衝撃波によってモンスターを倒せるでしょう）

「なんかカッコイイな」

（太古の竜騎士より威力は格段に落ちていますですがそれでも結構な威力になるでしょう）

「わかった、やってみるよ！」

（では、健闘を祈ります。この技は体力をかなり消費するのでくれぐれも使い過ぎには気をつけてください）

テレパシーが切れた

「使い過ぎには注意か、気をつけないとな」

シオラ石をはめて・・・と

はめたと同時に地面から浮き上がった剣の上に乗った

「ほお、シーズウーを使った技か・・・」

そのまま大体、2Mくらいまで上昇して、好きな魔法かあ・・・

「空中の静電気よここに集まれ！サンダー！！」

ズドオオーーン！！

言われたとおりに地面に剣を突き刺すと雷を纏った魔方阵が広が  
敵が消し飛んだ・・・

「なんだ！？その技は！！」

驚愕の顔を浮かべるギフェアと騎士団一員

アイシエス姫も驚いてはいたがなんだか嬉しそうであった

聖なる騎士部屋の床を豪快に破壊しつつ、これにてテストは終了した・・・

## 第八章 能力テスト（後書き）

次回はSPキルティ先生授業です。

S  
P

キルティ先生による保健授業（前書き）

早いですが次の授業は、世界地図を載せたいと思っています。

S P

キルティ先生による保健授業

天超地・ファーナ学校

ゴーン！……ゴーン！……ゴーン！……

ガラガラガラガラッ！

「お久しぶりです。みなさん！第二回目の授業は保健の授業という事になります。

ですが、もし、この題名を見た瞬間に変な方向に少しでも期待した人は、

……よいしょっとお。

十字架で頭を飛ばしちゃいます。……なにに？

この十字架を久しぶりに見たって？気のせい気のせい　ではでは、今日は……」

カキカキ……………

目の色で魔法能力がわかる！？

マジックリフレクションとは？

「この2つについて学びますよ！では。

まず最初は目の色で魔法能力がわかる？ということですが、

今までの話の中でも、相手の目の色について、誰々がどの色だった  
」。

みたいなのところがいくつかありましたね？

それでは色とその色の能力説明をしていきたいと思います。」

カキカキカキ……………

・水色の瞳は魔法使用は不可？

「この世界では誰しも魔法能力は秘めているのですが、それを上手く活用できていないだけです。」

魔法を使うことが無い家族は比較的、みんな水色です。

色が変わる理由は、魔法を学んでみたい。誰かの役立ちたい。

騎士団に入ってみたい。などの理由で、訓練所に入り練習した結果、その魔力のエネルギーが瞳に影響を及ぼして色が変化していくというわけです。」

カキカキカキ……………

・青色の瞳は魔力を使用する際に必要な土台を作り上げていく練習生？

「魔法と言うものは、地面、空中に散らばるフォースを集め魔法を発動させるのよ。」

フォースと言われる目に見えない物質を体内に溜め込むには、物体移動という練習が必要になってきて。

物を操れなきや目に見えない物質を動かすことなんて到底無理無理。騎士団主要メンバーのマールーはこの物体移動の応用を利かせた攻撃が得意みたいね。

このようにフォースを集めるための練習以外にも考え次第では違う技に変わっちゃったりします。

え〜と次は……」

カキカキ……………

・緑、黄、茶の瞳の生徒は属性魔法を学びます

「みんなが憧れる……って言っても、  
当たり前魔法が存在するこのパロバッセでは魔法自体に憧れを抱

く人はいないのよね……。

私の友達のユーミは日本というところを担当していますが、かなり魔法ということに興味があるみたいだね。

魔法を使った映画など結構あるそうですよ。もちろん本物じゃないけど……。

そして、色の説明ですが、緑色なら初級魔法。黄色なら中級魔法。茶色なら上級魔法を学びます。

ランクを上げるには能力テスト。

前の回でやりましたね？

それを受けて見事合格すれば、より上を目指すことが出来るようになりますよ。

生徒の平均能力は黄色。みなさんは平均より上ですか？

そして、たとえ瞳の色が低いレベルでも習得率が高ければ騎士団の入団が可能になっちゃいます。

低いレベルだからって騎士団員になめてかかると半殺しにされるわよ（笑）

カキカキ……………

・赤、銀、金で結合魔法を取得

「ここまで能力を上げると、魔法の素について嫌でも理解してくるのよ。

理解したうえで結合を行えば、今までにない強力な魔法を生み出すことが出来ちゃうの。

でも……。最近、知識不足の連中等が適当に結合したのよね……。

もちろん結果は大爆発！そこにいた人たちはもちろん、周りの物もみんな塵になったわ。

その事件があつてからだいぶ、ふざける人はいなくなったけどね。そのあなたも気をつけるように！」

・白い瞳を持つ人は超級魔法を取得

しかし、結合はやってはいけない？

「えーっと、最初に言っておくけど、結合は絶対にできません。例外もいるかもしれませんが……。

超級魔法を2つ3つ結合したら最強じゃね？とか思つた人……はい、残念。

莫大なパワーによりさつき説明した人みたくなるよ。分かつてる？  
スペルの長さはそんなに長くないから、覚えることが出来たなら、  
戦闘がずいぶん楽になっちゃうわよ」

・?色について……

「魔法ランクの最上位にあたる色、でも、どんな色だかは分からないみたい……。

大体予想がつくという人……。多分違います。

……あらかじめ言つときますが、黒ではありませんよ。

……んじゃ黒は一体?という話はまた後で………」

カキカキ……

次にマジックリフレクションについて

「マジックリフレクション、略してM F。これは体に秘めている魔法を弾き返す機能よ。

この機能は誰しも持っていて、火傷、静電気など軽症で済むものは全く傷つかないという優れもの！

このMF、効果を上げることでも可能で、例のあの人とかは上級魔法でもかすり傷1つつかないとか……。まあ、並大抵の気力じゃ、効果拡大なんて到底無理な話よ」

## 今日のまとめ

水色

魔力を秘めているが使用は不可

青色

練習次第で物体移動が可能になる

緑色

属性魔法が使用可能になる

黄色

中級魔法が使用可能になる

茶色

上級魔法が使用可能になる

赤色

結合魔法が出来るようになる（しかし2結合が限度）

白色

超級魔法が使用可能になる

銀色

3 結合が可能になる

フォース切れがほとんどなくなり2 結合魔法が20 回ほど使用可能  
3 結合ばかりだとあつという間に無くなる

金色

4 結合まで可能になる

3 結合が20 回ほど使用可能

結合を失敗するとかかなりの確率で死ぬ

? 色

5 結合が出来るようになる

しかし結合次第では国が崩壊するほどに……

マジックリフレクション (MF)

体に秘めている魔法反射機能

火傷・静電気などから体を守る

効果拡大は気力の問題で上げること可能だが並大抵の気力者は到底無理

「こほん。スペルの詠唱のしすぎによるエンプティフォースという状態になると

体が動かすことが出来なくなっちゃいます。いくら相手が勝てる相

手だからといって

唱えまくとあつさりと負けるわよ。そんなおバカな人はいませんよね？

それでは、自分の残りのフォー ス蓄積量の限界を知りつつ相手を効率よく追い込む！

計画性が大切ね …… では、第二回キルティ先生の保健授業を終わりにしたいと思います。

前回と同じく、第三回はいつやるのかは、まったく分かりません。

もしかしたらすぐやるかもしれませんが、もうやらないかもしれません。

さすがに、もうやらないことは無いと思いますが、次回の授業があつたら欠席0でお願いね！

では、ばいばーい」

S  
P

キルティ先生による保健授業（後書き）

次回は第九章を投稿します

## 第九章

### 騎士団クラスSSS（前書き）

何とか間に合いました。

## 第九章

### 騎士団クラスSSS

「では、騎士団クラスを発表したいと思う」

学校などで答案を返されるときは溜息しか出なかったが  
今回は少し違う気持ちだ……

「Aクラスは誰一人としていなかった。だいぶ上達したな」

みんなうんうんと頷く

「Sクラスは2人、キューラ・タミン」

私たち上達したねと手を取り喜び合う二人

「SSは6人、レクセル・ヴェスティ・ダロット・マールー・ピロ

ク・アイゼーン」

なんでピロク。おめえの名前が載ってんだよっ！とダロットがいった

「いや、僕に言われても……」

「まったく。調子に乗るなよ？」

マールーの忠告に首を縦にぶんぶんと振る

「そして今回はSSSが1人、ブレイク君だ。」

……ん？どうなってんだ？

期待を大きく裏切った……。良い意味で……

「……えつと俺がSSSですか？」

「そうだ、何か不満でもあるのか？」

テストで100点を取ったことなど一度も無いがきつとこんな気持ちなんだろっ

「いやいや、そんな高いクラスだったんですか？」

「いや、そのぐらいのクラスの結果が出るぐらい予想はしていたよ」

「予想って……」

「実はなあこれ以上にクラスは存在するんだよ」

「そうなんですか!？」

と一斉にみんなが言う

「そうだ、SSSの次にSSSS、その次にSSSSS」

なんかもうただ単にS並べただけだよ……。S文字の上は無いのかよ

「お前たち、Sの数を増やしただけの手抜きだと思っただけか？でもな、これは協議会が決めたことだからこちらからはどうにも言えない。……が、そのうちSの文字より上が決定されるだろうな」

そうですか……。てか、そうしてくれなかったら、数えるのが大変になるな。

当然のことだけど

「まあ、これにて能力テストを終了する、各自、自由にしてくれ、あ、あとブレイク。部屋を案内するからついて来てくれ」

「……部屋？」

「必ずしもそこに泊まれとは言わないが、所有物などを置いたりだな。自分の部屋のように自由に使ってくれ、鍵の心配はいらない。認証システムが働いてるからな。」

「は、はい、分かりました」

そんな話をしながら自分の部屋の前まで来た。場所は入り口から左手に進み右に見える階段を上りまた左手に進んだSSS001という部屋番。部屋番名の決め方はランクがSSSで最初の到達者で001ということらしい。

「んじゃ、そういうことだブレイク。このあとはとくに用事がなかったら帰ってもいいぞ。今日は特に何も無いからな」

「はい。分かりました。ありがとうございます」

「では、姫様、部屋に戻りましょう」

ギフエアはそういつて姫様に手を差し出したが……

「……」

「姫様？」

「……」

「聞いてますか？姫様！？」

「あっはい。すみません」

「では」

「あ、あのう、ブレイクさん」

ギフエア心

まさか、まさかこの展開は!?

「はい? 难道でしょうか」

「今日の事なんですけど……」

ギフエア心

来るか? 来るのか? 来ちゃうのか!?

「今日がどうかしましたか?」

「御一緒に……」

ギフエア心

だいたい予想は付く。この展開はだな、御一緒の部屋に泊まっても  
よろしいですか？

とか、姫様言いそうだぁ……。これは姫様側近の私がどうにかする  
べきか……。いや、この場合は見守るべきではないか？むう……。  
いや、こういうことは、もっと先になってからか？まだ幼いし……。  
いや、ブレイクは人間性が良いから大丈夫か？そういう問題じゃない？  
……。これからの生活がどうなっていくのだろうか？いやいやいや、  
や、将来はどんな風に暮らしていくのか？私も近くに置いていただ  
けるのだろうか……。いや、それはマズいよなぁ。家族の中に私がい  
るのはおかしい。これは止めるべき

.....あれ？

「誰もいない……」  
\*お約束です

そのころブレイクたちと言うと姫様に袖口を引っ張られていた

「姫様？何処に行かれるのですか？」

「敬語は止めてください、緊張します」

「……いや、マズいだろ？姫様にため口！？……マズいって！！」

「いや、でもさすがに困ります」

おっと！

いきなり姫様が立ち止った。

「私が姫……だからですか？」

「あたりまえじゃないですか、姫様にため口などそんな無礼なことは出来ません」

「そう……ですか……ならば、姫を辞めます」

「……………」  
「？」

姫を辞める？姫様を辞める？？

何？何が起こったの？

「そ、そそそれはどうなさっての過程からの結果で」

もうなんか自分が言ってることが正しいかどうかあゝ（混乱）

「過程……？ですか？そ、それはですね、わ、私は、あ、あなたのこと、いえブレイクさんのことが・・・」

「ひーーーーめーーーーさーーーーまーーーー！！！！！！！！」

ギフエアが凄い勢いで大声を出して走ってきた

「ギフエアさん。大変なんです。」

「どうした!!? 結婚の話か!？」

「……結婚? (何の話だ?) いえいえ、違います、とにかく、  
姫様をお辞めになると……」

「姫様が姫様を辞める? それはなぜだ? …… って大丈夫ですか姫様  
!？」

「わ、わわ私が、ブブブレイクさんと。けっこけっけけ結婚をおく  
」

鶏のようにコケコケいいながら倒れる姫様

「大丈夫ですか姫様!？」

「姫様は大丈夫なんですか？」

「……いつものことだ（なんという鈍感男なんだ）」

「いつものことなんですか？でも、ほんとに大丈夫ですか？」

「心配することはない、大丈夫だ。姫様は部屋に運んでおく。ブレイクは今日のところは部屋に戻ってくれ、家に帰っても構わない」

「……分かりました」

姫様のことも心配だけど、とりあえず部屋に戻ってひとまず寝よう。いろいろと混乱してるところもあるし……

頭の整理もしないと、もう何が何だか………

そして、ベッドに倒れこむと同時に深い眠りについた……



## 第九章

### 騎士団クラスSSS（後書き）

そういえば最近忙しいな……

## 第十章

俺とギフエアと姫様と（前書き）

## 第十章

### 俺とギフェアと姫様と

#### ヴェセア城・ブレイクの部屋

「と……………姫……………ブレイク……………そうだ……………」

先ほどこから、頭の中で同じ言葉をずう……………と囁き続  
かっている……………

あまり眠れてないこともあるなかなか言葉を聞き取ることが出来な  
かったが  
次の言葉はハッキリと聞き取ることが出来た

「と言うことで姫様はどうやらブレイクのことを好きだそうだ」

「今、何と？」

いやいやいやいやいやいやいやそれってヤバくないか？  
今、平常心保って言葉を聞いているのは、昨日からの負担ゆえ、  
もう精神が逝っちゃってるのかもしれない……  
それともあれか？全てが夢？幻覚なのか？

「おお、やっと反応したか……。」

これはあくまでも俺の推測なんだがな

（と、言っても、昨日や数日前の様子から確定に変わったがな）」

「は、はあ〜」

「そこでなんだが……その〜。」

姫様と付き合ってはくれないか？」

「ひ、姫様と付き合う！？」

いや〜冗談はほどほどにしないと朝から、頭が混乱します。  
もう既に混乱していますが………

「ここは、姫様側近でいながら小さな頃から面倒を見ていた私から

のお願いです」

ヴェセア心

重大な事は、またあとで話せばいい。今はこれだけで……

「お願いとあらば……」

いや、頼みに答えるまでもない。  
断る要素などどこにもないからな

「……1つ訊くが、ブレイクは姫様のことを“とても綺麗な人だと思いました”と第五章で言っていたがこれは本当なのか？」

第五章？何を言っているんだ？……って！そういうことよりも  
確かにとても綺麗な人だと思ったのは間違ってる。というか誰が  
見てもそういうであろう。これが答えになるのだが、次にヴェセア  
はこう言ってきた

「姫様と付き合うということはどう思う？」

ど、ど、ど思いつて……そりゃあ正直、もう嬉し過ぎて魂が吹っ飛び  
そっですわ

「それはとても嬉しいことなんですけど」

「そっか……」

そっいうことだそっです姫様」

ひ、姫様!!???

「そっなんですか。ブレイクさんが私のことを」

「こ、これは!?!」

ブレイクの部屋の入口からひょっこりと顔を出し近づいてきた

「すまんなブレイク。ちょっと姫様に頼まれたからな」

昨晚・ヴェセア城・姫様の部屋

（……では、失礼いたしました）

（……待って下さい兄様）

（その呼び方はここでは言わないという約束では？）

（あの。ブレイクさんについて相談があるんです）

（ブレイクについてか？）

ギフエア心

ブレイクについての相談と言えば、そりゃ予想はつくもので……

（はい。ブレイクさんは私のことをどう思いになられているのか、という事なんですけど）

（重々承知のことですな）

（知ってたんですか！？というか兄様は私の心が読めるんですか！？）

（長年一緒にいる兄弟ではないですか、それに心なんて読まずとも姫様の顔に書いてあるも同然）

（わ、私の顔にですか！？）

そういつて自分と同じ大きさくらいの鏡の前でわたふたと一生懸命探しだした

（例えですよ、例え。姫様の言動、行動などからしてバレバレです）

（そう、でしたか……あ！それよりも……その……どうしても知りたいんです。）

（では、明日探ってみましょうか？）

（本当ですか！？ありがとうございますっ兄様！）

姫様の笑顔が見れるならどんな頼み事でも承諾しそうだ……

あの日から姫様が変わってから笑顔なんて一切見せなかったというのに  
これも、まったく、ブレイクのおかげだな……

（では改めて。失礼いたしました）

昨晚・ヴェセア城・廊下

（例えば血が繋がっていなくとも力になれることがあるならば全力で……）

ヴェセア城・ブレイクの部屋

「頼まれたんですか……」

「そういうことだ。これからよろしく頼む」

「……はい」

途端にアイシエス姫が、わふつと抱き着いてきた。それにしてもあんな恥ずかしがり屋なアイシエス姫が抱き着いてくるとはな……。俺の魂は今頃、銀河系目指して吹っ飛んでいることだろうな……………

いや、死後の世界に宇宙ってのはあるのか？  
って上を見上げたが城の中だったことに気付いた  
てんぱってんなあ。俺……………

「私。嬉しいです。お役にたてることがあるならば何でも」

しかし、アイシエス姫の立場上迷惑を掛けるわけにはいかないから  
なあ

自信満々の顔を見ると何か頼まないといけないような感じもするが

……

「分かりました。アイシエス姫も何かあれば……」

ギフエア心

例えばまだ好きと言う感情を抱いていなくともそのうち……

「では早速、私のお願いを聞いて下さい！」

ヴェセア城・中庭

「それにしてもどこを見ても綺麗だね」

アイシエス心

そ、そんなぁ綺麗だなんて、ブレイクさんったら……

「この庭は誰が手入れをしているの」

「に、庭ですか！？（私。なんという早とちりを……）」

「うん。こんなに綺麗に保つなんてさぞかし掃除が大変なんだろう  
って思ったんだけど」

アイシエス姫に向かって普通に話す  
これをお願いというものなのだが

やっぱり、普通に話すのは大変苦労極まりない……

しかし姫様のお願いだからしょうがない。

「この掃除でしたらあちらの方が」

「一人でやってるの？」

「そうみたいですネ」

そうみたいですネって！こんなに広い庭を一人で掃除！？  
サッカーコートぐらいの大きさはあるぞ！  
俺だったら気の遠くなる作業で、仕事ほったらかしにしそっだ

「お名前は……カリアさん……でしたよね？」

「は、はい。カリア・ウェナリーと申します。よろしく願いしま

す」

と、俺と姫様に向かつてお辞儀してきた

「あ、いえいえこちらこそ」

オレンジ色の髪が腰付近まで伸びている頭には白いリボンをつけていて服はなんというか……

とても質素だと思う。こんな城で働いているのだから結構貰ってるのだと思うのだが

しばらくカリアさんを見ていたらアイシエス姫が俺の袖をクイクイ引っ張ってきた

「次行きましょうか」

早くいきませんか？ 的なオーラをガンガン出してきたのでとりあえず何か言おうと考えて

「そうだな。んじゃ頑張ってください」

と、応援の言葉を取りあえず……

今は手伝ってあげられないのが残念だけど。ってか手伝っても足を引っ張りそうだし

またの機会にそういうことがあれば……

「わ、分かりました！ありがとうございます」  
とカリアは一礼した。

その後、

噴水の近くの花を見たり、どんなプロが作ったんだ！と思わせるくらい上出来なステンドグラスを見たり

ひととおり城の中をアイシエス姫と見て回った

そして現在いるところはアイシエス姫の部屋のテラスで景色を眺めている。

「……そうでしたの!？」

「そうなんだ。俺はこの世界の住人じゃないんだ」

「では、お父さん・お母さんは？一緒に暮らしていたのですか？」

「この世界とはまた違う世界、つまり俺が暮らしていた世界にいる。っていつても。俺の父さんは6年前に世界旅行に行っちゃって、母は、地元を離れて長い間働いてるから俺だけが家で生活してたって感じかな」

「そうだったのですか……。しかし、なぜこの世界に？」

どうしてこんな話になったかと言うと、アイシエス姫の質問に少し答えて……いや、たくさん答えて……いや、数えきれないほど答えているうちにこうなった。

前の世界で雷に打たれ死んだ……ということは今は伏せておこう  
なんとなく嫌な予感がするからだ……

「うーん……。知らないうちにここにいたんだ」

少し無理があるかな……

まあなんとかなるか

しかし、生活してきた記憶があるのに自分の名前が分からない……  
どういうことだ……？

「戻ることは出来るのですか？」

戻るも何も俺は死んでるからなあ………つてか死んでることを忘れかけてたし

でも、この世界では今は生きてることになってんだよなあ。

でも俺のいた世界では死んでることに？……ああ……頭が混乱する。

俺は今どんな立場で立たされてんだ？

第二の人生を選んだことによって命が復活したのか？

こういう疑問はキルティに聞くのが一番だろうと、次に会ったときに聞き忘れないよう

頭にたたきこんだ。

「とりあえず戻り方がわからないから戻れない」

「もし、もし戻れたとしたらブレイクさんは元の世界にお戻りになるのですか？」

おっと。そんなうるうるした目で俺を見ないでくれ  
今にも泣きだしそうなその目はどんな男でも断れそうになかった  
これが泣き落として奴か？

「そ、そうだな……もし戻れたとしてもこの世界に留まるかな？」

「ほ、ほんとですか！？」

えーっとその笑顔がとっても眩しいです  
まあ元の世界に戻っても面白くないしな

そんなこんなで、なんか充実した一日だった。

ヴェセア城・ブレイク部屋前

「一日こっちで泊まっちゃったけど。ミシエル大丈夫かな……？」

「ミシエルさんのことで心配事か？」

「そう言っただけに手を乗せてきたギフェア……っていきなり現れた！！」

「そ、そんなんです。それにしてもいつから……？」

「いや、たまたまここを通りかかったらブレイクがいたものでね」

「たまたま……ですか？」

「そう、たまたま。あ！そうだついでに知らせることがある」

……知らせること？

「明日はS騎士団特別指令会議があるから会議室まで明日の午前9時に来てくれ」

思いつきにしては結構重要な話ですね……  
俺と会わなかったらどうするつもりだったか

「それでS騎士団特別指令会議とは？」

「Sランク以上の騎士団だけの集まりでなあ。特別な指令。任務が任される」

「Sランク以上の騎士団が集まる……。難関ってことですよ、それは」

「まあ当然のことだな。テラドレスの討伐・ペンジャックの卵の採取・ダーゼル騎士団の監視などといったところだろ」

あははは……どれも凄そうなんだけど、その凄さが分からないのが一番怖い

ってか、ギフェアさんのその余裕そうな表情……

「大丈夫だ。ブレイクなら何の心配もいらない。さっき紹介した任務は全てA～SSのランク程度だ。SSSのブレイクにとっては気抜きも良いところって感じだな。」

気抜きも良いところって言われても

初めての指令？ってのはすごく緊張するわけで……

「んじゃまた明日な」

そういつてギフェアは、俺の肩に手をポンつと置くと、頑張れとひとこと言われ

その場を立ちさって……ん？ 戻ってきた……

「それから、明日はお偉いさんたちもたくさん来るから時間は厳守にな」

「分かりました。気をつけます」

今度こそ歩いてどこかえ向かうギフェアさんを見送った後しばらく俺はその場で立ち止まっていた

「どんな指令を受けるのだから……」

## 第十章

### 俺とギフエアと姫様と（後書き）

会議では結構重大な発表があります

ですが、その前にEXを。

EX？

## 計画

？？？地方の街にある魔人基地

「ツアツエ！準備はどうなった？」

「はい順調です。この人数ならあと数日で」

ギーヴァ王率いる魔導師たちは約一万を超える数。

それだけの人数を使ってでもやり遂げる計画がある。

さすがにこんなに人数がいると邪魔くさくなるため先ほどまでギーヴァ様は自室で休んでいた

「そうか、ついに魔法破壊計画の始動だな」

「はっ！！」

「魔法破壊計画……この世からスペルという概念を消し去ること……」

エルウェールは静かに言った。

スペルを消し去る……それは魔法の絶対なる消滅を意味する。この世ではスペルを少なくとも答えなければ魔法は発動できない。スペルを唱えられない＝魔法が使えないということになる。しかし、そんな危機に陥っても唯一助かる術が数百年前に実証されている……シオラ石。でも現在発掘で確認されているシオラ石の色は緑のみ。緑は浮遊力しか生まない。そのためシーズウーに使われているのだが……

赤色のシオラ石・青色のシオラ石・黄色のシオラ石・白色のシオラ石・そして黒色のシオラ石これらは属性魔法を使用する際に使われるもの。他にもあると聞くが代表的なものでギーヴァ様は黒色以外は全て揃えている。シオラ石はそうそう簡単に見つけられるものではない、これは竜の涙を生成して作られると言われている為、作ること也不可能。これで世界統一も近くなりそうだね。

「しかし、最近、S Z A K騎士団の動きが怪しくなってきました」

透明なガラス越しに詠唱を唱えるあまりにも多い魔導師をみて顔をしかめるギーヴァ

「そうか、まあいざとなれば叩き潰すまで……」

「ギーヴァ様ならそんなこと楽勝ですよね」

「それよりだ、最近ブレイクはどうなっている？」

「特に情報なしですね……」

「そうか……」

「ギーヴァ様。アメルークをお持ちしました」

エルウェールがピンク色の飲み物を透明なグラスに入れて運んできた見た目はグワバという飲み物に似ているが味は最高だ

「……懐かしいな。アメルークを飲む日がこうしてまた来るとは」

「先日。ヤオパロイ島へ行ったときにアメルークのなる木がありましたので」

ヤオパロイ島、マロハス地方に存在する島。

数年前に完全にアメルークの木は消えたかと思っていたが、まだ残っていたか

「この香……。昔を思い出すな」

「そうですか。お味はどうでしょうか？」

「最高だ」

「ありがたきお言葉」

この上ない言葉をもたらしたエルウェールはいつになく機嫌がよかった



EX?

計画(後書き)

\*SZA K騎士団とは、セル・ゼロ・アカ・クア騎士団のことを示します

次回、またまた新キャラの登場ということで、しばらくギフェア以外のセル騎士団の一員には、休んでもらいます。

## 第十一章      こんなのってありッスか？

### ミシエル家

「時間は余裕にあるし持っていくものとかも特に無いっ」と

俺は今、ミシエル家にいる

そして今日はS騎士団なんちゃら会議というものがある  
時間厳守だと言われるとそわそわする

予定出発時間30分前だが、もう出ようと思う……

「ブレイク。ほんとに大丈夫なの？」

「そっだな、忘れ物とかも無いし大丈夫」

「そっか、今日はなんか大事な日なんでしょ？」

「どうやらそうらしい、任務を任されるって言ってたけど……」

「ブレイクなら大丈夫でしょ！どんな任務であろうと」

なんか今日のミシェルはやけに元気がいいなと言ったところ  
自慢のブレイクが初任務とあらば、弁当作りにも力が入るんだ。と  
か言ってきた

弁当って……

しかも初任務っていうのは普通、SSSランク者に向けて言う言葉  
じゃないと思うんだがな……

「はい。あとこれ」

渡されたのは鳥の紋章が入ったお守りみたいな物

「これは……？」

「勝利祈願のお守りよ！頑張ってきてねっ！！」

昨日の夜コソコソ作業してたのはもしかしてこれか？  
泥棒でも入ったのかと思ったのに……。変な心配したなあ

「ありがとう。こんな俺のために」

もちろんお礼は言っておく

「べ、別にブレイクのために作ったんじゃないかって、隣の家の子供たちあげる時に残った余りだからね」

「分かってるよ（ど）そのシンデレレですか？」

## ヴェセア城・会議室

城にこんな凄い会議室があるなんて……

「ブレイク。こっちだ」

呼ばれた方を見るとギフェアとその他（お偉いさんたち）の人々がいた

もちろん騎士団一員も居たのだがまったく違う場所にくっちゃべっている。あゝ俺もあっちに行きたい……

「紹介する。こちらがレスター・ダラン公爵さんだ」

「ごほんっ。君のことはギフェアからよく聞いたよ。これからも頑張ってくれたまえ」

髭を生やしていると尚更偉く見えるのは気のせいだろうかええ〜と。公爵？侯爵？……たぶん公だろうな。五等爵のうちの第一位だったよな

公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の左から順に偉かったはず……

「は、はい。ありがとうございます」

「そしてこちらがロトフェイ・マルトレス博士。魔術の新研究を絶えずおこなっている」

「なんか僕が凄い頑張り屋さんみたいな言い方はやめて下さい。困ります」

「魔術の研究ですか。凄いですね」

魔法研究のやり過ぎなのか目の色が左右異なっている色も判断しづらい……

「今度、ブレイク君にもいろいろ教えてあげますよ」

「ありがとうございます」

「最後にオクマーサ・テゴレス錬金合成師だ」

「よろしく。ブレイク君」

錬金合成師とはこれまた凄い  
不審者に思われるんじゃないかと思われるかもしれない作業着  
みんなきっちりと服を着こなしているのに逆に目立つ

「オクマーサは昔からの仲でなあ錬金や合成というものを覚えると  
なかなか役立つぞ！お、そうだ、オクマーサ。ブレイクにも何か教  
えてやってはくれないか？」

「全然OKですよ。んじゃ手始めにネズミとイモリの合成を「今こ  
こでは止めてくれないか？」……あ、とんだ失礼を……申し訳ない」

さすがギフェアさん昔からの仲だけであって対処が早い  
まさかポケットに生き物を隠しこませておくとは予想もしていなか  
ったな……

ってかネズミとイモリの合成で何が出来るとか知りたい

ブォーン

そのような起動音を立てると同時に電気が消えて空中に浮いた全面？コンピュータ。まあとにかくどこからでもちゃんと見える仕組みになっているものにおじいさんが映った。

「みんなそろったか？」

ごほんつと咳払いをして一言いう

……なんかダン ル アに似ていたりもする

「いえ、まだミールルク・イナミ魔導師が来ていません」

「そうか。……まあいいだろう。よく聞いてくれ」

「あの人はダケストル・フォナン老師と言う人で歳はなんと今年で500歳。信じられるかい？僕はとてもそうは思わなかったんだけど、最近、そうなんじゃないかって思ってきたんだ」

耳打ちしてきたのはロトフェイ博士なんだが……500歳！？信じられるわけが……

いや、少なくともあの魔人を見たから信じられないわけがない……か。

「俺も同感です」

「そう？ やっぱりそうだね」

「ロトフェイ博士はなぜそう思ったんですか？」

「勘……かな」

「勘……ですか？」

「そう、勘。ブレイク君、君は何でだい？」

「こんな話ここではどうかと思うんですけど、実は……」

「な！？ なんだって！！？」

突然の大声に一同こちらを向く

「シーッ！！ 静かにして下さい。す、すみませんみなさん。続け

て下さい」

「それはそうとどうやってそいつに会ったんだい？」

たとえ人間の聴力の4倍を誇る犬が近くにいたとしても聞こえないくらい小さな声で話し始めた。

「あいつから俺に会いに来たんです。」

「向こうから？」

「そうです。そしたら急に俺を殺そうとして来て」

「ふんふん。危ないところを誰かに結界を張られて助けられたと」

「そうです。ついではなんですけど誰だか心当たりありますか？」

「うん……唯一当てはまる人物と言えばファンベル爺……………」

「ファンベル爺？」

「そう、ファンベル爺は魔法の第一発見者にして最高学歴なんですよ」

「魔法っていつ発見されたんですか？」

「約480年前」

「ってことはファンベル爺って人は約480歳ってことになるんですか!？」

「そういうことになるね」

「そういうことになるってファンベル爺って魔人なんですか？」

「人間と魔人のハーフとでも言おうかな」

「ハーフ!? そんなことがあるんですか？」

「ハーフってのは人間と魔人の間に出来た子供だよな……  
そんな話があるかよっ

「まあその話はまた後にするとして。どうやら今回の指令が出されるようだよ」

「そついうわけで、今回の指令を発表する」

## 指令

開始日：明日朝9時に各クラス指定された場所に集合

達成条件：特別任務を完璧にこなす

任務内容：Sクラス用SSクラス用SSSクラス用にて

下記を参照

Sクラス：赤青黄白黒のシオラ石の採取

42名

SSクラス：ドルヴェーナに出現したハドルドウの

討伐

37名

SSSクラス：SZAK特別基地にて詳細を話す

9名

「ハドルドウの討伐かあ……。さすがにちょっときついよなあ」

「何言つてんだよレクセル！ハドルドウなんか俺たちセル騎士団が負けるはず無いだろう？それに見ろよあの人数。37人もいたら暇を持て余すぜ」

「ぼ、僕になんてそんな任務無理だよ……」

「んじやとつとと帰れよ」

「ひどいです、マールーさん」

その一方でキューラとタミンがキャツキヤと楽しそうに話していた

「私たちは宝石探しだね」

「うんうん。なんだか楽しそうだね」

しかし、そんな会話はブレイクにはまったく聞こえなかった

「……あは、あはははは。ぎ、ギフェアさん？これってどういつこ

とですか？……なんか凄いことになってるじゃないですかっ！！？  
何があげ抜きですかっ！！これじゃああげ抜きどころか命にかかわる問題になってきますよっ！！」

「まあまあブレイク。そんなに焦るなって、まだどんな任務かも聞かされてないし」

「んじゃ、なんでS Z A K特別基地に行くんですか？あそこは世界が何らかの危機にさらされているときに活動する組織ですよ。（…  
…要勉強済み）しかも9人だし……」

「俺も行くことだし何とかなるだろ」

さて何とかなるものかどうか……  
「なんかもう笑うしかない」

そしてとどめのお言葉

「あ、それと、君はブレイク君といったかな？君には、かなり期待しているぞ。ではまたS Z A K特別基地で会おう。その時はこういった映像ではなく私も現地へと向かうとする。」

ヴォン！

喋り終わると同時にパソコン自体が消えテーブルのみの部屋になった

「期待されてるじゃないか。ブレイク」

俺の肩を呑気にポンポン叩くギフエア

「……こんなのってありッスか？」

## 第十一章

こんなのってありッスか？（後書き）

次回はいろんな地方の騎士団たちと会います  
そして旅に……

## 第十二章 魔人基地への侵入（前書き）

今回は必殺武器の登場です（笑）

## 第十二章 魔人基地への侵入

俺は特別基地へ行く前、とても不思議な夢を見た。

「……………ブ……………ク」

何か聞こえる……………

「……………ブレイク……………」

俺の名前を誰かが読んでいる……………

「ブレイク!!」

「うわっ!!?」

目を開けたら目の前にキルティが居た  
余りに近いため頭をぶつける

「いったいわねえ……。まあ今回ブレイクの夢に無理矢理入り込んだわけはね、ちょっと渡したいものがあるから読んだのよ」

「渡したいもの？　つてか夢で渡されるのに持ち帰れるのかよっ」

「ああ。そこらへんは気にしないで、ちゃんと持って帰れるから」

そついいながらどこから取り出したか分からない大袋から何かを探し始める……

「ええーつと……。ん！　これだこれ。ブレイクに渡すものはこの石」

……石？　と思いながら受け取ったのは綺麗な赤・青・黄・白・黒・茶・紫・銀・金・透明の10色の石

どこかで見た形によく似ていると思いながら、なかなか思い出すことが出来ない……

「なぜ俺に？」

そう問うとキルティもしわを軽く寄せながらこめかみに手を当てる

「それなんだけどねえ。私にもよく分からない！」

だ、断言されたし！？

そのよく分からないものを渡されても困るのは俺なんだが……

「でもね、これを渡しといたほうがいいって言ってた」

「誰が？」

「上層部の人にそう言われたんだよね。ぶっちゃけ意味わからないけど、ブレイクに見せたら何かわかるかなあゝって思ってたね」

「ごめん、俺も思い出せない……」

「まあ、持ってた損は無いでしょ　なんかキラキラしてて綺麗だし」

そりゃいいけどなかなか重たいぜ、これ……  
長時間持ち歩くのはきついし

「まあ気分的にいいかもな……」

「でしょでしょ！んじゃまた何かあったらこうして夢で呼ぶからよろしくね」

「んじゃ、今度は頭ぶつけないようにしてくれよな」

「あ、ああ……そうね。了解！」

そういつとなにやら腰についているものを取り外す

「なんだそれ？」

「久しぶりの十字架の登場ですよ」

「じ、十字架……!?」

俺は戦慄した……。記憶の片隅に眠る恐怖を思い出す

「よいしょっとお〜。これ、見かけによらずほんとに重いからねえ」

この言葉も聞いたことのあるフレーズ

「ち、ちよつと？キルティさん？……どうかなされましたか？」

「ん？やっぱり目覚めはスッキリした方がいいでしょ？」

いえいえ……。頭痛で悩まされますよ

「それで、それをどうするおつもりで？」

ほとんど分かりきっていることだが聞いてみる

「聞こえなかった？これ！意外に重いよねえ……」

「いや、だから、その」

俺の言葉は全く聞いてなく標的に向けて十字架を構える

「目指せ！ホームラン！！振りかぶってえ」

「や、やめてくれまうぐっ!!」

「カッキン!!っとおゝ。頑張ってきてねえゝ」

ブレイクは

目が飛び出るかと思った

体が碎けるかと思った

一生頭痛がしそうな気がした

その他症状もろもろ降りかった……

## S Z A K 特別基地

ヴェセア城から南に約10km進んだところにある地下の基地  
入り口が、高級ホテルにあるトイレの掃除器具入れを魔法を唱えな  
がらずらすとあら不思議。秘密階段のご登場です。そして今、俺は  
そこをギフエアと下へ降りている途中……。

なんか頭痛が朝から酷いんだがどんなことがあったのかいまいち思  
い出せない……

綺麗な天使にぶっ飛ばされたという恐ろしい夢だったような気がする

でも、そのことについてはあまり深く考えたくなかった

「ギフェアさんのおかげで場所がすぐにわかりました」

「この街にはよく来るからな」

「この街って確か、アルタンテ地方のキャラルってところですよ  
ね？」

「そうだが？」

「このキャラルって所、何もかもが高級品って聞きましたが何を  
買って……？」

「まあ確かにここは高級品ばかり売られているが、珍しいものも  
売っているな。そうだなあ……香辛料とかレシピとか、よく買っ  
かな」

「ギフェアさんって料理とかするんですか？」

「まあな。今度タルタンテっていうの作るから食べに来るか？」

「タルタンテ？」

「それについてはまた後で話すよ。……さあ到着だ。ここがSZA  
K特別基地」

そういつて見せられたドアは……いや、ドアじゃなくこれは布か？  
そのようなものをとにかく、くぐり抜けた場所はもの凄くしつかり  
とした施設だった

「入り口とは違いこんな凄い場所があるなんて……」

「ん？ああ。ここはなあ、少し前に改装されたんだが入り口まで改  
装費がいきわたらなくてな」

計画性つてのが無かったのか……？

それはそうと、既に集まってる方たちが数名……いや、これで全員  
か……？

それにしても少ないなあ

「その服装はセル騎士団のギフェア・リザクストさんですね？」

そう声をかけてきたのはゼロ騎士団所属の人

そっか、さすがギフェアさん。いろいろな人に知られてるんだな……  
……ってあれ？ギフェアってリザクストって言うんだ。初めて知ったし。……ってことは騎士団全員に下の名前があるのか。ちょい興味ありだな。

「おールイセスじゃないか。久しぶりだな」

「お久しぶりですね。えーっと、そちらの方は……」

「俺はブレイクです、よろしく願いします」

「こちらこそ。私はルイセス・ファボラーテ、これから、選ばれた9人で力を合わせることになるだろうからよろしく。あ、あと他にもドンハスとゼナスがいる」

「あの二人も来ているのか」

「そういつて俺とギフェアさんはルイセスと握手をした」

「あーら。そこの可愛い男の子はなんていう名前かしら？」

「っ！？」  
顔を見なくてもわかる……こいつはおかまだっ！！

「君？君に聞いているのよん」

「え？俺ですか（出来れば話したくなかったんだが）」

「そうそう。なんていう名前なの？」

「ブレイクです。よろしく」

そういつて顔を合わせると意外と美青年だった

「ブレイク君？良いお名前ねん 私はウエズペス・ヨーグンツよ。これでもクア騎士団のリーダーを勤めてるのから。よろしくね」

でもまあ……喋り方のせいでせつかくの顔も台無しだし  
しかもリーダー勤めてるんだこの人。この騎士団大丈夫なのかな……

「あまり周りから引かれると後で困りますよ。ウエズペス」

「トルツ君ったら私のことが心配なの？優しいわねん」

「いえ、クア騎士団の名誉に関わる問題ですので。……あ、失礼しました。僕はトルツ・イオナンテです。よろしくお願いします」

この子がいるから大丈夫か。ってかいなかったらどうなっていたことやら……

「おい。あんたらたち、どんな武器使ってた？……ってギフェアじゃないか。久しぶりだな」

「テペバロクかあ。最後に一緒に戦ったのはファベスト帝国の襲撃以来だな」

そう話しかけてきたのは……アカ騎士団か、ずいぶん仲が良さそうだな

しかもファベスト帝国の襲撃って一体どんな戦いだったのか……

「そうだな。こうしてまた戦えるのも何かの縁だ。頑張ろうぜ！」

そうしてみんなの武器紹介が始まったのだが

「私は、チャクラムを使います」

へえ〜ルイセスさん、チャクラム使うんだ

「私はカルトベーターよん」

カルトベーター？ いったいどんな形状をしてるんだ？  
セル騎士団のみんなが持っていた武器とは違うものばかり……

「そうか、俺はアックス系の武器だ。そして俺の名はテペバロク・ウオラツツエだ」

「私はアイナ・リザベキート。テペバロクと同じアカ騎士団所属よ。武器は3バレルフrintロックっていう銃を二丁」

うん。この人は女の人だ。武器は3バレル2丁持ちとか超かっこいいな

…… テペバロクの彼女に見えるけどどうなんだか  
そしてある程度紹介が終わった時、老師さんが階段を下りて来た。  
一通り挨拶を交わしたところで中央の席に着いた老師さん

「ゴッホン。……さて、今回の任務の話だが、お前たちにはボルテキア地方のマシリストにあるといわれている魔人基地の調査に行ってもらうとする」

魔人基地への調査！？

「分かりました。……しかしなぜそのようなことを？」  
ギフエアが訊く

「ふむ。奴ら、魔人の秘密実験の情報がこぼれてな。どうやら一刻も争うようなんじゃない」

「一刻も争う？」

少し疑問に思いながらルイセスが話す

「そう。どうやらこの世からスペルという概念を消すやらなんとなのか」

「それは大変じゃないですかあゝ。もし、そんなことが起きたとしたらん」

ウエズペスの口調からしてまったく焦ってるとは思えない

「お前さんたち、いや、この世界の人々皆、魔法が使えなくなるんじゃないよ」

魔法が使えなくなる！？どうやってそんなことを……  
アイツの仕業だろうけど一体何の目的があって

「そういうわけで早急に対処してもらいたいのだが」

「わかりました。ダケストル老師」  
胸に手を当てギフエアが答える

「では、何か危険があつた時の対処は各自任せる。命だけは大切に  
な」

はっ！と全員で返事を返し、その後、俺たちは、必要最低限のものを用意して早急に現場へと向かった。

#### ボルテキア地方・マシリスト

「ここが魔族基地のあるマシリストかあ」

アルタンテ地方のキヤラルから西に10km進んだところにボルテキア地方が存在するマシリストへはそこからさらに南に3km。はあゝ疲れた。帰りは単純計算で23kmかあゝ。そして先ほどから約1時間ほど入り口を探しているのである。

「おい。見つけたか？」

ルイセスが声をかけるも見つかりませんと帰ってくるだけで、やは

り見つけることは簡単ではなかった。

「あら？これはなにかしらん？……えいつ！」

ウェズペスが単三電池ぐらいの大きさのロープに気づき引っ張り上げると。直径約100mの穴が開き、全員落とされた。

「くッ！畏か！誰がこのようなことをっ！」

「気をつける！！何が待ち受けているか分からないぞ！」

みんな武器を構え戦闘の準備をする

……ん？このまま落下したら骨折れるよなあ

シュタツ！！

「よつと！」

「結構深いところまで落ちちまったなっ！」  
シュタツ！！

華麗に地面に着地する騎士団たち。慣れてんなあ、でも、おかげで降り方が分かったよ

武器の先に圧縮した風を纏わりつかせクッション代わりに使用する。  
なんて誰が考えたんだかな。

シュタツ!!

「全員無事か?……平気みたいだな」

「……そしてここはどうやら目的地のようだ」

壁のところどころに何かの絵が描かれているが何を意味しているものか……

道は二手に分かれていてどちらも暗く先は全く見えない  
今ここも、空からの光でかろうじてみんなの顔が見えるくらいだ

「どうしますか?」

なんかとても冷静なゼナスさんが言う。腰につけているのは双剣か?

「二手に分かれるか」

ルイセスさんがそう言いだした

「何が起こるか分からないこの場所で少数移動は危険では?」

「確かに一理あるが今回はあくまでも調査に来たわけであって、各自フラッシュを使えば周りは明るくなるから平気だろう」

フラッシュありがてえ

「ルイセスの言うとおりだ。ゼナス、そういうわけだ。二手に分かれようぜ」

あの人ばかりとドンハスさんって人だろう。武器は・・・何も持っていないのか？

その後、クア騎士団リーダーのウエズペスの魔法。シャッフルでチームを作った

その結果

俺・ギフェアさん・ウエズペス・トルツ君のチーム

そしてルイセスさん・ドンハスさん・ゼナスさん・テペバロクさん・アイナさんの2チームが出来た。

「よしっ！各自気を付けていくように」

ルイセスさんの言葉にみんなが用心し、二手に分かれていった



## 第十二章 魔人基地への侵入（後書き）

次回更新は7時間後です。

## 第十三章

### 逃げる！大岩コロコロ（前書き）

おかまの天然がなんか凄いです

## 第十三章 逃げる！大岩ゴロゴロ

### ギフェアチーム

「フラッシュでだいぶ明るくなるんですね」

「光属性のレベル1魔法だが、こういう時に役に立つ。比較的、フォースの消費が少ないのも特徴的だ」

#### \*補足説明

属性魔法にはレベル5まで存在する。レベル1の日常生活に役立つものからレベル5の超魔法まで。だが、全ての属性にレベル5という5の上が特定条件によって解禁される。しかし建物が吹っ飛ばす程の威力が出るものばかりで危険極まりない。

その結果、目の色だけで相手のレベルを判断するのはとても危険なことでもある

ゲームだとフォースが数値化されているいろいろ対策出来るけどそういうこと出来ないしな……

俺が今まで使ってきた魔法のレベルは3・4あたりかな？

「……これは」

トルツ君が何かを調べ始めた。

「どうしたの？トルツ君？」

ウェズペスがトルツ君の顔を覗き込みながら問う

「このマークは罨です。一見なんの変哲もない落書きにも見えますが……」

そついつてそこに石を当てると地面から先の尖った槍が突き出てきた。

「この様にうかつに近寄ると串刺しになるでしょうね」

「それは危ないわねん。あら？これは……」

カチッ！

「……ウェズペス？今。何か押さなかったか？」

「これかしらん？」

俺とギフェアさん、トルツ君は一步下がり

「とりあえず、即死じゃなくてよかったな……そしてそこにある宝石はなんだ？」

「あら！？綺麗な宝石ね！さっきは無かったはずだけど、勘違いかしら」

触ったのはマークではなく何かのスイッチだった。しかし、なにやら少しずつ大きくなる音に耳を傾けた。

ゴゴゴゴコンッ！ゴゴゴコンッゴコンッゴゴッ！

ゴクリっ……

ウエズペス以外の人の喉が鳴った。

「やばいなっ！みんな潰されるぞー！」

「ウエズペスのせいでこんなことになったんですからね!」

「に、逃げますよ。ギフェアさん! トルツ君っ! 『ラファーガ』  
(超加速)」

「みんな置いてかないでよぉ〜待ってえ〜」

じりじりと迫りくる丸い岩石はどこから出て来たのか……洞窟いっぱいいっぱい大きさだった。

そして見たところ……あははっ一本道だねっ! ……はぁ〜。ちょっとした凹みすら無い  
しばらく走りっぱになりそうだな

「この魔法の効き目はそう長くは持たないんだよなあー」

正直、一本道が長く続いたら死ぬな……  
今日が俺の命日になるってこともあるかもなあ……ってこんなことじゃ死ねないし  
天超地に戻ったらキルティになんて言われるだろうか……。  
考えただけでも恐ろしい

「あ。う。もしかして、もしかしてなんですけどお……私。なんかしたかしら？」

「どうしていつもウエズペスはこんな時そんなにも呑気なんですかっ！そうですよ！ウエズペスが畏にかかったからこうなっただんですよっ」

「……とりあえず今は、逃げることを考えていこう」

どうか、この道が長くありませんように……

ルイセsteam

「これはどうしたものか……」

ルイセスが見たものはどこまでも下へ続く穴がそこらじゅうに開いていた……

「ルイセス。これは慎重に行かないと、結構危ないんじゃないか？  
一歩一歩気をつけねえと」

ドンハスの忠告に腕を組み考える

「その必要は無いわよ」

「アイナさん。何か良い案でもあるのですか？」

ルイセスが問う

「俺の『オリハルコン』（浮遊石）でこの穴は普通に回避できる」

「それは役に立ちますね。助かります」

約200mにわたる穴道をテペバロクの魔法で難無く乗り越えた。

よつと！

浮遊石にしては全くぶれることの無い石を下りて先へ進んだ。

「次は、これですね」

穴道を乗り越えたルイセスたちは、大きく立ちはだかる木に遭遇した。

「岩系なら俺が壊してやったんだが、植物となるとなあ……」

周りの岩にがっしりとくつついた木は武器で攻撃してもびくともしなかった

「……ここはどうやら十字路……いや米字路のど真ん中みたいですね」

「んじゃ、この先に進むのなら、横から何かでかい物でもぶつければ吹っ飛ぶんじゃないかしら？」

周りの岩にはがっしりくつついてはいるが、下の根っこがそこまで頑丈では無いらしいと判断した

そのため横からぶつければ通ることは可能になる

「それでしたら、テペバロクさんの岩を横から当てればいいのでは？」

アイナのアイディアにルイセスが提案した。

「それはいい考えだな。『ビックボールロック』！（岩石球体）」

その瞬間どこかでなにかが響いた  
きつとこの魔法だろうと皆が思う

「その岩石はどこから来るのですか？」

「すまねえな。それだけは指定できないんだ……」

ルイセス心

一番大事なのはそれなのでは？

「あ。でも、俺らの道には来ないから安心してくれ」

「では、ギフェアさんたちにはその可能性が十分にあるというわけですね？」

ゼナスが冷静に指摘する

「あはは。まあそうなった場合は……。どうにかすんだろ」

ルイセス心

どうか……。どうか御無事であります様に。

ただそれだけを願うルイセスだった……。

ギフエアチーム

「おわっ!?!」

もうさつきから罨にかかりまくりだがこのスピードのおかげでなんとか回避出来ている。

「あれ？なんか先が……」

「ん？木？木が何故こんなところに……」

「そんなことよりも、このままじゃ潰されますよっ！俺たちっ！」

「何か困りごとでもあるのかしら？」

「そうだ！ウエズペス。スペースショックであそこをすり抜けられるようにして下さい！そしてみなさん、まっすぐに通り抜けるのではなく横に避けて下さい。どうやらあの場所は米字路みたいで道が分かれているみたいなので」

「了解っ！！」

「了解しましたっ！！」

「では。ウエズペス。頼みます」

「分かったわあゝ。『スペースショック!』」（空間衝撃）」

ドウニヨドウニヨ〜ン

目の前の木が歪んみ始めた

「チャンスは一回ですっ! タイミングを見計らってっ!」

「おりゃ!」

「はっ!」

「よっ!」

「いやんっ!」

ゴロゴロゴロゴロッゴロンッ!!

ドンッ!!

上手く避け切ったことで木に衝突してぺちゃんこになることを防いだ

「ふう。……なんとか助かったな。しかし、凄い勢いで木が吹っ飛んでいったけど」

「そりゃ。俺の魔法だからな。威力も2・3倍増しつてとこだろ」

地べたに倒れ伏せている所に満面の笑みを浮かべたテペバロクが近寄ってきた

「こんなところにテペバロク？どうかしたのか？ってこれ、お前の魔法だったのか！？」

「すまねえすまねえ。ちょいとばかりし目の前の木をどかそうとしてな。意図的にやったわけじゃねえから安心してくれよ」

安心なんかできるかよ。なんか、いつかあの人の気まぐれな魔法で殺されそうだ……

「まあ。けが人もいないみたいだし、魔族基地にもたどり着いたみたいだし、よしとするか」

魔族基地！？そういわれそちらを向くと、自分の背丈の10倍はありそうなかい扉を発見した。

「何か絵が描いてありますね」

トルツ君の言うようにでかい扉には掘ったり色を塗ったりと絵が描かれていた

その扉には男の人や女の人が黒い羽の生やした……魔人か？あれは？……まあ、そのような奴らに足や腕を千切り取られているところが描かれていた。

……惨い

俺はとっさにその扉から目を背けた。

「なんと悪趣味な……」

ルイセスがそう言いながらその扉の開けるところを探し始めた。

「ルイセス！多分これじゃないか？」

扉を開けるハンドルみたいなものがあつたが、赤い液体のようなものがこべり付いていた。

「これは……血か？」

「どつやらそのようですね。誰がこのようなことを……」

ガシャシャシャシャ！ギシャーンツ！

ハンドルを回したことによって開いたでかい扉  
ついに魔人基地への侵入を果たした。

## 第十三章

### 逃げる！大岩コロコロ（後書き）

次章はついに魔人との戦いになりそうです

SP

キルティ先生による地理授業2（世界地図）

天超地・ファーナ学校

ゴーン！……ゴーン！……ゴーン！……

ガラガラガラガラッ！

「みなさんお久しぶりです。今回は世界地図を持ってくる約束でしたよね？

えっ？……そんなの知らない？しょうがないわね、今日だけは特別  
ってことで

でも次、こんなことがあったらただじゃあ済まされないから覚悟し  
ていてね」

予備に持ってきておいた地図をみんなに配ると教卓に戻った

> i 1 2 2 5 2 — 1 7 2 5 <

「ではでは、今回は授業と言うよりか地図の確認程度なので  
世界がどういう形をしているのかが分かっていたできれば幸いで

すよ」

ステツキみたいなものを持ち地方を1つずつ差していく

「現在は9つの地方が存在していますがこれから対立関係になると地方が増える可能性があります。まったく、面倒ですねえ……まあ、それはさておき、分かっていただけでしたか？」

こほんっと咳払いをして忠告

「ちょっと汚い地図なので見ずらい部分もあるかと思うけどそこらへんはおおらかな気持ちでカバーしてね」

時計に目を落とし微笑する

「授業時間が5分程度つてなんなのかしらね。ですが、今回の授業はここで終了です。」

毎度のことですがこの授業はいつあるか全く分かりません。もちろん私も。

次回は違う教科もやってみたい気もしますがどうなのでしょうね……  
ではキルティ先生の地理授業、終わりにしたいと思います  
バイバーイ！」

S  
P

キルティ先生による地理授業2

(世界地図) (後書き)

上手く書き直せたら後で貼り直します

## 第十四章

### 魔法破壊計画の阻止 前篇（前書き）

少しシリアスな部分があります  
少しどころじゃないかな？

## 第十四章

### 魔法破壊計画の阻止 前篇

#### 魔人基地

今現在、魔人基地への侵入を果たし周りを搜索中である……煉瓦で作られたこの道は入り口から比べると随分綺麗になってきた

「……静かだ」  
いつでも敵が出てきても対応できるように、武器を取り出したゼナスが言う

「そうだな。この静寂は少し怪しいな」  
ドンハスも先程からよく周りを見ながら先ほどから歩っている

「そういえば、魔人たちの計画はスペルの概念を消す……とか言っていましたけど、どんな目的があつての行動なのでしょうかね？」

「それは俺たちにも分からないな。本人に聞いてみないと」

少し眉をしかめて話すルイセス

「うーん、しかしどこにも人影が見当たりませんね……」

トルツがそこかしこを見回していたががっくりとうなだれた  
あんなに大きな扉を開けて堂々と侵入したが敵の気配がまったく

「ひっひっひ……。こんにちはみなさん」

その声にとつさに反応する騎士団達  
気配に気づかなかったと……？

「見かけない顔ですねえ……。イヒヒッ！」

何が可笑しいのかずっと顔がにやけている  
身長はさほど高くは無いが髪の色は白、目の色は白？  
さすがは魔人……。でもこの人数なら倒すには足りている

「そついうお前は魔人か？」

テペバロクが武器を構えながら問う

「そうです、私が魔人ですとも、イヒヒ……。階級は……。言っても  
分かるはずですね。ひひっ！」

酒かなんかで酔ってんのかと思ってもしようがないほどの顔の赤さ  
とにかく先制攻撃、全員が魔法を唱えた

炎属性・水属性・雷属性・風属性・光属性

などいろいろな魔法を当てて弱点を探ろうとしたが全て魔人の前で  
消え去った」

その間、魔人は一步も動こうとはしなかったもちろんにやけたまま

「イヒッ！イヒヒヒっ面白いですねえみなさん。ひひっ」

「なぜ魔法が効かない！？」

「僕は君たちとは違ってMFの体質が強いんでねえ。いひひひひ  
！」

「MF？マジックリフレクションか！」

「もちろんですとも、魔人相手に並みの魔法じゃかすり傷1つ与え  
られませんよ。イヒヒ」

「くっ……」

齒を食いしばるテペバロク

「ああ、面白い。まあ、私はあなたたちを殺すようなことはしません」

「何ふざけたこと言ってるんだ！」

ドンハスが怒りを込めて前へ出る

「少なくとも私は……ですよ？他の連中はどうするか分からない。気性の荒い物もいれば私と同じような奴もいるってことです。イヒヒヒヒッ」

そう言葉を残し跡形もなく消え去った

「ったくなんだったんだあ？あいつは……」

既に戦意消失のテペバロクの声が聞こえる

「しかし、感覚が敏感になっている時に気配に気づかず背後に回られるのは一体どういことですかね」

トルツの言葉には皆に考えさせられた

「ん。困ったな……。ここにいるのは危険か」

「しかし、阻止するためには中心部に行かなくてはなりません……」

ゼナスの言い分にルイセスが賛成する

「そうだなこの基地もそう大きくないはずだからどうにかたどり着きそうだな……」

再び歩き始めた一行。両サイドの壁には今にも消えそうなランプの火が灯っている  
その微妙な明るさが恐怖感をそそる  
入り口とは違って、魔人の気配は無いが雑魚的の姿をよく見るようになった

「おりやつ！ 俺らの城にこんな奴らがいたら最悪だぜ」

テペバロクの一振りで粉碎されていく魔物……  
この魔物も中級者にとっては強敵なのだが、今となってはもはやい

てもいなくても同じぐらいのレベルだった

「おゝ。ここが中心部か？」

周りの暗さであまりよく見えなかったが大きな扉が出てきた  
血のように赤い中心部への入り口は入る者の勇気を削ぐように見えた

「んじゃ、早速開けて入るぞ」

ガチャ……

その先に見えたものは自分の身長の5倍くらいはある巨大な機械だ  
った

ゴオオオオオ……

「なんか動いてるみたいですけどどうすればいいのかねえ……」

アイナが腕を組んで考える

「止め方が分からなければぶっ壊すのみだろ？」

テペバロクの考え方はいつもこうなのよねえ……  
と、アイナは思う

「それはあまりに無理矢理なのは？」

ゼナスが一步前に出る  
とその時！

コツッコツッ……

「ん！？誰か来るっ！」

その一言で全員が身構える

コツッコツッコツンッ！

「誰だ貴様は！」

テペバロクが言い放つ

「おーっと。不法侵入者さん達に言われる筋合いは無いですけど……、驚かしてすみませんねえ」

とてもゆっくり喋る執事みたいなこいつはどうやら魔人らしいが……武器と判断できるものが何一つない、紫黒のマントを羽織っていて目が銀色をしている時点で魔法を使いそうなんだが、どうだろう。……そういえばミヴィのやつ。連絡無いけどどうしたんだろう？

「誰が驚いて「やめておけ、今は抑えとけ」ちっ……」

「随分、お利口さんね、見たところあなたたちはS Z A K騎士団の方々ですね？私は魔人エルヘス。以後、お見知りおきを。まあこんな自己紹介、意味ないですけどね」

「お前らの企む計画とやらを教えてもらおうか」  
ギフエアがエルヘスの目を睨み付けた

「私たちの計画ですか……教えてあげてもいいんですが、どうせここで死んでもらいますし、必要ないかと」

「はーあ？お前ひとりなんかに負けるかってんだっ……！」  
もう怒りが爆発したのかテペバロクが走り出した。

「そうですか。なにも、私一人など一言も言っていないんですが……」  
「ハルシネイションシャドウ」(幻覚の影)

……エルヘスが3人？

影にしては色までしっかりとしている  
それから3手にわかれて戦いが始まった

「ちっ！」

「『リプカジャイチフェレギ』(魔法)」

「デペバロク！これをっ」

ルイセスに渡されたのはスペルの浮き出た手のひらサイズの碑石

「ありがてえな！『エナジーリフレクション』！(魔法反射)」

パキン！

「ほお。なかなかやりますね。魔法を跳ね返すとは。『ファイアフ

ルエンジェル』（魔天使の裁き）」

「っ！？」

ザクッ！ザクッ！！

「ぐはっ！？」

黒と白の光の残像がテペバロクを切り刻む……

テペバロクが殺られた！？くっ！……目の前のこいつで手一杯なのに他のみんなの援護なんて到底無理だ

「テペバロクッ！……『フェルドカルト！』（W魔法）」

ルイセスが高速で呪文を唱えたが

「ふっ……W魔法など、笑わせてくれるっ」

埃を払うかのようにすうっとかき消された

「援護します！『イラプション』（爆発）」

「こんな下級魔法、私には効か……！くっ煙幕か……」

「おい！大丈夫かテペバロク！」

ルイセスが煙幕に紛れ、テペバロクを治療しようとする

「あ？大丈夫だっただよ！こんなかすり傷、余裕余裕！」

「そうか……無理するなよ。」

「ああ。少し休めば、怒涛の快進撃の開始だ！」

「期待してるよ」

「なにをよそ見しているのですか？『マッディストリーム』（濁流）」

「くっ……みんなっ！気をつけろ！」

怒号の勢いで迫ってきた濁流は何もかもを呑み込むように流れてきた。

「『クレイウォール』（強土の壁）」

濁流を完全に防いだ後、アイナはテペバロクの異変に気付いた。

「て、テペバロク!？」

アイナはテペバロクの元へと走って行った。

先ほどまで余裕そうだったテペバロクがなにかおかしかったかすり傷だったところは骨が見えるほど深い傷になり

出血の量も半端ではない……

一体何が

「お……おう……アイナ……じゃ……ねえか……どうした?……  
……涙なんか……ながしたりして……」

「まさか、死ぬんじゃないよね……」

「ハハッ……死ぬはずないだろ? ほら! こんな風に立つことも……」

っ！！？」

体を起こした瞬間、全身に痛みが走った。

「ゴホッゴホッ……」

血の塊を吐き目が虚ろになっている  
傷口の広がる進行が速い

「あ、安静にしていな！そんなに動いちゃ「この人は毒にやられて  
います。しかも、やっかいな副作用の活発化で血が止まることは  
無いでしょう」………そんな！」

「先ほどの魔法はそういう効果をもたらす悪魔魔法の部類です」

アイナは絶望した。テペバロクの命はすでに時間の問題だった。

「ア……イ……ナ………の………」

「ん？どうしたの！？言う事があるなら早く言ってよ！？なんでも  
叶えてあげるからさっ！」

「つくつ……た……りょう……り……を……また……たべた……  
……かったな……」

「私の作った料理なの？私の作った料理ならいつでも食べさせてあげるから、ほら、元気出してよ……男なんだから……いつまでも寝てないで立ちなさいよっ！目を開けてっ！……こんなところで寝てたら風邪……引くわよ……」

やるせない気持ちに彼女の心をかき乱した……

すでにテペバロクは息をしていなかったが  
生き返ることを信じたかった。幻でもいいから声を聞きたかった……  
しかし、現実には現実。目の前にはあの元気な男は居なかった

隙を与えない攻撃、魔法もほとんど通じない  
そんな魔人たちとこれから戦い続けることなんてできるんだろうか……

ましてや魔人ギーヴァが相手となると勝ち目は無い

なにか突破口は無いのだろうか……

そしてこれ以上死人を出すことなんてあつてはいけない

煙幕の中、短い休憩時間のなかでブレイクは一生懸命、攻略を探っていた……

## 第十四章

### 魔法破壊計画の阻止 前篇（後書き）

次回もシリ阿斯になりそうです

## 第十五章

## 魔法破壊計画の阻止 後篇（前書き）

との間は過去を表します

との間は……

のちの機会に。

## 第十五章

### 魔法破壊計画の阻止 後篇

#### 魔人基地・中心部

テペバロクが命を落としたことでアイナに怒りがこみ上げる

力を振り絞りゼナスの相手をするエルエスに向かっていった

「こちらの魔法が一切通じないようですね『双剣無双!』」

カキンッ！キンッキンッ！！

「そんな物理技が通じるとでも？」

「ゼナスっ！大丈夫っ？『6弾ジャックポット』」

「たった6発の弾が私になど通用す……………なん……………だ……………と？」

「その弾はね、少しでもかすれば1発が10発の弾に分裂するのよ」

「改良の散弾銃か・・・まあ・・・私は・・・分身の身・・・本体ではないので・・・あしからず……………」

「助かりました。」

「いやいや、気にしないで、それよりも援護に行くわよっ！」

「了解です！それより…………平気なのですか？」

「ん？アイツの事だしあの世でも元気にやってるでしょうよ。いつまでもクヨクヨしてたって何も変わらないでしょ？」

「そうですね。さすがアイナさんお強いです」

「このくらい当然よ？」

「…………さすがです」

「えいつ！」

「カルトベーターか、クセのでかい武器だな。」

鎖の先に付いた鎌を自在に振り回す

「そーお？私にはとーっても使いやすいわよん」

「そうか……。我こそは魔神王の使いなり、暗黒魔導書ネクロノミ  
コンの元、今この者をとらえ絶望と終焉を迎えよっ！」

「いやんっ！束縛プレイはあまり好きじゃないのよねん」

「何言ってるんですか！早く逃げて下さい」

「ん？……あ！トルツ君、私なら大丈夫よん。それより後ろ。来て  
るわよ」

「えっ！？とつと！！」

「他の人を構っている程、暇がおりとは、私もなめられたもので……………」

ザクッ！…………

「どこに氣イ取られてんだあ？これであんたもおしまいだ」

ドンハスが後ろから糸かなんかで首を切り落とした  
暗殺術を得意として扱うドンハスだと分かりブレイクは少しぞくつ  
とした…………

「ふっ…………そのようですね。しかし本物は私ではありませんよ。で  
は……………」

そういつてエルエスの影は全て消えた…………

「ウエズペスを今すぐ放せっ！！」

「それは無理な話です。S Z A K 騎士団を殺すことは私たちの計画  
の大事な材料になります……………」

「材料？それはどういうことだ？」  
剣を構えたギフェア言う

「ふふふ……。5人の騎士団を殺す時その命を魔神王に捧げること  
で強大なる力を取得することが出来るという言い伝えがあります。」

「言い伝えごときを信じるというのか！？」

「信じるも信じないも私たちの自由。あなたたちには関係ありません」

「それなら、僕と勝負をして勝ったら放してください！」

「フフ…フハハ……。私と一騎打ちですか？面白い……。負ければあなたの命もいただきますよ？」

「覚悟！『エクスプロード』（大爆発）」

「ほう、炎の上級魔法か短い詠唱時間でこの魔法を出すことが出来るなんてなかなか……。『アブソリュートゼロ』（絶対零度)」

丸い大爆発を起こした炎をまるで、包み込むようにしてカチカチに固まらせた……

それは何かのアートのように綺麗なもので詠唱時間は口を少し動かした程度

「氷属性の超級魔法……………（こんな奴に勝てるはずがない……………）」

トルツは絶句した。自分がどんなに頑張ってもこんな奴に勝てないと……

「どうしましたか？あなたも私によって殺されるのです！『オーバーウェルム！』（打ちのめす）」

「トルツ！逃げろっ！！！」

ギフエアが叫ぶがトルツには全く聞こえていない

「一体どうすれば……………」

俺は考えた……。しかし、ミヴィのいない今じゃ何も……

（お前はそんなにも弱いやつだったのか？）

ミヴィ？……じゃない……誰なんだ……

（そんなやつが俺の子だったとはな……）

父さん……いや、違う。俺の父さんとは少し声が違うような……

（仲間が死にそうになっているというのに指を咥えて見ているというのか……）

俺にはどうしようも出来ない……俺には……

（そうか……。目覚めよ！『ソリドウスポテンシャル』（究極なる潜在力）

「っ！？……うぐっ……ぐぐ……がはっ！かはっ……」

「どうした！？ブレイク？」

「き、急に体が……熱い……熱いつ！」

そういつて胸を押さえながら俺は地面に倒れた……

体全体が火傷を負ったように熱かった

「こつちを先にとどめを刺した方が効率が良さそうですね『ウイケツドインパルス』（邪悪に纏う電撃）

「ブレイクっ！！大変だ、みんな！援護をー！！」

「もう遅いっ！……あなたもこれでおしまいですっ」

「クククッ…… それはどうか？」

「なにだと？」

ブレイクは手をぶらぶらさせて床から立ち上がった。  
まるで墓から這い出てきたゾンビのように

「ブレイク？」

もはやブレイクには何も聞こえなかった。

「我。闇に生きるものなり！」

そう言いを片手を前に出すとブレイクの目の前でウィケットインパ  
ルスがいとも簡単に打ち消された。  
それも詠唱時間は皆無……

「なにつ!？」

「光とは苦痛を与えるものなり!」

光の柱をいくつも構築してさらに呪文は続く

「闇とは我を強くさせ、相手に大いなる光よ降りそそげ!」

ブレイクの背中から赤いラインが入った紫色の翼を生やし、地面に魔法陣を作り上げた。

「これは!?!?・・・破壊・苦痛・野望・絶望・悲劇・悪夢・憤怒・終焉のスペルで作りに上げた魔法陣・・・。一体どういう事だ?」

「相手に苦痛を!『レイディアントホーリーエンジェル』（光輝く聖なる天使）」

目が眩むような光を見せられて、もはや視界は真っ白で何も見えなかった

「リ、『リジェクトオオオオ！』」（排除）

「ふん……そんな魔法、私の作り上げた魔法に比べれば雲泥の差。消えろっ……！」

リジェクトはただの紙切れのように破れ消えた……

「こ、この私が……こんな奴らに負ける……だ……と？考えられない。考えられない！！どうせ死ぬなら……！！」

「……弱いな。我に勝てる者などこの世に存在するのだろうか……」

その言葉をはくと何かが抜け去ったようにブレイクは、ふっと倒れる。

「ブ、ブレイク！？大丈夫か！？死ぬんじゃないぞ？死んでしまつたら姫様にどう話せばいいのやら、私は、顔をお見せすることも出来なくなってしまうのだぞ！？」

「大丈夫です。落ち着いてください、ギフェアさん。一時的な膨大な魔力使用の為、意識が途切れているだけです」

冷静なゼナスの対応でなんとか落ち着きを取り戻すギフェア

「という事は死んでないんだな？」

「そうです。安心してください」

(……………くっ……………アイツだけは……………アイツを倒せば……………騎士団を2人狩った……………ことに……………じ、自爆……………魔法……………『デス』  
(相手に絶対なる死を))

そういつてエルエスは死神を召喚したことによって息絶えた……………  
その息絶えたエルエスを遠くから眺める少女

「まったく。死んだら騎士団いくら殺しても意味無いじゃない、生きていればそれなりの褒美もくれただろうに、バカねえ……………。まあ、ブレイクは生きてるみたいだし何の問題も無いわね」

「ウエズペス！大丈夫ですか？」

「わたしなら大丈夫よん！それよりみんな無事かしら？」

「そうだね。みんな無事……の……よう……… テペバロク？」

視線を向けた先には体をあちこち刻み込まれたテペバロクだった。  
アイナはアイナの着ている服をそつとテペバロクにかけて手を合  
せていた。

「ウエズペスさん……」

トルツはそう言いながらウエズペスに向きかえると後ろから  
死神がウエズペスを鎌で切ろうとしていた。

「っ！？危ないっ！！！！」

とっさの判断でウエズペスにショルダーアタックをかまして吹き飛  
ばした。

「とっ！トルツ君っ！！」

「……あなたに会えて本当にうれしかったです。……僕、強くなれましたか……？」

イスナル城・ウエズペスの部屋

タッタッタッ！

「ウエズペス隊長！城門前で人が倒れています」

「っ！なんだって？助けに行かないとっ！」

「これは倒れている人が持っていた物です」

「……入団手続き？」

「どうやらそのようです。こんな時期に入団するとは珍しいものですね」

「確かに……ちょっと珍しいよな」

「あーあそこです。」

目の前にはボロボロになった服を着ていた少年だった  
そして、なぜかその子にこの俺が恋心を抱いてしまった……

「可愛い……」

「……ど、どうなさったんですか？ ウエズペス隊長？」

「ん？ ああ……なんでもない、とにかく治療室へ運ばないと」

## イスナル城・治療室

「……………ここは？」

「目覚めたか？ 調子はどうだ？」

「は、はい。どこも痛くありませんし大丈夫なようです」

「ならよかった。ところで何であんなところで……………」

そう言うと、あ！と飛び起きてポケットを確認する。

「ん！？ 無い……………無いっ！ 入団手続きが無い！」

「お、落ち着いて、君が持っていた物はこれ？」

そういつて一枚の紙を見せる

「あつ。はい、これです。ありがとうございます」

……トクン！

その笑顔は私の心奪っていった……  
まさか、こんなことになるなんて

「そ、それで、なんでここに入団を？」

「小さい頃から、イスナル城での騎士団員さんたちがやっている練習風景を見ていたんです、みなさんのカッコいい姿を見ていたらどうしても入団したいと思いました。」

「それにしてもなんでさつきはあんなにボロボロで……」

「ああ……それですか。僕、昔からいじめられっ子で、いつも周りからいろいろ言われてたんです。父のことや母のこと、妹のことも、借金をしてるのがバレてそれを毎回のよう……。」

顔をうつむいて話す姿に耐え切れなくなり止めようとしたのだが

「だつ、だから、必ず強くなつて！家族みんなを守れるくらい強くなつて！将来は養えるくらい稼いで、あいつらに馬鹿にされないくらいの人材になつて　　っ！」

俺はその子を抱きしめていた……

今は、好きだからとかいう感情は一切なく。ただ、俺と同じ人生を歩んでいたから共感できた。

「そうか、ここに入団すれば必ず強くなる。必ず。保証しよう！」

「本当ですか！？」

「本当だとも、さあ、元気出して！これから毎日特訓だからな！」

「はいっ……！よろしくお願いしますっ……！」

ほんの数秒の出来事だった……  
死神の鎌は体を切らずに通り返け、トルツの心臓だけを狙い、体から抜き取った。

ドクンっ……ドクンっ……

死神はその心臓を丸呑みした。

ゴクリっ……

「と、トルツ君？」

出血はどこも見られなく、その顔は悔い無く微笑んでいた………

「お、起きて！何寝てるのよん。どうせ……そうやって脅かすんでしょ？」

そんな事を言わなくてもウエズペスには分かっていた。  
生き返ることなんて絶対にないと………  
それでも、少しでも可能性を信じて体を何回も揺さぶった。

「本当に、強くなったわね……。こんな私を守れるなんて」

仲間を二度と殺してはならないと誓ったのにこんな事態を招いてしまった

最初はみんなで仲良くやってたのに。何故……。

あいつらの計画も残り3人になってしまった

計画を止めるためにも……計画！？

忘れてた！と思った時には遅かった……………

プシュ~~~~

そんな音を立てながら怪しい煙が四方八方から迫る

「なんだこれは！ごぼっごぼっ……………」

「みんな。気をつけろ」

そう、ルイセスが言ったときにはもう遅かった

「かはっ！」

「な・・なんだこれは……体から……ち……力が……」

「こ、これは……魔力……が、抜き取られています」

「魔法……破……壊……計画……なの……か」

ドサドサッ！

その嫌な空気が消え去った後、しばらく全員がその場で倒れていた。

## 第十五章

### 魔法破壊計画の阻止

#### 後篇（後書き）

魔法破壊計画は失敗？成功？  
はたしてブレイクたちは……

## 第十六章

### 悲しみを乗り越えて

（前書き）

ブレイクはこの世界には絶対にない物を発見した  
そしてそれはどういう意味を表すのか……

## 第十六章

悲しみを乗り越えて

「……ここは？」

目が覚めた場所は天超地だった

「俺……また、死んだのか？」

死ぬ前の記憶が無い……

確か誰だか分からないテレパシーが問いかけてきて……  
うーん……その先が思い出せない。

「あら。ブレイクじゃない……ん？」

「どうした？」

キルティは俺をじっと見たまま固まっていた。

「俺の顔になんかついてるか？」

「ブレイク。あなた、死んでここに來たわけじゃないわね？」

「俺が死んでない？」

「そう、体の色が通常より全然濃いし、あっちの世界でなんかあつ

たの？」

「分からない……記憶が無いんだ……………」

どうやつても思い出せない

その記憶だけを切り取られたような感じだ……

「なあんだ。コーチできると思ったのに……………」

「あはは。キルティはスパルタだからなあ……………」

「うふふ……………そういえば、ブレイクの世界は大変なことになって  
いるわね」

「俺の世界？日本の事か？」

「あ、ごめんごめん……………パロバツセのことよ。私はこっちで定着し  
てるから……………ついね」

「そうか……………。日本は今更戻れないし、関係無いか。んで、何が起  
こってるんだ？」

「凶悪な何かの力が働いているのよ、詳しいことは分からないけどとりあえず注意して」

「分かった。ありがとな」

「んじゃ、また頑張ってきてね」

「おう！………どうやって戻るんだ？」

「その状態なら目を閉じるだけで大丈夫かな？」

「了解！」

「あ！ 待つ       ！」

キルティがそう言った時には目の前から俺の姿は消えていた。

そして俺は天超地からパロバッセへと戻っていった

どのくらい気を失っていたらろうか……………  
夢を見た感じがするんだが、あまり覚えていない……

俺が目を覚ました時にはギフェアはすでにそこら辺を探索していた。  
そしてあるものを見つけた

「これはなんだ？」

ギフェアがとつたものは一枚の紙だった

「うーん……………なんて読んだらいいのかさっぱり分からない」

ブレイクなら分かるのでは？と判断したギフェアはそれを俺のところにまで持ってきた

「お！起きたか。早速だがブレイクはこのぐちゃぐちゃした字が読めるか？」

分かりましたと受け取りそれを見た瞬間にびっくりした。

「っ！？」

それは名刺だった。しかし、意図的のように消された文字と顔写真。読めたのは名刺の説明やらあまり関係ないものだったが……

「竜崎幸次……？」

名前だけは残してあった……

この世界に来たのは俺だけじゃなかったってことが……  
一体誰なんだ。

「ブレイク？読めたか？」

「分かりましたよ。この人は俺と同じ世界に住んでいた人です」

「ブレイクがいた……？日本というところか？」

「そうです。しかし、一体誰なんかが全く分かりません……誰かに  
よって意図的に大切な情報が消されています」

「そうか、それは残念だ。なにか大事なことが書かれていたかもし  
れないのにな……」

「そうですね」

でも、俺以外にこの世界に来た人が居たというのは知っておいた方  
がいい情報だよな？

「今回は2人の犠牲を出してしまった。俺の親友も命を落とすとい  
うことになってしまって、結果も失敗に終わってしまった。魔法も  
このように出すことが出来ない」

そういつて炎のスペルを唱えても少したりとも燃えることは無かった

「これでは魔法も使い物にならない……」

「この先どうなるのでしょうか……」

「いったん、基地に戻るしかないでしょ！」

そう言ってきたのはとても元気そうなアイナだった

「あ……あのう。大丈夫ですか？」

「ん？ 心配してくれたの？ありがとね。私は大丈夫よ。大体、いつまでも悲しんでたらテペバロクも困るでしょ？」

騎士団のリーダーが命を落とすことは

アイナさんが次にこの騎士団を支えていくことになるのか

「そうですね。」

「そうよん！私も、いつまでもクヨクヨしてたら怒られちゃうわよね。空の上まで行ってまでも心配はかけられないわ」

みんな。強いんだな……

「んじゃ、ここを一気に脱出するか」

ギフエアは魔法を唱えた。

「『オールエスケープ』（範囲内脱出）」

.....？

「？？？」

「.....？ あ！魔法、使えないんだっけ？」

「どうしたんですかギフエアさん？」

「そうだった。私としたことが.....」

そういつて頭を押さえるギフェア……  
今さっき、魔法が使えないからどうするかとか、悩んでなかったっけ？

……天然か？

「でも、どうやって脱出すれば……」

確かに。なんか持つて無かったかな？  
つて持つてるはず無いよなあ　　ん！？

コツツ！

「ん？……なんだ？この箱」

開けた箱にはシオラ石の形によく似た石がたくさん入っていた。

「ギフェアさん。この石でなんとかできませんかね？」

これが、普通の石ところなら馬鹿げてる話だが、これはきつと使えるはず……

だってこんなにキラキラして綺麗だから！  
って言ってもただそれだけだが……

「こ！これは！？シオラ石じゃないか！……しかも、レアものばかり……」

周りにいた騎士団全員がギフェアの周りに集まった

「本当だ！こんな色初めて見たぞ」

「聞いたことがある。シオラ石には緑の他に赤・青・黄・白・黒・紫・銀・金・透明の色のついた石があつて、魔力がいつしか無くなつたとしてもこの石を使えば魔法を発動できるという話だつたのだが、本当にあつたとは……」

はあー。そんな話が合つたんだ……

なんだか知らないけど、俺、かなりすごい物持ってたんだな……

でもいつ貰つたんだっけ……

「しかし、使い方が分からない……」

ギフェアが頭の中の引き出しを猛烈に開け閉めしたが見つからなか

った……

「うる覚えかもしれませんが、扱い方を本で見たことがあります。」

「それは本当か!？」

さすがはゼナスさん。こういう冷静でクールな女の人ってこういうことに詳しいよな

「はい、とりあえずやってみます」

シオラ石を1つ1つ手に取り記憶をたどる……

「脱出系魔法は銀色のシオラ石ですね。そしてこれを……」

誰か、ペンを持っていますか?と聞いたところルイセスが貸してくれた。

そして地面に騎士団全員を囲むように星を書き中心に石をおいた。

「これで準備完了です。移動系の魔法陣はこれでいいはず」

「それで、どうするんだ？」

魔法陣の中であぐらを組みながら座るドンハスが訊く

「中心。石に向かって、なんでもいいので自分の持ち物を投げて下さい。そうすると発動するはずです。」

ドンハス以外、身近にある武器をみんな持った。  
ちなみにドンハスは靴

「じゃあ、いきますよ！1・2・3で投げますから」

せーのっ！とゼナスが掛け声をかけ

全員で1・2・3を言った

「1・2・3！」

ドンハスは上投げでぶち込んだ、他のみんなは慎重に下投げ  
そうして中心部に集まった瞬間、騎士団全員が姿を消した

最初にいた場所に戻ってきたみんなは目の前から飛んでくる武器を寸前で避けた。

「おわっ!!」

「つぶね!!」

しかし、スピードの関係で死なずにすんだ。

ん？俺は飛んでこないぞ？って浮いてる……

さすがは意思のある剣だな。ありがとな。ミヴィ

（いえいえ、私があなたを傷つけるようなことは一切ありませんのでご心配なく）

「お？戻ってきたか、どうした？洞窟では一切話しかけてこなかったが」

（テレパシー妨害の関係で話しかけても通じなかったみたいです）

「やっぱりそうだったか、まあ、またこうして話せてよかったよ」

周りを見て人数を数えると…… 一人足りない

と、おもったらドンハスがワープしてきた

「ふう〜。なんとか脱出成……がはっ！！」

猛スピードで飛んできた靴によってドンハスは顔面を強打した。

「った！何しやがる……てみんな地面に倒れてどうした？」

「すいませんみなさん。まさか、こんな返し方になるとは……」

「いやいや、いって、ワープしてきた瞬間に自分の武器で死にそうになったけど、外に出れたことがなによりだ。感謝してるよ」

少し皮肉が混ざっているようにも聞こえるが  
確かにそうだ。もし、ゼナスさんが使い方を知らなかったら  
今頃、あの洞窟内をさまよってたところだろう……

「あゝそれにしても帰りが大変だな……何キロだっけ？ 相当歩く……  
いやシオラ石を使えば！」「残念ながら、銀・金・透明のシオラ石  
は1度の使用で1日は使えなくなってしまう……んなっ！」

そのあとの俺はあまりにも良すぎる思いつきのせいで激しく落胆したのであった。

## S Z A K 特別基地

「ただ今戻りました」

「おお！ 帰りが遅いから心配したのだぞ」

迎えてくれたのはダケストル老師だった

「はっ！申し訳ございません」

「いやいや構わん。結果報告をしてくれ」

みんながみんなの顔を合わせる……………

「はっ。結果は失敗に終わってしまいました。犠牲者は2名テペバ  
ロク・ウオラツツエ・トルツ・イオナンテです……………」

「……………そうか、戦いにそういうのはつきものだ」

ダケストル老師はただ、そう言うだけだった。

SZAK特別基地を出る前に老師から慰めの言葉と今回の報酬を  
いただいたが、それ以上話すことは無かった。

その後、各地方の墓で勇敢な2名騎士団を埋葬をし、深い祈りをさ  
げたのであった……………

138年7月24日

テペバロク・ウオラツツエ、トルツ・イオナンテ  
この2名は勇敢に戦いを挑んだ勇氣ある者、今ここに眠る  
どうか、安らかに眠って下さい

## アルタンテ地方・キャラル

俺はポケットに入れた名刺を取り出す

「一体誰なんだ？竜崎幸次って……」

魔人が持っていたこの世界には絶対にない物  
なぜそんなものを持っていたのか？

どこで手に入れたのか？

本人は今どこにいるのか？

次々に浮かび上がる疑問に頭を悩ませながらアルタンテ地方を後に  
した……



## 第十六章

悲しみを乗り越えて

(後書き)

次回は新キャラ登場です(姫)

ちなみに場所は、ジェキア地方のガルヘント城というところ

そしてブレイクの周りでなにか不穏な雰囲気が……

はたしてブレイクの運命は(笑)

EX?

快樂（前書き）

本編の前にEXがありました

EX？

快樂

魔王城・王部屋

昨日……

「ククククッ……。クハハハハハッ！」

「ギーヴァ様どうなされましたか？」

「殺すとは、自ら殺すのも楽しいが、見てるのも楽しいものだな！」

「そうですね。私も同じです」

基地に仕掛けてあつた監視カメラを通じて王部屋で見ていた二人であつた。

「お前と趣味が同じことは嫌なことだが、それを上回るくらい楽しい……ククッ！」

「そ、そんなあ……」

「まあよい。楽しさは分かち合うものだからな！ツアツエ！アメル  
ークを入れてきてくれ！今日は気分がとってもいいぞ！」

「は！はい！お待ち下さいっ！直ぐにお持ちいたします！」

駆け足でツアツエは部屋から出て行った。

「……………しかし意外な展開になったな。まさかあいつの「ギーヴ  
ア様！他に欲しい物とがありますか？」……………特に無い。大丈夫だ」

独り言を呟くギーヴアの部屋にノックを忘れて思いっきり扉を開け  
た。

「……………？ 了解……………しました」

「もし、そうならこれは使えそうだな……………」

了解という言葉は聞こえていないようだった

ノックを忘れて入ったのに怒られなかった……  
そんなことなんて今までで一度も無かったのに。

なぜ……………。

「しかし、なんて気分がいいんだ。ギーヴァ様が、ああ元気だところ  
ちかも元気が出てくる。」

今回怒られなかったのもギーヴァ様の機嫌が宜しいからだと解釈する  
そう言って鼻歌を歌いながらコップを用意してアメルークを取り出  
す。

「今日はっ！お祭り はっは！お祭り お祭り ルルルラ〜」

ある程度歌ったところであることに気づく……

あれ？そういえば、アメルークってどうやって作るんだっけ！……………

その後、必死の思いでエルウェールを探したツァツェだった

EX?

快樂（後書き）

引き続き十七章をご覧ください

今度こそ新キャラ登場です

## 第十七章

### ガルヘント城のお姫様（前書き）

個性的なキャラが次々と……

現実にはこんなわかりやすいほどタイプが違うなんてことありませ  
んよね

## 第十七章 ガルヘント城のお姫様

### ガダルナ地方・ハゼール樹林

「それにしても、遠いですね……」

アルタンテ地方から現在いる場所まで、約2時間ほどかかったワープ用のシオラ石は使えず。シーズウーもシオラ石の関係で使えず……

正直な話。丸一日は寝ていない。そろそろ体の限界が近づいている。ああ、早くベッドに入りたい。

「そうだな。ハゼール樹林を抜ければヴェセア城は見えてくるはずだが」

そう言っただけ歩いていくと木に異様にでかい実が生っていた。なんか美味そうに見えたのだが

「ギフェアさん。これはかなりおおきいのでは？」

「確かに、なんという実だろうな」

その時、その実がガサゴソと動き出した

「うわっ！なんか動き出しましたよ」

「気味が悪いな……採るのはやめておこつ」

俺たちはそのままその実の生った木を素通りしようとした

「こ、この私を無視するつもりかっ！！」

実が喋った――！！

「すみません。あなたは？」

ギフェアが申し訳なさそうに話しかける

てか、なにかと問題ありありな奴と話なんかすると、厄介事が……

「私の名はシルクシャシャ・ユイナール。ガルヘント城の姫じゃ」

ガルヘント城？どこだかさっぱりだな……

って！姫様！？厄介事の塊だぁ……

だいたい姫様が木に引っ掛かってること自体がおかしい。

そしてギフェアさんは何に反応したのか謝りだした。

「申し訳ございませんでしたっ！私はギフェア城のギフェアと申しますアイシエス・ティーナ姫、側近の者です。」

と言い。即、引っかかっていた姫を降ろした

その姫は真っ赤なドレスを着ていて

髪まで赤色だったため何かの実と勘違いしていた

背の高さとかアイシエス姫くらいかな……

偉そうに胸とか張ってるけど本当に関わってよかったのかどうなのかなんかめんどろなことになるそうだ

こうして俺の睡眠時間は無くなっていくなぁ……

「ギフェアさん、そこまでしなくても？」

「姫様とあれば、これくら礼儀だろ？」

そうか、まあ、確かにそうだな

「すみません、俺はブレイ」ちょっとまってくれないか!!」……  
へ?」

さっきまで胸を張っていた姫は俺の顔をまじまじと見つめながら目を見開く

「黒い目を持つお主は、ブレイクという者か?」

「はあ、俺は確かにブレイクですが……」

そついうといきなり駆け寄ってきた

「話は聞いておる。うゝむ……思ったよりかっこいいではないか」

話は聞いている?

誰から……?

「誰から俺について話を?」

話を聞くと、どうやらシルクシャシャ・ユイナーレ姫は（名前長え

（ ）ガダルナ地方の中で位置的にこことは反対側のウィーオという町で迷子になっている所を、買い物中のミーレが助けてくれたらしく、その後、ミーレの家でご飯をご馳走してもらったところ、俺についての話題になり（なぜ？）、あとであった時に自分一人でもわかるようにと特徴やらなんやら聞いたらしい……

「ミーレのやつか……」

家に帰ったらずは、お説教だな

「とにかくお主の強さは凄いということだと聞いたのじゃ」

そして姫様が手を差し伸べてきた。  
握手か……と手を握ると

「うわっ!？」

思いつきり手を掴んだまま引つ張ってきて姫様との距離は拳1個分くらい

「そ、そのだな……私と、っ、付き合ってはくれないか？」

い、いいいきなりッスか！！？  
そして、俺の後ろで殺気立った物凄いオーラを発している人物がいる……

「分かってるな？ブレイク……」

は、はい、もちろんですとも

「なぜ、そんなに逃げようとするのじゃ？照れているのか？私だ  
ってかなり恥ずかしいんじゃないぞ」

わずかだが頬を染めて顔をそむけている

しかしだ……

こんなに手が細くか弱そうなのに  
……手が離れない。なんていう力だ……  
とても女の子の力とは思えない……

「いい男が居た時、逃げられないようにと父から剛腕の腕輪をもらっておいでよかった」

おおー。なんと恐ろしい……

その腕輪を腕を掴む以外の目的で利用してきたら、もはや女だからなあ。とかで、喧嘩とか手加減できねえ……

「ではでは、付き合っのが駄目なら……け、結婚でどうだ？」

えーっと。それ、付き合う事よりレベルが高いですよ？どこをどう考え直せばそんな結果に辿り着くんだし……

「無理ですって！そんなことしたらアイシエス姫になんて言われるか……」

俺は必死に否定した。

「……んなっ！そんな姫なんぞにお主を渡さぬからなっ！」

意味わかんねえよ！

「渡さぬからなつて、どの立場からその言葉を  
っ！？」

「姫だからじゃ」

その言葉の先は離せなかった。□がふさがれたからだ……

□が……□で……□？……□でっ！？！？

ま、まさかファーストキスが……。あはははあゝ  
乾いた笑い声しかでない

「ブレイク！そんなところを姫様なんかに見られていたとしたら……」

フラグ。スタンドアップ！！  
もはや嫌な予感しかない……

ゴトっ！……………

「ブ、ブレイクさん？」

そこには持っていたリングを落とすアイシエス姫がいた……

ほらね。こっつなんだよ……あはははは。  
はあ。マジないわ  
あ……

どろろよこの修羅場……

第十七章 ガルヘント城のお姫様（後書き）

次回、アイシエス姫がキレます。（笑）

## 第十八章 二股？いえいえ勘違いです。

ガダルナ地方・ハセル樹林

「ブ、ブレイク……さん？」

てかさあ、何故にリンゴ？……

それは置いといて、そういう言葉はこういう場面で絶対に発してはいけないってのに

映画やらドラマやらアニメやら、フラグとは立ったら最後、必ず叶う究極の旗

「いや……こ、これはですね。じ、事故だ、これは事故なんだ」

俺は必死に否定した。

「手を繋ぎ合っ たまま接吻ということを事故と言つのですか……」

右手を見ると強く握っていた……いやっ！握られている。  
断じて俺は悪く無い！俺の右手は無抵抗のあまり、強く握られ過ぎ  
て血が止まっている……

ああ〜だんだん紫色に……

「シルクシャシャ姫もなんとか言ってくれませんか？」

心の底からどうにかしてほしいという雰囲気をガンガン出した  
さつきからギフェアの視線も痛いし  
ここは事の発端シルクシャシャ姫に全てを話してもらえば、どうに  
かなると思った

「うむ。そうだな……。そのアイシエスとやら、  
私とブレイクは結婚することになった。だから、もう私たちとは関  
わらないでほしい」

この嘘つき姫がぁー！！！！  
んだから！ いつの間に結婚することになったんだよっ！

「アイシエス姫、違うんだ。こいつとはさつき知り合ったばかりで  
」

「わ、私よりも短い付き合いの人と接吻するなんて……そういうお人だったんですね」

目元がきらきらと光り始める。

と、同時に目の色が変わりつつあるアイシエス姫

「違う。違うって！俺は……俺はっ！！」

「ですが、私はそんなブレイクさんでも御構い無しですわ！」

ええ~~~~~~~~！

いいのかよっ！！??

「そこにいる見知らぬ少女をこの場から抹消して下さい！」『デリート！』（抹消）」

おお。可愛い顔して凄い魔法を……………

「あれは時空系魔法のトップクラスを誇る魔法だな」

ギフエアが冷静に判断する

嘘だろ！？どんだけレベル高えんだよ……  
でも。魔法はねえ……

「……………ん？なににも起こらんが？」

シルクシャシャ姫は自分の身に何も起きないことに疑問を感じた

「ふえ？なんでですか？なぜ魔法が使えないのですか？……ギフェ  
ア？」

「あ………そ、その件については後程……………」

頭をぼりぼり掻きながら目をそらす

「ううゝ……………そ、それならっ！」

と言い、俺に向かって精一杯の体当たりをしてきた。

俺を倒そうとしたつもりだろうけど俺は一步後ろに下がる程度だった

「イタッ！　なんでですか？なんでですか？私とは…………グスン。

もう嫌になったんですか？グスン……キライになったのですか？グスン……」

涙で俺の服を濡らすアイシエス姫

「そんな訳ないって！このことについては後でじっくり話すから。とにかく俺は、アイシエス姫が1番」

「私がいちばん？」

「……………1番好きなんだっ！！」

「……………ギフェア。……………わ、私。  
ブレイクさんに愛の言葉を貰ってしまいました！！」

ギフェアは姫様に向かって親指を立てていたが

俺はこの発言によりのちに大変なことになるのであった……

「お、お主。ブレイクは私と付き合うといったではないかっ」

「いやいや、一言も言っていないから、付き合っの『っ』の字も言っていないから」

「うぬぬぬうゝ。か、必ず私と結婚してもらっからな」

だから、結婚ってなんだよ……………

「見ておれ、あんな手やこんな手を使っても必ずうゝゝ」

そう言いながら走り去ってしまった。  
なんか変わってるやつだな……

「とりあえず、城に戻りましょうか……………」

「そうだな」

## ギフエア城

「や～～っ とついたあ～～」

早く自室に戻って寝たい……

「ブレイクは結構な長旅で疲れたろ？ ゆっくり休んでこい」

「そうですね。 ゆっくり休んできて下さい。 の、後程お話をお聞かせくださいね」

「ありがとうございます。 そうだな、あとで話すよ。 それでは」

いろいろな事が起こりすぎて体は既に限界を超えていた

ガチャ……

ベッドはすぐそこだ

「よっしゃあ〜」

こんなにゆつくりできるのは何日ぶりだろうか……  
今日はゆつくり休むぞ

「お前は結構無防備なんじゃな」

「うわっ!」

ベッドの下に誰がいる……

「なにもそんなに驚かんでもよかろうに」

なぜシルクシャシャがここに!?

「ええっ!?!さっき城に帰ったばかりかだろ?」

「本当はそうするつもりじゃったが、どうしてもな」

ごろごろ転がりながらベッドの下から出てきた

「『どうしてもな』んじゃないだろ!! しかもどうやってここまで来た!？」

「そんなに怒らんでもいいじゃろ? さあさ、アイシエス姫とやらもないことだし……」

と言い、体を寄せてくる

「な、何を考えている……?」

「誓いのキ」んなもんするかぁー!!」……即答とは何事じゃ?」

「『何事じゃ』だって? 嘘つき姫は黙ってる」

「ひ、姫に向かってそんな口をたたくとは!……いや、いついつのもなかなか……」

一瞬頭に血が上ったように見えたが変な目つきで笑みをこぼした

「M体質とか言っつなよ？それよりかさあ、早く出て行ってくれないか？」

「なぜじゃ？ここは居心地が良いことだし、しばらく居ようと決めているのに」

「お前が決めることじゃないだろってんだよ！」

「それよりか……じゃ」

何故か知らないが抱き着いてきた

「こんなところを姫様なんかに見られたらどう反応するかのう？」

コンコンッ！

「ブレイクさん？いますか？話したいことがあるんですけど………？」

こ、こいつもフラグ立てやがった……！  
くそっ！なんなんだよ……

例の腕輪によって手を動かすこともできないし……  
ん？でも黙ってれば、いないと思って居なくなるんじゃない？

「なんじゃ？話したいことは？」

あははっ。こうやって殺意は芽生えるんだね……  
初めて女の子を捻り潰してやるうかと思った  
こいつがいる限り俺が黙っても意味は無いな

「だっ！？誰ですかあなたは！！？」

アイシエス姫の仰天した声が聞こえてくる  
まあ、そりゃそうだろうけど……

「ええーつとじゃな、先程のシルクシャシャじゃ」

ドア越しで話し合う二人……。と被害者一名

「なっ！なぜあなたがここにいますか？」

シルクシャシャの顔はにんまりとしていた

「それはじゃな……ブレむごむご、んまごまごっ（何をするっ！）」

「少し黙ってろ」

俺は、耳元で静かに囁いた

「……………」

お？意外に大人しくなるもんだな……

「ん？他に誰かいるのですか？」

「……………」

「誰かいるのなら返事を」

「……………」

「あれ？……………」

「……………」

「わ、私……少し疲れているのかもしれませんが……………」  
「先ほどのあの人が、まさか居るはずが無いですし。」

そう言ってその場から立ち去って行った。

「ふう〜。あぶねえあぶねえ。お前もよく黙ってたな？」

「……………」

「おい？どうした？」

「……………」

「なんか変だぞ？黙り込んで……………」

顔を覗き込むと顔全体が真っ赤になっていて、今にも湯気が上がりそうだった  
体がフラフラと立っているのも大変そうである

「大丈夫か！？熱でもあるのか？」

「……………熱……………ではありません」

ではありません？……………ん？言葉使いおかしくないか？  
あきらかにいつもと雰囲気違った  
あの偉そうな態度は一体どこに……………

「と、とりあえず、俺のベッドでしばらく横になってろよ」

「す、すみません。ありがとうございます」

なんか気味が悪い……………  
大人しくなってくれたのは良いけど、なんかペース狂う……………

「とりあえず、なんか飲み物でも持ってくるからここにいろよ」

そういつて、俺は部屋から出た……………

しかし、その後、部屋に戻るとそこには誰もいなく、窓が開けられていて、カーテンが揺れていた

そして一枚の羽根

.....羽？

一体どういう事なのか.....

ヴェセア城・聖なる騎士団部屋

ブレイクがシルクシャシャに食べ物を探しているその頃  
ギフェアはちょっとした異変に気付いた……

「そういえば、どこにいても騎士団の連中がいないぞ」

主要メンバー9人誰一人としていなかった。

ハドルドウの討伐にしては時間がかかり過ぎだ……

「どこで道草くってんだか……」

396

ステンドグラス越しに綺麗な月が見えた  
その月の明かりで絵の輝きも増していた。  
それをゆっくり眺めた後、ギフェアは部屋を後にした……

ハッキリ言ってこの時はまだ、事の重大さを全く分かっていなかった

この時はまだ……



## 第十八章

二股？いえいえ勘違いです。

（後書き）

次回は地理授業を予定しています。

S  
P

キルティ先生による地理授業3

(世界地図) (前書き)

新しい地方・国の紹介など  
世界はまだまだ広がった……

S P

キルティ先生による地理授業3 (世界地図)

天超地・ファースト学校

ゴーン！・・・ゴーン！・・・ゴーン！・・・

ガラガラガラガラッ！

「こんにちはー お久しぶりですね。天超地での生活も大変で大変で……

上層部の人たちは私たち新人をパシリにするし、めんどくさい仕事は押し付けるし……

って、話が脱線しましたね。えっと。今日、お話することは、今更ですが、実はあの世界地図、ほんの一握りにしか過ぎないのです。パロバッセと言う世界はとてつもなく広いんですよ。と言うことで、そろそろブレイクたちの裏で行動を開始する者たちも増えてくるというわけなので、新しい地方の紹介がありますよ」

・今まで紹介した9つの地域と国名

「これも今更ですが、9つの地域を合わせてエクシア国と言います。

緑色で塗られた場所ですね。薄すぎて見えないと思いますが……。そこらへんは気合いで（笑）」

・必見！新しい地方・国などなど

「ということですが、下の方に新しい世界地図載せておきますんで後で見てくださいね」

・今回紹介する地方は4つ、国は2つ

「さて、この広い世界で新たにわかることになる地方を4つ紹介したいと思います。

まずはアムスタル地方。アムスタル地方はキュリオテス国にありキュリオテス国は外側に行くほど治安が悪い事とのそうよ。真ん中に行くほど裕福な人が暮らしてるらしいわ。宝石ジャラジャラつ

けたような人が沢山いそうね……。一方、ロミ地方・ムスラム地方・ヘゼラル地方はデユナメイス国にありデユナメイス国自体が魔法に特化した国なので魔法のみで生活を行ってる光景が見行けられます」

・国と国の間の行き来はどうなってるの？

「はい、このことについてですが、

国と国の間には高く険しい山が邪魔をして簡単には超えることは出来ません。

もちろん超えようとした人もいますが、その後一度も見てませんからねえ……。

でも、一力所だけ移動可能な場所が存在しててね。

そこを通るにはいろいろと手続きが必要だったりもするけど、それだけ済ませば普通にとおることが出来ちゃいます。

特に料金もかからないから移動に関しては

ムダ金を使わなくて済んじゃうのよ。どう？分かりやすかった？」

今日のまとめ

・エクスシア国（緑） ・ 【剣と魔法の国】

ガダルナ地方・アルタンテ地方・サフェン地方・マロハス地方

ボルテキア地方・ジエキア地方・ラズルト地方・フェオルト地方

・キュリオテス国（赤）・ 【強者豪者の国】  
アムスタル地方

・デユナメイス国（黄）・ 【完全魔法国】  
ロミ地方・ムスラム地方・ヘゼラル地方

「地図見て分かるようにまだまだ知らない地方や国はたくさんあるのよ

もつと沢山の地方を教えることも出来なくもないけど

話に関わるのが近くなったてから話した方がいいわよね？

では、今回も少ないですがキルティの地理授業終わりにしたい  
と思います。

バイバーイ」

> i 1 2 9 5 9 — 1 7 2 5 <



S  
P

キルティ先生による地理授業3

(世界地図)

(後書き)

次回、ヘンテコチームの結成です。

## 第十九章 チーム結成（前書き）

少しずつ動き出す世界……

## 第十九章

### チーム結成

「よし。作戦は順調だ」

ここはキュリオテス国のアムスタル地方……

仲間のサインを受け取りホツとする闇に潜む人影が1つ、アムスタル地方とマロハス地方を繋ぐ関門への突破を試みていた。現在、見張り兵は2人程確認済み。アイツらの始末はユーマとロツチェに任せればいいとして、問題はその後だ、こちらに見張り兵がいるように向こう側にも、もちろん兵は居るはずだ、当然策はあるのだが、上手くいかなければ大変なことになる。不法侵入による行為で処刑されるだろう、しかし処刑と言うのはキュリオテス国でのルール。他の国のことは知らんが上手くいけばどうでもいい。俺たちがこんなことをするにはもちろん理由がある、こんな地方にいつまでも居たらアイツの思いつぼだ。人々の金を奪いに奪ってギャンブルを楽しんでる野郎なんかに渡す金はねえんだよって理由だ。

「アラス。本当に上手くいくんでしょうね？」

俺の後ろにいるユンが話しかけてきた

もちろん100%上手くいく保証は無いが、失敗より成功する確率の方がよっぽど高いと俺は思う

「ああ。大丈夫だ」

「信じるわよ？」

「信じられないんだったら帰ってもいいぞ？」

「そ、そんなことないわよ。もしものことよ。もしも、失敗したらどうするのかなあ〜って思ってたね」

「捕まったら捕まったで、そんな時考える」

「はあ？本気で言ってるの？  
なんでこいつなんかについて来ちゃったんだろ。はあ〜あ」

盛大に溜息を吐く

「ちつ。うるせえな。上手くいけばいいんだよ。上手くいけば。

ってそんなこと言ってる間に突入準備の合図だぞ！」

「ほんとに!？」

ユーマとロツチエのシオラ石の合図により俺たちはマロハス地方突入作戦を開始した。

## ガダルナ地方・ミール家

あのホラ吹き姫の忍び込み事件から2日ほど経った今日、

俺は久しぶりにミーレの家に戻った。

まあ。ミーレにはいろいろ言わなきゃならないこともあるしな。  
あの姫の事とかあの姫の事とかあの姫の事とか……

「おい。ミーレいるかあ」

「あ！ブレイク。あの能力テストの日から、もう2週間経ってるよ？  
帰ってこないからずいぶん大変な事してるんだろうなあーって思っ  
てさ。

体とか大丈夫？」

「ん？ああ……大丈夫。

それよりさ「それでそれで！テスト結果どうだった？」

「テスト結果か……SSSだったな」

「嘘っ！？凄いじゃん！それじゃあ今日は美味しい物を作らないと  
！」

「それは嬉しいな。んでさ「ちょっと料理の材料を買ってこないと  
！」……ミーレ？」

バタバタと扉に向かっていこうとしたので呼び止めた

俺の少し低い声にびくう！？となりながらガチガチとこちらを向く

「ん？……ど、どうかした？」

「数日前くらいにこのくらいの姫様が来なかったか？」

このくらいと言いながら、大体、俺の肩より気持ち下ぐらいを手で表した

「姫様なんかがこんなボロっちい家なんかに来ないでしょ？」

といいながら壁についた埃を手にとってパンパンツとはたくすでに、やべっ……。みたいな表情を隠してるのがバレバレなのだが、あえて知らないふり

「たとえば、その姫様が迷子になっていたとしても？」

「うぐっ……。いや……。それは、ね。迷子になってる子は助けてあげないと」

「その心優しいミーレさんにご質問！  
俺のことについて話しましたね？はい、かYesでお答えください」

「どっ！どっ！どっちも同じじゃない！！」

「その感情の昂りようは凶星かな？」

「なっ！」

言葉に詰まったということは、本当そうだな……  
もちろん最初から分かったことだけど

「まったくミレーは……」

「だってね。姫様がどうしてもいい男を紹介してほしいっていうから  
とりあえず身近な人をつてね……」

「とりあえずつて……」

そんな風に思われてたんだ……

「いやいや！私の仲の良い友達って言ったらブレイクしかないいで  
しょ？」

手をぶんぶん振って必死に否定する様子がなんとも怪しいな……

「いないでしょ？つて、俺に聞かれても困るんだが……」

「私は、神に誓って嘘はついてません！」

「ほんとかよ……」。

ミレーなんて絶対に『神』とか信じなさそうなのにな

俺は、わざと超疑り深い目でミレーを見る

「な！なによ！こんな私でも神様くらい少しは信じてるわよ」

「……少しは？」

気づいた言葉の過ちは必ず拾う主義だ

「んもっ！！超、超、ちょくくっ信じてるんだからっ！」

「あゝはいはい分かりました。」

とりあえず適当に返事だけは返した。

「そういうブレイクはどうなのよー」

「信じてない」

「っ！即答！？……はあゝ。ブレイクには何の幸運も巡ってこないわよ？」

そんな幸運があるなら俺は死んでねえって  
それにその神？いや、女神か……。

ってか本当に女神かどうかも分かんねえし。  
とにかく会って話して仲良くなっちゃった仲だしなあゝ  
そんなことを考えたらなんだか笑えてきた

「何１人で笑ってるの？気持ち悪いわよ？」

「悪いな。俺には神様がいたからこそミールたちに会えたのかもな  
……」

「……それってどういう意味？」

首をかしげるミレーに  
そんなに気にすることじゃねえーよ、と一言言いまた旅に出る準備をした

それから俺はヴェセア城に向かったのだが、  
なんだか落ち着かないのか石像の周りをグルグル回っているギフエ  
アがそこに居た

「どうしたんですか？」

その声をかけた俺はギフエアに見られるなり  
そうだった！などと何かに閃きダッシュで近づいてきた

「俺たちでチームを組むぞ！」

なぜに？そもそも騎士団主要メンバーという、もはやチームを組んで  
するようなもんじゃないですか？

「あの9人がチームなのでは？」

「いや、それなんだがなあ、仲間が激減した」

腕を組みながら深刻そうな顔をしているギフェア

「何言ってるかサッパリなんですけど……」

「どうやらストライキを起こしたらしい」

ええ〜！

「この偽情報が出回っているようなんだ」

「あ、偽情報ですか……」

びつくりしたあー。ほんとだったらヤバかったろ……。  
しかし、とギフェアが話を続ける

「事態は急を要しているかもしれない」

「急を？何かあったんですか？」

「数日前、指令が出されたる？」

その時、あいつらにはSランク相当のハドルドウの討伐を任された筈だったんだが

実際、そこに居たのはSSSランクのアズラだったそうだ」

「アズラって！

6本の大剣を6本の剛腕で持ちマジックリフレクションの強化のせいで

魔法攻撃が一切効かないという最強の敵ですよね！？」

でもアズラは古代の魔物。今に生きている筈がない……

ギフェアの考えは正しかった、しかし、記憶の中では例外があった

「召喚……」

召喚なら古代の魔物も呼び寄せることが出来るかもしれない。

少なくとも不可能ではないはずだ。

召喚者のフォースがどれほどあるかは知れないが、

魔術のみを得意とする奴でさえ、簡単な事ではない。では一体召喚者は誰なのか……

「召喚？」

ブレイクも召喚と言う言葉は知っている。

RPGのゲームなどでは当たり前に出てくる言語である。

……が、本物を見たことなど一度も無い。当然のことだが……

「この世界には召喚が使える者も少なからずいると思っていた方がいい。」

しかし、アズラともなると何人のフォースを供給し合ったのか……」

眉間にしわを寄せしばらく考える……

「まあ、騎士団主要メンバーが全員消えたわけじゃない」

「ほ、ほんとですか！」

よし、これなら仲間助けも少しは楽になるかもしれない  
マールーとか、ダロットとか、ルイセスあたりがいれば最高だな……

「その残った仲間だが……。ピロクのみだ。以上！」

ぴ、ピロク……？ え〜っと確か……。騎士団紹介の時にいた……？

「おい、こっちにこい」

ギフェアにそうわれテトテト歩ってきたのが……

「ぴ、ピロクです。ピロク・ラックポート……です」

前髪のせいで顔が見れない。顔を下げていることもありなおさらだ。ハッキリ言って考えにもなかった人物だった……

「よろしく」

「よ、よろしくお願いしますっ」

と、さらに深く頭を下げ挨拶を終えた

「んじゃ、とりあえず一通り挨拶も済んだことだし、あと一人だな……」

ん？あと一人？騎士団メンバーでもない他の奴がいるのか？

「久しぶりじゃの。ブレイク」

側近の者たちが江戸時代の駕籠みたいなものを背負って来た隣を通る直前にクセのある口調で話されたら

……誰？なんて思えない

「よお、シルクシャシャー　っ！　……おいおいなんだよこれ！？」

シルクシャシャーに声をかけた直後、4人に槍で首を切り落とされそうになった

もちろん無礼なのは俺だが、こいつには訳があつての現状だ

「イスラ、ワアンツ、ナージャ、エフォラ

そいつはもともとそういう性格なゆえ、私は平気じゃ。

……とりあえず槍は降ろして構わぬ」

そついうと大人しく槍を下げる。……が、まだいつでも俺を捕えられる状態だ。

ってか、もともとそついう性格って……悪いのはお前だっつーのに

「まあ、そんなわけじゃ、私も同行を願う」

しょうがないか。断ったら……

いや、断った瞬間に却下されるだろうな、当たり前だけど面倒なことにならないようにここは普通に

「ああ、よろしく頼む」

「ん？ブレイクの事なら断りそんな気がしたんじゃが……」

「そりゃー、今は、仲間のピンチだし、少しでも戦力のある奴がいた方がいいだろ？」

「確かに正論じゃな。そういう冷静なブレイクも好きじゃぞ」

調子に乗るな

ウインクとかはやめろって……

結局は同じような結果になるのかなあ？

ロードゲームが出来るのなら、あの時のシルクシャシャの選択肢を変えて進めてみたいものだ……

「これで、メンバーは揃ったな。ええ〜っと、  
一時的な臨時のチーム。……………【ギフェア団】は……。ギフェア  
団でいいよな？」

とりあえずチーム名を決めたギフェアだったが不安があつたのか確認してきた。

とりあえず俺は首を縦に振っておいたが

「【シルクシャシャの夫はブレイク団】。と言つのはどうじゃ？」

「ギフェアさん。続けて下さい」

「……まあこのギフェア団は、今回の作戦までのものとし、終わりに  
次第解散する」

「な、なぜに私の提案を無視するのじゃ！」

「俺はお前の夫じゃないし、意味の分からない名前つけてんなよ」

「ん、では……、【シルクシャシャの彼氏は「いい加減終わりに  
しないか？」つまらんのう〜」

物足りないそうにがっかりするシルクシャシャを横目でみながら溜息を吐く俺。

「そろそろ茶番は終わりにして行くとするか」

「ちゃ！茶番とは何事じゃ！！なあーブレイク？　って！私を置いてくな！」

隣を見た瞬間そこにはブレイクの姿は無く、既にギフェアとずいぶん先を歩いているところだった

「置いてくぞー、シルクシャシャ」

「までまで、さっきまで私が必要とかなんとか言っていたではないか」

「来る気が無いやつに無理に頼むのもなんだろう？」

「行く行く行く行く！行くに決まっておるじゃろ！」

そう言って小走りで追いかけてくるガルヘント城の姫様  
はたしてこのアンバランスなチームはどうなっていくのでしょうか

……

「あれ？僕の順番は……？」

特に会話に混ざっていなかったピロクであった

## 第十九章

### チーム結成（後書き）

次回はEXです。

ギーヴァの過去がわかります。

EX?

追憶（前書き）

今回は少し長めのEXです。

EX?

追憶

魔王城・王室

「今日は特に仕事が無い」

「そのようですがどうかされましたか？」

こんなことを言うギーヴァ様を疑問に思ったエルウェール

「今日は休暇にする」

「本当ですか？ギーヴァ様？」

ツァツエが嬉しそうにつっこんでくる

ギーヴァ心

確かにここ最近調べごとが多いとかで忙しい毎日だったから  
こいつらにも少し休みが必要だろう……

「しかし、本当に休日によろしいのですか？」

休日だからと言ってもあのバカ（ツァツエ）とは違い、いろいろ心配になる

「あいつらには刺客を向かわせた。心配する必要は無い」

「そうですか。それなら安心です」

「……………どうした」

その場から動かないエルウェールが気になり声をかける

「あのう……………。ギーヴァ様もどこかに行きませんか？」

期待した眼差しでギーヴァを見つめる

「いや、俺はいい」

少しでも期待した私が駄目だった  
ギーヴァ様は昔からこういう付き合いは苦手だった。  
しかし、絶対に来てくれないというわけでもなかった  
少なくとも、あんなことさえなければ……………

## 魔王城・庭

「ギーヴァ様！どこかお出かけに行きませんか？」

「俺はどこにも行かない。賑やかな場所やら女と2人きりなど、もつてのほか」

ちなみに今は、私とギーヴァ様で二人きりのはずだが  
私と二人きりになっても平気らしい……………

「昔はよく一緒に出掛けましたけどね……………」

「今と昔じゃあ違う……」

魔王城・庭の噴水近くで話す若い魔人が2人

「こういう場所なら平気なんですか？」

「人目につかない場所が一番落ち着く。」

ガイヤス大魔王様も、外には出るなと言われている」

「そんなこと言ってないで一度くらいいいでしょ？」

「よくない……」

「それなら、賑やかじゃない場所で、トルマッセも連れて行くのはどうですか？」

ギーヴァ様の一番仲のいいトルマッセを同行させれば、絶対に行くはず！

「……………」

「行きましようよ！」

「……………そんなに行きたいのか？」

「もちろんです。城の外は空気が違う感じがしますよ」

「そうか……。それなら気分転換に一度行ってみるか」

「本当ですか！？やったあ！！（この機を逃さずにプレゼント、渡さないっ！）」

「うるさいぞ、エルウェール。鼓膜が破れる……」

「あ！すいません。ギーヴァ様」

エルウェールがギーヴァにプレゼントを渡すには理由がある  
今日が誕生日だからだ。心からのお祝いをしようと前々から考えていたのだ

この日を利用しなければと、作戦を練っていた

「別に平気だ。トルマツサを連れてくる」

「私かもっ呼んでいます！」

そう言っ指差した方向にはトルマツサが歩いてきたところだ  
あいかわらず頭にはあほ毛が2本ユラユラしている

背もギーヴァ様と同じくらいで目の色は銀色

髪には徹底的にこだわるらしく短髪より長髪派だという  
周りの女性からの好感度はかなり高いらしく、プレゼントなどしょ  
っちゅうのことらしい

「今日はどんな御用で？」

「俺には分かるぞ、詳細はエルウェールから全て聞いてるんじゃないのか？」

とうに見破られていたことに苦笑するトルマツサ

「さすがですね。では行きますか」

??? 地方・サートルクの森

「どうです？ ギーヴァ様。とても静かで落ち着くところではないですか？

（どのタイミングで渡そうかなあ……）」

「……そうだな、たまにはこういうところもいいな、トルマツサはどう思う？」

「とても良い所ですね。私も初めて来ましたが、こんなのにどかだと大の字で寝ていたいものです」

と、いいながら早速大の字になって寝た

「まったく、外は危険だと聞いているのによくそんな無防備なことが出来るな」

「ははっ。こっついう風に心から体を休めることもたまには必要なものです」

「そっついうものか……。まあ俺は遠慮しておくがな」

「そんなことは分かっていますよ」

トルマツサは微笑む。  
と、その時

「……それがさあ、ここを見回ししないと仕事が切り上げられないんだよ」

「!? 誰か来る!」

とつさに身を隠した……

「人間か?」

「そのようですね……」

2名の若騎士団を見ながら  
少し緊張ばしった声で話すエルウェール  
なんて間の悪い時に来てしまったのだろっ。  
人間には近づくなと大王に言われていたのに……

「大王が人間が俺たちに危害を加えるようなら容赦なく殺せと言っていた」

「まあ、今のところそのような様子は全く見られそうにないですけど……」

こちらは少しの焦りもない冷静な判断を下すトルマッセ

「あっ!?!」

コトッ!

騎士たちに気を取られていたエルウェールはプレゼントを落としてしまった。  
普通なら気づくことの無い音でも、この静寂の中でそれは、それはとても大きな音だった

「おい!……誰がいるぞ……」

「動物かなんかじゃないか?」

「そうだといいいんだがな……」。

「こちら辺には魔人の目撃情報も出ているから用心が必要だ」

「そ、そうなのか！？それってかなり危険じゃないか？

……その音。どこから聞こえてきた？」

「……………大体、あの辺りだな……………」

必死に身を隠すエルウェール

「お前のせいで大変なことになったな……………」

「すいませんっ。ギーヴァ様。私の不注意で……………」

「まあ、この失態はかなりの重荷になるがしょうがない、トルマッセ、何とかできないか？」

「そうですね……………。私が、魔法で援護しますのでみなさ

………！？」

ドサッ……！

トルマツセの言葉が途中で切れたことに疑問を抱いたギーヴァがそちらを向く

「どうした？トルマ……。おい！どうした？背中に矢が……」

「隊長！魔人を射抜きました！」

「作戦は成功だな。生死の確認は？」

「はっ。よくは確認していませんが、さっきの当たり具合だと死んではいなくても致命傷にはなったはずです」

「お前は、命中力が高いからな。武器さえ改造してあればどんなに遠くでも目標物を捉えられる」

「ありがとうございます」

エルウェールは相手が情報伝達機器で違う相手と連絡を取り合っている光景を確認した

「ギーヴァ様、相手は違う相手と連絡を取り合っています」

「…………ギ…………ヴァ…………」

「喋るな！安静にしてろ。背中からの出血が思った以上に多いな……」

「ギーヴァ様。

相手が連絡を取り「分かっている！先制攻撃を仕掛けてきた事、後悔させてやる！」そうですね」

カサカサ……

「てめえら、俺の仲間になんてことをしてくれた……」

「まじかよ……魔人は1体だけじゃなかったのか」

哑然とする騎士団達……

しかし、相手も一人と言う事で再び戦意を取り戻す

「俺の大事な仲間を傷つけたことがどんなに恐ろしいことになるか覚悟しろっ！」

「みんな！構えろ！」

全部で5人か……

物足りないくらいだ……………

「『モトバリヂラヂ』（丁結合炎・氷・雷）」

たったの数秒で結合魔法を完成させ相手に放つ  
そのスピードは魔人の中でもトップクラスを誇るほど……

「『ソーサリーフレクト』（魔法反射）」

対して5人全員が魔法反射を唱える

「俺の攻撃魔法の前ではそんな防御魔法、無いも同然だ！！」

まるで、もともとそこには何もなかったかのように簡単に5つの魔法反射を打ち破り

あっという間に騎士団5人の息の根を止めた……

「……くっ。本気を出すまでもない相手なんかに!」

ギーヴァはすぐにトルマツセの所まで戻った。

「ギーヴァ様。トルマツセの状態が!」

「ん!?!どうした!」

トルマツセの場所まで駆け寄ると、明らかに先ほどの顔色より悪いことが分かった。

「出血はもう止まっている。なぜだ……。毒か?毒が回っているのか?」

「これは、毒のようですが、普通の毒ではなく……。魔人殺しの矢というものをまともに受けたからだと思います」

「魔人殺しの矢?それにあたるとどうなる」

俺は、既に嫌な予感しかなかった

「まともに受ければ助かる確率は……ほぼ0ということに……」

「人間ごときが道具だけはまともに使いやがって」

「ギ……ヴァ……俺に……心配は……いらなから……」

「お前が死んだら、俺はこれからどうしたらいい？」

「ギ……ヴァ……の……思いの……まま……に……  
……」

すうっと力が抜け頭がガクリと垂れる……

「おいっ！トルマツサ！！死ぬなっ！！  
あんな奴らなんかの攻撃なんかで死ぬような奴じゃないだろ？」

いくらギーヴァが叫んでも声は返ってこなかった……

「クソオオオオオ！！！！」

俺は城まで全速力で走った。親友を助きたい一心で頭がいっぱいだ  
った……

急いで城へと運んで行っただが専門の魔法医師に既に手遅れだと言われた。

それでも、まだ間に合うと思った。いや、思い続けた。

思い続ければ生き返ると思った。しかし、現実はそんなに甘くは無かった。

俺は悔しかった。俺にとって一番の親友が、人間なんかには殺された。俺らは何もしていないのに……

そして心に誓った、人間という動物は我らの敵だと。

ガイヤス大魔王様が言っていた通りだった。少しでも疑った俺が悪かった……

この機を境にギーヴァの人間に対する心は深く、固く閉ざされたのであった……

そして、この大事な日が、ギーヴァ様の誕生日が、最悪な日になってしまった

「どうした？」

「あーいえ……なにも」

昔のことを考えていたらぼーっとしてしまった

「そうか……。とりあえず今日ぐらいはゆっくり休めよ」

「分かりました。」

その優しさと微笑みが微かではあったがかつての少年ギーク様と一致した……



EX？

追憶（後書き）

今回はギーヴァの過去について話しました。

長く生きる魔人にはいろんな過去があります。

エルウェール。ツアツエもまたいろいろな過去を思い出として  
心に残していることでしょう

## 第二十章

### 漆黒を好む少女（前書き）

またしてもブレイクのピンチ！？  
必死に頑張るブレイクの運命は……

## 第二十章

### 漆黒を好む少女

サフエン地方・ドルヴェーナ

魔物がよく入り込むことで有名な街、ドルヴェーナ  
しかしその街はなぜかたくさんの人であふれている  
そんな風に聞かされていたのでこの現状を見ると何とも……

「……誰も人が居ない」

周りを見渡しながらギファが言う  
どの店にも店員は居ないし街全体が廃墟のようになっていた

「ここで……戦ったんですかね……？」

か細い声でピロクが話す姿をシルクシャシャが見て、シャキツとしないさい！男でしょ？

とか何とか言われてしょんぼりしていた

「その様な、地面がえぐれて木々には痛々しい跡がつけられている」

こんな攻撃を受けたらどうなることやら……。考えたくもない綺麗な噴水もこんな悲惨な場所と一緒にされたら迷惑だろうん？　なぜ噴水だけ無傷なんだ？

「そうなのですが、何故噴水には傷1つ付いていないんですかね……」

「そうなんだよな……」。噴水の周りがこんなにぐちゃぐちゃになっているのに、まるで何かに守られたように……」

考え込むギフエア。  
それはそれとして今は……

「うーん、それにしても、どこに連れて行かれたのか全く分かりませんね、ギフエアさん」

「そうだな。手がかりが分からなければどうすることもできない」

「手がかりが欲しいのなら私が教えてあげてもいいわよ？」

聞いたことの無い上品のある声に反応すると空中に少女が浮いていた腰まで伸ばしてある黒髪、ドレスみたいな黒服、黒いバラのついた靴、黒いリボンのついた帽子。黒と言っても漆黒という部類に入る色だ。

「しかし、黒好きだなあ」

「その君！私の美貌に見惚れちゃった？」

クスクス笑いながらその少女は言う、しかし、俺の顔を見て、何かに気付いたのかその笑顔はすぐに消えた。

「んなわけなからう！―しかもなんじゃ、その黒、黒、黒……。とにかく黒ばかりじゃ」

「私の好きなファッションよ？黒が大好きなの」

対抗心を燃やすシルクシャシャにその少女は静かに笑う

しかし、この容姿もアイシエス姫と比べてしまえば霞んで見えるだろう

まあ、一般にはかわいい部類に入るとは思うが……

「どこに連れて行っただのか分かるのか？」

「分かるけど教えな―い」

あつかんべーしながら地面に降り立つ、その態度に、この無礼者め―！とか例の姫が後ろで言っている。ピロクは相変わらず、ビクビクしているがその少女は背中に取り付けてあった杖を取り出すと一言

「私に勝つたら教えてあげてもいいけどね」

そっつい、杖で空中に何かを書き始めた。その瞬間、目の前の建物が歪んだ

「え!？」

というより、この街全体が歪んだ。その少女の笑顔は歪みとともに消えてしまい  
みるみるうちにあたりは変貌していき見知らぬ境地へと飛ばされてしまった

完璧に場所が変わった後、あたりを見回すと俺一人だった

「……誰もいない」

「私がいるけどお？」

そう耳元で猫なで声で言われ、とっさに反応し抜剣する

「あらあら、そんなに敏感に反応したら可愛がってあげたくなっちゃうんだけどなあ……」

よいしょっと、といいながら自分の背丈と同じくらいの杖を構える  
見事に杖まで真っ黒……

「殺さない程度に痛めつけて私のおもちやしようかなあ」

身の毛もよだつようなセリフを言われ顔をしかめる  
しかし相手が喋り終わった時には既に呪文は完成していた

「『カリエンテヴァッサー』（沸騰温度の熱湯）」

先制攻撃を仕掛けてきた少女は、蒸気がモクモクと出まくる球体状の水をこちらに飛ばしてきた。

その時、俺は疑問に思った。なぜシオラ石無しで呪文が使えるのかと……

もちろん俺もシオラ石は持って無かったがその魔法はエナジーリフレクションで跳ね返すことが出来た。しかし理屈が分からない……

「なかなかやるわね、意外に楽しめるかも……あ！あとねえ、この空間は私の理想とした空間で作られているから魔法なんて簡単に出来るわよ」

そんなのありがよっ！！  
ボス並みのずるさだな……………  
あ、でも、そのおかげで俺も魔法は使えるのか

「『シュトゥルムインパルス』（電撃の嵐）」

バチバチと鳴る雷が相手へと向かう  
手始めに中級程度の魔法を使った

「『エレメントアブソープ』（魔法吸収）」

だが、俺の放った魔法は相手の目の前寸前で消えた……。いや、吸収された

「うんうん。いいねえ、フォースの消費はこれで防ぐとして、次は……」

杖を華麗に回転させ地面に刺す

「『クラックボルケーノ』（地割れ噴火）」

ドゴンッドゴンッドゴン……！

固い地面を突き破りながらマグマを散らす

「ちっ！『エナジー（待って……！）』どうしたミヴィ？」

（すぐにツアオベライドレイジャーを！！）

「『ツアオベライドレイジャー』（魔法抹消）」

意味も分からずとつさに唱えた。  
虹色の壁が自分の周りのみ魔法を無効化した

（さっきの魔法はエナジーリフレクションの1つ上の魔法だから覚えておいてください）

「あなた何者？さっきの攻撃をかすり傷1つつけずに立ってるなんて、でもやっぱ私の。」

「何者って言われても、俺は、ただの騎士なんだが……」

口を動かしながら同時に手も動かす  
「『ライニング』（電撃砲）」

威力は低いが当れば麻痺るし連続撃ちが可能なゆえ隙を作るには丁度いい

でも、こんな下級魔法程度で手こずるわけもないか……

「『アンチサンダー』（雷無効化）これで大丈夫」

魔法の防御は完璧ってわけだな……

雷魔法は使用したとたん時空に吸い込まれるように消える  
ってことは雷属性は使い物にならないから魔法剣改を……と

手を剣にかざし剣の柄から剣先まで赤く染めた後  
一振りすると水がはじけた。これは、能力テストで使ったものと変わらない

「私も本気を出さないと危ないわね。『ブラストフロンド』（爆風  
岩石飛ばし）」

ダッ！と駆け出し飛んでくる岩を真っ二つに斬る

魔法剣にした場合、剣を振るだけで魔法も飛ばすこともできるため遠距離攻撃も可能ってのが良いよな。

でも、先ほどの岩に魔法を撃ってみたがどうやら無力化されてしまうようだ

だったら、物理攻撃で突破すればいいことだ

「ほんとに気を抜いたら駄目なようね『スパーク』（電磁波）」

っ！？

「『ベレニガン』（走行バリア）」

あっぶねえ……

レベルの低いおかげか走っている最中にも使えるバリア魔法で普通に凌げた

（そのベレニガンも重要な魔法なので忘れないようにして下さい）

「『ラジングルマ』（稲妻の散弾撃ち）」

雷魔法を二つ組み合わせた！？

それで魔力を強めたか……

「『アダマントエピタフ』（比類なく硬き石版）」

何本もの極太な稲妻が襲いかかってきたが  
こちらも土魔法を二つ組み合わせ上手く対応する

しかし、同時に魔法を使うとは厄介だな……

ミヴィの知識が無かったらどうなっていたことやら

電磁波は広範囲に広がる魔法。当ればしばらく体が思うように動かなくなるらしい

さすがに俺でも電磁波の中では上手く動き回れないし、攻撃もままならない

「よし！このまま突破だ『ラファールガ』（超加速）」

さすがにこの魔法のコンボを打ち破られるとは思っていなかったのか驚愕の表情をしている

魔術師にとって近距離戦に持ち込まれるのは大いに不利な状況になる俺は驚異的な速さで剣を相手の後ろに回り込みながら水平になぎつた勝負あつたな……

しかしっ！

キイイーン！！

「っ!？」

相手が剣を鞘から抜くと同時に攻撃を防がれた  
加速魔法を使った攻撃を普通に防御された上にあの平然とした顔……

「ごめんね、私、剣の方が専門だから近距離は得意なんだよね」

なに!？ 魔術師に加えて剣士でもあったのか  
しかも二刀流だ。

剣先の細い長剣をもう一本とりだした少女は抜剣すると同時に斬ってきた

ガギンっ!!!

「うぐっ!？」

剣を何とか振り払い、相手の振り払う剣を受け止めると、とてつもない重力が襲いかかってきた

あんな細身な剣で手がしびれるほどの重さをくらった。

そして、風を切る音を聞きながら地面と平行に約100mは吹っ飛んだ

なんつー馬鹿力なんだよ……

助かったのは、この空間には建物など、障害物が一切ないため追加ダメージは無かった事

「いくらなんでも、あんな剣じゃまともに戦えないな……」

（自分の剣も改良しましょう。グラヴィティフォーカルで同等に戦えるはずです）

「同等に戦えるのか？分かった、『グラヴィティフォーカル』（重力集点）」

ん〜。……特に変わった様子は無いけど

適当に剣を振りながらどこが変わったのか確かめた

（自分は影響を受けないから分らないと思うけど交えた時に実感があるはずです）

「へえ〜。ってかこんな魔法使ったら普通の奴にはかなり有利に戦えるんじゃないか？」

（それはあなたの判断で行って下さい、人の性格というものが出るかもしれないね）

そうか……。

まあ、どちらにせよ。今はこれであいつと同等になったわけだ！

「そっちがこないなら私からいくからね！」

あの少女もまた加速系の魔法を唱えているのだろう  
高速で向かってくる少女の剣技を受け止める

キィィィン！

「あはっ、その剣の準備のために来なかったのね」

普通に戦って少し驚く様子を見せたが軽く笑みをこぼした

その後、10合・20合・30合と剣を交える

2人とも加速系の魔法を使っているので普段と変わらないバトルだった  
が

他の人が居たら残像のみしか確認できないであろう

キンッ！キュイン！！

「『アグニ』（速攻炎）」

「『アイシクル』（速攻氷）」

バーン！！と、2人の高速魔法がぶつかり合う

「なかなかやるわね」

「俺もここまで戦えるなんて正直驚いた」

「戦うのが初めてじゃないんでしょう？」

「まあね、でも、ここまで瞬時の判断を迫られる戦いは初めてかな」

「へえーそうなんだ。んでも、そろそろ終わりにしましょうか」

うふふ。と笑いながら剣を二本交えるように地面に刺し、その手前で杖を構えた

「私のもとに集結しなさいエターナルセブンスード」

突如空中に現れた7本の剣が少女のもとに舞い降りる  
九刀流なんて見たことねえぞ……

空中に浮く7本の剣が俺に向かってきた

キンキンキュインカキン！

「くっ！！」

「休む暇なんて無いわよ？」

キン！キンカキンキュイン！！

次々に襲いかかる剣と相手し続けるにはもはや時間の問題だ……  
力が尽きて隙が出来れば俺の負け、という事になる  
こんなチートみたいな攻撃を受け続けたらそりゃー負けるわな

俺は後ろに飛び去り剣を地面に刺す

「ん？何が来るのかしら？」

「俺の負けだ。いさぎよく散ろうと思う」

内心、誰かが助けしてくれるんじゃないかと思っていたが  
その願いも通じること無く……

「そう……。あなたは、いや、ブレイクはそんな人だったの……」

っ！！ 何故？何故俺の名前を知っているんだ！？

「なぜ俺の名前を知っている！？」

「死を覚悟した人に教えることなど何もないわ」

上から迫る剣を最後に俺は死んだ………

はずだったが痛みが無い……

閉じきつた目を徐々に開けると、そこにいたのは……  
双剣を華麗に使いこなし相手の攻撃を防いでいた少女がいた

「う……嘘……だろ？」

なんでここにいるんだ！！？？

「アイシエス姫!!」

## 第二十章

### 漆黒を好む少女（後書き）

ついに隠れた能力発揮か！？  
次回、いろいろな意味で驚きます。

## 第二十一章　ものまね得意のお姫様

### 幻想の世界

「遅くなりました。ブレイク。いやいや、ブレイクさん」

相手の剣を双剣で受け止めて吹っ飛ばしたところを見た。  
そこに居たのはアイシエス姫で　　んっ！？

アイシエス姫っ！！

にしては声に少し違和感を感じる、他の人に似ているような……

しかも、つい最近聞いた気がする……………

「ん？なんじゃ私に何か付いておるのか？……いやついでなので  
すか？」

うん、シルクシャシャだな。

物真似はほぼ100%完璧なのだが（黙っていればな）  
言葉を巧みに扱えないところが、かなりの欠点だな……

「なあ？　シルクシャシャだろ？」

「うぬっ！？　何故分かった？」

しかしこの物真似どうやら一番の得意分野だとか……  
言葉の真似も完璧にしてから言えってんだ

「そんな変わった口調はシルクシャシャぐらいしかないって」

「なんと、私の声を覚えてくれたとは……。  
いやいや、将来お嫁になる者の声は鮮明に覚えていて当然か？」

「だから、んなもん勝手に決めるなよ、ってかどうやってここに来た？」

「ギフェアからシオラ石という物の力を使ってここまで来たんじゃない」

シオラ石？

ああ！あの時のたくさんあった石の1つか！  
まさかこんなことまで出来るとは……

「んでこれからどうすんだ？」

「そうじゃのう……。尋問でもするか？」

そういうと少女の近くまで近寄り拘束魔法を唱えた

「魔力の流れを感じたが、やはりそうじゃったな」

どうやらシルクシャシャには魔法が使えることは分かっていたらしい  
まあ、そんなこんなで少女は身動き1つとれなくなった

「なぜブレイクを襲ったのじゃ？」

「……あなたに答えることは何も無い」

「『タイテンス』（締め上げる）」

シルクシャシャの詠唱により

体を締められる少女はうめき声をあげる

「どっじゃ？ 答える気になったか？」

「……………だから……………あなたに……………答えることは……………無い」

……………そうか。とただ呟いたシルクシャシャは再び詠唱する

ギュウウウ……………

「どっじゃ？」

「何回言っても同じこと……………」

「ふうん……………『タイテ』やめろ！」 なんじゃ？」

さすがに耐え切れなくなった俺はその少女をかばった

「それくらいにしとけて」

「ブレイクがそういうんじゃない」

俺はその子に駆け寄った

「……………大丈夫か？」

「やっぱり覚えていないんだね……………」

「えっ？」

その言葉の意味を理解できなかった  
一度もあつたことの無いのにこんなこと言われても…………

「人違いじゃないのか？」

ぶんぶん首を振り手を握ってきた

「覚えてないのブレイク？」

この子はなぜ俺の名前を知っているのか  
この世界に来てこの子に会ったことなんて無いのに  
しかも殺されそうになったんだぞ？

「覚えてない……………かな」

「そう……………なんだ……………やっぱりそうだよね」

「なんじゃなんじゃ？私にはまったく理解できないんじゃないか？」

「いや、俺にもさっぱり……………」

「だけどこれだけは！あの時の事は決して忘れないからね！！」

急に驚くほどの大声を出すので振り返ると既にその子は居なくなっ

ていた

「あの時の事？」

「知らないところで何かしていたのか？　そうか、なら浮気じゃない？」

「いやいや、まだ何も言っていないから！　ってか何で付き合ってること前提で話進めてんだよ！」

「とりあえずあの子も危険人物としてメモっておこう」

……………どんなことメモってたんだよ

「さて戻るかの……『エスケープ』（脱出）」

その後、幻想で作られた世界は打ち砕かれた

「お！ ブレイク無事だったか！！」

ギフェアがこちらに来る間にポケットに何か入っていることに気づくん？と思いつながら取り出すと赤い星形の宝石を見つけた

「それは記録星」

「記録星？」

「自分が残したいものを記録するものなんだ。その用件を聞くと壊れて消えるようになってる」

そんな便利なものがあるんだと俺は少し感心した。

とりあえずその記録星という物を地面に落とすと効果が発動するよううで、

早速やってみると地面寸前で止まり、さっきの女の子が出てきた。光で出来ているその少女はとても精密に出来上がっていた。

（これを聞いてるってことは私に勝ったのかな？場所を教えるって言ったけど、もう城に戻ってると思うのよね。そういえば、あの噴

水見た？全く傷がついてない不思議な噴水。その能力を改造すれば少しは楽しいことが出来るかも。楽しみにしていてよね。上手く成功させることが出来ればあの時のこと、思い出してくれるかな……。んじゃまたね)

「思い出す……………」？」

「何をじゃ？」

俺は何かを忘れているのか？

それを思い出させるために能力改造をするのか？

謎は深まるばかりであった

とにかく騎士団員が全員無事でよかった。

ラズルト地方

「上手く気持ちが出来ないなあ」

先ほどまでクライムに乗っていた少女は動物禁止区域で降り、日の落ちた道を一人で歩いていた

「しまいには殺しちゃうところだったし……」

深く重い溜息を吐きながら店の角を曲がる

「ところであの女の子は誰なんだろう……も、もしかして、彼女さん!？」

そう考えるとあっという間に顔が火照ってしまった。

「ほんとに誰なんだろう？　また話せるかな。でも、嫌われちゃったかなあ」

いまさら自分がしたことを後悔する少女はある店にたどり着く

「よお！　ずいぶん遅かったじゃねえか」

近くの工場で機会をいじくっていた一人の男が話しかけてきた

「まあね、いろいろとあったのよ……」

「それより、聖なる噴水見たか？」

機械をいじくる手は止めずに話してくる

「そうね、見たわよ。分かったことは2つ」

「なんだ？」

「1つはビックリするほど強力な魔法がかけられていたのよ」

「そんな強力な魔法が？」

急に手を止め聞いてくる

「そうそう。それで、もう1つはその噴水に転移の力があるみたい」

「転移の力？　どういうことだ？」

「どういうことかは分からないけど、転移先は私も分からないし、どうすれば転移するのも分からない。でもセル騎士団の何人かが巻き込まれたみたい」

「セル騎士団か、そもそもその街にはアズラが出たらしいじゃないか。」

「そうなのよね、たぶん、そいつを転移させようとしたのよね。」

「噴水には精霊が宿ると聞いたがそいつがやったことか？」

「精霊かあ…。」

見たこと無いけどそうかもね。

精霊は住んでいる街を守る守護神みたいなものだから、きっとそうよ」

精霊には転移させる能力を持つ精霊や武器に宿る精霊や人に宿る精霊がいるって聞いたけど……

本当にそんなのいるのかなあ？

人に宿る精霊とか何なの？って感じだし、不死身になったりとか？

「まだまだ分からないことが沢山あるなあ」。

でもブレイクには昔のブレイクに戻ってほしいな。

そのためには噴水の力を利用して……」

その少女はブレイクを昔のブレイクに戻すべく作戦を練ることにした

昔、ある時、ある場所で、とある少年少女が木陰で話をしていた

「ねえねえ！この世界は私たちの知らないところがまだまだたくさんあるのよね？」

「うん。そう聞いたけど……」

「んじゃ、私たちがもう少し大きくなったら一緒に旅に出てみない？」

「えっ！そんなの無理だよ。親にも怒られる……」

「そんな弱気になってちゃ、この広い世界を旅した時痛い目に合うわよ？」

「そんなこと言われても」

「だって、あの時私に言っただじゃない。君を一生守って見せるって」

「あ、あれは……」

「もしかしてえ。嘘だった……なんてこと無いでしょうね？」

「違う違う！嘘なんかじゃないよ」

「んじゃ、約束ね」

しかしある時その少年は遠くに引つ越さなければならなくなってしまうた。

どうやら親の仕事関係らしい。私にはどうすることも出来なかった。

「な！なに泣いてるのよ！この弱虫！」

「き、君だつて泣いてるじゃないか！」

「ぐす……泣いてなんかいいわよ！か、必ず戻ってきなさいよ！」

さよならとは言えなかった、だけどまた会いに来れる保証も無かった。

それほど遠い場所。一生のうちに一度も行くことの無いだろうところへ

「うわあああああ！！」

だから何も言えなかった。ただ大声で叫び泣くことしかできなかった。

僕を弟のように優しくしてくれたその少女との別れは胸が張り裂けそうなくらい辛かった。

それからその少年とは一度たりとも会う事は無かった。  
でも、あの時交わした約束は一度たりとも忘れなかった。

そしてその少女は少年に会うために旅に出ることに決めた。  
1人での旅は辛く悲しく寂しく……。  
でもやっとの思いでその少年の家についた。

やっ与会える。何年振りだろうか……  
当時8、9歳という二人が今では立派な大人へと成長しつつあった  
私を覚えているのか？という不安はもの凄くあったが、そんなこと  
よりすぐにでも会いたかった。一目見たかった。

だが、その家には少年はいなかった。  
その少年のお父さんやお母さんすらいなかった。  
埃もかぶっていてとても人が住める場所では無かった。

何があつたのか？

その謎が知りたくてその少女は再び旅を始めたのであつた。

## 第二十一章　ものまね得意のお姫様（後書き）

能力改造とはいったい何なのか？

無傷の噴水の持つ力とは？

今回はブレイクの過去の話とほのぼのストーリーになると思います。

ちなみに『時巡る神秘説』はサンツエルク大聖堂という大図書館にある本です。

\* 地域不明

## 第二十二章 寝る子は育つ（前書き）

今までやろうと思っていなかったことをいざやろうとすると  
邪魔が入る。という経験ありませんか？

そして久しぶりに例の盗賊が出てきます。  
（ほんとに少しですが）

## 第二十二章 寝る子は育つ

「えーっと、授業を始める前に今日は転校生が来たのでみんなに紹介しようと思う」

きゃー！。という女子の黄色い悲鳴が聞こえる。

「君だ。みんな優しくな。席はあの髪の毛の長い子の隣の席に座ってくれ」

俺はなぜこんなところにいる？

昔の記憶が思い出せない。思い出そうとすると真っ黒な空間しか出てこない

「よろしくね」

微笑みかけてくれるその女の子に俺も「よろしく」と返事を返した。  
それからのこと、その女の子には良く会う。

「また会ったね。何かの縁かな？」

いつも笑顔を絶やさないその女の子を見ているとなんだか心が落ち着いた。

「確かに良く会うね。君はここで何をしてたの？」

「空を見てた。この世界には私の知らないところがまだまだたくさんあるんだなあ〜ってね」

その時、一瞬だけだが昔の記憶、真っ黒な空間に人影が出来たあれ？昔こんなこと言われたような……………。

だが、それ以上思い出すことは出来なかった。

一体誰だったんだろう……………。

「兄貴……そろそろ宿で泊まりましようよ」

「いや、あいつに会うまではどこにも泊まる気は無い」

「マジですか!?!」

そう話すのは黒盗賊一行

存在を忘れている方はいませんか？

髭面ピエロと聞いても分からない方は第一章を読んでみましょう。

現在位置はフェオルト地方のバザック山のふもと

金だけはある黒盗賊はガダルナ地方からクライムという別名、山駆ける狼を借りて

わざわざ遠いところまでブレイクを探しに来たというわけだ  
ちなみにクライムは一匹レンタルで銀貨1枚。日本円で千円  
ついでだが、赤貨は1枚十円。銅貨は1枚百円。金貨は1枚一万円  
となっている。

「こんなところにあいつは居るんですかねえ……?」

周りに山ばかり広がるこの地域には絶対にいないという確信があったのだが  
すべては兄貴に委ねられている

「なあ？ウデラは正しいと思うか？」

「え？いや、俺はよく分かりません。兄貴が頼りですから」

「そうです。俺もそう思います」

「エデルもそう思うのか……」

「あたりまえですよ。兄貴の勘は正しいですから」

「まあその勘……。今まで一度も当たったこと無いけどな」

「そうでしたね……」

その言葉に皆が固まる……

「んまあな！大丈夫だ。心配することはねえよ、奴はここに絶対に来る。」

その予想は実際に当たることになるのだがそれはもう少し先の話になる……

## ガダルナ地方・ヴェセア城・ブレイク部屋

「さて、久しぶりにゆっくり休めるぞー」

先ほど騎士団達との会議が終わったばかりだ。  
そして今日は、最近、ほとんど休みの無い俺にとって最高の昼寝デ  
ーだった。

「んじゃ、昼寝でもするか」

小さい頃、母に言われたことがある。

寝る子は育つと。その言葉にこれほど共感したのは初めてだった。

俺が小学生の時寝ている時間が勿体ないと昼寝なんてしたことなかった

もちろん、中学も、高校でも……

だが今は違う！今こそ昼寝をする時だ！！

そう決めて自室に向かうと目の前からとんでもない人が歩ってきた

「ブレイク。これからどこへ行くのじゃ？」

「どうして、お前がいるんだよ」

「暇だからじゃ」

暇って……。ってか毎日のように見かけるけど

城の方は大丈夫なのか？

「なんじゃ？私の体をジロジロと……。もしや私の美貌に釘づけか？」

どうやらセクシーポーズをとっているらしい

不慣れな動きにぎくしゃくしているが何もつっこまずにそっとしておこう

「なあ？シルクシャシャ、俺はこれから昼寝するってことで話は後でな」

「な！なんじゃ。私の話は完全無視で昼寝をするというのか？」

「そうだ。とりあえず俺は寝る」

「そうか……。んじゃまた後で……。じゃな」

微かにだが口の端が吊り上った気がした。気のせいかな？  
しかし、もう自室は目の前だ。やっと寝れる。  
と、ドアノブに手をかけた瞬間声がかかる。

「あの？ブレイクさん？」

こつこつと思い通りにいかないとは……  
声の主はアイシエス姫だった  
さすがにアイシエス姫だから平気だが他の奴だったら何をしていたか……

「しばらくお姿を確認することが無いと思っていたのですが何処に言っていたのですか？」

「ああ。魔人の基地に行ってたんだ」

「魔人！？お、お怪我はありませんか！？」

急に俺の体のあちこちをぺたぺたと触ってくる

「かすり傷1つないって。大丈夫」

「そう、ですか。ならよかったです」

「えっとさ……。なんか言い辛いんだけど……」

俺の遠慮がちな言葉にすぐ反応するアイシエス姫

「いえいえ。何でも言っして下さい！」

そんな笑顔で見られても困るんだが……

「まあ、そのだな……。結構な長旅でかなり疲れてるんだよね……」

「はい、旅のお疲れなら私がマッサージでも？」

正直かなり嬉しいんだが、とにかく寝たい気持ちの方が上だった。

「いや、今はとにかく寝たいんだ。いいか？」

アイシエス姫は少ししょんぼりした表情を見せた。  
そしてそのあと何かひらめいたようにパツと顔を上げる

「そ、添い寝してもいいですか！！？」

「そつ！そそそ添い寝！！？」

彼女いない歴17年の俺にとってはかなりの攻撃力だった  
そんなことされたら眠れないっての！

「……………」

断りづらい……

「いい……ですか？」

「えーっと、そのー」

その期待に満ちた目で見られても困る  
でも悲しい顔は見たく無い……

そうだと、俺はひらめく  
アイシエス姫を先に眠らせてから部屋に運びそれから一人でゆっくり寝よう  
結構名案だと思った

「そうだな。アイシエス姫がそうしたいなら」

「はい！」

その会話のやり取りを聞くシルクシャシャ

「うぬぬぬうゝゝ！ あの小娘がああ！ フハハハ見ておれえ、必ず私と寝てもらうからな」

## ブレイクの部屋

「飾り、何もありませんね……」

アイシエス姫が俺の部屋を見渡して一言  
確かに、飾りとかそういうのは何も買っていないしそんな暇も無かったし

「あの、よかったら私が飾りを手伝いしましょうか？」

「いやいや、アイシエス姫にはそんなことさせられないって」

「そうですか……」

深い溜息を吐くアイシエス姫。飾りたかったのか？

「でもやりたかったらやってくれると嬉しいかな」

「ほんとですか！」

両手を絡め合わせて目を輝かせる

ほんと分かりやすいというかなんというか  
思わず笑ってしまう

「なにが可笑しいのですか？」

「いや、別に。アイシエス姫はなんか分かりやすいなあ〜ってね」

「私は分かりやすいのですか？」

「だからこそいいのかな？」

なんだか理解できなかったアイシエス姫が  
とりあえず嬉しかった。

「明日なんですが、どこかへ行きませんか？」

「明日かあ〜。（確か明日も仕事は無かったっけか……）大丈夫かな」

「ではでは！ウェイルバザールにでも行きましょう」

「ウェイルバザール？」

話には聞いたことがあるが行ったことが無い

「どんなところだ？」

「毎回がお祭りのように賑わう商店街です。

わ、私たちの……、あ、あの、で、デートには丁度いいかと思いついて……」

「へえ。んじゃ行ってみるか？」

「やった！明日が楽しみで眠れそうにありません！」

「そっか、でもなあ、ちゃんと寝ないと明日楽しめないぞ？」

「でも楽しみで楽しみで……」

目を閉じて明日の事でも考えているのだろうか？  
ほのかに頬を赤らめとても満足そうだった。

「んじゃ、そろそろ寝るな」

そういつてベッドに入るとすかさず潜り込んでくるアイシエス姫。

「ブレイクさん、あつたかいですね」

「んあゝ、そ、そうかあ？」

あまり触らないでほしいんだけどな……

俺の胸に頭をうずめるアイシエス姫の顔はとても満足そうだった

その後当然ながら眠れない俺はしばらくしてアイシエス姫の肩をたたいた

「アイシエス姫？           アイシエス姫……？」

よし、反応なし。俺はアイシエス姫を抱えて姫部屋へ運んで行った。

「おやすみな」

時刻はすでに深夜2時を過ぎていた体も言う事を利かなくなってきたし  
やつの思いで自室に戻った俺はベッドに倒れこむのと同時に意識が飛んだ……。

「うふふ、これで邪魔者も居なくなったようじゃな」

そして次の日……

「あゝよく寝た」

寝返りを打つと何かが体に触れる。  
体の大きさにアイシエス姫かと思ったが、アイシエス姫は一度寝

ると時間までは起きない体質だからありえない。だとすると……  
おそろおそろ布団の下をのぞく

「むにゃむにゃ……」

気持ちよさそうに眠るシルクシャシャを発見した

「だろうと思つたよ……って!」

思わず鼻血が出そうになった。

なんだこの服装は!?

下着が見えるほど薄々な絹のパジャマを着て胸元が大きく開いた……  
つて胸、そんなにないから心配ないな。

と、その瞬間ものすごい勢いでキックを腹に叩き込まれた

「ぐはっ!」

寝ていてもまるで起きているかのように……  
さつき動いたせいで服がはだけてきている  
まずい。この服装はとても危険だ……。

その後、絶対にシルクシャシャを起こさないように自室を出た。  
もし起きたら何されるか分からないからな……  
シルクシャシャの事だからマジで危ない

ガチャ

「今日もいい天気だなあ」

などといかにも呑気な事を言ってみる

大きく伸びをし両道を見ると左からとてととアイシエス姫が走ってきた

「どうして一緒に寝てくれなかったのですかあ？」

「いや、俺は一緒に寝てたんだけどなあ……」

「では、誰が？」

「うゝん分らない」

とぼけたがバレずに済んだ

ちよっと悔しそうな顔をしたアイシエス姫だがこんなことを言ってきた

「今日も……いい……ですか？」

その言葉の答えにまたしても悩む俺であった……。

## 第二十二章 寝る子は育つ（後書き）

次回はEX・調和

EX?

調和（前書き）

ブレイクたちがウェイルバザールへと移動中の頃  
魔王城では男二人が話し合っていた。

EX？

調和

魔王城・王部屋

「刺客が失敗したせいで予定は少しずれたが、計画にはまったく問題ない」

「そうですね。魔法破壊計画は成功しましたし次は世界征服ですか？」

「いや、今世界を支配しているのはフォレストランス。もとはと言えばこの世界の者でないがな。  
その名前すらも本当かどうかかわからない、しかし俺の力では勝てる見込みがない……」

「はあ。そんなこと言わないで下さいよ。」

ギーヴァ様が世界を支配できるようになればどんなに良い世界が待っていることやら」

「しかし、フォレストランスの強さは尋常ではない。

先代魔王ザキールは突如現れたそいつによって瞬殺されたことになっている……」

「に……人間がですか!？」

普通に考えて人間が、しかも1人で魔王に勝つなんて考えられない

「何かの間違いでは？」

「それは無い。魔王に受け継がれる記憶は絶対だ」

そうだった。とツアツエは思う

魔王には次に王になる者にほとんどの記憶を受け渡すらしい  
だから小さい頃からほとんどの魔法を知り尽くしている。この世界の現状も

もちろんのこと、魔法を使いこなすことは出来ないが、  
知っているだけ他の奴らとは段違いの強さを誇る

魔法の性質の理解もまた重要な事である。だからこそ魔王は強い  
魔界を統べる王となることが出来る。

ましてやギーヴァ様に勝てる者などいないとさえ思う  
しかし、現状には唯一勝つことが難しいとされるフォレストランスと  
呼ばれる者

そいつにさえ勝てばこの世界は我らのもの同然  
でも、これからどうなさるつもりなのか……？

「それでは、これからどうするおつもりで？」

「少し時間はかかるがブレイクを利用してフォレストランス。奴の突  
破口を探す」

「なぜあの人間を？」

「……それはだな」

ギーヴァに聞かされた話とはんでもないことだった  
しかしそれが本当なら、いや、本当だからこそ、とてもつかえる案  
だった。

「それはそれは……。手伝えることがあるなら何でも言っして下さい  
！」

「だがな、その作戦を実行するには相当な時間があるんだ。」

「そうなのですか？　なら、何を？」

「しばらく中断していたあの老人の息の根でも止めようと思ってな」

「さすがはギーヴァ様。場所はつかめているのですか？」

「大体の位置はな。」

あの老人、ファンベルを長生きさせるわけにはいかない。  
一番厄介な奴だがそいつさえ倒せば邪魔な奴はいなくなり  
この先の進行度がずいぶん楽になるに違いない

「フッフ……これから面白くなりそうだな……」



EX？

調和（後書き）

次回更新は12月12日

そこでしばらく勝手ながら執筆は休ませてもらいます。  
とりあえず少し前にも活動報告に書いときました。

## 第二十三章 駆け落ち勘違い

時刻は午前9時を過ぎようとしていた

俺は城で一通り準備を済ました後、誰かに見つかるとうるさいという理由で抜け出してきた。

そんな考えは全くなかったのだが、アイシエス姫がどうしてもそうしてほしいと言ってきたからであって、俺は何も、黙って城を出なくたって良かったと思う

まあ、そんなこんなで、現在はアイシエス姫とウエイルバザールに向かっている所だった

「ブレイクさん！何見ますか？何処を見て周りますか？」

「そうだなあ。アイシエ……ティーナに任せるよ」

「ティ、ティーナ……！？ さっき、ティ、ティーナと言いましたか！？」

「みんなに知られている名前じゃ絶対に呼んじゃいけないだろ？」

「それもそうですね もうなんだか、それだけで私……」

恥ずかしさを紛らわす為か、心の底から嬉しいのか。

クルクル回りながら服や髪をなびかせ喜びを精一杯、体全体で表現する。

それにしても、はしゃぎ過ぎじゃないか？

と思ってもしょうがないほどの元気っぷりを見せているこの姫はこんなに元気に走り回れたのか……。普段見ることのない元気な行動を目にするとなんとも愉快的気分だ。

「そんなに走って転ぶなよ」と声をかける

可愛い笑顔で明るい返事を返し再び走り出す少女は俺の心配を吹き飛ばさせてくれた。

んで、名前だけ変えても姿で分かってしまうので、もちろん変装中だ。

まあ。心配を吹き飛ばしてくれたというものの、フードをかぶせメガネをかけている程度の変装ということから、嬉しいのは分かるけど。こつちとしては、その変装が、いつ取れてしまうかハラハラしていた。

ウェイルバザールの入り口にさしかかると急に幅が狭くなり

その店と店の間は5、6mくらいにまでなった。全ての店が赤レンガで統一されていて、看板や彫刻などは、まるでフランス、イタリアにいるような雰囲気味あわせてくれる。

アイシエス姫が言うように確かに賑わっているから尚、退屈させないパラソルの下で飲み物などを口にしながらゆっくり休む人もいればきらきら輝くジュエルに心奪われる女性たち。

他にも大道芸や道端に絵を描いて遊んでいる子供たち、とても楽しそうだった。

「ほんとに賑やかだな」

「そうなんですよ。来てよかったと思いませんか？」

日本にはこんな雰囲気の場合は無いしな、貴重な体験が出来たかな  
って言ってもこれからこの貴重な体験はいくらでも出来るけどな……

「そうだな。ティーナのおかげだよ」

「あ……」

何故俺がアイシエスと言わなかったのかはさっきの事で理解できて  
いると思うが  
それでもやっぱりこう呼ばれると、そうなるのか……

「なんか悪いな」

「い、いえ大丈夫です。むしろそちらで」

「なんか言ったか？」

「あ……何でもないですっ」

「それにしてもどの店に寄ればいいのか迷うな……」

周りを見渡してもどこの店も良いから選び難い

「ブレイクさん。この店に入りましょうよ？」  
そういつて手を伸ばした先を見るとそこは服が売られているところだった

「服が欲しいのか？」

「はい。私でも似合う服があるか試着もしてみたいのです」

そりゃなんでも似合うに決まってるだろ  
まったく。こういう子に限って自分がどうだのこうだの言って……  
容姿は完璧だっていうのにさ

「そうか。んじゃ入るか」

そういつて楽しいお買い物ものが始まった。

## ヴェセア城

その頃ヴェセア城では……

バダンッ！！

「ギフェア隊長ー！！」

よほどのことだったのか練習中に着ていた鎧を脱ぐのを忘れて猛ダツシュで入って来た

「どうした？そんなに慌てて？」

俺はどんな状況下であっても平静を取り繕う。

それこそが騎士団隊長としての資格であると思う

「それがですねえ……」

「なんでも話してみろ？」

話づらいことなのだろう

しかしどんなことであろうと隊長であるこの俺が、的確な指示を与えるべきだ！

「ブ、ブレイク殿と、アイシエス姫様が駆け落ちなされました」

「なっ！！　んなぁんだとおおお！！！！」

「ギフェア隊長！落ち着いて下さい。」

「こんな状況で落ち着けるかぁ!!」

テーブルをバンと叩き立ち上がるギフェア

すでに先ほどまで考えていた隊長の資格など欠片も頭には無かった

「いや、でも…」

「駄目だ！なんとしても駆け落ちなど、駆け落ちなどおお!!」

「待って下さい！その情報も確かではありませんゆえ。まずは落ちて下さい」

部屋から出ていこうとするギフェア隊長を必死に押さえる練習生

「なっ！……そうか、でも2人していないのであろう？誰かにさらわれたのかもしれない。

とにかく、ここらへん一帯をくまなく探して邪魔する敵は全て排除だ！」

「わ、わかりました!!」

「騎士団員は50人いれば十分だろう。ただちに向かわせる！」

「はい！」

正直こんなことに50人は多いだろうと思いつながらも  
その後、練習生はクラスB騎士団50人と1人1人武器を持たせ城  
を出たのであった

ウェイルバザール -

「どうですか？似合ってますか？」

白いワンピースに白い帽子・そしてライトグリーンの伊達メガネ  
まるで天使のようだった  
しかし白好きだなあ  
先ほどから白を基調とした服ばかりだ

「とても似合ってるよ」

「ほ！ほんとですか！？」

まさにこの繰り返しである

それでも天使のような姿を見ているだけで  
この13回目のループでさえも苦痛には思わない  
しかし、さすがに疲れてきた

「それで、どれが欲しいんだ？」

「うーんとですね……。迷っちゃって決められません」

そうだよなあー。普通に考えてそうだよなあー。

13着も着たらどれを選ぶかなんて

正直、俺はどれを着てくれないかと思っている

もちろん適当ではなく。何を着ても似合っているからである

「んじゃ、また後で来るか？」

「それは嫌です」

即答かよ……

んじゃ、待つとするか

30分経過……

「どうだ？決まったか？」

「これもいいしあれもいいし。あっちのもいいし……」

1時間経過……

「まだか？」

「ちょっと待っててください。もう少しで決まりますので……」

2時間経過……

「まだか？」

「ちょっと待っててください。もう少しで決まりますので……」

3時間経過……

すごいなあ〜と俺は思う

アイシエス姫の服選びもそうだが  
俺の根気の強さ。これには驚いた。

最初のころに比べれば精神的にだいぶ強くなったと思う

「そろそろいいか？」

「はい！これにしますー！！」

選びに選び抜いた服は先ほど着ていた  
白いワンピースに白い帽子・ライトグリーンの伊達メガネだった

「とっても似合ってたよかったです」

「そうですか？これにしてよかったです」

女の子の買物物は結構長引いたりするものだと思っていたが  
これほど待つのは正直つらかったりする……  
でも、可愛いから問題ないか？

「銅貨5枚と銀貨7枚になります」

実に日本円にして7500円  
意外に普通だったりする

でも、どうやらこのお金については少し前にキルティ直々に俺がひそかに貯めていた貯金からダイレクトに引き落とすらしい。死んだ今となつてはどうでもいいことだが、なんかとても不愉快になった。当のキルティはいくら女神でもお金を作り出すことは出来ないのよつとまあ、普通の回答をよこしてきた。だからって……………

カランカランッ！

「ありがとうございました」

「ふう〜なんかもう一日分の力を使い切ったみたいだ……」

隣にいるアイシェス姫はすでにお気に入りの服に着替えている。  
クルクル回りながらワンピースをひらひらさせる

「ランラン ランラン」

これほどまでに買ってあげたことを嬉しく思うのは初めてだ

「あ、この店。新しく出来たんですね？」

俺の聞かれても困るが、確かに色の付き具合とか他と比べると違う  
ような……

「凄い綺麗な石ですね。いろいろな色が並んでいます」

ん？ これって、シオラ石じゃないか？ いや、シオラ石だ。  
しかし、シオラ石が店に売り出されるなんて……

緑以外の石は入手困難とされているのに、何かが怪しい……

俺がその店に入ろうとしたその時  
右から見覚えのある人が歩ってきた

「ウエズペスさん!？」

「あら？ブレイク君じゃない」

なんかすごい人に会ったと思う

イスナル城はマロハス地方にあり、ここガダルナ地方との距離は50 kmにも及ぶ

一体何の用で……？

「何しにここまで来たんですか？」

「そうねえん。トルツ君の好きだった、カIFEレアの花を探しに来たのよ」

「カIFEレアの花？」

「ガダルナ地方の海辺に咲く、太陽と海の色で出来たともいわれる程綺麗な花なんですよ。

葉、茎、根などは綺麗な水色。花は太陽のように真っ赤に染まっていて、アロマな香りがして気分が落ち着くと言われています。」

すかさずアイシエス姫が入ってくる

「よく知ってるわねえ。ブレイク君の彼女さん？」

「か、かかかの、かの彼女!？」

あーあ、また頭から煙が……  
もちろん例えだが、こうなってしまうと何を言っても聞こえない

「この姫にはちょっと刺激が強すぎちゃったかな？」

俺は苦笑いをするしかなかった  
と、そこに誰かの大声が聞こえてきた

「邪魔する者は全て排除しろとの隊長からのご命令が下っている！  
ブレイク殿とアイシエス姫が戻られるまではこのご命令は絶対であり  
匿う者にはそれなりの罰を覚悟してもらおう！そういうことから

」

「何々何々！？」

全く状況がつかめない  
今、どんな状況なの？

「ブレイク君はだいぶ好かれているのねん。  
私も、そういう隊長になれるように努力しなくちゃ。」

「ええ！男に好かれる筋合いはありま……。居ない……。」

何と早い人だとこの時初めて思った

人は見かけによらないという事だな……

それにしても今はこの現状をどうにかすることだ…… って！

「ここらへんに敵がいる可能性が高い。みな武器を構えろ」  
カチャカチャッ！

ぶ、武器！！？俺たちをどうするつもりなんだ！？  
俺はとりあえずアイシエス姫を抱っこしてその場から逃走した。

「きゃっ  
」

ビックリしているかというか嬉しそうというか……  
とりあえずデート打ち切りには不満も何も無いみたいだった

「こちらB班、ご二人の姿は見えません」

「こちらC班、この付近にはいません」

「了解。しばらくしたら元の位置まで戻ってきて」

クラスB騎士団をまとめるのはメルズ・ファルター

先ほどの練習生である。

ギフェア隊長のご命令によりウェイルバザールまで来ているのだが  
ここにもいなそうだ

と、思いきや……

「ん？」

ブレイクさんらしき人発見！  
後は目の色の確認だな。

ササササッー

見つからないようにおそるおそる忍び寄るとやっぱりブレイクさん  
だったが  
もう一人は……？アイシエス姫？？

「おい？何やってんだ？」

びくう！

として後ろを振り向くとブレイクさんが立っていた  
「えっ？ええ！」

「何してんだって聞いてるんだけど？」

あそこにさっきまでいたというか俺はずっと見ていたのに  
なぜ2人……？

「あ、えと、そのですね。ギフェアさんに頼まれて……」  
「俺らを殺せと？」

「いえいえいえいえいえ、ち、違います！！この武器は誰かに連れ去られていたらの話です」

慌てて武器をしまうメルズ・ファルター

「そうだったか……」

「この！ブレイクに何をするっ！！」

「えっ？ ごふっ……」

「まったくなんという無礼をしているのか」

「おい、シルクシャシャ。俺はこいつと話をしていたんだが……」  
全身に戦闘オーラを放っているシルクシャシャが来た

「襲われてたのではなかったのか？」

「そうだけど……」

なんてことをっ！！てな顔で青ざめるシルクシャシャ  
はぁ。まいったな。

言わしてもらうとこの泡吹いてるこの子と会う以前にシルクシャシ

ヤとはもう会っていた

そして、追われている事をはなして、シオラ石を使った幻覚術を教えてもらい。この子に見せて今に当るのだが……

「悪かった。悪かった。この私に何かできることでもあれば……」

「何言っても無駄だろ？ 気絶してんだから」

「ん？ なんじゃ？ ふむふむ、私が悪いので何もしてくれなくてもいい？ わ、分かった。すまないな」

おい、普通に会話してるみたいに見せるな  
まったく……。自分を無実にするためにこんな猿芝居を……

「みんな！ ブレイクさんを見つけたぞ！！」  
「ワァー！」と走ってくるのはすでに攻撃態勢に入っている騎士団達

「わっ！ マズいだろ、逃げるぞ！」  
あれ？ なんで命狙われてるの？

「待てえー」

「待てるかってのー！！」  
「ってなんか構えだしたし」

「弓矢部隊。撃て!!」

部隊をまとめているっぽい人が命令を出した瞬間、雨のように矢が降り注いできた

「おいおい!なんかおかしくないか!?!?『プロタクス』(物理防御)」

パシュ!パシュパシュ!!

何とか防いだがこの後はどうすればいいんだ!  
アイシエス姫を抱えたままじゃ完璧に相手を撒くことなんてできないし……

「むむうゝ。鉄砲部隊。撃て!!」

てっ!?!鉄砲!?!?

「『プロテクス』(絶対防御)」

キンツ!キュイン!パキュン!

「鉄砲が効かないだと!?!」

物理攻撃の最強武器ともいわれる鉄砲をいとも簡単に弾き返されてしまい

わたふたと焦り始める……

「ったく、『プラーミヤ』（炎）  
ボオオオ！！」

「炎！？魔法は使えないはずっ！」

ずいぶん慌ててる様子だな……

赤色のシオラ石を片手に握り、いつも通り魔法を唱えれば使用可能だなんて

手に握る以外は前と変わらないんだな。

当然こんな珍しいシオラ石を持つてる奴なんて居ないに等しいだろうし、知らない者も多いだろう。

と言ってもこのシオラ石。

ちよっとしたかすり傷で割れてしまうほどデリケートだと聞いた  
はつきりいつて、もろすぎだろ？

「おい、シルクシャシャ何かいい方法は無いのか？」

「何かに変装するってのはどうじゃ？」

「俺も変装できるのか？」

「私とキスすれば大丈夫じゃ」

自信満々に話すシルクシャシャ。

お前の考えは既にお見通しだ！なんて探偵っぽく頭の中で展開した実際のところ、キスしなくても平気だろう

「なんじゃ？」

とりあえず手を握る

「手じゃ駄目なんじゃ。魔法が唱えられんじやろ。せめて私に抱き着いてくれぬか」

抱き着くって……

俺が少しの間黙ると何か察したのか不機嫌そうに

「何じゃ？ それくらい良いじやろ」と言ってきた。

はいはい。そういつて俺は後ろから前に手を通して抱いた

「そ、そうじゃ、ブ、ブレイクもやれば、で、出来るのではないかいや、これくらいできて当然だろ？」

これくらいで照れる奴がキスなんて軽く言ったって

「では」

シルクシャシャの右手には白色のシオラ石が握られていた

「我が身をリ्यूズマキイに変えよ！」

別名、天舞う大鳥

豪雨が来ようが、強風が来ようがお構いなしのタフさを持つ

一瞬、竜とでもいうのかと思ったが平気だった

そんな目立つようなことをするほど、こいつも馬鹿じゃないだろうしな

バサッ！

「んなっ！！姿を変えたぞ！？ あ、あれは、リ्यूズマキイだ！」

「どういうことだ！？皆立ち止まるな！追え！追えー！」

はあー。これからどうしよ……

「思ったんじゃが、どこに行くのじゃ？」

「とりあえず。城に戻ろうぜ」

「……いや、その前に寄りたいところがあるのじゃが、いいかの？」

「どこにだ？」

「サフェン地方のレンファート遺跡跡地じゃ」

「遺跡跡地？どうしてそんなところに？」

「それは行つてからの楽しみじゃ」

一体シルクシャシャは何を考えているのやら……

大鳥に姿を変えた俺とシルクシャシャとアイシエス姫は城に戻る前、宿で一晩過ごし、サフェン地方のレンファート遺跡跡地へ寄り道をする事になった。

## マロハス地方・イスナル城

その日、イスナル城では、仕事を終えたウエズペスが帰城していた

「ふあゝあ。トルツ君の分まで頑張らないと！」

資料整理に努めるウエズペスは手元にあるトルツの写真を見ながら言った

時間帯はすでに日付を過ぎていたがこの整理が終わるまでは寝れなかった

「まさか、ブレイク君と“お姫様”まで一緒とはねえ」。

しかも、あの様子だと恋をしてるのかな？肝心のブレイク君は気づいていないみたいだけど……」

驚異的な観察力を備えているウエズペスにはあんな変装など光の速さで見破れた。

でも、あえて言わなかったのはちゃんとTPOをわきまえていたからこそ。外見や性格とは裏腹に頭脳明晰で、小さい（まだちゃんとした男の）頃は多くの女性によく思いを寄せられていた。いつても当の本人には女性に興味は無く、しだいに男性に対して思いを抱くようになってしまった。きっかけはもうこの世にはいないあの少年……。

「はあーあ。カルフエレアの花は結局見つけれなかったのよねえ」  
「残念……」

ブレイク君と別れた後も他の店を探し回ったのだが何処にもなかったというか自然に生えてるカルフエレアの花を私自身が見たこと無い

「トルツ君なら知ってるんだろうけどなあ」  
「そっさいながら再び資料をまさぐると変わった色の封筒に入った手紙を見つけた」

「ん？ なになに……」  
手紙にはこう書かれていた

我が隊長ウエズペスへ

正直、こういうのを書くのは苦手ですけど書きます。

僕にもしものことがあった時この手紙を読んでください

少し前にわかったことなんですけど、カIFEレアの花というのは異世界にいざなう花だそうです。まあ異世界と言っても想像つかないでしょうけど。

どのような仕組みになっているかとか、どうすれば行けるのかなど詳細は全く分かりませんが、こういう情報は知っておいた方が良いのかと思いついて、かといって今は言葉で伝えるほどの情報でも無さそうなので、こうして紙に書いて保管しようと思ったのです。

ちなみにカIFEレアの花の在り処はファンベル爺が知っています。毎年採取場所が変わってしまうので僕には何とも言えないのですがその人に会えばきっと何かわかるはずですよ。でも、無理はしないで下さいね。体調とか崩されても困りますので

それでは、これから隊長として頑張ってください。

忠実なる部下 トルツ・イオナンテ

「トルツ君……」

決して長い文章ではなかったが私を氣遣うトルク君の優しい言葉は涙を流すには十分な量だった  
そして決めたことがある。これからはファンベル爺という人に会うために旅に出ようと。

「しばらくの間、城のことはジェミラスに任せておけば良いよね」

ぼそつと一言いうと出発する支度を始めた

第二十三章 駆け落ち勘違い（後書き）

次回更新日 ?/?

## サンツエルク大図書館 入口付近本棚（前書き）

ご入館ありがとうございます。

ここはサンツエルク大聖堂の中にある図書館でございます。

館内は大変広いため目的の本が見つけれづらいかもしれませんがご了承ください。

たくさんのお本の中には、もしかしたら、驚きの発見があるかもしれません

当然、物語の進行は全くないので、暇でしたらということ。

それではこちらから入場して下さい。

サンツエルク大図書館 入口付近本棚

・調合レシピ1・

薬草の作り方

癒しの葉＋魔力＋（天然水）

補足

天然水を入れることによって  
飲みやすさが格段に変わる。

天然水を使わない場合、正露丸の糖衣無しを水無しで飲む感じ  
天然水を使った場合、糖衣有りを水と一緒に飲むと言えば分るだら  
うか？

簡単に言えば天然水は入れないと3日間は苦さが残るらしい……

・劣黄血の少女 上巻 （長編）・

今から70年前。黄絹帝国と言われる所にたった一つの命令の為に  
感情無しに動き続ける女狂騎士がいた。

そこで暮らす人々は皆血の色が赤ではなく黄色であった

別に血の色が黄色だから狂騎士だということではない

しかし守らなくてはいけない決まりという掟が定められておいそれを破ってしまうと体内の血が異常反応を起こし人格が豹変してしまう

そんな恐ろしい掟も守ることは簡単だった。だから破る者なんていなかった。

あんなことさえ無ければ……

そこで私が悲しき少女の話を書き留めておきたいと思う

古い友人から聞いたことだから記憶も薄れてしまっているが思い出しながら書く為、間違っている部分などは承知の上、よろしく願いたい

「お姉ちゃん！」

「なーに？」

私の可愛い妹が何かを手で持ってこちらに走ってきた

「はい。これあげる！」

それはお花でできた冠だった。

綺麗に彩られていて配置もよく考えられている。

「ありがとうね」

私が受け取ると可愛い笑みをして隣に座った。

しばらくお話をしていると次に弟が走ってきた。

「みてみて蝶だよ。綺麗でしょ？」

「珍しい蝶ね。どこで取ってきたの？」

「倉庫の近くで飛んでたから取ってきたんだ」

倉庫？小さいころお父様に絶対に入ってはいけない場所だから近づかないでと言われたところ  
いつもいつも何かを運んできては倉庫に持ち込んでいた。

「まさか、入ってないわよね？」

「うん！入ってないよ」

ほっと一息。お父様は旅に出てしまつて顔もあまり覚えていないけれど

優しくかったような気がする。よく遊んでくれた気もする。

「ねえねえ。昨日のお話の続きをして」

私が昔の思い出に浸っていると妹が話しかけてきた。

「うん？緑眼の少年少女…だっけ？」

「それぞれ！」

こんな難しい話、なんで好きなんでしょう？  
子どもというのは、童謡やおとぎ話なんかを好むのに……

そんな楽しくも小さな疑問も抱きながら一日が経った。

そんないつまでも続くだろう幸せな日もそう長くは続かなかった。

「おはようございます。お母様」

「あら、今日は早いのね」

小さいころはいろいろなお話を聞かせてもらって、私も今となってはあの子たちに教える身。  
恩返しをしようにもたくさんありすぎてどうしたら良いのか分からなかった。

しかし、お母様はただ一緒にいてくれるだけでいいのよ。としか言ってくれなかった。

「お母様。何か、貰うと嬉しい物とかありませんか？」

「そうねえ。無い…かな？」

「そうですか……」

「そんな無理にしなくてもあなたがいてくれれば嬉しいのよ」

そう言っただけでベッドから立とうとした瞬間。膝から崩れ落ちるように地面にへたりこんだ。

「お、お母様!？」

「大丈夫。大丈夫よ。」

そんなことを言っ立とうとしているがどうやら立てないらしい……

「お医者さんをお願いします。」

「少し休めば大丈夫よ」

「嘘！少しの変化だったけど、最近のお母様は何か様子がおかしかった」

「あら、気づかれていたのね」

扉を壊す勢いで飛び出た私は男子に勝るほどの速さでお医者さんを連れてきた。

別に運動が得意というわけでは無かったけど、お母様のために何かをできると思えば疲れを感じなかった。

「お母様！連れてきました」

早速診断を初めて私は付きっ切りでずーとそばにいた。  
妹弟も私が帰ってきたときにはすでにお母様のところにいた。

「うーん……」

何をそんなに悩んでいるのか、そんなに重い病気じゃなければいいけど……

「あ……。お母様はどのような症状で？」

「このことについてはこちらで」

お医者さんは私一人を違う部屋に連れて行きこれから精神的に辛い話をするかもしれないけどいいかい？  
と言われた。

「え…？あ、はい……」

お母様がなんだっていうの？

「急性足骨収縮病。この病気は歳を取るにつれて足の骨が弱っていき、しだいにいろいろな部分で炎症を起こしそこから出来てしまった。新たな菌が体全体をむしばんで死に至るというものです。」

「死に至る……」

その言葉が何度も何度も私の頭の中でぐるぐるぐるぐる回った。

「その治療法のことですが……」

「なっ直せるのですか！？」

「治療に使う材料なんですが、こちらのものをそろえてもらえれば」

そういつて差し出されたものは見たことも無いような材料ばかり並んでいた。

「こ、こんなもの……」

と、頭に倉庫という言葉が思い浮かぶ  
思ってきたときにはすでに走り出していた。

「お父様！ごめんなさい！！」

がらっ！と開けた先には棚の上に様々な形をした瓶がずらりと置いてあった。

片っ端から調べていって頼まれたものと置いてあるものを見比べてみた

「あつた！！これも！これも！！やったあ！これでお母様の病気を治せる。」

お父様に変なことをしてしまったと思いながらも感謝の気持ちをいますぐにでも伝えたいと思った。

しかし

「カIFEニアの花？カIFEニアカIFEニア……無い？」

急に冷や汗が出てきた。

「無い！？無い！無い無い無い無い！！どこにも無い！」

すでに安心しきっていた先ほどの自分は消え去っていた。

「なんで！なんで無いの！！」

走り回っていると机の上の古びた本に目が留まった。

「カIFEニアの花の育つ場所！？」

これだ！！と中を開くと地図が出てきた。

私は見つけた材料をすべてお医者さんに渡して妹弟たちにすぐに帰るわと伝え

飛び出ていった。

「なんて珍しい材料を持っているんだ！あの娘は一体……」

場所はそう遠くはなかった。

なぜお父様が持ち帰ってこなかったのか不思議だった。

「はあはあ……ここね。」

地図には森の奥の泉と書かれていた。

そこから数時間探したが見つからなかった。

「なぜ？なんで見つからないの！？」

だんだん日が落ちていき探すのはもう無理だと判断した私は家に戻った。

「お姉ちゃん！」

私を心配して外に出ていた二人は抱きついてきた。

「ごめんね遅くなって。心配かけてごめんね」

「うん。でもお母様が」

「お母様がどうしたの？」

「ベッドに横たわったまま目を覚まさないんだ」

え？

「お母様！？ あれ？お医者さんは？」

「用事があるから待っててって」

「用事？こんなに遅くなっても戻ってこないなんて……」

「それは君が騙されたからだよ」

「だ、誰！？」

後ろを振り返ると見たことの無い服を身にまとった背の高い男性がいた。

「お母様を助けたんだね？」

「はい。でも、もう……」

「そうか、魔人の契約って知ってるかい？」

そういわれた瞬間背筋が凍った

「お姉ちゃん……」

私の裾をぎゅっと掴んで後ろに隠れている二人に大丈夫よと声をかけ再びその男に振り返る。

この人は魔人だ。

「魔人の契約さえ交わせば君のお母様は助かるよ」

「お母様を助けられる……」

「そうだ。君の願いはそうなんじゃないのか？」

これが悪魔の契約だということは分かっている。だけどっ！  
お母様の命は私が必ず！

「ほうほう。魔人とともに話すとは……。君はもう後戻りはできない」

そう。この黄絹帝国での掟。それは魔人と話すこと、話さなければ掟は破られないし、魔人も下手には手を出せない。ようは自分自信が決めること。それは今私自信に起きていること、そしてその掟を破ってしまった。

「劣化した血は狂騎士へと変貌させる……。狂騎士になってしまえば何もかもを忘れて戦いを好む機会になっていくだろう。しかし、私と契約を交わせばまだ、どうなるかはわからない。どうだ？ 覚悟は出来たか？」

「魔人の契約。お願いします。」

「フフ…フハハハハッ！ 良いだろう。ではこれを」

手の平の上に出てきた器に何かが注がれる

「これを飲めば、契約は成立する」

「お姉ちゃん？」

「大丈夫だから。お母様は必ず助けるからね」

そんなに量は多くなかった。しかし鋭い何かで体を引っかかれるような痛さを感じた

「痛いっ!!」

「そうか、痛いか？その痛みを乗り越えれば君の言うお母様が助ける。そう思えばそんな痛みも痛くはないだろう？」

「はあはあ……」

「契約完了。これからは私の言うことをちゃんと聞くんだぞ？」

「はい」

それでお母様が助けられるというならば……

・ 大魔術師の血筋 1巻 ・

『そう。テベスは、シナハの子』

これは、偉大なる魔術師誕生の苦勞と喜びの物語である。

偉大なるラックポート家は次々と大魔術師を作り上げていった

しかしある時ラックポート家の血を受け継いでいるはずなのに魔法が使えない子がいた

魔法を使うことに恐怖を感じているらしい

我々は丁寧に優しく教えていった

初級魔法は普通に使えた出来栄えは完璧だった。

他の子らと比べても各段に違かった

この子を育て上げたら今までにいない最強の魔術師が誕生する！

はずだった……

魔法のレベルは中級までは非の打ち所が無い完璧な魔法だった

しかし上級となると成長はピタリと止まり上達は全くといってしなかった

我々は考えた。

後もう少して偉大なる魔術師が誕生しようというのにここで諦めて良いものか……

そして。昔に何か恐怖感抱いているのでは？と思いその子に訊いてみた。

だが、その子は首を横に振るだけで何も言わなかった……

いくどもいくども優しく訊いたのだが心を許していないのか  
話すことは無かった

そんなある日、とうとうしびれを切らした私はその子に怒ってしまった

もちろんすぐに誤った。こんなことで怒るなんて私はどうかしている……。

その直後、その子は叫びだし体中が青く光り出した

#### ・ 少年少女緑眼狩り事件・

私の可愛い子供たちは男女合わせて26人  
綺麗な緑色の瞳をしている

しかし緑眼狩りという残酷な事件により数は減りつつある

なぜ幼い子供たちだけを狙い殺す必要があるのか……

そんなこと死体をみれば解ってしまうことだが、その取り除いた物の  
利用法が私には理解できない

ある調査レシピを見ると書いてあるのだが禁断のレシピとして危険

と判断し燃したはずだった

しかしそれには既にコピーされた全く同じレシピが存在した

だからこのような事件が起きてしまった

私は守らなくてはならない

後日、その子たちをあちこちの地方に住まわせあいつらに気づかせないようにした

私にもあの子たちの居場所は分からなくなってしまったが、生きていてくれればそれでいいと思う

あの子たちに神の御加護を

## ・調合レシピ2・

緑シオラ石：上位編

下位緑シオラ石＋緑色の瞳＋生きた赤い糸

まず下位緑シオラ石を置き赤い糸で結びます。

緑色の瞳の核を取り出しシオラ石の上に置きます。

水魔法で赤い糸と化学反応を起こし下位シオラ石は上位のシオラ石

へと変わります。

補足

緑色の瞳、生きた赤い糸。ともにとても入手困難なため発掘で入手するほうが安全である。

この本の制作者の私もこの場では書くことは出来ない。その気になれば書くと思うのだが……

・時巡る神秘説・

昔、ある時、ある場所で、とある少年少女が木陰で話をしていた

「ねえねえ！この世界は私たちの知らないところがまだまだたくさんあるのよね？」

「うん。そう聞いたけど……」

「んじゃ、私たちがもう少し大きくなったら一緒に旅に出てみない？」

「えっ！そんなの無理だよ。親にも怒られる……」

「そんな弱気になってちゃ、この広い世界を旅した時痛い目に合うわよ？」

「そんなこと言われても」

「だって、あの時私に言ったじゃない。君を一生守って見せるって」

「あ、あれは……」

「もしかしてえ。嘘だった……なんてこと無いでしょうね？」

「違う違う！嘘なんかじゃないよ」

「んじゃ、約束ね」

しかしある時その少年は遠くに引つ越さなければならなくなってしまった。

どうやら親の仕事関係らしい。私にはどうすることも出来なかった。

「な！なに泣いてるのよ！この弱虫！」

「き、君だって泣いてるじゃないか！」

「ぐす……泣いてなんかいいわよ！か、必ず戻ってきなさいよ！」

さよならとは言えなかった、だけどまた会いに来れる保証も無かった。

それほど遠い場所。一生のうちに一度も行くことの無いだろうところへ

「うわあああああ！！」

だから何も言えなかった。ただ大声で叫び泣くことしかできなかった

た。

僕を弟のように優しくしてくれたその少女との別れは胸が張り裂けそうなくらい辛かった。

それからその少年とは一度たりとも会う事は無かった。

でも、あの時交わした約束は一度たりとも忘れなかった。

そしてその少女は少年に会うために旅に出ることに決めた。

1人での旅は辛く悲しく寂しく……。

でもやっとの思いでその少年の家についた。

やっと会える。何年振りだろうか……

当時8、9歳という二人が今では立派な大人へと成長しつつあった私を覚えているのか？という不安はもの凄くあったが、そんなことよりすぐにでも会いたかった。一目見たかった。

だが、その家には少年はいなかった。

その少年のお父さんやお母さんすらいなかった。

埃もかぶっていてとても人が住める場所では無かった。

何があったのか？

その謎が知りたくてその少女は再び旅を始めたのであった。

サンツエルク大図書館 入口付近本棚 (後書き)

まだまだこの図書館の100分の1も見えていませんよ？

後日来れば増えているかもしれませんね。

この図書館は本減ることなき増え続ける場所ですから

また、場所を移動すれば新たな発見があるかもしれませんよ

場所の移動はどうすればいいかって？

それは時の流れに任せるものですよ

それでは、またご入館ください。私はいつでも待っていますので。

## 第二十四章 封印されし精霊

### サフェン地方・レンファート遺跡跡地

「ここがレンファート遺跡跡地……」

緑が生い茂る場所に建物があったと感じさせる煉瓦の破片が転がっている

もはや膝より高い障害物は無かったが一つだけ俺と同じくらいの身長  
の碑石みたいなものがあった。

アイシエス姫は寝心地の良さそうな場所に寝かせてきた  
とうぶん起きそうも無いし……

「あれはなんだ？」

「そう。これのためにここに来たようなものじゃ」

「……これのために？  
どういう事だ？」

「ブレイクはその剣に何かを宿しているのか？」

「え？（何で分かった？）」

（あなたは私の声が聞こえるのですか？）

「もちろんじゃとも。お主の声は聞こえとる」

なんかすげえー

いろんな意味でシルクシャシャは凄いと思う

「俺が宿したわけじゃないんだ」

「そうなのか、では、お主自身が宿ったのか？」

（私はもともと宿っていましたが自分で宿ったわけではありません）

ふむふむと顎をなぞりながら考え込む

しばらく考え込んだあと、シルクシャシャは俺の方を見て封印を解いてみないか？と言ってきた

「封印を解く？」

「そうじゃ、封印を解くことによって、この者を実体化出来るのだぞ？」

マジっ！

そんなことが出来るのか！？

「んでも、そんなことしたら剣による自己作用が無くなるんじゃない…」

（それは大丈夫です。剣を操作するのは宿っていなくても可能ですので）

「こんなことをするには私にとって、敵を増やすことにしかならぬのじゃが……」。

これからさき、こうしておくことによって、ブレイクも何かと楽になると思っんじゃない」

「楽になる？」

「そう、仲間を増やすことは重要な事じゃ。」

溜息を一つ

不満の方が上なのかあまり笑顔ではない

（ですが何故いきなりそんなことを？）

「近時、刺客が来のじゃ」

急に真剣な顔になり話し始める

「し、刺客！？」

「そのためにも、いろいろと対策を練らないといけないんじゃない？」

俺の周りをくるくる歩きながら話す

「ミヴィが必要なのか？」

「まあ、そうなんじゃよ。」

「ってか何でそんなこと知ってたんだ？」

「風の便りじゃ」

空を見上げて風を感じるように目を閉じる

シルクシャシャは物真似…声真似は出来ないけど

そういうこととしてそこら辺の街をうろろしていれば

裏情報的なものも手に入るのか？

なんだかすごいスキルを持ったメンバーと行動してるよな。

二重スパイ…とか言わないよな……。

「それより、その封印を解くにはどうしたらいいんだ？」

そういうとシルクシャシャは俺に向かって両手を前に広げた

「何だよ？……抱いてくれってか？」

「そもそも、その剣が無くては何もできないんじゃないか？」

ブレイクがよいと言うのであれば私の体はいつでも空いているぞ？」

「ああ悪い悪い……ヴェーア！」

シュン！と音を立てながら現れた空中に浮かぶ剣を手に取りシルク  
シャシャに渡す

「ぶ、ブレイク、せめて鞘に剣を収めて渡してはくれぬか？」

結構びつくりしていたようだがこの剣にしまっ鞘などそもそも無い  
そう告げると恐る恐る剣を受け取り碑石の前で剣を振り上げる

「相変わらずだが、私の言ったことを軽く受け流すことは止めてく  
れぬか？精神的に痛い」

だったら言わなきゃいいだろうが！

などといったら立ち直れなくなりそうだからやめておいた。

「ああ、あれは冗談だったのか？ならこれからもう受け取るよ」

「な！なんじゃと！？じ、「冗談ではなくてだなあ……」

俺の返答に少しびっくりしていたようだが修正は不可能  
これからはとことんつつこんでアイシエス姫には誤解を招かないよ  
うにしくは

まあそのごたごたは少ししたら落ち着いた

私だって構って欲しいのじゃ。とか言いながらまた剣を振り上げる

「我、碑石の力を借りこの剣に宿る精霊を解き放つ、精霊の力の源  
は風・水・聖となり。

今ここに姿を実体化させよ。」

目の前に広がる眩い光により視界が閉ざされた

「うつー!!」

その出来事は数秒により視界が開けた  
そして目の前に立つ一風変わった服を身にまとう清楚な大人の女性  
が現れた。

「成功じゃな」

シルクシャシャは現れた女性が思わぬ綺麗さということで、成功し  
たことの嬉しさより  
そちらの方へと気持ちは傾いていた。

「ミヴィか？」

実体化されたミヴィは、俺と同じくらいの身長でストレートの金色の髪を腰まで伸ばしていた。  
目の色はピンクで服はアラビアン的な服装と言えば分るだろうか？  
まあそんな感じだった。

「はい、そうです」

相変わらず表情一つ変えないミヴィだがいつか笑ってくれる日が来るだろう

「んまあこんなところじゃ。帰るかの？」

とりあえず俺とミヴィの関わりを最小限に抑えたかったシルクシャシャは早めに切り上げようとした。  
もう、あまりの綺麗さに悔しさで涙が出てきそうになったほどだ

「そうだな。アイシエス姫もいつまでもあそこで寝かせっぱじゃ可哀そうだし」

俺がアイシエス姫へと向かおうとしたところシルクシャシャが立ち  
はだかり  
目を閉じつま先立ちになる

「どうした？」

「お礼くらい良いじゃろ？」

確かにこの行動がどういう意味を表しているかなど人目瞭然だが……

「よく頑張った！！シルクシャシャのおかげで助かったよ。ありがとうな」

と髪をクシャクシャしてやった。

「な、なんてことない！こんなこと朝飯前じゃ！」

キスをしなかった事による不満さは少し見え隠れしたがどうやらこれでも良かったらしい

## ジェキア地方・ガルヘント城

最強集いしジェキア地方に建てられたガルヘント城  
騎士や魔導師・武術などあらゆる人材が集められた姫様護衛隊  
しかし、その姫はどこへ行ったのか分からず、現在は消息不明となっていた

「なあ？セルウェンはどう思う？」

剣士として選ばれたハイシャル・イースタンスはたった6畳の狭い部屋に自分を含めた4人を入れ姫様について話していた。

セルウエン・フィードルト

地べたに寝転がりながら串刺し肉を上手そつに食べている黒髪黒服野郎に話しかける

「ああ、姫様の事か？どうだかなあ。俺にもサツパリ……。カラゾネスはどうだ？」

「どうだ？と言われても……、予想が全く付きません」

カラゾネス・パルキリート

メガネをかけて背が高く一見頭が超良さそつに見えるが学力的には普通である

超頭が良さそつだとよく勘違いされることが悩みらしい

「私は、誰かいい男でも見つけたもんだから一緒にいる、なんてこと、あるんじゃないかな？」

何かとんでもない事を言い出したこいつはミヤーゼル・セルターナ魔導師として選ばれただけのことはあり、俺たちを遙かに上回るフオースを持っている

もちろん魔法の知識も抜群である。こればかりは馬鹿に出来ない

「でもさあ、そろそろ帰って来てくれないと俺たち姫様護衛隊はどうなる？」

ハイシャルが手を広げみんなに言う

「別に誰か違うやつがいるんだったらそいつに任せようぜ？ ふあ  
あ……」

「相変わらずだなセルウエン。このまま姫が帰ってこなかったら俺たちの存在意義が無くなるだろ？」

セルウエンは串だけになった棒を外に投げると一言

「もしそうだとしたら休暇が増えるな」

真面目に結論を出すセルウエン

「増えるどころじゃないですよ！」

すかさずカラゾネスがつっこむ

「分かった分かった。探しに行きやいいんだろ？」

「探しに行くんだったら私も行くうー！」

ミヤーゼルは身支度を始めた

「そうと決まればすぐさま行こう。……ところで誰かエトロケスト

（目標探査）使える人いないか？」

「ああ、俺が使えるけど？」

「セルウェン。どういう時にそれを使うんだ？」

「好きな女の子の追っかけ」

「ほんとか！！？」

「嘘だよバーカ」

「え？えっ！？セルウェン好きな子いるの！？」

「いねーよ！ミャーゼルは黙ってる！……はあ。冗談でも言わなきゃ良かった」

こうしてガルヘント城の姫様護衛隊はシルクシャシャ姫を探しに旅立ったのであった。

## ガダルナ地方・ヴェセア城

「……………」

「見つかったのか？」

「……いえ。どこにもいません」

「これがもし駆け落ちなどという事になったら……分かってるな？」

「はっ！はい！！分かっています！」

まあ、ブレイクがそんなことをする人では無い、と言う事ぐらい分かっている

でも早急に連れ戻すためにもこう言っておくしかない  
何故なら近時か刺客が来るといふ話が出ているからだ  
このことについては話し合わないと城が大変なことになるかもしれない

「では、引き続き続行してくれ」

「早急に探し出します！」

「頼んだぞ」

急いで出て行ったクラスB隊員の背中を見た後、外窓を覗くと今日も快晴だった。

「さて、どんな奴が来るのやら……」

ギフェアはいろんな感情を感じながらブレイクの帰城を待った。

その後、数十分でブレイクたちが帰城し、ギフェアの部屋へ訪れたのだが、当然の如くギフェアは仰天した。ブレイクは旅先で一人の女を口説いて帰ってきたのか！？という疑問だ。当然首が270度捻るんじゃないかというくらいブンブン頭を振るブレイクだった。ミヴィの状況説明もありなんとか事態はややこしくならず済んだ。このことばかりは正直に言ってくれて心の底から感謝した。もちろんシルクシャシャの長い暴走もあったがめんどくさいので省く。アイセス姫も寝ていたため記憶が無いながらも一生懸命ブレイクのことについて話していた。

「ったく。困った姫じゃのう」

「あなたは黙っていてください！」

「お主が寝ていた間、私とブレイクの深い関係も知らずに良く言えたものじゃな」

「な！何ですかそれはっ！？　ぶ、ブレイクさん？」

「別に何もなかったよ。こいつの話は信用しなくていいさ」

「そ、そうですね。何もなかったですね」

まだ、少しは疑っているのだろうか？  
目だけをちよろってこちらに向けてくる。

「大丈夫だつて、気にするなよ」

「そういえば、じゃ。アイシエスが寝ていた間にしたキスの感想、いたっ！痛い。何をするのじゃ！」

俺は剣の平たい部分をシルクシャシャの脳天に叩きつけた

「……キス？」

可愛らしく小首をかしげるアイシエス姫だったが目がマジだった

「こいつの嘘だぞ？信じるんじゃないぞ！」

「でも、あの時はキス……確かにしてましたよね？」

なっ！これを言われたら対抗する術が無い  
時にアイシエス姫は恐ろしい……

「いや、あの時は事故だつて言つたろ？今回もそうなんだつて！」

「それはわかっています！わ、私が言いたいのは……」

「言いたいのなんじゃ？」

気になってしょうがないシルクシャシャ。目を光らせて問う

「私が言いたいのは……」

何をそんなに躊躇しているのか……  
なかなか話さない

「なんだ？」

「わっ！私にも同じことをしてほしいのです！……！」

「んなつ！？」

マジっすかー！？

なんだこの展開は！？

恋愛ゲームでもあるまいし、これはきつと、そうだ！これは夢だ！  
夢を見ているに違いない！俺の人生こんなに上手くいくはずがない  
からだ

普通ならこのままメテオやら聖なるなんとかやらをぶつけてくるはずなのに……

こんな可愛い女の子がこんなことを言ってくるはずがない

俺のハッキリと覚えている学校での経験が教えてくれる……

あの時、俺は女の子の一言によつて全てが壊れた  
俺の容姿は良くも悪くもない、いわゆる普通だった。  
仲の良い友達も結構いる方だった。そんなある日の事

俺は窓側の列の一番後ろだった。

好きだった女の子はその隣の列の真ん中  
ちなみに5×5の席並びだ

俺は授業中や休み時間、ずうーとでは無いがその子の事を見ていた  
しかし、その行為が全ての発端になってしまった。

キンコンカーンコン……

チャイムが鳴り授業が終わった。

ガン見ではないがその子を見ていた  
そしたらその子の近くに座っていた玲子っていう奴が……

「君この子のことずうーと見てるけど何で？」

「いや……。別に……」

「この子のが好きなんですよ？」

「いや、違うそんなんじゃないって！」

ほんととは違くないが指摘された事にたいして批判した  
こんな奴の言う事を認めたくなかった。誰しもそんな気持ちはある  
と思う。

「でも、ジロジロ見てたわよねえ」

「違うつて誤解だ！」

必死に否定した。だがしかし……

「どう思う？桜木さん？じろじろ見てるんだよあ？毎時間毎時間ずうーとね」

わざと大げさに言ってるこいつが憎かった  
今すぐこいつをどうにかしたかった  
だけど、止めるにも既に遅く……

「……………気持ち悪い」

その一言で俺の全てが破壊された……

「ほおーら！　君が見てるから桜木さんがきもがってるじゃない  
！」

「……………」

「なに？どうしたの？もしかしてえゝ振られちゃったことにショック受けてるのあゝ？」

俺は心の底から怒りの感情を引き上げた

「てんめえ……………」

左手に握っていたシャーペンの先をそいつに向けた

「さっきから話を聞いてればなんでもかんでも言いやがって」

「本当の事を言っただよ」

大げさの事実をまるで何もかも自分が合ってるのよ。というように言っただけだ。

「ふざけるな。自分勝手言いやがって！」

「へえ。あんた、いつからそんなに生意気になったの？  
あなたは私には頭が上がない筈よ？逆らおうって言うの？」

「そうだ。逆らってやるよ！人の感情、弄びやがって！」

「な、何よ。偉そうに。振られたことには違いがないじゃない」

「てめえがそんな言い方しなけりや、桜木さんには迷惑かからなかったろ！」

「そう。負け惜しみなんてダッサイ。素直にあなたが桜木さんに誤ればいいのに」

「この……っ！」

居ても経ってもいられなくなった俺は席を立ち玲子めがけて走って行った  
だが……

ガラガラ!!

「何やってるんだ!!お前たち!」

誰かがこの状況をちくつたんだかすかさず先生が飛び込んできた

その後、玲子も落ち着いたが話すことは一切無かった

「ブレイクさん?どうかしましたか?」

アイシエス姫の声にハツとした俺はしばらくぼーっとしていたことに気づく

「わりイわりイ……」

「あの?」

「なんだ?」

「先ほどのお話の返答は……」

頬を赤らめて言うアイシエス姫に改めて事の重大さを理解した

「あ、そ、そうだったな……。えっとだなあ」

「いつまでもそんな話してないで、本題に入るぞ!!」

ギフェアさん助かりました。

恩に着ます。

「ぎ、ギフェア。まだ、私は話して」

「今はそんなことをしている暇は無いんです姫様!

どこからか刺客がこの城に攻め込んでくるのですから」

とたんにアイシエスは仰天した。

「ほ、本当ですか!? それは大変です。ただちに会議を」

その後、俺たちは騎士団全員を会議室に向かわせた

### ギフェア城・会議室

「それでは、今回の事についてだが……」

ギフェアが話し始めた

緊張感漂う会議室にはギフェアさん、アイシエス姫、ミヴィ、シルクシャシャ姫（何故?）、マーシャ、ダロット、レクセル、ピロク、マールー、アイゼーン、ヴェステイ、キューラ、タミンと、結構な人数が集まっていた。

「おいおい、あいつ誰なんだ？」

ミヴィを見て当然のような反応をするダロット  
とにかくデレデレし過ぎである。

「知らねえよ。新入りか？」

と、マールーがめんどくさそうに答える

「なあーんかあの態度ムカつくわよね」

会議にもかかわらず偉そうに腕組みをしているシルクシャシャを見て嫌悪するヴェステイ

まあ、当然か……

そしてピロクはシルクシャシャに目を合わせられずにいた  
ずうーとこちらを見られている気がしてしょうがない……

「ど、どどどどどうしよう……」

マーシャの事も気に掛けるレクセル

「表情1つ変えない彼女は一体……」

そして、騎士団にすくない女性が増えるんじゃないかとつきつきしているタミンとキューラ

「な、仲良くなれるかなあ……。なんだか緊張する」

「そうね、なんか気難しそうだよね……」

一通り話し終わったギフェアが提案をする

「てなわけで、迎え撃つには、武器や薬品、食糧などが必要だ。手分けして集めてきてほしい」

と言いメンバーを指名した

「ブレイクと、ミヴィはオクマーサ・テゴレス錬金合成師の所へ向かってくれ。」

薬品の調達を任せる。シルクシャシャ姫とアイシエス姫、キューラ、タミンはキャラルにあるウイゴの実とナーヴァの葉とエルスの肉を頼む。紙に書いたから分からなくなったらそれを見てくれ。アイゼーン、レクセルは刺客への対応を考えてくれ。ダロット、ピロク、マールー、ヴェステイは武器やシオラ石をなるべく多く持ってきてくれ、金貨は後で渡す。以上だ。各自気をつけて行動してくれ」

「はっ！！」

## ヴェセア城・ブレイク部屋

「オクマーサ・テゴレス合成錬金師の場所はフェオルト地方にあると聞いたけど詳しい場所が特定できないんだが話かるか？」  
特にどこにも座ろうとしないミヴィに話しかけた

「フェオルト地方には街が1つ・鉾山が4つなので、その街さえいけば見つかると思います」

あまり感情を表に出さないためほとんどの会話が無表情だ

「そうか、何でも分かってて凄いな」

「いえいえ、長年生きていただけなのでその分物知りなだけです」

「そうだな。んじゃ行くか？」

「そうですね。移動にはクライムを利用するのがよろしいかと……」

クライムとは別名山駆ける狼と呼ばれているだけのことはあり  
平面はもちろん急な山を登ることも簡単にやってのける陸上動物で  
唯一乗って移動できる動物だ

「そうか、それなら移動がずいぶん楽になりそうだ」

そうと決まればまずはクライムを借りにギルダンダに行かないとな  
こうして薬品調達系のブレイク、ミヴィはギルダンダへと向かった。

## ヴェセア城・アイシエス姫部屋

「…………なぜじゃ」

何故このメンバーなのだろうか？

と考えざる負えないシルクシャシャであった。

よりによってアイシエスとやらと一緒にになるなど考えていなかった  
からだ

一方、アイシエス姫も同じことを考えていた。

あの人と同じ役目を任されるとは思わなかった

「え〜つと。あの〜」

キューラ、タミンの2人は気まずい雰囲気の話しかけられずにいた

「どうしよ、タミン……」

「どうしよって言われても……」

と、その時

「まあ、とにかくじゃ、集めてこない事には何も始まらん。  
その2人は、買う食材の場所が分かるか？」

「あ、はい。案内します」

ギフェアがこのメンバーにした理由は、単純にシルクシャシャとアイシエス姫の和解とキューラとタミンに仲良くなってもらいたいという事だけで組まれたチーム  
これから同行するにあたってどんなことが起こるのか。ギフェアは全く考えていなかった。

「私が、リストを持っているので何を買うのかは私が……」

「お主じゃ頼りないのじゃ」

といい取り上げられてしまった

「ひ、酷いです……」

「泣けばいいということではないんじゃ。  
そんなことでブレイクが優しくしてくれるなんて思ってたらしいに

なつても先に進んぞ。

しまいには、私がブレイクの心を盗んでやるつか?」

急に顔を赤らめるアイシエス姫。

そしてその話を聞いてしまったキューラとタミン。

「そ、それは本当ですか!??」

「え〜と、あの、その〜」

「まだ、はつきり言えんのならそこまで好きじゃないという事じゃない」

愛情が足りんのじゃ、と言いながら頭をポンポンやってくる

私より少し背が高いからっていうこともあるがなんかムカついた…。

「はつきり言えます!! 私はブレイクの事が大、大、大好きです!」

きゃー。という黄色い悲鳴が聞こえる  
もちろんキューラとタミンの事である。

「そんな争いも今は一旦休戦じゃ。早く買ってこないと迷惑かけてしまうからな」

「そ、そうですね。とりあえず今は急ぎましょう」

女の子4人組は何とか出発することが出来た。

しかし、ブレイクの件の事についてはここだけでは収まらなかった

……

## ヴェセア城・聖なる騎士部屋

「俺と、マールーとヴェステイは手分けして武器を探して、ピロクは荷物持ちな」

「そ、そんなあ」

「弱音吐いてると……分かってるな？」

「はいい」

気の弱いピロクを言葉＋目力で言う事をきかせるダロット

「途中で荷物落としたら罰ゲームな」

と、マールー

「酷いですよー」

「なら、最後まで頑張ったら褒美あげる」

「ほ！ほんとですかあ！？」

「深い、ふかぁーい溺恋を味あわせてあ・げ・る」

「いや、遠慮しておきます……」

ヴェステイの深い恋とはほぼ強制的に脳裏の神経を弄り  
勝手に誰かに恋をさせてしまうというもの。

しかもかなり重度なため、ちよつとやそつとじゃ忘れることなん出  
来ない

朝、昼、晩とその子の事で頭がいっぱいになってしまう  
たとえ好きじゃない子であっても……

「ううゝ」

この先の事を考えると先が思いやられる……

「とりあえず、武器を売ってる場所でも探すか」

「完成度の高い武器ならキヤラルに行けば……」

いや……。確かにキヤラルに行けば結構上等な武器が手に入るかも  
しれない

しかし、皆があまり知らない店、尚且つ完成度の高い店の方が断然良い  
何故かと言うと、そういう場合上等を上回る程の武器が手に入るからだ

「でも、リスタクスの方が良いんじゃない？また新たに腕の良い職人さんが店を開いたみたいだし」

ヴェステイの情報を聞いたダロットが考える。

「ジェキア地方の……。そうだな！リスタクスならいいかもしれない」

「んじゃ決まりだな！ピロク！遅れるんじゃないぞぞ！」

「ま！待って下さいよ。みなさん」

後れを取りながらも必死に追いかけるピロク。  
そしてピロクにとっては地獄のおつかいが始まった

## ヴェセア城・会議室

「さて、俺たちは、刺客について調べるんだったな」

「そうですね。と、言っても手がかりが何も……」

アイゼンがそういった瞬間、ギフェアが良い情報がある、と部屋を飛び出していった

「良い情報？」

当然、何が何だかわからない2人は顔を見合わせる

ボタン！

「これだよ、これ！」

「刺客リスト？」

ギフェアが持ってきたものは少し埃のかぶった刺客リストという物だった。

いかにも怪しげなこの本は、開けるな危険と書いてあった

「勝手に開けてもいいのですか？」

もちろん確認を取るアイゼン

「大丈夫だろ。城の危機も迫ってることだし」

平然としているギフェアになんともいえない気持ちを抱く二人であった

ガチっ！

頑丈にロックされた鍵を開け、中を見てみると刺客の数々が物凄く丁寧に書かれていた

「これは凄い……」

ぶっちゃけここまで凄い物は見たこと無かった  
良い意味で期待を裏切ってくれた

「凄いですね。これで何か情報がつかめそうです」

「役に立てて良かったよ。」

実際、俺もこの本がここまで良く作りこまれていたなんて思ってたな  
かったしな」

そういつて一言応援の言葉をくれると部屋から出て行った

「さて、我々も頑張りますか」

「そうですね。みんなが帰ってくるまでに少しでも多くの情報を伝えられるように頑張らしましょう」

こうして4つに手分けして別れたチームは刺客に迎え撃つために必死に準備をし始めたのであった。

## 第二十五章 対刺客戦闘準備（前書き）

今回はいろいろな人の目線から進んでいきます。

## 第二十五章 対刺客戦闘準備

### フェオルト地方・プレンプワレス

この街、プレンプワレスという場所は、山に囲まれた中にある活気あふれる街

鍛冶場が多く、鉱山での発掘作業が主として材料に使われている。また、数多くの山の中でもこの場所は有名で、希少な鉱物が採れると言われている。

たびたび聞こえる鉱物を叩く音。トンチンカンと鳴り響いている。太陽の光に当り眩しいほどに輝く防具や武器・盾などは安物から高価なものまでずらりと並んでいる。

「鍛冶場が多いんだな」

「そうですね。昔からそうでした」

相変わらず感情のこもっていない言葉だが、少しだけ違和感を感じる。

「ふうーん。ミヴィは来たことがあるのか？」

「はい、この剣の前の持ち主がここを通った時に……」

平然とした口調では言っているもののどこか悲しそうだったのを俺はちゃんと感じ取った。

実体化したミヴィとはついこの間会ったばかりだが、一緒にいた時間には長い。

そのおかげで少しの変化も読み取れるようになってきた。

「その持ち主はどうしたんだ？」

聞いてよかったのかどうなのか迷った拳句に聞いてしまった。  
しかし、その答えはためらいなく答えてくれた。

「私、いや、この剣ごと地面に差してどこかに行ってしまった」

剣ごと差して何処かに行っただと？

「それから、数十年の月日が流れましたが帰ってくることはありませんでした。」

なんてことをしたんだ。と思いつつミヴィの話を聞く

「そんなある日、私は十字架のアクセサリーを付けたとある人物に剣を持ってかれました」

「……十字架のアクセサリーを付けたとある人物？」

俺の記憶が正しければ、そんな奴ただ一人しかいない  
忘れる筈も無い。あの、自分の背丈の3倍はある聖なる十字架を女  
の子にいつまで持たせるの？という（そんなの地面に置けよ）めち  
やくちゃんな理由でブン回した事、トラウマになりそうだ……。

いや…もう、なってるか……？

「んで、その後どうした？」

「これから、旅立つ人のためにこの世界の案内人になってくれない  
か、と聞かれました」

「この世界の案内人？」

「そうです。そして、渡った先が貴方だったわけです」

どういう理由でミヴィを世界の案内人にしたのか分からんが  
まったく、半強制的に持ち出しやがって、持ち主が探してたらどう  
すんだよ。

「それはありません」

まるで何か理由を知っている口ぶりだった。

「ん？　なんでだ？」

普通に感じたことを普通に訊いていた。

「この剣を置いていくときに、もう手にすることは無いだろう、と  
いていましたから」

もう手にすることは無いだろう？

意味深な発言だな……。

どこかへ向かおうとしていたのが、  
そのため剣を置いていく羽目になり……、うん、わからん……。

「そうなのか、んじゃ、持ち主が見つけたらさぞかし驚くだろっな」

「でしょうね。でも、今はこのままでいいと思っています」

「このままでいいのかよ？」

「はい、ブレイクに使われた方がこの剣も上手く活用しているみたい  
ですし、

その人が、今の私を見ても気づかないでしょう。」

ミヴィがそういうと剣が笑うかのように光った。

2人して話しながらあちこち回るとひととき目立つ家を見つけた派手、というかなんというか、なんかトリッキーだ。

しかも、今は何が起きているのか窓や屋根、玄関から白い煙がモクモクと出てきている

「たぶん、ここが、オクマーサ・テゴレス錬金合成師の家だよな？」

それは、ここ以外に考えられないと思わせるほどであった。

「そのようですね……」

とりあえず家のインターホンを探したのだがどこにも見当たらなかった。

しばらくまっても、人影も見えることも無く、沈黙が流れた。

視界をたびたび遮るその煙は家をぼんやりと見せ、紛れてしまったら出ることもままならないほど濃かった。

「失礼します」

立ち止まらずに門から家の扉へとまっすぐ歩いていき、ドアをノックした後、

一言そうい扉を開ける。

この煙は害は無さそうで煙たくないし、臭いもない  
でもとてもひんやりする

「オクマーサ・テゴレスさん？」

とりあえず名前を読んでみたが返事が無い

「ミヴィ、この煙をどうにか出来ないか？」

「魔法でも使いましょうか？」

このままでは探すのもそうだが、歩くのもままならないと判断しどの魔法が得策なのかを訊いた。

「風魔法は少し間違えれば家を壊しかねないほど恐ろしい魔法らしい。」

俺は慎重に魔法を唱えた。『ナチュラルエア』（自然風）

唱えるとふわっという風が体を包み部屋中に広がっていった。みるみるうちに煙が消えていくと意外に家は広がった。煙のせいでこの家が狭く感じていたのだろう。

そのおかげで二階への階段も見つけた。

「きつと二階にいるでしょう」

一階には一部屋しかなくパツと見て、いないと判断した。

そして俺とミヴィは早速二階へと向かった

「オクマーサ・テゴレスさん？」

再び名前を呼ぶその先には見覚えの人影を発見したからだ。

「ああ！ブレイク君。久しぶりだね！」

明るく迎えてくれたオクマーサ・テゴレスさんは何か実験を行っていた

煙の発生源はすぐにこれだと分かった。

「あの？それは何を……」

「これはねえ、溶けない氷を作っているんだよ」

「と、溶けない氷!？」

謎の液体からは白い霧みたいなのがモアモア出ていたが、溶けない氷なんて物を作り出せるのだろうか……。そんな実験に目を奪われているとテゴレスさんが口を開き、

「何か用だったかな？ 僕は、合成・錬金などをやっているとつい  
つい夢中になってしまつて……。」

俺の方こそ、夢中になってしまっていた。

「あ、そうですね。実は、刺客が近々迫ってきているようで」

「ほう、刺客かあ……。」

顎に手を当てしばらく何かを考えていた。

「そうなんです。お力をお借りいただけないでしょうか？」

「うん、それは腕に縋りをかけて作らないとね」

どうやら大丈夫らしい

そういうと部屋の奥から見たことの無い物を（植物や器具などはいいのだが、瓶に入った怪しい目玉の詰め合わせ・動物の器官・見たことの無い色の液体など）とにかくいろいろ持って来たのだ。

「とりあえず。ケアフレッシュとビルドアップ、それに魔法強化剤を作っておくよ。」

作ったものはギフェアに送っておくから取りに来なくても大丈夫だからね」

「あ、ありがとうございます」

さて、それは口にしても大丈夫なのだろうか……  
作る材料を見てしまった俺は飲めるのだろうか……

ま、まあ、さてはともあれ、なんとかギフェアさんに頼まれた物を調達できそうだ……

## アルタンテ地方・キャラル

「うむ、私によく似合う街じゃのう」

ギフェアさんも時々レシピや調味料を買いに来るというキャラル何処を見ても豪勢な服を着ている人ばかり……

と、言ってもこの姫様たちには敵わないでしょうけどね  
キューラとタミンは羨ましそうに姫様たちを見る。

Quality goodsと書いてある看板を見て  
いかにも高級品がそろってそうじゃなあと納得。

割と英語は出来るらしい  
そして、いかにもみんなに私が姫だ。  
と言わんばかりに偉そうに歩くシルクシャシャ

噴水の公園には女神の石像や所々を流れる透き通った綺麗な水、

今日なんていい天気の日、水から反射した光が眩いほどだった。目的地の道中、どうすればこんな絵が岩に描けるのでしょうか？という綺麗な彫刻や、赤い煉瓦で出来た建物に並ぶ高級品の数々……。綺麗なものや珍しい物を見るのはとっても楽しいのだけれども……

「はあ。何でこんなにも階段が多いのでしょうか……」

思わず、アイシエスは弱音を吐く、そんないかにも箱入り娘とは対照的に、

「なんじゃなんじゃ？そんなことでへたばっていてはこの先、生きてゆけんぞ？」

待つて、赤くて大きなリンゴさん……。

既に限界を迎えていたアイシエス姫の目には、ひよいひよい上るシルクシャシャをリンゴと認知した。

「ここです。入りましょう」

すでにアイシエス姫はダウン中だが、きつとこの二人の姫様は右も左も分らないこの地方でいろんなものに興味を抱いてしまうだろう。私とタミンがいなかったら今頃どうなっていたのでしょうか……。少し冷や汗をかいた。なにせ刺客が迫っているのだ。

「えっと、最初は……。ウイゴの実なんだけど」  
建物の中に入りキューラはメモを取り出した。

「ウイゴの実とはこれか？」

タミンが一生懸命探していると、どこから持ってきたのかシルクシヤシャが自慢げに見せてきた。

「それは……。ウイルの実です。見た目は良いのですが、味は最悪です。」

だから食べ物としては使われてないんです。……鑑賞用？と言ったところでしょうか」

「そ、そうなのか？」

そそくさに元の位置に戻ってきたシルクシヤシャ  
そして行き違いにすでに復活した、アイシエス姫が何やら持ってきた。

「これでしょうか？」

緑色で棘が沢山付いていて先が少し赤い大きな実

「そうそう、これです。さすがはアイシエス姫」

「いえいえ、お力になれてよかったです」

よしっ！と小さくガッツポーズ

「では次は、ナーヴァの葉ですね」  
再びメモを取り出し、二人に言う。

そう言った途端アイシエス姫とシルクシャシャ姫が競い合うように  
ダッシュした

「うーんと……。ナーヴァ、ナーヴァ、ナーヴァの葉っぱさん……」

「どこじゃ？ナーヴァの葉とやらは……」

しばらくしてエルスの肉を探すキューラとタミンの所へアイシエス  
姫がやってくる

「あの……」

「あ、持ってきてくれたんですね。ありがとございます……と言  
いたいんですが」

「違い……ましたか？」

「すみません、私の注意不足で……」

アイシエス姫が持ってきたものは熱を帯びる葉、ナーバの葉であった  
発音ではどちらもほぼ同じに聞こえてしまう厄介な葉っぱ  
そして次にシルクシャシャが持ってきた

「これはどうじゃ？」

「ちょっといいですか？」

と、タミンがその葉に触る、真っ赤な色をしているのにひんやりするこの葉は間違いなくナーヴァの葉であった。

「これです。ありがとうございます」

「おれなんぞいらん。こういうものには詳しいからな」

満足げに胸を張るシルクシャシャ

「さっきは間違えたじゃないですか？」  
すかさずアイシエス姫がつっこむ。

「ア、アイシエスは黙っておれ、さ、さっきは勘違いをしたただけなのじゃ。そう勘違いじゃ」

自分に言い聞かせるように言うシルクシャシャは全ての食材が揃ったことに気付く

「ん？全部そろった様じゃな」

「そうですね。では帰りましょうか」

会計はタミンが済ませ、店から出ようとした瞬間

「まてまて、あそこにあるのはなんじゃ？」

「あれは……。秘薬のようですね」

「秘薬？それはなんじゃ？」

「いろいろな種類があるので、見てみてはどうですか」

そういった時には既に棚から手に取っていた。

速い……。

「おおー！　なんか凄いのが沢山あるぞ！？　なんと綺麗な色をとるんじゃ……」

「わ、私も見たいですー！！」

2人のお姫様がキヤーキヤー言っているのを見て

おもわず笑ってしまうキュウラとタミンだった。

## ガダルナ地方・ヴェセア城周辺

「あゝもう！どこに行きやがった！」

しびれを切らしたセルウエンは剣を思いっきり地面にブツ刺す

「その発言。姫様に聞かれたら処刑では済まされませんよ？」

カラゾネスが言う。

ひたすら歩き、もう日が落ちる頃……

「なんか疲れたし今日はここら辺にしようぜ？」

「はあ？ハイシャルが、このままじゃ姫様護衛隊はどうなるんだあ？  
みたいなこと言って、一刻も早く探すことにしたんじゃない！」

ミヤーゼルは姫様が見つからない苛立ちをハイシャルにぶつける。

「まあ、そうだけどさあ。無理するのもよくないじゃんかあ」

ガサッ……

「何!？」

突如後ろの草むらが擦れる音がした。

さすがは姫様を守る地位に着く者たち、すかさず武器を構える

「みんな、気をつけろ」

慎重に草むらに近寄る護衛隊

ガサゴソ……

「一体何者なんだ……」

ついに武器を振り上げ草を切り払うセルウェン

「おいっ！何しに来た!!」

「君たちこそ、もう夜になるというのにどうしたんだい？」

背は高く、赤い服を身に纏っている。

「もしかして、ギフエアさん？」

## ジェキア地方・リスタクス

リスタクス、それはジェキア地方にありながらも現地に住んでいる者は数人しか知らないというこつそりと経営している店、アルタンテ地方にあるキャラルと比べれば、認知度は雲泥の差ともいえる。珍しい物や売っているものはほぼ同じと考えられるが、リスタクスには裏メニュー的な物が存在する。店員にある言葉を言えば通してもらえる場所を知っているダロット達は店の前まで来ていた

「結構遠かったなあ」

ガダルナ地方からクライムを借りてここまで来たのだが  
1時間はかかっただろう  
乗り慣れないピロクにとっては尻筋が酷く傷む旅となっていた

「つたく、それくらい平気だろ？」

歩くのもままならないピロクは膝に手を置いて休んでいた

「ほ、ほんとに無理です。筋肉痛が酷くて……」

「はあ」。ピロクはクライムの近くにでもいる」

「なかよくなれるかもよー」

ヴェステイさん、クライムとは仲良くなれませんかよ  
同じ種族だけしか心を開かないんですから……

「んまあ、ちよつくら行ってくるから、待ってる」

「…はい」

僕はひとまずクライムの所まで戻ることにした

「いててー。これは数日じゃ治りそうにないな……」

お尻をコツコツしながら手綱で繋がれているクライムの近くまで寄る

「さすがは調教されたクライム、野生とは違って大人しいな」

よしよし、と頭を撫でるピロク

「結局僕が荷物持ちなんだよなあ」  
と、独り言を吐く

「まあ、頑張れや、兄ちゃん」

びくう！となつて周りを見渡すピロク

「えっ？だ、誰？」

「俺だよ、俺。ここにいるだろ？」

そう、声を掛けられたのはクライムだった

「う、嘘ですよね？」

「本当だ。兄ちゃんは俺と喋ってる」

「ええ~~~~~！！！」

しりもちをつき、ピロクが悲鳴を上げているその頃、ダロットたちはというと……

「特殊効果のある武器って置いてないですかねえ？」

「そうですね、特殊効果ですか……。ここには置いてないですね」

「本当ですかあ？」

「本当ですとも、それともあれですか？」

「では、N E D D I H   R O O D」

「ほう、久しぶりに聞きましたよ、その合言葉。了解です。」

とにかく、レジの裏にあるスタッフオンリー通路から特別な部屋に連れて行かれた

「おおーこりやすげえな」

ダロットの第一声、続いてマールー、ヴェステイ

「確かにすげえな」

「ほんとねえ、良さそうな武器ばかりじゃない」

「最近客が全然来ないので、数はそんなに多くは無いけど、良いのがあったら安くしとくよ」

これなんかどうです？といわれ持ってきたのは普通の銃だった

「どんな効果があるんだ？」

そうマールーが効くと、良い質問ですと言い

「当たった者には、毒、麻痺、混乱、火傷、遅足という追加効果が期待できます」

「でも、期待できるっていう事は全ての効果を与えることは出来ないんだな」

そういわれると店員はすこし顔をしかめ

「そうですね、そこが1つの改良点、といったところでしょうか…」

と言い、元の位置に戻した

「とりあえずだ、しばらくはこの部屋に居る羽目になりそうだ。早く決めれそうにないし、とりあえず、あいつらに連絡でもしとくか」

「そうだな……。ヴェステイ？あれ、使えるか？」

「こんなこともあるのかとシオラ石常備なのよ？気が利いてるでしょ？」

取り出したシオラ石を片手で握りしめ魔法を使う

「『ヴィジョン』（幻）」

「よお！そっちは元気にやってっかー？」

ヴェセア城・会議室

ギフェア隊長から貰った物、ん？貸してもらったのか？

まあ、とりあえずその刺客リストを先ほどからパラパラめくっていたところ

良い情報を発見した。

「今から20年前。今の状況と似た現象が起きたみたいだ」

「兎歴118年ですか、私はまだ、生まれて間もない頃ですね」

残念だなあ〜と一息つき俺の方を見てくる

「それは俺も同じだ！」

そんなに俺は老けて見えるかっ

真面目な顔して、アイゼーンはこれだから困る  
感情が高まった時、女口調になるのも特徴だ

「でも、同じ現象が起きるんだとしたら、それはとても有利になりそうね」

「そうだな、その時出た刺客は……危険度7。……………7!？」

危険度7とは城の崩壊危機だ……

最高は10までであると聞くが7でさえ見たことない

「でも、対策が書いてあるのでは？」

「対策、対策……………って、あれ？」

「どうしたの？」

「あたりの城をめちゃくちやにした後、帰って行った為、詳細は不明……………」

「え……………」

「その日は例の刺客によりファベスト帝国が勘違いを起こし襲撃の発端となった」

「ファベスト帝国の襲撃……………」

「そういえば、ギフェアさんはその戦いに参加したとか？」

ファベスト帝国の襲撃。

今はデユナメイス国と呼ばれているが、昔はファベスト帝国というところであつたと聞いた。事の発端は刺客が来たことによる事だとは言われているが、実は違う。

悲惨で残酷で血なまぐさい最悪な事件。『緑眼狩り』という、合成に使う材料欲しさに犯した禁忌破りの人たち。もちろん全員捕まり処刑、しかし、この天使を殺した村人の怒りは収まらず。禁忌を破った国を滅ぼそう、二度とこんな人間を作らないために必ず。という考えを持ち始め、襲撃した。人口の約1%にも満たない禁忌破りの人がいたせいで無害の人たちも女、子供関係無しに次々に殺され、人口は急激に減っていった。

しかし、さすがにこれは酷すぎる、度が過ぎると判断した他の国の人たち、兵を増援し、戦力を徐々に高めたその国はファベスト帝国をついに返り討ちに成功した。ギフェアさんも増援の傭兵として戦っていたらしい。

「確かに、二度と同じことを繰り返さないにしてもこれじゃあどうすることもできないな」

「なんかいい案は無いの？」

「

と言ったその時だった

（よお！そっちは元気にやってっかー？）

いきなりヴィジョンによる連絡がきた

「おっと、いきなりだとびっくりするんだが……」

（悪いなー。お二人の時間邪魔しちゃって）

「そんなことない！！」

「そんなことないわ！！」

見事に同時に言う二人

（息ぴったりだな。夫婦喧嘩は止めとけて）

「だから違っつて！！」

「だから違うわ！！」

（まあ、おふざけはこれくらいにしておいてだ、帰りは遅くなりそうだ。

結構な穴場を見つけたからなあ）

「そうか、分かった。ギフェア隊長に伝えておくよ」

（よろしく頼むな）

そついうとツインという通信独特な音を出し、切れた。

「……………」

「……………」

2人して顔を合わせる

「この先、どうするか……」

まったくの情報も得られない今、どうすればいいのか、二人は悩んでいた。

## 第二十五章

## 対刺客戦闘準備（後書き）

：追伸：

図書館の本を追加。

EX？

調査（前書き）

新たな魔人出現。その強さや如何に……

EX?

## 調査

### 魔界・2番街

「あいつの場所は途中まで掴めたが……。」

「そうですね。ジェキア地方辺りでプツツリと……。」

「くつ、何をしたか分からんが、こちら側から大きく動くとかえって危ない。」

とりあえず、エルウェールを現地へ向かわせたがどうなることやら

……

「はあ……」

なんだ？ なにかギーヴァ様の様子がおかしい……

そんなに慎重にならなければいけない事があるのだろうか？  
すでに、魔法を支配し、我らが優位に立っているというのに

「おい、キルス！ お前の出番だ。」

ギーヴァ様が遠くの方を見ながらそう言うので気になって見るとツインテールでアホ毛のある緑色の髪をした少女が走ってきている所だった。

「あいつは誰ですか？」

「こう見えてあいつは魔人ファーストクラスなんだ。お前の1個上だぞ？」

「なつ。そ、そうなんですか……あの子がねえ。」

ずいぶんと華奢な体系だが1本5?以上ある剣なんて持てるのだろうか？

もしくは魔法?とにかく、強そうには見えない。  
なのにファーストクラス？

「おじさん私よりも下なの？」

いきなりタメ口か、なんというか礼儀の無い子だな。

「そ、そうみたいだね。凄いだねえ君は。あと、おじさんって言うのは」

あと、と言いだめた直後に満面の笑みで

「なら、おじさんはこれから私の『舎弟』だね。」

舎弟？こいつ何者なんだよ。  
なんか、そこだけ声帯変わったし……

「そういうわけだ。ツアツエ。試しに勝負でもしてみるか？」

ギーヴァは口の端を釣り上げてツアツエに言った。

## 魔界・一番街

「準備は良いか？ツアツエ」

もちろんです。と魔界剣を2本取り出す。  
そしてブーンという低音をたてて今か今かと戦いの時を待っている。

こいつに勝ってギーヴァ様に良い所を見せるとするか。

「ツインソードですか。おじさん凄いですね。」

と言いながらもその女の子は腰から2本、肩から2本、空中から2本。計6本を取り出した。

「6本……」

なんなんだこいつ……

「ちなみに剣同士を繋ぎ合わせて……っ」と

腰と肩に装備していた剣をそれぞれ繋ぎ合わせ自分の丈と同じ2本の剣を構えた。

「なんだその筋力は……お前、本当に女か？」

「あれえ。女の子にそんなこと言っちゃっていいのかな？  
ちょっと力チンときちゃったんだけ……どっ!!」

話し終わると同時に地面を蹴って駆け出した。

また、そのスピードも尋常では無く、魔人であるツアツエでさえ、集中していなければ残像と化して目で追うことは不可能となるだろう。

「くっ!!……速いつ!!」

「どうしたの？守ってばつかじゃ勝てないよ」

あまりにも速い斬撃が何度も何度も繰り返され、剣を交えるたびに服や皮膚にかすり傷を負う。ツアツエは魔人特性の治癒能力が半端なく高いが、その能力を止める魔法がキルスの剣には掛けられていた。

「『テラマグナフラマ』（大地獄炎）」

相手を囲むようにして炎柱を何本も噴き上げた。

「ふうーん。魔法はそこそこね。『アニマコンゲラートルーメン』（光纏う氷結風）」

一瞬辺りが点滅した後、激しく燃えていた炎は跡形も無く消えてしまった。

\*天超地にいるあの人による知っておきたい大事な事\*

当たり前のように詠唱無しで魔法を使っている2人だけど、本来これらの魔法を唱えるのには最低5人の魔導師が数分かけて作り上げる魔法であってそうそう簡単に出せるものではないのよ。例外もいます……

「っ！？一瞬で俺の最大魔法が消された…だと！？」

「まだ、私の効果は終わってないんだけど？」

時間差で数本の光のロープみたいなものが体を貫く。

「ぐうはっ！」

ツアツエの体から鮮血が噴き出す。

「なんて美しい光景なのかしら……と、見惚れてる場合じゃない。」

と追い打ちをかけるように目にもとまらぬ速さで相手を切りつける。

「うぐうっ！……はあ。はあ。」

そして、瀕死で弱り果てているツアツエに向かって両手に持つ長剣  
2本を投げつける

「これで終わりね」

だが既に、ツアツエは息絶えていた。

そこへ2本の剣が突き刺さる。もはや直視出来る光景では無い。

体をバラバラにされ原形を保っていないツァツエを見て

「私の勝ちイ！なんて間抜けな恰好なの。あはははっ」

と、殺すことに何も感じないキルスであった。

「それでいい。その調子でこの老人の首を狩ってこい」  
魔法でファンベル爺そっくりな人物を描きキルスに見せる

「このおじいちゃんを？なんだか弱そう。」

「侮るな。精々殺されないよう気をつけることだな」

「私が殺される？そんなことはありませんよ。ではっ」

そういつて大空高く舞い上がってどこかへ飛び去った。

「さてと、こいつは……」

その頃エルウェールはというと人間界に来ていた。

「ファンベルがどこに行つたかつて言われてもねえ」

ジエキアからガダルナ地方へと移動した。

すでにジエキア地方は隅々まで探したのだが何処にもいなかった。  
正直、体力の限界である。

「はあゝあ。疲れたな。」

ガダルナ地方のゴーナ平原に來たエルウェールは平原の端にある高さ5 m位の大木の切り株に座つた。そして、この奥へと進めばハーゼル樹林に行ける。そのハーゼル樹林に実ると言われるミチャンの実をもぎつてかじる。果物界の中でも1、2番を争う程美味しいと言われている四角い果物だ。オレンジ色の硬い皮をくりぬくと中に赤い色をしたゼリー状の美味しい部分が出てくる。10分くらいでこずつた結果何とか食べることが出来た。

「へえゝ人間界の果物つて結構おいしい物もあるのね。後でギーヴァ様にも教えてあげないと……それにしてもどこから話し声が聞こえる。城の方かな?……行ってみよつと」

切り株から華麗に飛び降りると再びミチャンの実を採り城へと飛んで行つた。

ヴェセア城・庭

昼間は白で統一されている綺麗な庭は太陽の光でより美しく見えた。

「綺麗……」

ついつい見惚れてしまったエルウェルはいけないと庭の奥で聞こえてくる話し声を聞きに行った。

「そうだな、その時出た刺客は……危険度7。……………7!？」

思わず耳をふさぎたくなるほど大きな声を出された。

「うるさい……」

でも、ふと思う事があった。  
刺客って一体なんなんだろうかと……

「その日は例の刺客によりファベスト帝国が勘違いを起こし襲撃の発端となった」

ふうーん。確かそういうこともあったわね。盗み聞きをしながら思う。

エルウェールは当然魔人な為ファベスト帝国の襲撃なんて数ヶ月前くらいにしか思わない。

でも、あれは酷かったと思う。

「そういえば、緑眼狩りなんて子供だったし、そんな酷いこと一体誰がしたのかな……」

酷いと言えば、あの無心の神悪、烈火の殺人鬼と言われたあの少女はどうしたのかと思う。あんな優しそうな少女が人殺しを重ね、大地が血の色で染まったあの日、私もその光景を見た。誰構わず殺されていた。無差別殺傷、ここまで酷いのは初めて見た。本当にどこを見ても赤、赤、赤……そして、その少女をついに見つけることが出来た。どうやら誰かと話しているようで、私は盗み聞きをしてしまった。

「こんなことして何になるというの！こうなったら私も死んでやる！……」

「ふっ。うるさい女だな……」

「ふざけないで……」

「全てを忘れさせてやるよ。だから目を閉じる」

「全てを忘れられる……」

「真実から逃げるか。人間というものは弱いなあ。  
自分の罪を一生引きずっていけ！」

その時、最後に何を言ったのかはよく覚えてなかったけど、物凄い光がその少女に当てられた。何が起こるか分からない私にとって、危険だと判断し、すぐにその場を立ち去ったから正体は分からなかったけど、一体なんだったのやら……

「だから違うつて!!」

「だから違うわ!!」

「むう……。それにしてもこの男女二人はうるさいな……」

あまりのうるささに鼓膜が破れそうだった。

「この先、どうするか……」

どうやら2人は何かに悩んでいるようだけど、その悩みが解決します様にと協力は出来ないが願うエルウェールであった。

エルウェールの心の広さは広大である。

「とりあえず、オルリオにでも行きましょうか」

「そうだな。あそこの紅茶は美味しいし、なにか良い提案が思いつくかもしれない」

「どうやらカフェにでも行くらしい。」

「なんだか、私も行ってみたくなってきちゃったな」

美味しい物もありそうだしと誘惑に負けカフェ・オルリオに行くエルウェールであった。

## カフェ・オルリオ

「とりあえず、落ち着いたところで」

「どうしようかしらね。あ。どうせなら同じ強さの刺客と同じ対策をすればいいんじゃない？」

「それはあまりに適当じゃ……」

「こうなった以上この手しかないわよ！」

どうやら何か良い案が思いついたらしい。

安心したエルウェールはすぐ近くのテーブルで紅茶を飲んでいた。

「……美味しい。なんて美味しいのかしら」

人間界にはこんなに美味しい物がたくさんあるのね。

美味しい物巡りのツアーでもないかなあ？

そう！人浮かれているうちに深い深い眠りについてしまった。

それはもう、どんなでかい音が響こうと絶対に起きることは無い程の熟睡っぷりだった。

EX?

調査（後書き）

エルウェールの熟睡によって後々ものすごくラッキーなことが起きます。

## 第二十六章 バトルウィズアサシン

刺客リストによると、目標は、  
こちらに向かっている情報を聞いた時から約5日でここにたどり着くようだ。

残り日数は2日

準備も着々と終えて、買い出しに行った人たちも次々と帰ってきたのだが……

「そういえば、ブレイクたちはどうした？」

「まだ、帰って来てないみてえだな」

ギフェアの疑問にダロットが周りをきょろきょろしながら言つ。  
そして、その近くでシルクシャシャがニヤリとすると

「ブレイクめ、今頃ミヴィとやらとあんなことやこんなことをおこ……」

演技を大げさに（主にアイシエス姫に）見せつける

「ええ！！それ、どういことですか！？」

「ああ。なんと哀れなアイシエスなんじゃ……」

「シルクシャシャ姫、そういうのは止めて下さい。  
アイシエス姫も簡単に乗らないで下さい」

キューラの言葉に「つまらんのう」とボソツと言う  
「う、嘘だったんですか…」 またしても怒りの炎をたぎらすアイシ  
エス姫

「大人しくさせるのが大変です……」と、キューラとタミンは困る  
ばかりである  
城にたどり着く間もこんなことばかりで既に疲労困憊だった。

この姫たちの争いが起こる少し前の事、問題のブレイクたちはとい  
うと

「腹減ったあゝ」

「何か食べていきましようか？」

少し遅れるが、許してくれるだろう。

「おお！？ 此処であつたが百年目！今日こそ勝負をつけるぞ！！」  
何か聞えたけど、まあいつか

「……さて、どこに食べに行こうか、ミヴィ？」

「この辺では、火山ラーメンが有名だとか……とても美味しいらしいです」

「んじゃその店に行つてみるか」

「つて待て待て！！誰かを忘れてはいないか？」

「髭面ピエロかぁ。よく生きてたな」

「なんだとお！！このとおりまだ生きてるぞ！」

そういうことで、俺はこいつに絡まれてしまつていた……  
でも、あの時いた大男がいないのだが（よくそんなこと覚えてたな、俺……）

「ん？ それはだなあ……聞いて驚くなよ？

……魔法で体格を変えていたのだつ。どうだ！驚いたろっ！！」

「わー、すごい。おどろいたなー（棒読み）」

ちなみに豪華な拍手付きである。褒め言葉と拍手のセットで銀貨10枚です。

あゝそれにしても腹減った……

「な！なんだそのぽかぁんとした顔は！！今度こそギャフンと言わしてやる」

というと鞘から剣を抜き魔法を唱える

「どうだ！魔法剣だぞ！！まいったか。あーはっはっはー」

そうか、髭面ピエロは褒め言葉拍手セットの他にも何か欲しいのか。サイドメニューとか？  
やべえゝマック行きてえゝ。この世界にはファーストフード店なんて存在しないからなあ

とりあえず俺は魔法剣改をやっサイドメニューて見せた

「魔法剣改。よし、どこからでもかかってこい……」  
……と言いたいのだが、腹減ったから戦えそうにないな。  
だから降参だ。あんたの勝ちでいいから早く通してくれ。」

「魔法剣、か、改だとお！！？」

なんでそこだけにこんなにも大げさに驚いてくれるんだ。  
サイドメニユーだから高く付かないんだがな、精々銀貨5枚です。  
ってか？

「あ、兄貴！？ 気絶しちゃいました」

「な、何！？ 気絶だと？」

2人の子分は髭面ピエロを抱えてこう言ってきた

「あ、兄貴は、お前の、そっその魔法剣のみすばらしさに呆れて倒れたんだ。

つ、次こそ勝負をつける時だからな！覚悟しとけよ！！」

無理矢理なフォローだな

そっさいながらふと思う。そろそろ魔法剣改より強力なのを作ろうかと

あいつに負けそうだからとかではなく、強化しておいて悪いことは無いと思ったからで

「ミヴィ、邪魔者も居なくなったことだし帰るか」

腹減ったって言ってもあいつらに時間とられたしどうすることも出来ないな……

「そうですね。それにしてもさっきの人……」

「さっきの奴は黒盗賊とか言う面倒な奴らだ。あんまり関わらない方がいいぞ」

「いえ、なんとなく私の剣の持ち主に似ていたもので……」と真面目な顔で言う。

……………え？

「ええ………！！」

まさかの発言だった。

俺はただ、髭面ピエロがミヴィの言っご本人ではないということを一生涯祈り続けた。

## ギフェア城・会議室

「まだ、帰ってこんのかー」

そろそろ我慢の限界のシルクシャシャ  
姫と言ってもまだ16歳。駄々をこね、手足をバタバタさせる。

「そんなことをしても帰ってきませんよ。まだまだ幼いのですね。」

アイシエスがシルクシャシャに向かって言う。

その言葉にジタバタをピタリと止めたシルクシャシャ。

「確かに遅いですね。どうしたんでしょうか？」

クライムと話せるという驚愕な事実を知ってしまった悩み多きピロクが答える

その事実を知ったことと同時に自分にはクライムの血が巡っているのだろうかという

悩み事が増えてしまった。自分はクライムと同士ということなのだろうか……

「あら？アツアツカップルさんが帰ってきたみたいね。」

扉が開く音を聞いてヴェステイが言う

その言葉にまるで糸で引つ張られたかのようにクイツと扉の方を見る姫2人。

「すみません。遅れました！……って、あれ？」

シルクシャシャの目の色が真っ赤に燃えている？

……アイシエス姫も疑り深い目でジロジロ見てくるし  
なんだ？空気が重い……

「いやいや、良いんだよ。それより頼んだものは作ってもらえたか？」

あのう。無理矢理笑顔とか作るの止めてもらえませんか？ギフエアさん。

どうせならこの状況を説明してほしいのですが。

「作ってもらっています。後で届けてくれるそうです。」

これまでの状況を話し、一息つくと同時に誰かに後ろから抱き着かれた

「し、心配したんですよ。あんまりにも帰ってくるのが遅かったのですから」

と、俺に対する疑いは晴れたのか既ににこやかであった。

「悪い悪い、心配かけたなあ〜よしよし」

優しく頭を撫でてやる

満面の笑みで気持ちよさそうにしているアイシエス姫を見ると  
こっちまで笑顔になる

「ブーレーイークー！」

なにやら走ってきた赤い奴はとりあえずほっとして、これからどう  
するんだろうか

「んなっ！避けるとは何事じゃ！！！」

両手を広げて同じく俺に抱きつこうとしたシルクシャシャを見事に  
かわした。

「それにしても、どうやって刺客を倒すんですか？」

「それなんだが、レクセルとアイゼーンに任せている」

「そうなんですか。それならよかった。安心です」

安堵している時に噂の2人が来た

「ぎ、ギフエアさん」

「おおー。待ってたぞ！レクセル、アイゼーン。さあさっ、作戦を

教えてくれ」

今か今かと待つギフエアにたいしてなにやら言い辛そうな2人

「そ、それなんですが……」

「どうした？早く結果を見せてくれ」

「刺客リストには詳細が書かれてなくて……」

「え？」

その場にいた全員の顔色が変わった

「なんだって？」

マールーが聞く

「だから、大事な情報が何一つ書いてなかったんだよ」

「まじかよ……」

今の季節は……って季節ってあるのかな？

とにかく暖房が欲しいくらい部屋が寒くなったような気がした  
そして、凍ったように動かないみんなを見て慌てて話を続ける。

「で、ですが、まだ間に合いますよ」

「あと2日でどうしろというんだ！」

当然の如く怒られる2人

「二人で考えて来たんですが、刺客レベルの同じ相手と同じ対策をすればいいのではないかという結果が出たんですが大丈夫でしょうか？」

それはあまりに適当じゃないですか？  
という言葉を抑え、話を聞こうとしたところ

「なんとも大胆な行動じゃな」

シルクシャシャー！！  
お前と言う奴は何という事を……

「まあいい。それで刺客レベルはいくつなんだ？」

あれ？簡単に流された……

「7です」

「フ！？……それと同じ相手はいたのか？」

「ちょっと待っててください……」

しばらくページをペラペラめくったレクセルは顔をパツと上げ

「こいつです。レベル7の刺客は」

「そいつだな？よし、それを参考に準備を始めるぞ」

そして刺客到来の日……

「各部隊は既定の位置につけ！」

ガシャガシャ！と音を立てながら進む騎士団は  
支給された武器を持ち並び始める

相手は仲間を連れてくるとの噂だとシルクシャシャから聞いたので  
城にも部隊を配置した。城を出る前にずいぶんとシルクシャシャに  
時間を取られたが、アイシエス姫を守るのはシルクシャシャだけ  
だと肩を掴んで目をしっかり見て言ったら

「わ、私も姫じゃぞ！……ま、まあ。しかしじゃな……」

仕方ないかのう……ブレイクがそこまで言つのなら……」

顔を真つ赤にしていたことは何故だか分からないが  
しつかりやつてくれそうに助かった。

時間を取られた訳とは、どうやらシルクシャシャも俺らと一緒に戦  
いたかつたらしい。そのことで少し話し合いになっていた。竜に変  
身すれば刺客も驚いて帰っていくだろうという作戦だが、所詮、炎  
は吐けないし、空を飛ぶことも出来ないの、見破られるのは時間  
の問題、しかも、その程度で刺客をどうこうするなんて無理にも程  
がある。ということもありその案は却下された。

それでも、ブーブー言っていたのでさっき説明したように言い聞か  
せたというわけだ。

そして、城から出てゴナ平原へと向かう。

どこから攻撃されてもいいように武器をしつかりと構えて

「そつえば、刺客ってどんな奴だ？」

武器を地面に置き片手を腰に当て大いに余裕を見せるダロツト

「絵や写真が無かったから何も分からなかった」

残念そうにレクセルが言う。

「そうか、どうする？山ぐらいデカいの来たら？ほらヤマ○カミとか」

「ちよっ、やめて下さいよぉ」

なぜそのモンスター名を知っているのかがよく理解できなかったがすでにちびってそうなピロクが弱々しく話す。

と、その時、地面から物凄い振動と音が聞こえてきた。

「とうとうお出ましか？」

白い歯を見せ武器を構えるダロット

「命だけは大事にな！！」

ギフェアの声が平原全体に響き渡る。

この凄い音の中でも言葉が伝わるってのも凄い話だが、

「しかし、この大きさはまずいのでは？」

現在約、1000mの範囲で地面が揺れている

北側に俺（ミヴィ付き）とギフェアさん、南側にマ・ルーヴェステイ、そして西側にピロク

最後に東側にレクセル、ダロットという感じになっていた

「へへっ、倒し甲斐があつていいじゃねえか」

「そんなこと言っていますと踏みつぶされますよ」

徐々に大きくなる音に緊張や興奮、いろいろな感情を抱く

「く、くるぞー!!」

ドカーン!!

と地面を突き破り

で、でたー!!と言わずだったのだが

「あれ？」

そこにいたのは俺らの背の半分しかない子供だった

「へ？」

当然驚くみんなだったが、その気の抜けた気持ちもすぐに引き締まる。

その少年はどこからか知らないが剣を5つ取出し構えだしたのだ  
手に持ちきれない分は魔法か何かの力で浮かせていて  
その姿はバリバリ戦闘モードだった。

「結構危ない奴だな…」

レクセルが顎に手を当てながら話す

「冷静に言っている場合じゃな　　っ！　　うわっ！！」

まさにピロクが喋っている時に相手は戦闘を開始した

超ギリギリのところを奇跡的に回避したピロクは顔が真っ青だった。

その少年は魔法を使うしぐさを見せずに一気にスピードを上げてこ  
んどはダロットに間を詰めてきた。

「うわっ！なんだこいつは！魔法唱えてねえのにラファールガ並みの  
速さが出てんぞ！」

少し焦ったダロットも加速魔法を唱える。

その後、全員がシオラ石使用の同じ魔法を使い、なんとか速さでは  
同等にはなったが

「くっ！この隙の無さはなんなんだ！？」

現在一人で応戦中のダロットは相手の防御に隙が無いことに困って  
いた

「大剣の軽量化を最大限に生かしてもこれかよ……」

見た目、物凄く重そうに見える大剣は持っていればレイピア並みの軽さになるので、楽々振ることが出来るのだが、相手はちょっとも怯む様子を見せない

「すみません、待たせてしまって」

「ダロット一人じゃ無理そうねえー」

戦いにレクセルとマールー、ヴェステイが加わった

相手はほぼ動いていなく武器だけを自在に操り攻撃をしている  
味方が増えたからと言って隙は生まれなかった。というか対処が変わらない。

体力だって無限に続くわけでもないし、そう長くは戦えない

しばらく戦っても戦況が全然変わっていない

1人が4人になったってどういうのにどういうことだ？

「ちっ！らちが明かねえ。どうなってんだよ！！」

「ほんとですね。トラップは全て回避。攻撃は効かない。

ヴェステイの魔法も通用しない。どうしたらいいんでしょうか？」

「面倒な相手ね……。何か手段は無いの？」

少年も魔法を唱え始めた

「げっ！二重魔法かよ……」

ダロットがマジかよ的な顔をしながら間合いを開ける

「『アネモスコメット』（彗星の風）」

強烈な風が吹き付ける中、彗星が降りそそぐ

ヒュ~~~~ドゴーン！！

シュシュシュシュバーン！！

なんとか全員がエナジーリフレクションを唱え身を守る

「これほど膨大なフォースを使ってもあの戦闘能力……」

レクセルが啞然とする

魔法使用中はさすがに剣の動きは止まっていたが疲れてる様子は一切見られなかった

「あの魔法に全てのフォースを注いでたら防御魔法なんて簡単に打ち破れるところだったな」

再び武器を構えたダロットが落ち着いて言う

武器を浮かす魔法を使っているのにもかかわらず新たに魔法を唱える高度な技術

そういえばあの黒い少女もそんなことしてたっけ？

まだたどり着かない俺とギフェアはなるべく急いでいた。

「ラファールガを使えば一気に行けますよ？」

「いや、シオラ石にも使用上限があるのは知ってるだろ？そう何度も無駄に使えない」

魔法も便利なものだと思っていたが使い慣れるといろいろと面倒な事もある

使えるのに使えないのはなんだかもどかしい。

数分という短さでたどり着いたが、戦っている者にとってはかなり長く感じていた

「すまない。遅れた……」

「ああ、でもこいつは手ごわいぜ。物理、魔法攻撃は一切通用しないし、にしては攻撃はバンバンやってくるし、魔法は二重魔法普通

に使ってやがるし」

地面に刺した剣に体全体の体重をかけ休むダロツト

確かに、攻撃の通用しない相手と埒の明かない勝負を続けても意味が無い

だが、ここを突破されたら……。想像するだけでも恐ろしい  
なんとか食い止めないと！

「ミヴィ？何か手は無いか？」

「そうですね。無敵なこの人には……。ん？」

「どうしたんだ、ミヴィ？」

急に何かを探るように目を閉じた

「私と同じような力を感じる……」

「どういうことだ？」

ミヴィと同じ力を感じる？意味が分からん……

「この人、精霊を宿しています。」

はあ？

「精霊を宿してる？」

「その様です。この驚異的なスピード、フォースの限界突破などあなたたち人間にはとても不可能な事やってのけるわけはこういうわけだったんですね」

「なあ？精霊に宿られた奴はどうなるんだ？」

「その人の性格や精霊の性格により片方が完全に眠らされたり、精霊の能力だけを利用する人間もいると思います。もちろん100%精霊に体に乗っ取られる場合もありますが……」

「ふうん。んであいつはどうなんだ？」

「えっと。人間：精霊とすると8：2ぐらいです」

ほとんど人間じゃねえか！？

「しかし、精霊の力はほとんど借りて戦っているようです」

「っていうことは素の人間は強くないと？」

「そういうことになります」

ふうん。何があつたか知らないけど  
あいつに好き勝手はさせない！

「ミヴィ？俺に宿ることは出来るか？」

「えっ？」

さすがに俺の言葉には驚いたらしい  
めったに表情を変えないミヴィが目を真ん丸にしていた

「そうすればあいつと対等に戦えるかもしれない、いや、それ以上も可能か？」

「でも、どうなるかわかりませんよ？」

「宿ることさえできればそれでいい。今はこの方法が最善策だ」

「そう…ですか……。では、いきますよ！」

そういうと俺に軽く抱き着くような感じでスウッと入って行っ  
たと、同時に意識が途切れた……

「うつー！……こじはっ。」

体の痛みで起き上がった俺は周りを見渡す

「おい！大丈夫か？」

この声はギフエアか？

「大丈夫みたいです。今の状況は？」

「まだ、仲間が戦っている。だが、そろそろ限界も近い……」と頭を抱えて悩みこむギフエア

「その心配はいりません。俺は今からあいつと一対一で戦います」

意味が理解しきれていないのかぼかーんとなるギフエア  
しかし、すぐに我を取り戻し

「おいおい、命は大切に扱っただぞ！？それでも正気か？」

「はい。むしろ一人の方が戦いやすいかもしれないです」

「ブレイク、頭どこか強く打ったか？調子悪いとかないか？」

「ないです」

そうか。と一言いうと立ち上がり

「最後の切り札を使う時が来たか……」

そう告げて俺に頑張れと言って手を貸して立ち上げさせてくれた

「ありがとうございます。きっと、いや、絶対に勝ってきますんで」

「そうだな。期待してるよ」

それから、ギフェアさんには城の方を頼みますとお願いをしてそちらへ向かわせた

「さて、俺も戦つか……」

手や首、腕の骨を鳴らし武器を構えて戦場へと出向いた

「やべえ。もう限界だ」

「マールー！まだまだこれからだろっ！？先にへたばってみろ。俺がブツ倒してやる！！」

「へへっ。怖い事言っなあ……。そんなこと言われたら嫌でも戦うさ」

その時少し離れた場所でピロクは思う

「なんとかして力にならないと！今こそ頑張らないと！！」

口ではいろいろ言っているが体が動かない  
そんなこんなで既に2時間が経っていて……

「駄目だ駄目だ……。僕には何も「出来るさ!!」へ？」

僕の隣にはなぜかクライムがいた。

「俺は人のフォースの力を感じることが出来る。  
ピロクには少なくとも今まで乗らせてやってきた奴ら以上の力を持  
っている。  
自分を信じる！やれば出来るさ」

「そ、そんなこと言われてもなあ……」

と、その時

刺客が唱えた魔法をダロツトラが弾いた結果、クライムの連れてき  
た仲間に攻撃が当たりそうになった

「お前らっ!!?」

叫ぶクライムにピロクの目の色が変わる

「あれは水と闇と土の結合魔法。それなら!!『フィールドプラズマ  
スヴェート』(炎光雷結合)」

相手の放った魔法とクライムの仲間の間にピロクの魔法が入り

ギリギリのところ魔法同士がぶつかり合い消滅した。

「助かったぜ。やれば出来るじゃねえーかよ。その調子だ」

人外に褒められるのは不思議な感覚がしたが、自分の力に自信が持てた

「僕は、こんな凄い魔法が使えたんだっ！！」

この上なくすがすがしい気分になったピロクは敵に先制攻撃を仕掛ける

「『シュニーヴァッサーグルーベ』（氷水土結合）」

この魔法の相性の良さは抜群だという事をピロクは知っていた。実をいうと、ピロクの本気はブレイクと同等だったりするあくまで現在のブレイクに。だが……

「結合魔法か……ふっ。『S・マバリア』」

マバリアというレベル1魔法ガードでピロクの最強魔法を消し去った

「え……。なんで、レベル1魔法ガードで防がれたんだ！？」

ピロクは啞然とした。相手は一体何者なのか……

「あれは、精霊魔法の一種だ」

クライムがそういった。

「精霊魔法？」

「そうだ、『S』は精霊を表していると聞いた。」

「ってことは今戦っている相手は精霊!？」

「もちろん。そういうことになるな」

あっさりとした受け応えに言葉を返すことが出来ない

「……んじゃ、どうやって勝てばいいの？」

再び絶望するピロクであった。

「ミヴィ?聞こえるかー？」

(聞こえます。どうやら成功したみたいですね。相性はバツチリなようです)

「それは良かった。んでなんか変わったのか？」

（魔法が全て強化されます。体力、運動神経ともに著しく上昇するようです。）

「本当か！？すげえな……精霊の力」

（でも、あまりこの状態を保ち続けると肉体的な、なんらかの症状が起きてしまってて酷い時には精神錯乱になります）

「そっか、短時間で決着をつけるのか……」

俺は敵と戦っているダロツト、マールー、ヴェステイに話しかけた  
「ダロツト、マールー、ヴェステイは城の方を頼む。ここは俺一人で防ぐ」

「おい、本気か？俺たち3人がかりでも埒が明ねえんだぞ、なら協力して」

「大丈夫だ。とにかくギフェアさんも向こうにいる。敵も多いみたいだからそつちを頼みたい」

「そ、そうか。ブレイクの凄さは知ってるが、無理はすんじゃないぞ？」

「そうよ、あなたを私に惚れさせるんだから、それまで死んじゃ駄目だからね！」

どういう理由なんだ……

「分かった。死なずに戻ってくるよ」

3人はピロクも途中で拾いそれぞれ城へ戻って行った。

「さて、速攻で勝負をつけるか」

「貴様、精霊を宿しているな？」

顔に似合わず声帯が低い

これも精霊の力か？

「そうだ、この力を借りてお前を倒す！」

「そうか、それは面白い。『S・フレイム』（精霊炎）」

炎系魔法にしては音が違う。

ヴォオオとかゴオオでもなくフォオオオというおとなしい音

（精霊魔法と言う系列の違う魔法です。

この場合普通の魔法だと太刀打ちできません。

私たちも精霊魔法で対抗しましょう）

「了解！『S・ヘイル』（精霊氷）」

キラキラ、キンキンではなくどう表現したらいいか分からない神秘的な音を鳴らす

精霊と言っただけあって演出が凄いい、迫力あって良いなあ

「ほう…。少しはやるようだな。」

そういうと剣を取り出す。その剣には魔法が宿っていた。

「魔法剣……改？」

「魔法剣改？……違うな。」

魔法剣スピリトウスというものだ。さて、貴様の腕前見せてもらおう」

そう言って駆け出してくる

（私たちも魔法剣を）

「わ、分かった。魔法剣改！」

ヴェーアを呼び寄せ炎剣に水を混ぜる

「フハッ！なんだその剣は？そんなお子様剣で俺に勝てると思って  
るのか？」

（それより上の魔法剣は無いのですか？）

「これが限界だ。これ以上なんて……」

（そうですか、なら！）

ミヴィがそういつと剣に異変が起きる

「なんだ？」

（私が命名します。魔法剣スプライト）

その剣は今までの剣の作りとは全く違う物だった  
刃の部分に赤い紋様が刻まれそれを氷が覆うようにコーティングし  
持ち部分は金色に輝き、全体に雷を纏っている

「なんかすげえ強そうなんだが……」

（戦ってみればその威力も分かります）

「そっか、楽しみだな『ラファーガ』（超加速）」

2人が高速でぶつかり合うと同時に剣を交える

ジュオン！！

シリシリシリシリ！！

「音すげえな。スーウーズみたいな音だ……」

「何！？俺の剣より強いだと……」

「そうか、それは残念だな」

（その力の差は相性。今なら勝てる！）

「よし、乱斬りだ！ おりゃあああ……！！」

ヴォンヴァァン！

ジュオンジリジリ！！

「くっ！！」S・ブラスト』（精霊爆風）「

「っ！」S・エレメントアブソープ』（魔法吸収）「

あの少女の使った魔法を覚えといてよかった。  
ってかよく覚えてたな……

（危なかったですね。よくその魔法をご存じで）

「あの少女と戦ったおかげで助かった」S・ダイヤモンドダスト」  
（超精霊細氷）「

空中に巨大な氷がいくつも出来て一斉に相手に向かって落ちる。

「ちっ、精霊の力を持ってしても駄目だったか……」

その言葉を最後にその刺客は姿を消した……

「さすが、魔法の演出が凄いなあ……」

（まったく、あんな強力な魔法を使ってよく平然と立っていられますね）

「そつえばそうだな。俺、実は精霊だったり？」

（その可能性も十分ありえますね）

「ええ!？」

（嘘ですよ）

なんか、ミヴィの性格が変わってきた様な気がする

「変な冗談はよせて……」

その後、俺とミヴィは今の状態を解除して城の方へと向かった。みんなには追いついたと伝え、びつくりされた（当たり前か……）城にいた敵はそう強くも無かったらしく逆に退屈だったそう……シルクシャシャはアイシエス姫に俺の真似をさせて乙女同士の恋愛術とかを教えてみたいだが、相手はシルクシャシャだからな。どんなことを吹き込んでるか分からないから困ったもんだ。アイシエス姫が変な行動したらすぐに止めさせないとな……

「ブレイク、今回の刺客の戦いぶりを見ていたわけでは無いが、君に魔法の講師を頼みたいんだ。」

いきなりギフェアがそう言ってきた。  
いくらなんでも急ではなからうか……

「ちなみにいつを予定して……？」

「明日だ」

睡眠不足で過労死するという可能性が十分出てきたな  
明日当たりが俺の命日か……

そして、とギフェアが続ける

「その子たちはブレイク直属の部下と言う事にもなるぞ」

お！なんとも頼もしい味方が……

俺は寝不足のせいか頭の中で考えることは、どうやってこき使ってやろうか？

とか、寝る時間を確保するにはどうしたらいいか？とか。  
そんなことばかりであった。

「そうですか。分かりました。」

「よし、そういうことだ。頼んだぞ?」

「分かりやすいように頑張りますよ」

俺はそう答えて速攻自分の部屋へ戻った。

この時ばかりはどんな相手に邪魔されようが寝ようと思った。

そして深夜……

「ん? なんじゃ? 鍵が開かないぞ?」

だが、俺も馬鹿じゃない。同じ過ちは何度も起こさない。

魔法で鍵を完璧ロック状態にしておき、シルクシャシャによる不法侵入という危険性は防いだ。

「ふぬぬうゝゝ! はあ、はあ…。なぜじゃ! なぜ開かないのじゃ!」

しばらく窓相手に奮闘するシルクシャシャであった。

ちなみにミヴィはブレイクの隣の空き部屋に住むことになりすやすやと眠っていた。



## 第二十六章 バトルウィズアサシン（後書き）

「なあなあ、アイシエス？ 少しだけ私に付き合ってはくれぬか？」  
「えっと……、大丈夫ですけど、どんな用事ですか？」

「なんじゃ！？ 何事じゃ！！ ってお主らは！」  
「はい。やっと見つけましたよ。シルク姫」

「君がブレイク君だね」  
「あなたは？」

「長年の調査の結果、魔人に勝てる方法が見つかった。  
と言われたら聞きたいかね？」

次回『開校！ブレイク魔法授業』

## 第二十七章 開校！ブレイク魔法短期学校

窓の外に広がる青空 快晴だ。

しかし俺の気分は曇りまくりだった。

良く寝られなかったとか、朝になっても尚扉をガチャガチャしていた猥褻姫のことじゃない  
不思議な夢を見た為である。

その夢の中、俺は都会のと真ん中に立っていた。  
高層ビル、マンションが立ち並ぶ都市、懐かしい風景だと周りを見渡した。

『明後日には大量の雨や雷を伴う雲が接近してると思われ……』

天気予報だろうか？何処からともなく聞こえてくる。

ふと携帯で日付を確認していた。 6月27日

パサッ

手から何かが落ちた物を拾うために地面を見る。

どうやらメモらしく、買い物の途中だったらしい、野菜の名前とか飲み物とか調味料だとかいろいろ書かれていたのだったが、一番最後に俺の知らない名前が書いてあった。

『稲美に雑誌を買ってやる』

……稲美って誰だ？ってか、俺はなんでここにいます？とにかく疑問ばかりが残っていた。

その下にも人形を探すがどうたらこうたらと書いてあったが目の前から走ってきた少女に驚いて呑気に読んでいるどころではなかった……

現れた少女は限りなく漆黒の少女と瓜二つだったのだが、それは顔だけであり服は普通の私服と黒一色では無かった。

杖も持って無いしな。      どうやら何かを言っているようだが、何を言っているかはわからない、音はなんにも聞こえないらしい、俺は、聞こえないとジェスチャーで伝えたとその少女は俯いてしまった。

可哀そうだが聞こえないのだから仕方がない。

しばらく何もせずただ突っ立っているとなぜか手を引つ張られた。どうやら着いて来てほしいみたいだったので黙ってついていくとある病院に着いた。

「……病院？」

当然身に覚えのない場所。何食わぬ顔で入っていく少女。黙ってついていく俺。

173号室という場所で少女の歩みが止まり躊躇なく扉を開ける。

部屋のベッドの所には若い少女が寝ていた。少女はテーブルの上に置いてあった、ペンと紙を使い俺にメッセージを伝えようとしたのだが、俺は信じられなかった。

『この子はあなたの妹』

たった1行の言葉。俺は疑った。俺には妹なんていないし1人っ子のはずだ。  
お父さんは世界旅行に行ってるし、お母さんは地元を離れて長い間働いている。  
今まで暮らしてきた中ではそんな記憶……あれ？思い出せない。  
3人家族では無かったのか？俺は急いで部屋番号の下に書いてある名前を見に行った。

【竜崎稲美】

どこかで見たことのあるような名前だったが、思い出すことは出来なかった。  
だが、1つだけ分かったことがある。  
本当にこの子が俺の妹だとしたら俺の名字は竜崎だ。  
ひとまず部屋へと戻るとまた少女が紙に何かを書いていた。

『この子は私によく似ている。助けてと語ってくる。私もそう願う。』

この子はお前に似ている？しかもこいつはこの子と会話ができるのか？

『もう一つの世界にいるこの子は闇の中。全身真っ黒。服も髪も口ッドもすべてが真っ黒』

服も髪も口ッドも？

『そんな子をあなたは助けることができますか？守ってあげることが出来ますか？記憶を思い出すことができますか？』

いやいや、俺を殺そうと襲って来た奴だろ？

そんな奴を助ける？守る？どということなんだ？

『そう、全てはあなた次第なのです。』

俺次第……

何を言おうとしても口がパクパク動くだけでその少女には何一つ伝わらない。

そしてその幼い少女。俺の妹に近づいて顔をみようとした瞬間に目が覚めた。

朝から気分が悪いのも当然だ。

超顔が似てる漆黒の少女は出てくるし、俺に妹がいるとか知ったし

……

俺は買い物に出かけてる途中で、手紙に書いた文字が確かに俺の文字だった。

だとしたら俺はあの子を知っている？

あゝもう！全然分かんねえ……深く考えても何1ついいことも無いし記憶喪失という可能性もあるがまだわからないし、魔王ギーヴァの仕業なのかもしれない。

そんなこんなで自分の部屋にある窓から空を見ていたというわけだ。

「はあゝ。いくら魔法が使えたって教える側って結構難しいよなあゝ」と無理矢理頭を切り替える

とくに準備するものも無いし、

夢の事も忘れようと俺はとりあえず外に出て魔法の確認をすることにした。

それにしてもあの夢は一体……っていきなり何考えてんだよ俺は。

自室から出るとミヴィに会った。

おはようございますと一言告げるミヴィ。

あいかわらず無表情だがその無表情から何かを感じ取った。

「どこかへいくのか？」

「はい。ヘゼラル地方の友達の所へ少しだけ」

魔法授業、見に行けなくてすいませんと後付けで言った。  
それはそれで構わないのだが……

「デユナメイス国にミヴィの友達？…え、だって、封印解いたのつい最近のことだったし俺とずっと一緒だったろ？いつそんな場所に行く暇があつたんだ？」

「剣仲間と言うべきでしょうか？私が剣に宿っていた時、主人はもう1つ剣を持っていました。とてもおしゃべりで話に付き合うとても疲れてしまう子でした。」

「ミヴィはあんまり喋らないからな」最近はだいぶ変わって来たけど……

それにしても剣仲間だなんて、なんか凄いなあ。

俺の身近な物にも精霊が宿っていて絶えず話をしてたりな  
って、さすがにそれは無いか……

「それでもってあの子はとても感情が豊かで、泣いたり笑ったり怒ったり心配したり私とは違って喜怒哀楽がしっかりとあります。とくに寂しがり屋で数時間私と離れただけで泣きじゃくっていました」

「いろいろと大変なんだな」

「はい。でも私と私の友達は離れ離れになってしまった。」

「心配なんだな。そこで十字架の奴に会ったのか？」

コクリと頷くと、「もう泣かないと約束はしていましたが久しぶりに見に行こうかと」

たぶんその子もミヴィと同じく置いて行かれたのだろうか……俺は「気をつけてな」と言って空へと飛び立つミヴィを見送った。

「何事じゃ？」

異様に外ががやがやするので嫌々目を覚ましたシルクシャシャ。いつのまにかヴェセア城の一角にシルクシャシャ専用の部屋が出来たのは少し前から実行してきたシルクシャシャのちよつとした策略が上手くいったからである。

「うるさいんじやが……」

いつまでたっても止まない声にだんだん腹が立ってきた

「……いーんちゅー！……いーんちゅー！……いーんちゅー！」

怒った勢いで扉を思いっきり開ける

「何じゃまったくっ！」

独り言をぶつぶつ吐きながら廊下をドスドス歩いているとアイシエス姫がトコトコ歩ってきた。

「あ！シルクちゃん」

バリバリ機嫌が悪いシルクシャシャに声をかけたアイシエス姫なんと空気の読めない子でしょう……

「アイシエスではないか。あと、その名で呼ぶなと言ったるっ」

敵対していたアイシエス姫とシルクシャシャ姫はいつの間にか結構仲良くなっていた。

そして機嫌の悪いシルクシャシャに話しかけてもブチ切れることな  
く事は進む…

「どこかへ行かれるのですか？」

「ん？ 特に要は無いが不満解消のためにあいつらに何か言っ  
てやろっと思っとな」

「あいつら？……あいつらとは誰ですか？」

外を睨み付け腕を組むシルクシャシャ

「外にいる連中じゃ！」

燃えるように赤い髪が今にも燃えそうなのではないかと心配になったアイシエス姫は消火栓の位置を把握する。そして、シルクちゃんが無事に出る前に早急に今の状況を説明した。

「ふむふむ……。そうじゃったか。」

魔法の授業をするのか、それで、そのうゝいわゆる生徒たちが騒いでいたと……」

その時ある考えがふと浮かんだ。当然悪いことだ。

完璧に悪巧みの顔になったシルクシャシャは口の端を釣り上げてアイシエス姫に話しかける

「なあなあ、アイシエス？　少しでも私に付き合ってはくれぬか？」

「えっと……、大丈夫ですけど、どんな用事ですか？」

「魔法授業の見学……と、いったところじゃな」

シルクちゃんが見学だなんて…

「ま、まさか、まさかとは思いますが、  
見学ついでに自分の不満をぶつけようなどと言うお考えはお持ちではないでしょうか？」

「お！ アイシエスの勘も鋭くなったな。  
その通り、まあ違うといえば違うんじゃないが、あながち間違っておらん」

「だ、駄目ですよ！ ブレイクさんが悲しみますよ」

「うっ！ 痛手をついてきたな……。  
じゃ、じゃが、私の眠りを妨げた輩は許せんのじゃ。  
それにアイシエスも、もはや共犯なんじゃからな！」

「ふえ！？ な、なんでそうなるんですかぁ！」

「まあまあ。とりあえず眠りを妨げた輩をぶったおすのじゃ！」

「わ、私には無理です。無理ですう！」

アイシエスの事だからすぐにボロがでそうじゃからな、ここは慎重に…

「うーん……。アイシエスにはブレイクの気を引いてもらおう。本当なら私がやりたかったんじゃが、私の手で罰を与えたいという事とこの作戦の成功のためにもこれが一番の得策じゃからな。よろしく頼むぞ！」

「えっ、あ、はい……」

しぶしぶ了解するアイシエス姫をこれで仲間じゃな！という、なんとも身勝手な同盟を結ばれ、とりあえず作戦を共にすることになってしまったのであった……

誰からも見られることの無い死角で、心地よい風に当りながら俺はシオラ石を手にとった。

シオラ石の色はいろいろあるが、炎魔法は赤いシオラ石。水・氷魔法は青いシオラ石。雷魔法は黄色いシオラ石。大地魔法は茶色いシオラ石。暗黒魔法は黒いシオラ石。回復魔法は白いシオラ石。と、まあ代表的なものだけを挙げてみたけどこれって結合魔法は2結合が限界だよな？左手と右手で一個ずつ。タコやイカじゃあるまいし、そんなにたくさん持てない。んじゃどうやろうか……。

試しに片手に2個ずつ持ってみた。いや…持てなかった。

「やっぱ、無理だよなあ。片手に2個ずつ持つなんて」

と、そこにシルクシャシャが近くの通りを歩いているのを発見した。

「シルクシャシャじゃないか？」

「どっとうしたんじゃブレイク？ なっ何か悩み事か？」

このときシルクシャシャは物凄く焦っていた。

自分の考えている策がバレてしまうのではないかと

いや、既にバレているかも知れないとさえ思っていた。

「悩み事？ んまあ、確かにそうかな……。ちょっとこっちに来てくれ」

「なっなんじゃ？ 何用じゃ？」

心臓をバクバクさせながらブレイクの元へと歩いて行った。

ヴェセア城・門前

すでに、魔法を学ぼうと待つ三大学園（マギア学園・メイジ学園・ウィザード学園）

の生徒たちがずらりと並んでいた。そして、その中で将来の夢に胸膨らます少女がいた。

「よし！ 今までの魔法の復習は完璧。段取りもちやんと確認してきたから、失敗することないよね。私の得意分野の防御魔法を見てもらって、今回のこの魔法授業を経て、いつかはこのヴェエシア城の騎士団として仕事して、妹・弟たちに楽させてあげなくちゃ！」

私の夢の第一歩！

と、門をくぐり視界がとらえた光景は強靱な肉体を持つ大柄な人やどこからどうみても天才と名乗りそうな人柄だったり、とにかく、私が居られるような場所じゃなかった……

「あ、あはは……やっぱり、止めよっかなあ」

『人数が揃いましたので門を閉めます。門の近くは危険ですので離れていてください』

古びた機械のようなキキイという音をたてガシャンと閉まる門もう、引き返すことは出来ない

「うつわ。どうしよう……」

と1人おどしていると自分の隣にいる丸坊主の男が何やら言い始めた。

「おい、聞け！お前ら！俺は、マギア学園一の魔法使いだ！  
今回の魔法授業を経て、三大学園一の魔法使いになってやる！」

こんな暴言男をほっとくわけもなく、もう一人の男もその男に対し  
言い始めた

「んああ？ おめえなんかより俺の方がよっぽど上手く扱えるって  
んだよ！ハゲは黙ってる！」

んだとお！？と、仕舞には、けんかを始めた

「うつわ！？ち、ちょっと！押さないでよ！！」

そんな私の声も届かず二人のけんかはどんどんひどくなっていった

「きゃっ！！」

なんかもう、最悪な状況だ……。  
傍杖を食うとはこの事なのかなあ。と、その時

「真っ黒黒に焦げるのじゃ！『ライトスピーニング』（高速電撃砲）  
」

眩い閃光とともに高压電撃が二人に落ちた

「ウギギギギギギッ！！」

言葉通り真っ黒に焦げた二人を見てある少女が高笑いをしていた  
あの子は誰なのかな？もっもしかしてっ！恋人っ！？……いや、そ  
れは考え過ぎか。

「ざまーみるなのじゃ！神聖なるこの城を汚す者は、この私が許さ  
ないのじゃ」

真っ赤な髪に真っ赤な服、まるでリンゴみたいな子だなあというのが私の第一印象。  
そして、次に水色の髪をした綺麗な緑の目をしている少女が歩いて  
きた。

その隣にいるのは……。ブ、ブレイクさん！？  
こっち！？もしかしてこっちなブレイクさん！？それとも2人と

も！？

私もあそこへ行きたい……

ブレイクが出てきたとたんざわざわし始める会場の人々。

なにせ、あの刺客を倒したという話だ。あつという間に話は広がって行った。

そんなことがありながらも、城で暇していたブレイクには全く関係ないが如くのんびり生活していたということもあって、自分の名前が出された時には驚いた。

「なんで、俺の名前を知ってるんだ？」

「当然、ブレイクは人気者じゃからのう。知らない筈がないのじゃない！」

胸を張って言うシルクシャシャ。

さっきのセリフやら、授業には出てくるわ、ここはお前の城じゃない。

んまあ、とにかく

「大丈夫か？その……水色のワンピースの……」

俺が声をかけるとその子はびくうとして周りをキョロキョロ見渡す。

「わ、わたしですか？」

「ああ。そうだけど？怪我は無い？」

「だ、大丈夫です。ありがとうございます」

「名前は何ていうんだ？」

「なつ名前ですか！！え…っと、エクシアです。エクシア・フェイナです。」

「そうか、んじゃエクシア。今回のテストを上手く合格してまた会えることを楽しみにしているよ」

「本当ですか！はい。頑張ります」

とは言ったものの……テストかあ…ってテスト！？

あれ？授業だけかと思ってたけど、さすがにこの人数じゃ無理ってことかあ

倍率高いなあ……。でもっ

私はこの時、ブレイクさんというお方の呼び名を変えた

こんな私を助けてくれて、心配なさってくれて、なんて優しい人なのだろうと。

だからブレイク様の気持ちにお応えして必ず合格しなくては！

この時、すでにシルクシャシャが助けてくれた事なんて頭にまったく無かった。

「ブレイク様……私は必ずこの騎士団に入団することを誓います」

小さな声で私は心に誓った。

「んじゃ、手始めに、この授業を受けることが出来る実力を持つかどうかテストをする」

「ブレイクさん？」

いきなりアイシエスが話してきたものだからどうしたものかと振り向いた。

「なんですかアイシエス姫？」

みんなの前ってこともあるし当然言葉を変える。

「あう。このテストが終わったらちょっと……」

「ちょっと？何か用があるのですか？」

「……はい。少しでもいいので」

一体なんなのか？まあ、テストが終わった後は少し休憩時間を取るとして

とりあえず了解した。

「お主。なかなかやるなあ」

「はい。まあこんな感じでよろしいですか？」

尚もシルクシャシャの悪巧みは進んでいくのであった。

「それじゃ、試しに防御魔法を使ってみる。数秒後に空からサンダーボルトを突き落とすからそれを防ぎきったら合格だ。しかし、防御魔法を唱えた後、魔法を防ぐまでは魔法を解かない事だ。それが出来なければ、即刻失格！いいな？」

「サ、サンダーボルト！？幸い防御魔法は私の得意分野だけど、そんな高レベルな魔法を防げとは思えない、…でも、やらなきゃ、やらなきゃ合格しない……。もう！こうなったら自棄だ！『エネルギーフレクシオン』」

両手を空に広げ、虹色の光を放たせ頭上に魔法を展開させる。ブーーンという魔法特有の音を鳴らし空から降ってくる魔法を待ち構えた。

「これでよし！集中を切らさないように頑張らなくちゃ！」

死なないよね？という心配をしつつブレイク様が、数秒後、どんなすごい魔法が降ってくるのか楽しみでもあった。

「でも、やっぱり怖いな……」

恐怖を感じながらも必ず防がなくちゃならないというさつき心に誓ったことを思いだす。

しかし、ブレイク様が言っていた数秒はとくに過ぎているのにいつこうに落ちてくる気配が無い。数秒で落とすと言っていたのにどういうことだろうか？ 周りを確認したいけど、視線を逸らせば防御魔法が解けてしまう。それほどこの魔法は集中しなければならぬ。その代わりその集中は蓄積されていつて唱える時間が長ければ長いほど強力な防御魔法が出来ると教えてもらった。今、この状況なら魔法を防げるかもしれない。

「でも……」

もうどのくらい時間が経ったろうか……

時間が見れないから確認すらできない

そんなことを考えていると、しびれを切らしたのか、とうとうある男が声を荒げた。

「あゝもうやってらんねエよ！ 数秒後じゃねえじゃん！ ったくいつまで俺らを待たせる気だ！」

それでも魔法は降って来ず、だんだん魔法を唱えていた人がいなくなってきたその時

「無数の雷いかずちよ降り注げ！『マジックソープ』（魔法解放）」

みんなが慌てて防御魔法を張るも虚しく簡単に破壊されていった。ブレイクは放った魔法を空で止め、数秒では無く、5分程度待つてから降らした。

5分近く魔法防御を唱えていたものは当然余裕に防げる魔法も不意に來た魔法を即座に防ごうとした奴は簡単に壊される。實際敵の魔法はいつ来るかなんて分からない。それが普通だ。気を抜いていると痛い目に合うということがテスト内容だ。

「うわー眩しい！！」

猛スピードで振ってきた魔法は私の防御魔法で防ぐことが出来た。5分も待ったかいがあった。魔法の楯も傷1つ付いてない。

「やった！我慢しててよかった」

ホッと一息吐くとヘナヘナと地面に座る

「合格者は30名程か、他の奴は残念ながら失格だ受ける権利は無い。

不満がある者はそこにいる林檎ちゃんに言ってくれ」

「なっなんじゃ！林檎ちゃんとはっ！……いや、特別な愛称で呼ばれるという事はもしかして気があるってことか？そうなのか……そうだったのかブレイク!?」

勝手に脳内妄想爆発中の姫様はほっというて

「おい待て！こんなんで結果を決めるんかよ！！納得いかねえぞ！？今すぐ俺と勝負しろ！」

そうだ！そうだー！と不満の声が上がる。

「ちっ。しょうがないな。俺に勝ったら合格にしてやるよ。」

「言ったなあ？」

「ああ、言ったよ。 んじゃ、いつでもどうぞ」

「それじゃ遠慮なくいかしてもらうぜ！『エアロスラッシュ』（真空斬り）」

「そんな魔法で勝てると思ってるのか？『バーストクエイク』（岩石飛ばし）」

「岩っところで俺の技が……って！きつ効かないだー!!」

同じ魔法でもレベルが違ってもんだ。

どんなに鋭くしたって鋼並みの方さを誇る岩の前じゃあどつすることも出来ないだろう。

そして、男はと言うと岩石に埋もれうめき声をあげている。

「どうした？他に相手してほしい奴はいないか？」

しーんとなる一同。

何も言わずゾロゾロと帰って行った。

んで、ブレイクの魔法を見ていたエリシアはと言つと

「素敵！なんて素敵なのかしら。はあゝブレイク様と一緒にいられるあの二人が羨ましい」

そんな風にブレイクを思っているとは見ず知らず

アイシエス姫はブレイクの気を引き付けようと名前を呼んだ。

「こつちへ来てください」

「ん。あ、ああわかった。

とりあえず合格者も広場の休憩所に移動させたことだし大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ。なのでこちらへ」

何をそんなに催促するのか……と思いつつ着いて言った俺。そのころシルクシャシャというと

「待て！お前ら！！」

城から出て行こうとする生徒たちを止める

「なんだ？つてかあんた誰？」

「何を隠そうこの私はじゃなあ。ガルヘント城の姫なのじゃ！！」

「城違うじゃん、ちびっこちゃんは帰った帰った」

「なっ！何じゃとお。んもう怒った。

ただでさえ眠気を妨げられてむかむかしていたっていうのに！」

少しずつ長い詠唱を始めるシルクシャシャ

「どうした？ほら、危ないから高い所から降りないと、足が滑って落ちちゃっぞぞ？」

「うぬぬぬううう言わせておけばあゝ」モンス・イグニフルース  
（噴火）」

地面から物凄い勢いで飛び出すマグマ

「うおっ！アチッ！」

「あははははー！ざまあーみるなのじゃー！！」

やられゆく生徒たちを見て嘲笑うシルクシャシャ、とその時。

「いました！！『コンゲラート』（氷結）」

何人かの声が混ざった詠唱によりマグマがカチンコチンに凍ってしまった。

「なんじゃ！？何事じゃ！！ってお主らは！」

「はい。やっと見つけましたよ。シルク姫」

久しぶりに聞くその呼び方。よく見てみれば懐かしの4人達。

「セルウエン、カラゾネス、ハイシャル、ミヤーゼル。どうしてここにいるのじゃ！？」

「はあ、そりやもう大変でしたよ。いつまで城を空けておくおつもりですか？偉い人たちが話があるっていうのに長く待たせて、だいぶ前から姫様が自分の部屋から出てこない理由も分かりましたよ。何とか鍵を開けて部屋に入った時窓のかぎが閉まってなかったんですから。こちらとしてはどんなに心配したことが……」

あきれたようにセルウエンが言う。

「さあシルク姫、帰りますよ！やっこの長旅も終わる」

ミヤーゼルがシルクシャシャの腕をつかむ

「なっなんじゃ何をする！」

「こうでもしないと帰りませんからね。帰ったら会見ですよ！  
一国の姫だっという事忘れないで下さい」

カラゾネスは魔法（もちろんシオラ石使用）で移動系魔法陣を形成した。

「何じゃお主ら！いつからそんな高度な魔法が使えるようになったんじゃ！」

「そうですね。ギフェアさんのおかげですかね。なかなか捕まえられない人をどうやって城に連れて帰るべきかって相談したらこんな凄い魔法の指導をして下さったんですよ。」

「ギフェア……あいつめえ……」

「姫様護衛隊、役目を果たしました！今日はパーティーだ！」

なぜパーティーになるのか分からないが、ハイシャルが元気よく言う

数日前の元気の無さとは打って変わってテンションが全然違った。

「やめろ！やめるんじゃ！！やめろと言っておるじゃろ！！」

無理やり引つ張られたシルクシャシャはあっけなく魔法陣に入れた。

## ヴェセア城・広場前通路

シルクシャシャがどんなことになっているかまったくわからないアイシェス姫。

どのくらい惹き付けておけばいいのか分からないのでこのまま会場に行ってしまうという作戦に出た。

「なにか話があるんじゃないのか？」

「い、いえ。そんな深い意味はありません。ただ一緒にいたかっただけです。」

この言葉は本当の事であるのだが、同時に作戦を悟られないためもあった。

しばらく歩いていると授業が行われる広場に着いた。

「ブレイクさん。私は一緒にいても大丈夫なのでしょうか？」

なんか、いろいろと困っているアイシエス姫は先程からそわそわしている

「ん？ 別に大丈夫だけど居心地悪いかな？」

「い、いえ、大丈夫なんですけど。」

なんか言いたそうなのは分かるが何を言いたいのか分からない

「どうした？ 言いたいことは言っておかないと後で後悔するぞ？」

俺は足を止め、アイシエス姫の前に立つ、広場までは後、数メートルで到着するのだが、こっちとて、話の途中じゃ気になってしょうがない。

「い、一緒にいてもなんとも思われませんか！？」

「……………」

なんだ、そんなことか。でも、そんな事で良かった。

「だ、大丈夫なんでしょうか？」

「ああ。大丈夫だ。そのくらいのこと俺は気にしない。

そばにいてくれていた方が、俺も落ち着くだろうし、なにしろそうしてもらいたい」

「あ…はい…わ、分かりました……」

まるで機械人形のようにぎこちなく体を動かしながら俺の後についてきた。

なんか煙出てるけど頭大丈夫かな……。

## ヴェセア城・広場内休憩所

「ふう〜。私でも受かたなんてなんか凄いなあ〜」

自分が受かったことの嬉しさに浸りながら休憩所で休んでいる少女は、ついに授業をうけれるんだと、うきうきしていた。

「どんな授業をしてくれるんだろ。楽しみだなあ」

と、その休憩所に一人の若い騎士団が入って来た。

「え」と。次の組の人たち……準備が出来ましたので、どうぞこちらへ」

彼女は目を魅かれた。彼にではなく、彼が来ている服に。

私好みの騎士団服のデザインはここに入りたいと思った1つのきっかけでもある

本当の理由はそうではないけど……

「うつわ、なんか緊張するう……」

そんなこんなで授業開始。

「えーと、魔法を使う前にこの広場に特殊なフィールドを作り上げたから、シオラ石無しで授業を行っていくよ」

特殊なフィールド？

いままでいろんな知識を積んできたけど、このことに関しては全く聞いてない

本で見たことも無ければ、誰かが使っている所も見たことが無い

「ふう……（さすがに、10組を休憩15分程度でやり続けると体が

やばい……)」

この特殊フィールドはこの授業試験を行う前に丁度暇してたシルクシャシャから教わったことだ。なんだか話してる最中ずつと緊張している様子だったけど、どうしたものか……。それについて聞いてみたが、なななな何でもない何でもないんじゃないじゃ気にせんでくれ！といかにも何かありますよ的な発言を残してどこかへ行ってしまった。何か話せない理由でもあったのか？後で、相談に乗ってやるか。とにかくシルクシャシャのおかげでいちいちシオラ石を使わなくても魔法が使える。

「とくしゅふいーるど」って何ですか？」

首をかしげながら唇に人差し指を当てる

「えーつとな。特殊フィールドってのは

」

ギフェアさんから聞いたことだけど、現在、サンツエルク大聖堂というところで特殊フィールド、大聖堂にいる人達、俺が知っている人で言えば、ダケストル・フォナン老師、レスター・ダランさん、ロトフェイ・マルトレスさんなどは『Sフィールド』と呼んでいるらしく、この特殊フィールドの全世界化を目指しているらしい。そもそも特殊フィールドにはシオラ石が無くても魔法が使える力がある。魔法破壊計画が成功に終わってしまった今、この不安定な世の中をどう変えるべきか話しあっている。そのことを知るのは俺とギフェアさん、そして、その他の騎士団リーダー格の人達だけである。あまり外に知られると危険が及ぶという考えから一部の人にしか話

さなかった。

まあ。これを簡潔化してアイシエス姫に教えてあげた。

「マホウハカイケイカク？」

俺の袖をクイクイ引っ張ってきて教えてと目で訴えかける

「ああ、えっと……。それについては、後でじっくり好きなだけ話してやるから。」

「本当ですか！？後で。じっくりと。好きなだけですわね！」  
輝かしい笑顔を見せられてはどうしようもない

「ほどほどにな……」

「はい！ほどほどですわね！」

分かってないな。こりゃ……

まあ。とりあえずこの組が最後の組。早いとこ終わらせて寝よ

「んじゃ、まずは、全ての属性の初期魔法を唱えてみる」

「初期魔法ですか？」

先ほどのテストにいた少女、エクシアが聞いてきた

「全てにおいて土台がしっかりしてないと魔法のレベルを上げても魔法は完璧にはならないんだよ」

とてつもなく感心したようでメモ用紙を取り出し何かを書き始めた。

とりあえずみんなが魔法を唱えた。

授業の様子も最初のテストを通ってるだけあってみんなしっかりした魔法を唱えている。  
と思ったのだが……

「あれ？あれえ！？」

俺の言葉をいちいち書き留めていたエクシアは魔法をうまく制御できていなかった。

どうやらかなりテンパっている様子で、普段は上手く出来ているのだろうとつかえる。

「大丈夫か？少し落ち着けって」

「ま、魔法が制御できないっ!!」

なにがどうしたんだか、魔法が暴走し始めた。

「うわっ!」「きゃっ!!」「っ!『エナジーリフレクション』」

それぞれが魔法の対処を行っていたがいくつかの飛び散った魔法が城の外に出てしまった

「あっ!おじいさん危ない!!」

散歩でもしていたのか、のろのろと歩く老人に今に魔法がぶつかりそうだった。

いや……、ぶつかった。ぶつかったけど微動だにせず何事もなかったように手から落ちてしまった筒を拾った。俺はすぐさま駆け寄り頭を下げた。

「す、すいません!お怪我はありませんか?」

その老人はこちらに顔を向けると、まるでやっと会えたかのような友人のような顔をしてきた。

「君がブレイク君だね。」

その言葉は疑問では無く断言に近かった。  
目と目が合った瞬間俺は驚いた。

……金色！？

「あなたは……」

「ああ、すまんすまん。君が私の事を知っている筈が無いよな。  
私の名前はファンベル・ラックポート以後よろしく願う」

丁重な挨拶にあたふたしているといきなり目の色を変えてしわを寄せた

それよりも……ファンベル爺だつてえ！！？

「ブレイク君。どうやら君に思いを寄せている者が沢山いるようだね」

えーっといきなりそんなこと言われても……

「ファッファッファ。いきなりそんなこと言われてもって顔しておるな。私は心眼という物を備えていてね、人の目を見ると友情関係やら悩み・力量なんかを知ることが出来るんだよ」

「そ、そうなんですか」

まさかファンベル爺にここで会うとは思わなかった。うわ〜なんという対面。俺のミスで危険を及ぼしてしまった事がきっかけで会うことが出来たなんて…良いんだか悪いんだか…

「そう困らんでもよい。私はその程度の魔法ならバリアを張らなくても平気なんだよ」

エクシアに向いたファンベルはとても落ち着いた声で話していた。

「バリアを張らなくても!？」

どんだけこの人のMFフィールド凄いな…  
急にこの原因を作った張本人が大声を上げた

「そう焦らんでもよい。君が魔法を使ったことなど私にはわかってる。」

「ええ!？ な、なぜですか!？」

「目を見ればわかる」

手をポンっとして、そうか!と一言。

ファンベル爺も気にせんでいいともう一度落ち着かせるように言っ

た。

「そしてブレイク君。君には後で話があるんだが良いかね？」

「あ、はい。大丈夫です。えーっと1時間ぐらいかかりますが平気ですか？」

「時間の事は気にせんでいい。良い部下を見つけることが出来れば良いのう」

この人はそんなことも分かってしまうのか……

「ぶ、部下！？」といきなり声を上げたのはエクシアだった。

「あー言ってなかったな。

今回二度目の試験で合格すれば俺の部下として協力してもらうつことになっているんだ」

「えっ、ええー！！」あたふたとし始める。

どうしよう。どうしましょう。どうかしてしまいますよ私。ブレイク様の部下に就けるなんてこれほど嬉しい事なんて……嬉しい事なんてっ！！

「おいおい、大丈夫か？もしかして俺の部下じゃ嫌か？」

「そっそんな事ありません！もうガンガン働きますよ！！」とまだ決まったわけじゃないのに異様にはしゃぐエクシアだった。

そしてファンベル爺はカフェ・オルリオという場所で先に待っているらしい。

俺もなるべく急ぎますと言い魔法授業の会場・広場へと戻った。

「よし、ちょっとした事故で中断していたけど、再開する。」

初期魔法からの発展魔法そして応用魔法とレベルを上げていき、精神統一・フォースを注ぐペースなどなどいろいろな事を教えて行つた。とくにエクシアには丁寧に、こんな魔法を乱した時にはかなりの被害が出るだろうからこちらとて怖ろしい。そしてテストの時が来た。

「よし、今までやってきたことのテストをする。もちろん合格すれば俺の部下としてセル騎士団に入団だ。合格人数は関係なくしつかりとついていける奴だけを選んでいくからそのつもりでいてくれ。」

そして数時間後……

「ブレイク君、ずいぶん早かったんじゃないかね？」

「いえ、大丈夫です。テストは終わったので」

ファンベル爺の肩には黄色い鳥がとまっていた。

「ほうほう。その様子だとさっきのメンバーは全員合格だったのかな？」

「よくお分かりで、脱落者はいたんですが合計で7人が合格しました。」

「ふむふむ。力になってくれるといいのう。…それにしても雲行きが怪しくなってきたのう」

「キィ、キュイィ」と黄色い鳥の鳴き声が聞こえた。

「そうかそうか、もうじき雨が……」

確かに雲行きが怪しくなってきた。

「えっと言葉がわかるんですか？」

「わしは動物と会話ができるんじゃないよ」

「凄いですね。私も話してみたいものです」

とそこへ、この店のマスターと思われる人が来た。

「ご来店ありがとうございます。何か注文する者がありますか？」

髭を生やしたツルツ禿でがたいの良いマスターはとてもにこやかで愛想が良かった。

「では、コーヒーとブレイク君は何を頼むかな？レモンティー？分かった。あとレモンティーを1つ」

「コーヒーとレモンティーですね？ご注文は以上でしょうか？」

「特には無いですな」

「分かりました。只今お持ちいたしますので少々お待ちください」

と頭を下げると店の奥の方まで歩いて行った。  
どうやらあの1人でこの店を経営しているらしい。結構繁盛してるみたいだけど忙しそうだ、アルバイトとかそういうの募集しないのかな？と思っているとファンベル爺の「どうかしたのかね？」という言葉にハツとする。

「いえ、1人で経営するのは大変だなと思ひまして」

「確かに、愛想も良いから人気なんだろうね」

「そうですね。」

「そしてだ。ブレイク君。今日は話があると言ったけどあまり周りに聞こえるのもまずいから少し小さい声で話すけどもいいかな？」

「あ、はい。大丈夫です」とは言ったもののまずいつてなんだ？

そしてその頃、やっと目を覚ました魔人エルウェール

「う、うう〜ん。私、どのくらい寝てて……って、ああ！」

今まさにエルウェールの目の前には目標人物ファンベル爺が居た

「うわっ」とすぐにテーブルの下に身を隠すエルウェール。自分、何してんだろと思いつながらとっさにとってしまった行動。自分の姿が知られているわけでも無いのに……

そして、敵にこの話が聞かれているとは全く知らないブレイクはファンベル爺の話を聞く。

「長年の調査の結果、魔人に勝てる方法が見つかった。と言われたら聞きたいかね？」

もちろんです。と首を縦に振った俺。それは今まで知りたかった情報だ、仲間たちを無駄死にさせないためにも必ず仇討ちをしなくてはならないため、あの頑丈魔法防御。あれが何とかできないと話にならない。ところで魔人には精霊魔法は通用するのだろうか……

「10年前の話になるのじゃが、とは言っても最近じゃがな」

「……最近？」少しの間理解できなかったが、この人、500年は生きてるんだつけと苦笑する。

「確かに、あなたにとっては最近の出来事ですよね。それで、どうしたんですか？」

「その頃のわたしには可愛い子供たちが沢山いた。なぜかと言えばセントレリアーク地方のヴィズマルクという街である噂が広がっていな、緑色の眼、それは呪いの目と呼ばれて恐れられていたんじゃ。」

「そもそもその、セントレリアーク地方という場所が全く分からないのだが」

「世界は広いんだなーとだけ思っただけ引き続き話を聞いた。」

「そして、捨てられてしまった子供たちをわたしは引き取った。小屋にはわしの他にもイーゼルという15歳の少年。10歳の女の子のエクア、まだまだ幼い7歳のピロクという少年で引き取った子の世話をしていた。もちろんその子たちも緑の眼を持つ子供たち。」

「ピロク？」

「そう。ピロクじゃ。今頃は17になつとるんじゃろうなあ」

「会ってないんですか？」

「10歳くらいに名魔法学校に入れたんじゃないよ。それから一度も会ったことがない」

「その子、ギフェアさんのところで騎士団やってますよ？」

「ほほう。そんなに成長したのか……それは良かった。」

「会わないんですか？」

「いいんじゃないんじゃない。元気だと分かっただけでも十分じゃ」

とマスターが持ってきたコーヒーを一口飲み一息つく

「話は戻るが、わしは噂の事は迷信だと知っていた。」と深くため息をついた。

「なぜですか？」なぜファンベル爺だけが知っていたのか

「緑の眼と言うのはとても貴重な合成の材料として使われていた。その貴重な合成材料を使うために街中で迷信を流し子供をかつさるっていったんじゃない。そして、わしはその合成法を知っていた。だからこそ守らなくてはならなかった、成人してしまうと眼に宿る魔力が消えてしまいうらしく、まだ加減の知らない小さい子だけを狙っていた。」

「なんてひどい事を……一体誰が」

「あらゆる人間、魔人たちがやっていた。未知なる合成を求めて」

「合成のために命を奪うなんてっ」

「だから、わしは緑の眼だと悟られないよう魔法をかけ各地方へとバラバラに散らせた。もうわしにも居場所は分からなくなってしまったのだが、一方的に何人かの子たちから手紙が届いていた」

「そこに魔人に関する情報が？」

「そういうことなんだ。探してきてはくれないか？」

「もちろんです。任せて下さい」

「それは助かる。名前はミゼル・キートン・リエラの3人情報はこれだけなんだが大丈夫かね」

俺はハイと言うとファンベル爺は微笑みながらマスターにコーヒー代を払い「またどこかでな」と言う店から出て行った。

「あんなこと言っちゃったけど手がかりも無しにどうすればいいものか」

ポツポツ……

雨が降り始めた。と同時に

ピシャーー!!

ゴロゴロゴロ!!!!

雷の音も聞こえてきた。

俺もマスターに代金を払って城へと向かった。

「この感じ、あの時と似てるな……」

その日の夜、物凄い疲労感とともに俺は倒れるように眠った。

## 第二十七章 開校！ブレイク魔法短期学校（後書き）

「いっぺん死ね！」

「なにすんだよ、ちびっ子野郎！」

「貴様！行っではいけない事を！」

「つたく、こんな雨じゃどこにもいけねえじゃねえかよ……なあ新神」

「そうだな。まるで台風が来てるみたいだよな」

「なのになに出るのか？」

「そう。病院に行かないとな、妹が待ってる」

「えっと、ご飯。一緒に食べないか？」

「もももちろんです！ぜひとも一緒に……！」

「君がリエラ？」

「何故私の名を？ああ。ここ最近のストーカーはあなたですか……」

次回『緑眼の子供』

サンツエルク大図書館 窓際の本棚 (前書き)

入口付近の本棚には目を通しましたか？

さらつともいいので見ておいたほうが良いと思います。

さてさて日のあたりの良い窓際の本棚ですが、話の続きが置いてありますので是日見ていって下さい。

もちろん物語の進行は全くありませんので暇でしたらということでは……

ではごゆっくり。

サンツエルク大図書館 窓際の本棚

・劣黄血の少女 中巻 （長編） ・

その日の夜のこと

魔神に呼び出された

少女はとんでもないことを言われた

魔神の命令は666人の命を奪うこと

虫も殺せない少女にはそんなこと出来るはずがなかった。

しかし魔神はこう言った。俺の言うことを聞かなければこいつらを殺すと。魔法で見せられた映像には元気に走り回り、笑う可愛い弟・妹だった

「人を殺すなんて私には無理です」

私は泣いた。知らないうちに涙が頬を伝った。しかし魔神はこういった。

「おまえは何もせずにただじっとしていればいい。もう1人のおまえが働いてくれるだろう」

もう1人のおまえ  
それが誰なのか私にはすぐ分かった。

「やめて！そんなことしたら」

「おまえは何も悪くない。悪いのはもう1人のおまえだ。気にすることはない」

魔神が片手を振り上げると再び全身が引きちぎれそうな痛みが走り  
転がり悶えた

そして気絶と共にしばらく何があつたのか覚えていない

目が覚めてから覚えていたのは血塗れの手、足、体……  
そして見るに耐えない死体  
もはや原型を留めていなかった。

現状を理解するにはそう時間は係らなかった

「いやああああ！！」

少女は絶叫した。

喉が枯れるまで泣き続けた。いくら泣いても生き返らない人たち。

崩壊した家、もう家なのかもわからない。まだ遠くのほうで気が燃  
えている。

お母様の大好きな赤い色。でも私にとっては嫌いな色。この首飾り  
の赤宝石も私を恐怖に縛り付ける物。一体自分はどんな気分で襲つ  
たのだろうか、少なくとも私にこんな力なんてないはずなのに、も  
う一人の私……

「333人。あと半分だ、上出来じゃないか。」

「私は…私は……」

その後、魔神に思いつきり怒りをぶつけた。こんな私は初めてだった。

こうなったら誰も殺さずに弟も妹も助けてあんたから逃げてやる！  
そう思うのであった。

・大魔術師の血筋 2巻 ・

体中が青く光り出し、体中をスペルが覆った。

「あああああああああ！！」

「なっなんだこれは！？」

「苦しみを『ゾンビサモン』」

地面から這い出てきたゾンビはこちらにゆっくりと歩いてくる。

その数約20体

「くっ！『ファイアレイン』」

雨のように降り注ぐ炎の塊。

ゾンビの弱点を知った上での攻撃だったのだが……

「アウアウアアー」

軽くよろめいたぐらいで倒れる様子は全くなかった。

「炎魔法が効かないだと……」

「ミールルク先生！ここはとりあえず身動きを取れなくしましょう。動き回れては他の生徒に被害が及んでしまいます。」

「そうだったな。『フォールクエイク』」

大きな地震とともにゾンビたちを囲うように穴を作る。

「アアアー！」

うめき声をあげながらどさどさと穴に落ちていく。

「一体これは……」

「先生！ピロクが倒れました」

「すぐに助けに行くぞ！ついてこいっ！これは爺に連絡だ」

5mの穴をジャンプした先生たちはピロクの元まで駆け寄った。

「大丈夫か！？しっかりしろっ！返事をするんだピロク！」

「ううゝ。ここは……？」

「よし！エスター。保健室まで運んでくれ！」

「はい！分かりました。」と抱きかかえラファールがでそく運んで行った。

「一体なんなんだ。魔力の暴走だと？しかも召喚魔法だなんて上級者以上の魔法だぞ？」

いくら悩んでも答えが出ないことに腹が立ち地面を蹴る

「私はあの子を助けられないのか？何に脅えているんだ」

連絡手段のビジョンで爺にアクセスを求めたのだが

「出ない？取り込み中か？」

その後何回もアクセスを求めたが一向に出ずどこにいるのかさえ分からない状況になってしまった。

「何をしているんだ爺は……。お！エスターじゃないか。ピロクの様子はどうだった？」

「はい、とくにこれといったことは無いのですが……」

「ですが？」

「動物を会話をしているんです」

「ぷははははっ！」

「なっなにをいきなり、どこが可笑しいんです？」

「それは結構結構。さすがは爺の子供だ。それを聞いて安心したよ。」

「は、はあ」 エスターは何がなんだわからない様子だったが聞けるような感じじゃなかった。

訊いたとしても答えてくれそうになかったのでそれ以上何も訊かなかった。

「ピロク？元氣か？」

「あ、ミールルク先生。さっきはごめんなさい」

「ん？ごめんなさいとはどのことだ？」

「上級魔法を使えなくて……」と俯く

「そんなことはどうでもいいんだ。ピロクの命があればなんでも」

「命にかかわる問題だったのですか？もしかしてまたなんか大変なことを！？」

「取り乱すな。大丈夫だ。…またつてことは前にもあったのか？」

一拍置いてから話し始めた。

「はい。目が覚めたら自分の周りだけが凄いことになっていて……」

「そうか……。私はしっかりと見ていたぞ。お前は上級魔法以上の魔力を持っている。ただ、それを引き出す能力がないだけだ。お前の本気はこの学校長の私であっても勝てるかどうかわからないものだ」

「そっそんな！ミールク先生には到底及びません！」

「自分に限界を作るな。その先は無限大にある。今はこんなでもいつかはきつと」

「そうですか。久しぶりに先生の笑顔を見ました」

確かに私は笑っていた。何故だ？自分にはよくわからない……

それに私は学校長でありながらもこんなになるまで生徒を追いつめてしまった。

これは学校の頂点に立つものでありながらその資格が無い。やめるべきか……

「先生！また魔法教えてくださいね！！なんかやる気が出てきました」

「そうか。それは良かったな」

・ 神話 ・

今よりずっと前の話。パロバツセには神といわれる存在がいなかった。

パロバツセに住む人たちは好き勝手やり放題状態となり世界は滅茶苦茶になりかけていた。

その頃、天上の神セレスティーナは異世界を回って神になれる人物を探していた。

神になるにはいろいろな代償を払わなくてはならない為なかなか当てはまる人が居なかった。

とは言っても素質が無かったから無理だったという理由もある。

素質が無ければ神になっても力がつかないため世界を支えていくことが出来ない。

代償を払って神になれる人であり且つ素質がある人。

探してはいたがなかなか見つからずあきらめようとした時、世界に少しだけ歪みが出来た。

それは一時的なもので普通に暮らしている分なら全くといっても気づかない、

だがしかしその少しの変化をセレスティーナは逃さなかった。

場所は地球、ドイツの建物倒壊に巻き込まれた人の中にセレスティーナの求めていた人がいた。

すでに生命の危機状態であると数分も持たない状態だった。

そしてセレスティーナは契約を試みた、選択肢を選ばせないようなこの契約は

あまり良い物では無いとは思ったのだが、こちらとて世界を守っていくにはこうするしかなかった。

その男の人は私に向かって俺の子供は無事なのかと訊いてきた。

そんなの知るわけが無かったが落ち着かせるために無事だと言った。その後その子供に会えるとしたら会いたいかと訊いたら当然だと

答えが返ってきた。

それで契約は成立。異世界の神になった。神になってしまった代償は感情を封じ込め何も感じることが出来なくなってしまうこと、

この代償については私たち天上の神であっても知る由も無かった為、この代償はあまりにも残酷だった。

そしてその日のうちにまた時空の歪みを感じ取ったセレスティーナは今度こそと同じ地球へと向かった。今度は日本というところでさっきの男と同じく

建物倒壊に巻き込まれていた。生命の危機も男と同じ状態で、またしても選択肢を与えないような状況を作ってしまった。

私はこれでも神と言えるのだろうか、と疑問に思ったセレスティーナ、しかし、

目の前の命を放って置くことも出来ず、同じく契約を交わしてしまった。

昔から男の神は地上の神。女の神は天上の神として言い伝えられていた。

この女はのちにこの天超地の神として働くであろう。

契約の内容は子供に会いたいとのこと、その約束で神にしたはずだったのだが、

その代償は記憶のほとんどを失いその子を見ることは出来ても触ることが出来ないという事だった。

神として失格だと思ったセレスティーナはパロバツセの管理を他の者に任せることにして

どこかへと消え去った。そしてだいぶ月日がたち次にそのパロバツセの管理を任されたのが

キルティという神となったのだが、その神は生まれたばかりであり階級も下の方で

こき使われっ放しで飽き飽きしていた。そしてある時ブレイクという存在と接触する。

何故だか心が動いたキルティはなんとかしてこの子を救ってあげたいという

とにかくよく分からない感情が彼女を動かし今まで支えてきた。

この地球というところで命を落とし再び神として目覚めた二人の力によって

二人の子供が助かった。しかし、その子供の1人はパロバツセに迷い込んでしまう。

これがすべての始まりになってしまったのであった。

**サンツエルク大図書館 窓際の本棚（後書き）**

まだ少ないですがこれから追加していきます。

その時は連絡しますのでよろしくお願いします。

またのご入館をお待ちしておりますのでその時まで……

## 第二十八章 緑眼の子供

「シルク姫様」

「なんじゃ、カラゾネス」

豪勢な椅子にちょこんと座っているシルクシャシャはそっぽを向いていた。

「請謁ながら面会にはちゃんと出てほしいのですが……」

「嫌じゃ」腕を組みキツパリと言う

「とりあえず出るだけでも良いのでお願いします」

「嫌じゃと言ったら嫌じゃ。とくに今回の面会相手もあやつじやろ  
うに」

「まあ、確かにそうらしいですけど……」

よくは見えていないが多分そうだろう。  
結構頻繁に来てるし……

にしても懲りないよなあ。あの人も。

「なんとかして追い返せ。カラゾネスなら出来るじゃろ」

「そんな無理を申されましても……」

「とにかくじゃ。私は面会には出ん」

このまま話しても埒が明かないので部屋から出た。

ガチャリ。

「どうだったカラゾネス？」

外で待っていたセルウェンが問う

「シルク姫の性格上予想はつくのでは？」

「あはは、そうだな。

んで、どうすんだ？ハイシャルとミャーゼルの時間稼ぎもそう長くは続かないぞ？」

「うーん。」

とりあえず姫様の気分が優れないから後にしてくれとでも言っといてくれ。と言い

了解したカラゾネスはハイシャルとミャーゼルの待つ謁見の間に向かった。

「どうやら行った様じゃな？」

足音が遠ざかっていく音を聞いたシルクシャシャは椅子から立ち上がった。

「さて、ブレイクの頼みごとの事もあることじゃし、抜け出そうかと思ったんじゃが……」

1つ数千万するテーブル（シルク姫にとってはどうでもいい高級品）にポンと置かれている小包を手についた。

「これは一体なんなんじゃ……と中身は写真か？」

ガサゴソと少し大きい封筒を空けてみると写真と手紙が入っていた。肩までかかった茶色でストレートの髪の少女は2人の子供と一緒に笑っていた。

なんだか自分にとっても似ている気がして気持ち悪い……

「……誰じゃこやつは？ 手紙には、なにになに……」

『久しぶりだなあ。今はシルクシャシャ、だっけか？まあ、それはいいとしてまたお前に働いてもらう時が来た。既に記憶が無いから意味が分からないかもしれないが、黙って言う事をきいていればそれでいい。んじゃまた一週間後に……』

「なななななんじゃ！なんなんじゃこれはっ！喧嘩売りまくりではないか！」

しかも、書いた日が今からちょうど一週間前であり会う日は今日となっていた。

写真もろとも手紙を床にベシンと叩きつける。

「大丈夫ですか？シルク姫」と部屋に入って来たセルウエン

「いっぺん死ね！」

「ぐはっ！！」と壁に叩きつけられるセルウエン

「なにすんだよ、ちびっ子野郎！」と反射的に禁句を言ってしまった。

「ち、ちびじゃと……お主、いまさっきチビと言ったな？」

「ふっ、チビがどうした。ったくいきなり蹴り入れんなよなあ意味わかんないぜ……あ、やべえチビって言っちゃまった……」

床に突っ伏しながら火に油を注ぐ。

プチっ

そしてアイシエスの頭の中で何かが切れた。

GAME START！

「貴様！行ってはいけない事を！」

「え。何この表示？…ゲームスタートってなんだよっ」

猛烈にダッシュしたシルク姫はセルウエンに左ストレートを喰らわし華麗に回転しながら右足で蹴りを入れる

2 Chain！

「かはっ」

『相手は真面に攻撃をくらいよめいている』と何処からともなくナレーションの声が聞こえてきた

「わ、わたしの一番のコンプレックスを……」

と右足を振った力で空中に浮き上がった自分の体を、かかと落としとともに地面に着地。その後、バック中とともに空中に相手を蹴り上げさらに右フック

5Chain!!

『いやゝ二段ジャンプも華麗ですねえ』またナレーションの聞こえる

『ジャンプで魅せてくるとはレベルが高い』ともう一人のナレーションが答える

「ぐがつ!!」

こんな動き…雑技団かよ……

「まだじゃ!まだ終わらんのだじゃ!!」と溜め攻撃を繰り返そうとした。

「ふつ、遅い!」セルウエンはそれでもギリギリのガードだったが何とか防げそうだった

「コメットパンチ!」

Guard Clash!!

という表示が出た後セルウエンは無防備になってしまった。

なんだよこのシステムっ!？

『出ましたー!!シルク姫のガードクラッシュ!!!!』と熱い声で叫ぶナレーション

直後、右と左の猛烈パンチを繰り出し強烈な左キックで壁に叩きつける

20 Chain!!!!

「っ!？」

声にもならないうめき声をあげ地面にへたり込んだセルウエンはもはやなぜ自分がこうなっているのかが分からなかった。

「なんだ、このシルク姫の戦闘能力の高さは……」

「鉄 5で鍛えたからに決まっておるじゃろ」

しなやかに地面下りポーズを決める。

YOU WIN! (シルク姫視点)

「そんなもの一体どこから……」

「国を回っていたら面白そうなものがあつたからな、買つて来たんじゃない」

この姫にはちゃんと準備をしたうえで喧嘩を売るべきだと判断したセルウエンだった。

「っと、それよりセルウエン、この手紙はどうしたのだ？」

「手紙ですか？」不思議そうにそれを手取る。

開けても良いですか？ととりあえず許可を得てから中身を覗く  
どうやらセルウエンが持ってきたわけでは無いらしい

「こっこれはっ！シルク姫そっくりじゃありませんか！」

目を大きく見開いて驚いていた。

「なぜそんなに驚く！」

「いやいや、こんな清楚な女の子がシルク姫だしたら合わないな  
ーと思ひまして、しかもお花の冠もかぶっているじゃありませんか  
…ププッ」

「なーにーがーププッじゃ！何故だか私ではないのにムカムカする」

まあ。と一言いうと魔法で光のロープを取り出した。

「うわっなにすんだよ！」

「お前はしばらく黙っている！私は少し出かける」

セルウエンの体を縛り口をテープで留める。そして窓を開けて

「私にはこの城は小さすぎる」と言いながら消えて行った。

(…いやいや、この城にしたいと言ったのはあんたじゃないか……)

キンコーンカーンコーン……

「んじゃ、授業はこれで終わりだ。

今日は凄い雷雨だから帰るのは少し待った方が良さそうだな」

担任の先生はそう告げると教室から出て行った。

「ったく、こんな雨じゃどこにもいけねえじゃねえかよ……なあ新神」

「……………」

「新神。聞いてるかぁー？」

「あ、悪い悪い。んじゃまた明日な」俺は机の横に引っ掛けていた鞆を取る。

「おいおい、俺の話聞いてたかったの？外を見ろ！外を。雷雨だぞ

「！」

窓の方に手を広げ雷雨を強調する。

「そうだな。まるで台風が来てるみたいだよな」

「なのに外に出るのか？」と不思議そうな目で俺を見てくる。

「そう。病院に行かないとな、妹が待ってる」

「妹さん……そんなに容体が悪いのか？」

「ん、ああー大丈夫だよ。大丈夫。心配するなっ」

妹に頼まれた物。それをなんとしても届けなければならなかった。

「なあ新神」と真剣な目で俺を見てくる

「どうした手嶋？」

「もしかして妹属性か？」

「んなわけねえーだろー！」

何を言ってるんだコイツは……

「あはは、冗談だよ。……まあ気をつけていけよ？」

ザザー。という地面に叩きつけられる雨音、それとともに鳴り響く雷。

幸い風が無かった事だけ助かった。

目的地は自転車で15分前後の成島総合病院。  
自転車置き場で合羽を着て準備を整える。

「止む気配は無し」

という当然のことを口にしながら校門を出た。  
雨は弱まるどころかより一層強さを増していった。

「さすがにやばいよなーこれ……」

しばらく一本道を走行していた俺の頭には妹の事で一杯一杯だった。

ザザー

降り続く雨、俺は赤信号で横断歩道に止まっていた。

「この信号長いんだよなー」

車通りは少ないけど交通ルールは守っていた。

そしてしばらくし青になり少しだけスピードを上げた。

ゴロゴロゴロ……

灰色の雲の上で黄色い稲妻が走っていた。

そして、運命が狂う……

物凄い光とともに7階建てのビルに雷が落ちた。

余りの眩しさに俺はその場に止まっていた。  
何かの崩れる音……

「なっ！！？」

俺は一瞬にして目の前が真っ暗になった。

どれくらい時間が経ったのだろうか……

早く病院に行かないと妹に頼まれたものを届けないと……

朦朧とする意識の中、自分の身に起きている状況を把握する。

「つつ……！」

体が動かない。そして腹部と足が痛い……

痛みを感じる場所に視線を向けようとするが何かでがっちり固定されていて頭が動かない。

「これは…岩か？」

いや、コンクリートだ。痛みを感じながらも冷静に考える俺

「俺は、建物の倒壊に巻き込まれたのか？」

まったく動かすことのできない体。

しかし必死にもがいていると左手だけが動かせるようになった。

「よしっ」

とりあえず痛むところを軽く触ってみる

「んあっ！」

とてつもない激痛が走った。

声にもならないうめき声をあげた俺は左手を顔の前まで持ってきた。

「……血か」

やっぱりなと思った。きつと足もそうなんだろう、見なくても分かった。

その時、ふとある言葉が頭に浮かんだ。

『俺はもう助からない』

この雨だ。人通りも少ない……いや、1人も見なかった。車だつて通らない。

そんな中この雷雨、助けも来る筈が無い。自分で何とかしようつたつてもう体を動かす力も無い。どうやら出血の量が半端じゃないらしい……

「なにやってんだよ俺……今日には必ず届けてやるって言ったのに」

妹が大事にしていた黒いフリルの付いているドレスを着た人形。家のどこかで無くしたというあまりに少ないヒントを頼りにひたすら探して見つけ出した西洋風の人形。これが無いと眠れないと言っていた。

急に容体が悪化した妹には探すことも出来なかった。だから代わり

に探し出した。

それなのに……

「俺はこんなことも出来ないのか……こんな簡単な事も……」

何も力になってはやらなかった。

「こんな役立たずな兄を許してくれ」

そう言葉を残し俺は今までにない瞼の重みに眼を閉じた。

「はっ!!」

ベッドからがばっと起きた俺は汗だくになっていた。

「何だったんだ、あの夢は……」

記憶にあるようでない記憶

覚えているようで覚えていない

妹が病院？俺が瓦礫の下に？

そこであることに気づく

「俺の妹が病院にいるっていうのは昨日の夢でも見たな……天気予報は確か……」

全く興味のない情報を必死に思い出そうと頑張っているとなんとか思い出した。

「明後日に大量の雷雨だったはず」

そしてその明後日の学校帰りに俺は……  
考えただけでも恐ろしい

「ん？」

またしても疑問が浮かんできた。

「瓦礫の下で俺は死んだ？」

考えただけでも恐ろしい事を簡単に口に出した俺  
しかしこれには大きな矛盾があった。

俺がこの天超地に初めて来た時キルティは何て言っていた？

「あなたは死んだのよ、だからここに來たの、雷でズドォンって  
感じで」

ってなことを言ってたはず。自分がどのように死んだかつてのはよ  
おーく覚えている。

「俺は瓦礫の下で死んだ。けどキルティは雷で死んだと言っていた」

ただの見間違えなのか？

それを確認する手段は俺にはない。

それはともあれ…今俺がしなくちゃならないことは

「ミゼル・キートン・リエラの3人を探し出すこと」

これに協力してくれそうな人は……

ミヴィはデュナメイス国のヘゼラル地方にいるから連絡の取りようがないし

シルクシャシャでも探しに行くか

といつももの服に着替え部屋から出た。

「おはよう。ブレイク、今日のこの天気を見ると昨日の事が嘘のようだ」

と窓の外を見る。確かに、昨日の雷雨はあつという間に去つたらしい。

今は小鳥のさえずりも良く聞こえて空は快晴だった。

朝食でも食べに行かないかと誘われたので、食堂に足を運んだ。

「今日はいつも以上に賑やかだな」

「そうですね。新たに加わった騎士団たちが来ているからですね」

と賑やかなテーブルの端でパンと牛乳を食べていた一人の少女が立

ち上がる。

「ブレイクさん……いやブレイクさん」

何を言い留まったのだろうかと思いながらもエクシアに手を上げる。

「おはようエクシア」

「おはようございますっ」と笑顔で元気にあいさつをする。

「元気が良くて良い子じゃないか？」とギフエア

「少しおつちょこちよいなところもありますが良い腕を持っています」

そうかと一言いうと俺の方を見てしばらく黙る。

「な、なんですか？」

「あの子と食べなくていいのか？…俺は気にするな。大事な話が合ったわけでも無いしな」

「で、でも…」

「ほら、あの子の目を見てみる？こっちに来てくれないかなあとという目で見ているではないか」

ほんとだ。あの目は確かにそうだ。目の奥をキラキラさせてるっていうかなんというか…

「確かにそうですけど…」

「まあ。部下との交流は深めておくものだぞ」

そういつてギフェアは目じりに涙を溜めながら去って行った。  
別に永遠の別れってわけでもないじゃありませんか……

「ブ、ブレイクさん!？」

とビックリしつつも願いがかなってとても嬉しそうだった。

「えっと、ご飯。一緒に食べないか？」

「もももちろんです!ぜひとも一緒に!！」

それから俺はベーコンタマゴサンドとミチャンドリンクを頼んだ。  
ベーコンタマゴに使われている材料の1つのベーコンはトンキング  
から

もう1つのタマゴはオストリッチかららしい。

トンキングとは野生モンスターで主にタイアルク・マロハス地方で  
生息しているらしい。

オストリッチはダチョウのことらしいからダチョウの卵みたいだし

「あ!そのジューズ美味しいですよね!」

ミチャンドリンクを指で指しながら話しかけてきた。

「え、そんなに美味しいのか？」

「もしかしてブレイクさん……ブレイクさんって飲んだこと無いん

ですか？」

またなぜそこでどもる？

「飲んだこと無いんだよ。んで今日は新メニューとして出てたから頼んでみたんだけど」

「きつとはまりますよー」

「コクンコクン……ってこれはっ！」

「なんですかつ！いきなり声を荒げて！？」

「色といい味といいみかんの味そっくりだ！」

愛媛のみかん並みに甘い。これは凄い飲み物を発見してしまった。

「んで…、そうだそうだ。早速だけど手伝ってもらいたいことがあるんだけど」

「そっそんなあ。い、いきなり御一緒にですかあ！？」と手で顔を覆う。

「そ、そうだが？…まあ他にも連れてくかな」

「そうですかあ」物凄い勢いでテンションが下がった。

「最初の手伝いにしてはかなり重要なんだ」

「そんなに重要なんですか？」

「世界規模だな」

「ええええええええええええええええええ！」

一斉に視線が俺なんかに集まる。

「しっ！静かにしろよ。なるべく秘密にしていたから」

「あ、はい。すいません。それにしても世界規模だなんてそんなことに私が関わってもお役にたてるかどうか……」

「大丈夫だ。今は人探し中だし魔王と戦うとかそういうんじゃないからな」

「はあくそれなら良かったです。それで人探しと言うのは？」

「ミゼル、キートン、リエラっていう子たちを探すんだ」

「リエラ？」と何か知ってそうな顔をする

俺が知ってるのかと訊くと妹の友達にそのような名前の子がいるのだとか……

間違ってる可能性は大いにあるけど行ってみる価値はありそうだ。

「んじゃ早速食べ終わったら行くか」

「早いですね。さすがですブレイクさま……ブレイクさん」

「なあなあ。ずっと訊きたかったんだけどいいか？」

「えっ。は、はい？」

「なんで俺の名前呼ぶときいつもどもるんだ？」

「あつとそれは……ええーとですねえ。なんでもありません」

何でも無いはずが無いのだが言いたくないのであれば無理に訊く必要も無いな

「そつか。んじゃ今から一時間後で良いか？」と俺は食器を片づけながら確認する。

「よ、よろしくお願いします！」

一時間後

食堂に呼び寄せたのはエクシア、ギファエさん、そしてなぜかアイシエス姫

「いやあどうしても行きたいってうるさくてね。別にいいだろう？」と耳打ちしてくる。

「まあ別にいいですが……」しかしあいつの姿が見えない。

「どうしたブレイク？……シルクシャシャ姫のことか？」

「そうです。いつもついてくるはずなのに姿が見えないので」まあ、いないだけ苦労しないか。

「そうですね。んじゃもう行きましようか！」とアイシエス姫。

あれ？最近仲が良かった風に見えたのは俺の目の錯覚か？  
いや……そうみえるだけか？

「あ、あのう私なんかと一緒にしても平気なんでしょうか？」

弱々しく話すエクシアに向かって元気さえあれば大丈夫だと言ってやった。

「本当ですか!？」

こんな適当な事を言っても疑いもせず、すっかり安心しきっていた。

既にみんな準備は整っていたので城から出た後  
誰かの勘を頼りに進もうというつもりでもないことをギファアが言い出した。

「そんな適当すぎます」

「んじやなにか良い案でも？」

「えつとですね。それは……」

ここぞとばかりに発言したエクシアは何も考えずの発言だったため  
撃沈

「まあ。まずは動かない事には始まりませんよギフェアさん」

「そうだ。その通りだな」

とボルテキア地方に歩き出して数十分さっそくある子供に会った。

「ねえ。もしかして迷子？」

「そんなことない。わたしは迷子なんかじゃない」

と答えた目は緑色だった。

（見つけた！？）

「えっと君の名前は？」

「普通はあなたがたから名乗るのが当然ではないの？」

「ああ悪い悪い。私の名はギフェア。ギフェア・リザクスト」

「私はアイシエス・ティーナです」

「私はエクシア・フェイナといいます」

「俺はブレイク。よろしく」

「ブレイクという者。下の名も言うのが当然なんだけど」

「俺はブレイクという名前しか覚えてないんだ。悪いな」

「覚えてないだけで無いと言う事ではないんだね？」

「まあそうかな」

「分かった。私の名前はリエラだ」

「君がリエラ？」

「なんだ？その探していた人を見つけたみたいな顔は」

「いや、探していたんだよ実際に」と俺は手を握る

「そうですか。ここ最近のストーカーはあなたでしたか…」

「えっと。今日初めて会ったはずだけど、探し始めたのも今日だったし」

「そうか。ならいいか。んで私に何か用か？」

「ファンベル爺から魔人の倒し方を聞いてくれと」

「んな大声で魔人と言うんじゃない！！」

と思いつきぶつ叩かれた。

「いてててえ。すいません」

「まったく。ファンベル爺は元気か？」

「元気でしたよ。それはもうとても」

魔法が当たっても無傷だったあの人なら全然余裕なはず。

「そうか。ならよかった」

「それで分かったんですか？」

「まあついてこい」

そう言われていついていくと森の中へと入って行った。

「ボルテキア地方の森。サルザ森林か」

周りの様子を見ながらギフェアが言う

「そうだ。この奥に我らの隠れ家があり、そこでほかのみなたちと研究している」

「研究の成果は出たのですか？」とアイシエスが訊く

「どれだけ研究を続けてきたと思っている？この今まで使ってきた時間は無駄にはしない」

「今は何人隠れ家に？」

「私を混ぜて3人だ。他の2人はミゼル・キートンという奴らだ」  
ミゼルとキートンはファンベル爺が話していた子と同じだった。  
手間が省け多分とても助かった。

「さて、ここが我らの隠れ家だが…」

「…ここが？　というかどこに？」ギフェアが周りを見渡ししながらリエラに確認する

「無いようである。ほら、こっちに來い」

そう呼ばれてリエラの隣まで来るとあら不思議。地下へと続く階段を発見した。

「こ、これはどういう仕組みなんだ！？」当然ながらギフェアが驚く  
「これについてはいくらファンベル爺さんの仲間であろうと黙秘なんだ」

確かにいくら仲間であっても易々教える人はいないだろう。

「この階段はどこまで？」

「ざっと100mだ」

「ひゃ、ひゃくめーとるですか！？」アイシエス姫がそんなに歩けませんというような口調で言う。

「まったく。姫というのはめんどくさい奴だ」

「アイシエス姫。疲れたなら私がおぶっていきますが？」

「大丈夫です。もし必要なときは…ブ、ブレイクさんに、お、お願いしたいと思います」

「そ、そうですね…」ギフエアにクリティカルダメージ

「え、俺ですか？」

「だめですか？」

涙目の上目使いは一撃必殺に値する。

「い、いや……」

「だめ……ですか？」

「も、もちろん駄目じゃないですけど」

「じゃ、じゃあ。いいんですね!？」

「は、はい」

「まったく付き合ってられないな。ほら着いたぞ」

すでに抜け殻のギフエアと上機嫌の姫様の対処に困り果てた俺はすでにHP0状態だった。

「お帰りが早いです……ね えっと誰ですか？」

「ファンベル爺の仲間と言ったところかな」

「おじいちゃんの仲間!？」

一番にお帰りと言ったのは女の子…ミゼルと言う子だろうか  
緑色のショートカットで白と水色のワンピースを着ていた。

「それで、おじいちゃんの様子はどうだった？」

「こいつらから聞くに元気らしい。良かったなキートン」

「そっか。元気なのが分かってよかったよ」

次に話してきたのはキートンという男の子。

金髪のストレートがギリギリ目にかかっている。

みんなの容姿は完璧であってなぜこの子たちがこんな目に合わなければならぬのかと思った。

「それで…だ。こいつらはファンベル爺から魔人に関するデータ教えてもらってくれと頼まれたらしい」

「おじいちゃんに頼まれたならしょうがないね」

「そうだね。さっそく用意しないと。みなさん、こちらへどうぞ」

小さいのに対応の早い子で偉い。

俺がこんなに小さかったころ何ていったら親に迷惑かけてばかりだったような気がする。

「何か飲むか？」

「テルトナールはあるかな？」とギフェア。何とか復活したみたいだ。

ちなみにテルトナルとはコーヒーみたいなものである。

「私はミチャンジュースとかあれば嬉しいです」とアイシエス姫

「俺も同じものがあればそれで」と俺が答えるが、さっきから何を黙っているのかエクシアは口を開かない

「なあエクシアは何か飲むのか？」

「……………かわいい……………」

「エクシア？」

「っ！？ あ、はい。すいません。何か言いましたか？」

「大丈夫か？ 俺は何か飲みたいものは無いかって訊いたんだけど？」

「わ、私は大丈夫です」

一体何を考えていたのだから少し気になって話しかけようとしたその時テーブルの上にどさつと紙が置かれた。

「これは？」

「これがその魔人のデータだ」

ざっと300枚くらいだろうか

「こ、こんなにたくさんあるんですかっ！？」と目を大きく開ける

## アイシエス姫

「まあ良く聞いてくれ、これの9割以上は嘘のデータだ。この中から本当のデータを抜き出すのは大変だった。そして」

と上にある数枚を手に取り残りを横にどけた。

「本当のデータはこれらのデータだけ」

「ええ3枚だけですかあ!？」とアイシエス姫

なんかとてもやる気なアイシエス姫なんだが一体どうしてなのだから……

「んじゃまず1つ。魔人の魔法関係についての話なんだが……」

魔法……。そういえばあの時、魔法破壊計画で戦った魔人。俺らの魔法なんか足止めくらいにしかならなかつたな。

「魔人はMFの他に特殊な防御シールドを張っているから普通に攻撃したんじゃ歯が立たない。そこでその防御シールドを強制解除する薬品の研究が成功したんだ。これについてはオクマーサ・テゴレス錬金合成師に協力してもらったんだが……知ってるか？」

「ああ。もちろんだ。俺の仲の良い友達だからな」

「そうだったか。なら話は早い。オクマーサの家でその薬品を買ってくればいい」

「家に行けばあるんだな？」

「俺に頼まれたことを言えば渡してくれるだろう。そして次に速さ。スピードだな。ラファールを使っただけじゃ上位の魔人には勝てない。その魔法の鍛錬についてはファンベル爺に訊くのが良いのかもしれないが、その魔法についてはそれ以上の者がいる」

「ファンベル爺より高い魔法が使える人がいるのか」

「ミールルク・イナミ魔導師 聞いたことはあるか？」

「ミールルク？」

「最初にブレイクが参加したヴェセア城での会議。覚えているか？」

「なんとなく覚えています」

「その時に欠席した人がミールルク・イナミ魔導師だ」

おぼえてねえ〜

「そんな人がいたんですか」

「そうなんだ。実はその魔導師には過去に消えたという噂が広がっていた」

「過去に消えた？」

「まあ今でも消息は不明。でも生きていることは確からしい。少なくとも魔法学校の校長だったからな」

「魔法学校の校長だったんですか。そんな凄い人が何故消えたんですか？」

「そこについては俺もよく分からないんだが生徒との衝突があったらしい」

「どうやらお前は知ってるみたいだな。まあそいつに教えてもらってくれ。んで最後、魔人には片方の名前しかない。たとえば私の名前がオルフェス・リエラのように魔人にはフェイルとかセゼリーなどという名前しかない」

「コードネームとかじゃなくて？」

「いや、相手がそう言ってたという実際の証言もある。まあこのデータにもそう出ているがな」

「そうなんだ」

「もしかしたら片方の名前しかない裏切り者がいるかもな？」

と俺の方を見てにやりと笑う

「お、俺はそんなんじゃないぞ」

「まあ冗談だ。お前はそんな奴には見えないし、なにより決定的な証拠が無い」

「決定的な証拠？」

「それは教えないがな」

「そうですか」

まあ疑われなくてよかった。

「ってな感じだな。どうだ？少しは役に立ったか？」

「いや、少しどころじゃない。かなり助かった。ありがとう」

「そうか。ならよかった。たまには来てくれよ？ こいつらも久しぶりの来客がうれしかっただろうし」

「あ、はいもちろんです」

んじゃまたなと見送られ俺らはその隠れ家から外へ出た。

「さて。んじゃこれからどうするか」と、ギフエア

「オクマーサ・テゴレスさんの所に行きましょうか」

「そうか。ならそこに行くか」

そして魔人を倒す為まずは薬を取りに行くブレイクたちであった。

## 第二十八章 緑眼の子供（後書き）

勝手ながらこの小説の更新をしばらく停止します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9609/>

---

非現実的な人生

2011年3月28日11時44分発行